

戦前期のニューヨークの日本人社会とメディア研究

佐藤 麻衣

戦前期のニューヨークの日本人社会とメディア研究

目次

| | |
|---|-------|
| 序章 | P.1 |
| 第1章 日本人が発行した英字雑誌『Japan and America』— 星一のメディア活動— | P.9 |
| 第2章 永井荷風と雑誌『太西洋』 — 「夜の女」の初出をめぐって— 〔付〕『太西洋』第1号—第3号目次 | P.17 |
| 第3章 田村松魚のアメリカ滞在記 — 日本語新聞の文芸欄と移民地文芸— 〔付〕田村松魚著作年表（1903〔明治36〕年8月から1913〔大正2〕年4月） | P.24 |
| 第4章 石垣栄太郎の文芸活動 — 『日米週報』と『紐育新報』の文芸欄— | P.32 |
| 第5章 ニューヨークの邦人美術展覧会と日本語新聞 — 紐育日本美術協会と画彫会の展覧会— | P.50 |
| 第6章 独立美術家協会とサロズ・オブ・アメリカの日本人画家 — 狂騒時代のアメリカ美術界を背景に— | P.61 |
| 第7章 紐育新報主催の邦人美術展覧会 — 角田柳作のジャパニーズ・カルチャー・センターとの関わり— | P.73 |
| 第8章 1930年代のニューヨークの邦人美術展覧会 — 芸術活動と日米外交政策— | P.85 |
| 第9章 世界恐慌期の日本人画家—ニューディール政策とリベラルな美術家の活動— | P.95 |
| 結章 | P.115 |
| 〈資料〉 | |
| 表 | P.119 |
| 図版 | P.159 |
| 図版出典 | P.187 |
| 引用文献 | P.192 |

主要参考文献

P.215

謝辭

P.229

序章

1.研究史と先行研究

本研究は、戦前期のニューヨークにおける日本人のメディアを中心に、文芸および美術活動に表れた芸術家の思想と帰属意識の変遷をたどる。

異郷に渡った人々は、日本人社会の情報伝達的手段として、移動先の各地で日本語新聞を発行した。また言語や文化の異なる現地の人々との意思疎通を図る手段として絵を描き、芸術家になった日本人もいた。ニューヨークの日本人のメディアは、日本語新聞や雑誌の活字メディアと、アメリカで美術を学んだ日本人画家の作品と活動による造形芸術があげられる。このようなメディアは、これまで書誌、文芸、美術のそれぞれ異なる分野として研究が進められてきた。このうち戦前まで発行された『日米週報』と『紐育新報』については書誌的な研究がある。そして文芸欄については、前田河広一郎の滞米時代の文芸活動の調査がされてきた。また造形芸術では、渡米画家をテーマにした美術展覧会と図録により、日本に生まれアメリカで美術を学んだ日本人画家の調査研究が進められてきた。しかし、日本人社会が中心になって発行された新聞や雑誌と、日本人社会が後援した日本人芸術家の活動は、十分に調査されているとはいえない。

以上がニューヨークの日本人のメディアに関する研究の概略だ。そこで、本研究において注目したいのは、これまでの諸研究では、日本人社会で発行された日本語新聞や雑誌といった活字メディアと、それらのメディアの文芸欄に表れた文芸家の創作活動、そして日本人社会と日本語新聞が支援した日本人の芸術家の繋がり、明瞭にされていないという点だ。例えば、日本語新聞に発表された文芸作品には、アメリカに渡った日本人のどのような生活の様相が描出されているのか。また、日本語新聞が主催した日本人画家の美術展覧会と彼らの創作活動には、いかなる意図があったのか。活字メディアと日本人芸術家との関係は明瞭にされる余地がある。

先行研究における全体的な傾向には次の点があげられる。第一に、アメリカに渡った日本人移民の研究および現地で発行された日本語新聞の研究史は、西海岸が圧倒的に多い。第二に、戦前までニューヨークで発行された『日米週報』と『紐育新報』の発行の経緯については幾分明らかになっているものの、紙面の分析は十分にされてきたとはいえない。第三に、絵画や彫刻といった造形芸術は、使用言語の異なる人々にも思想や創作の意図を伝えることが可能な媒体だ。そのため、日本人画家の創作活動は、日本人社会だけではなくアメリカ社会でも評価されていた。しかし、アメリカにおける日本人画家の実態は、一次資料となる美術作品の所在が不明なものが多く、彼らの活動を伝える日本語新聞や英字新聞、雑誌の美術欄は、資料の入手が困難なことから、日本語と英語の両方の美術批評を分析し、日本人画家の活動を述べた研究は極めて少ない。

では、異郷に渡った日本人のメディアについて具体的な先行研究の例をあげる。まず、アメリカで発行された日本語新聞の先駆的な研究として、蝦原八郎の『海外邦字新聞雑誌史』（1936）がある¹。これはアメリカ各地で発行された、日本語新聞の発行の経緯を詳細に述べ

たものだ。このうちニューヨークのメディアは、新聞では『日米週報』と『紐育新報』、雑誌では『太西洋』や『Japan and America』の発行について言及しているものの、それぞれの紙面の詳細は検討の余地がある。

アメリカで発行された日本語新聞全般を調査した研究には、田村紀雄らの「在米日系新聞の発達史研究」²、および「日系新聞研究ノート」³、そして田村紀雄・白水繁彦編による『米国初期の日本語新聞』（1986）、田村紀雄の『アメリカの日本語新聞』（1991）と『海外の日本語メディア-変わり行く日本町と日系人』（2008）がある⁴。この中でもニューヨークの日本語新聞について、「日系新聞研究ノート(7) 紐育日系新聞小史」では、『日米週報』は、「明らかに実業側に立っていた。記事は、日本や日系人に関する米国内での経済ニュースや人事往来にさかれた」と言及している。また『紐育新報』についても「開戦直前までの最終号でも明らかなように、他の多くの日系新聞同様に、東京特電を中心に編集していたから、ドイツ、イタリアの側に近い侵略戦争の戦場記事を大きく扱う有様だった」とニューヨークの日本語新聞の特質と立場を明確にしている。そして、文芸欄については、芳賀武が「両紙とも、在米日本人の文芸記事などはなかった」とインタビューに答えている⁵。だが、ニューヨークには、永井荷風や中村春雨といった明治期の文士も滞在している。このことから、戦前のニューヨークで発行された日本語新聞の紙面は、再検討する必要があるだろう。

日本語新聞の文芸欄に表れた移民による文芸活動の研究は、西海岸の日本語新聞を中心に進められてきた。例えば、移民地の日本人社会を背景にした、翁久允の移民地文芸について研究した、山本岩夫の「翁久允と『移民地文芸論』」（1994）⁶、中郷芙美子「『移民地文芸』の先駆者翁久允の創作活動—『文学会』創設から『移植樹』まで」（1992）と「翁久允移民地文芸の特徴—『生活』と『思想』について」（1993）がある⁷。これらの論考は、1920年代のアメリカ西海岸で翁久允が提唱した、移民地文芸を扱い、日系アメリカ文学の新しい分野を構築した重要な研究だ。そして、日系アメリカ文学の観点から研究した水野真理子の『日系アメリカ人の文学活動の歴史の変遷—1880年代から1980年代にかけて』（2013）は、約一世紀に渡る日系アメリカ人の文学活動の変遷を、日本語と英語の両方の視点から論じている⁸。このほかにも、移民研究の観点から、日比嘉高の「日系アメリカ移民一世の新聞と文学」（2004）、「永井荷風『あめりか物語』は「日本文学」か？」（2006）、『ジャパニーズ・アメリカン移民文学・出版文化・収容所』（2014）がある⁹。これは戦前のアメリカ西海岸で発行された日本語新聞の文芸欄を中心にした文芸作品と移民地における書物の流通を分析したもので、移民研究の新たな側面を見出した研究だ。しかし、これらの先行研究はいずれも、西海岸の移民地を調査対象としており、戦前の東海岸の日本人社会と文芸は見過ごされてきた。

そして、戦後のニューヨークで発行された日本語雑誌については、『NY 文芸』を復刻した、山本岩夫の「アメリカ東海岸唯一の文芸誌『NY 文藝』」（1998）がある。ここでは同誌の発行の意義を「この雑誌が日系日本語文学の歴史において、東海岸で発行された唯一の文芸同人雑誌」であり、『NY 文藝』の同人とこの雑誌の内容の特徴も西海岸の文芸誌に見られ

ないものである。同人の特徴はその多様性にある」と述べ、戦後のニューヨークの多民族社会を背景にした文芸作品の多様性を指摘している¹⁰。

以上のように、アメリカで発行された日本語新聞と文芸欄を扱った先行研究のほかにも、戦前のニューヨークの日本語新聞を資料にした研究として、浦西和彦の「前田河広一郎と『日米時報』」（2002）がある¹¹。これはニューヨークの『日米時報』を調査した希少な研究だ。しかし調査対象は、前田河広一郎が同誌の編集に携わった、1918年から1920年の2年間に限られているため、これ以外の時期の文芸活動は不明だ。

このほかにも、アメリカに渡った美術家の研究もある。例えば、清水登之の日記を翻刻した岡義明の「清水登之、生涯を綴った日記」（1994）は¹²、翻刻された日記の本文から20世紀初頭の日本人画家との活動と清水登之と日本人画家の交友関係が浮かび上がる。しかし、清水登之は1924年に渡仏しており、これ以降のニューヨークの日本人画家の活動の様相は不明である。

また、石垣栄太郎の美術活動に着目した研究に、安來正博の「石垣栄太郎関係スクラップ資料と、その補足的考察(1)」（1996）、「石垣栄太郎関係スクラップ資料と、その補足的考察(2)」（1997）がある¹³。ここでは、石垣栄太郎が蒐集した新聞のスクラップを中心に、アメリカの美術界における日本人画家の活動について言及しており、戦前のアメリカ社会における日本人画家の活動と評価を知る手がかりになる。しかし、蒐集された資料は、石垣栄太郎の社会的活動と思想の影響があり、偏りがある点は否めない。また、出典が確認できない記事も多く、日本人画家の活動の実態は不明な点が残る。このほかにも日本国内で開催された、アメリカに渡った日本人画家の展覧会と図録がある。その中でも安來正博の「資料に見る戦前の渡米画家たち—その活動の軌跡」（1997）¹⁴、および浅野徹の「大正・昭和前期の在米画家についてのノート」（1987）は、戦前のニューヨークで開かれた邦人美術展覧会について言及した重要な論考だ¹⁵。しかし、これらの研究では、邦人美術展覧会の開催の時期や出品者、展示された作品のタイトルは言及があるものの、展覧会の様相や開催の意図の十分な調査がされているとはいえない。

さらに、アメリカ美術史における国吉康雄の活動を調査した研究に、トム・ウルフ(Tom Wolf)の「The Tip of the Iceberg in Early Asian American Artists in New York」（2008）¹⁶、*The Artistic Journey of YASUO KUNIYOSHI*, (2015)がある¹⁷。これらはアメリカ美術界での国吉康雄と日本人画家の活動に言及した重要な論考だ。だが、調査対象は英字資料にとどまっているため、ニューヨークの日本人社会で、日本人画家がいかに評価されていたかは不明だ。また、1910年代から1930年代の邦人美術展覧会の開催について言及しているものの、これらの展覧会の開催の意図や日本人社会と美術家の関連は明瞭ではない。

このほかにも注目すべき先行研究に、星野睦子の「アメリカ美術家会議と国吉康雄」（1998）、「国吉康雄と1930年代ニューヨークの日系人画家—アメリカ美術家会議を糸口として」（2000）、「『アメリカン・シーン』絵画と1930年代の国吉康雄」（1997）がある¹⁸。これらの論考は、1930年代を中心に国吉康雄のアメリカ美術家会議での活動を詳細に述べた重要な

研究だ。しかし、アメリカ美術家会議における国吉康雄の活動に焦点が絞られているため、1930年代のニューヨークで活動した日本人画家の団体や邦人美術展覧会については調査の余地がある。

以上のような先行研究から、戦前のニューヨークで日本人により発行された活字メディアと、日本人の芸術活動を移民によるメディアとして包括的に扱い、これらのメディアが果たした役割と日本人画家の創作の意義を明確にした研究は、これまでないと言えよう。

2. 日本人のメディアと芸術活動の背景を探る意義

ではなぜニューヨークの日本人芸術家と日本人社会の繋がりは明確になっていないのか。その理由は、日本人社会で発行された日本語新聞や雑誌といった活字メディアと、文芸や美術といった芸術作品が、それぞれ異なる見地で調査されてきたことが考えられる。

その中で、まず日本語新聞や雑誌は、情報伝達と記録の保存を意図した媒体として、社会学の観点から「書誌」的な調査が進められてきた。そして日本語新聞や雑誌に掲載された文芸作品は、移民地を背景にした「文学」という枠組みで検討されてきた。また日本に生まれ、アメリカで芸術を学んだ画家の創作は、アメリカで活動する日本人の「美術」として、美術史の観点から調査が進められてきた。つまりこれらは、「書誌」、「文学」、「美術」という、それぞれ異なる分野で研究が進められてきたのである。さらに、調査の基盤となるニューヨークで発行された日本語新聞や雑誌の一次資料は、現存部数も少なく入手が困難なことから、新聞や雑誌の様相は明確になっていない点がある。そのため活字メディアに表れた日本人の文芸活動は、十分な調査検討がされてこなかったのだ。また、現地で創作活動をした日本人画家についても以下の点があげられる。まず、アメリカで活動した日本人画家はアメリカの美術団体が主催する展覧会や、日本人会後援の邦人美術展覧会に作品を発表していたものの、ここで活動した画家の多くが今日無名で、作品も所在不明のものがほとんどだ。そのため、彼らの活動の実体と作品の様相を知る手がかりは、当時の展覧会の図録や新聞雑誌に掲載された図版や美術批評に頼らざるを得ない。しかしアメリカで発行された、これらの資料は入手が困難で解読も容易ではないことから、日本語新聞と英字新聞の両方を資料として分析した研究は極めて少ない。

ニューヨークはヨーロッパ諸国との通商を中心に発展した国際都市だった。そのため当地は商業貿易を目的にした日系企業も支店を置く必要な都市であり、日本人会はこれらの有識者を中心に形成されていた。また文化芸術の分野でも、ニューヨークは東西の文化が行き交う交易都市であり、日本から東廻りでヨーロッパに渡る人々の中継点として多くの文化人が一時的に滞在した。このような都市で発行された日本語新聞や雑誌は、日本人社会の情報伝達の手段として重要な媒体だったといえるだろう。また日本語新聞や雑誌には文芸欄もあった。そこには、素人の文芸家だけではなく、日本の文壇で活躍した文士も作品を発表した質の高いものだった。さらに日本語新聞の紙面には、当地で活動する日本人画家の動静も記されている。ニューヨークで活動した日本人画家には、日本の美術学校で美術教育を

受けた者だけではなく、労働目的の移民として渡米し、アメリカで美術教育を受けた画家もいた。彼らは、アメリカの美術展覧会に作品を発表しており、その活動は日本語新聞だけではなく、英字新聞でも注目されている。これらのことから造形芸術は、活字メディアとは異なる言語の枠組みを超えた表現媒体だったと言える。

そこで、戦前のニューヨークの日本人のメディアとして、新聞や雑誌とこのような活字メディアの紙面に表れた文芸作品や美術家の創作活動を取り上げて、これらのメディアを現地の日本人の間だけではなく、日本人社会とアメリカ社会をつなぐ媒体という視点を取ると以下の点が明らかになるだろう。第一に、戦前のニューヨークで発行された日本人による活字メディアの意義がより明らかになる。第二に、日本語新聞に表れた文芸および美術活動をたどることで、日本に生まれ、アメリカで創作をした彼らの創作の背景が浮かび上がる。そして第三に、邦人美術展覧会の様相を探ることで、時代の推移と共に変容した、日本人画家の帰属意識の変遷や創作の意図が明らかになる。

このように戦前のニューヨークで発行された新聞や雑誌をもとに、日本人芸術家の活動を再検証することで、当地の日本人社会と芸術家の活動の関連性が浮かび上がるとともに、移民としてアメリカに渡った人々が、異郷で創作活動をした意義を明瞭にできるものと考えられる。

3. 論点

以上の認識に基づき本研究では、戦前のニューヨークの日本人の文芸、美術活動に着目し、芸術家と日本人社会との関連を指摘した上で、作品に表れた彼らの創作の意図と帰属意識の変遷を浮かび上がらせる。その過程で、各章では以下の点について留意しながら論じていく。第一に、日本人によるメディアの果たした役割は何か。第二に、メディアと日本人社会にはいかなる関わりがあったのか。第三に、日本に生まれ、アメリカで創作活動をした芸術家の帰属意識は時代の推移と共にどのように変遷し、作品に反映されているのか。そうすることで、ニューヨークの日本人社会で発行された活字メディアと芸術家の創作活動との繋がりが明らかになると考えられる。

そこで第1章から第4章では1900年から1920年にかけてニューヨークで日本人が発行した新聞や雑誌を取り上げて、これらのメディアで発表された文芸作品の様相を明瞭にする。第1章では、1900年にニューヨークで発行された、英字新聞『Japan and America』の発刊の意図と特色を探る。そこで同時期に発行されたシアトルの『Japan Current』とサンフランシスコの『Chrysanthemum』とを比較検討し、ニューヨークで日本人により発行された英字雑誌の特徴について論じる。第2章では、1907年に発行された雑誌『太西洋』を取り上げる。これまで所在不明だった同誌第1号から第3号までの様相と、第2号の文芸欄に掲載された永井荷風の「夜の女」の初出を明らかにし、ニューヨークの移民地文壇と永井荷風の関係性を論じる。そして第3章では、田村松魚のアメリカ滞在時の創作を扱う。田村松魚は、アメリカ西海岸で発行された日本語新聞の編集に携わる傍ら、文芸作品も発表

していた。そこで、日本語新聞に発表した彼の文芸作品とアメリカでの足跡を追うとともに、アメリカにおける田村松魚の創作活動の意義を論じる。第 4 章では、ニューヨークの日本語新聞『日米週報』と『紐育新報』に掲載された、石垣栄太郎の文芸作品を取り上げる。これまで石垣栄太郎は、社会派リアリズムの画家として美術活動に焦点が当てられてきた。しかし、父親の呼び寄せで渡米した彼が、西海岸からニューヨークに移動した背景には、ガーtrude・ボイル(Gertrude Boyle)とのスキャンダルがあった。本章では石垣栄太郎が日本語新聞に発表した文芸作品の調査をもとに、彼がニューヨークに移動する転機となった事件の様相と、美術活動を始める以前の石垣栄太郎の創作活動について述べる。

第 5 章から第 9 章では、日本に生まれ、アメリカで美術を学んだ日本人画家の活動に着目する。第 5 章では、1910 年代年に 2 回開催された紐育日本美術協会の邦人美術展覧会を扱う。この当時の日本人画家は、日本の美術学校で美術教育を受けた後、ヨーロッパに渡る目的で、ニューヨークに一時的に滞在した画家が多く、彼らの芸術活動の背景には、日系企業の支援があったことは創造に難くない。そこで、1917 年と 1918 年に開かれた、邦人美術展覧会に着目し、ここに表れた日本人画家の作品の様相と、日系企業との画家の関わりを述べる。第 6 章では、1920 年代のアメリカ美術界を中心に独立美術家協会(Society of Independent Artists) とサロonz・オブ・アメリカ(Salons of America)の展覧会に出品された日本人画家の作品の様相と創作の意図をたどる。ここでは、労働移民として渡米し、アメリカで美術教育を受けた一世の日本人画家の活動に着目し、日本語新聞と英字新聞の美術批評から、日本に生まれアメリカで芸術を学んだ日本人画家が、1920 年代のニューヨークをいかなる視点で描出したのかに留意したい。第 7 章では、1927 年に紐育新報社が企画した邦人美術展覧会を取り上げる。移民地における日本語新聞は日本人会の後援のもとで発行されており、日本人会の広報誌的な役割も担っていたと考えられる。そこで紐育新報が主催した邦人美術展覧会と、日本人会の幹事だった角田柳作が設立を唱えた「日米文化学会」との関連を探る。第 8 章では、1935 年と 1936 年に紐育新報社の後援で開かれた邦人美術展覧会を取り上げる。満州事変以降、日米関係の悪化が懸念される中で日本人画家の美術展覧会を開いた意図と、日本人社会が推進した日米親善と文化交流との関連を明らかにする。さらに第 9 章では、世界恐慌下のニューヨークにおける日本人画家の活動として、まずジョン・リード・クラブ(John Reed Club)とアメリカ美術家会議(American Artists' Congress)、Work Progressive Administration(WPA)、そしてニューヨーク市民美術委員会での彼らの活動に着目する。日本の中国侵入と日本の軍国主義と世界規模に拡大するファシズムを背景に、リベラルな思想へと傾倒した日本人画家のアイデンティティの葛藤が描き出される。そして結章では、第 1 章から第 9 章で述べてきた、日本語新聞や雑誌の発行と、これらの活字メディアに表れた日本人芸術家の文芸活動を意味づける。また日本語新聞が後援した日本人画家の活動と、美術展覧会の開催の意図を俯瞰してみる。そして異郷に渡った日本人の芸術活動が日米関係に果たした役割を意義づけたい。

4.定義

本研究における各用語の定義を確認しておく。

1.メディア・日本人のメディア・移民地文芸

本研究では、情報や意思を伝達する手段として、活字媒体と絵画・彫刻などに表れる造形芸術をメディアとして捉える。その中でも日本人により発行された新聞、雑誌の活字メディアを日本人のメディアと称した。ここには、星一が発行した英字誌も含める。日本語の活字メディアは、情報伝達的手段として日本人社会の重要な役割を果たしていた。また、文芸欄は文芸家の作品発表の場でもあった。移民地文芸 20 世紀初頭のアメリカで発行された日本人による英字誌は、アメリカの読者を対象にした日本の実状を伝達する情報機関だった。

移民地とは、日本人が移住した異郷の地を指す。また移民地文芸は、移住した日本人による、異郷を背景にした文芸作品を指す。

2.造形美術・日本人画家

造形芸術は、絵画、彫刻を中心にした美術作品を称す。これらは言語の枠組みを超えて意思の伝達を可能にした媒体だった。

日本人画家には、日本で美術を学び、ヨーロッパに渡る中継点としてニューヨークに一時的に滞在した画家と、日本に生まれ、出稼ぎを目的に移民として渡米した後に、アメリカで美術を学んだ画家がある。本研究では日本の国籍を有し、アメリカの市民権の取得資格がない画家を日本人画家と称した。但し、1910 年代は、これらの画家が混在しているため、日本の美術学校で学び美術家としてアメリカに滞在した画家と、アメリカの美術学校で学び芸術活動を始めた画家を区別するために、第 5 章では後者を渡米画家とも称している。

¹ 蝦原八郎『海外邦字新聞雑誌史』学而書院(1936 年 1 月 13 日)。

² 田村紀雄・白水繁彦「在米日系新聞の発達史研究序説」『人文自然科学論集』第 61 号(1982 年 9 月 25 日)、33-90；田村紀雄・新井勝紘「在米日系新聞の発達史研究(5) 自由民権期における桑港湾岸地区の活動」『人文自然科学論集』第 65 号(1983 年 12 月 5 日)、75-136；田村紀雄・山本英政・阪田安雄「在米日系新聞の発達史研究(7) 安孫子久太郎—永住を主唱した『日米』新聞経営者」『人文自然科学論集』第 68 号(1984 年 12 月 10 日)、61-96；田村紀雄「在米日系新聞の発達史研究(11) 反ファシズムの新聞『同胞』—1937 年～1942 年」『人文自然科学論集』第 78 号(1988 年 3 月 15 日)、139-178；田村紀雄・坂口満宏「在米日系新聞の発達史研究(17) シアトル初期の日本語新聞」『人文自然科学論集』第 92 号(1992 年 12 月 5 日)、39-70；田村紀雄「在米日系新聞の発達史研究(18) 1880-1910、Portland 日本語新聞と伴新三郎—外交官辞し、日本語新聞発刊へ」『人文自然科学論集』第 93 号(1993 年 3 月 16 日)、65-89；田村紀雄・大澤隆「在米日系新聞の発達史研究(21) 『蒸気船』新聞と萌芽期の桑港日本町—大澤栄三の活動を中心に」『人文自然科学論集』第 97 号(1994 年 7 月 20 日)、3-32 を参照されたい。

³ 田村紀雄・山本武利「日系新聞研究ノート(1) 加州日系紙の新聞広告と経営—1910～1940」『東京経済大学会誌』第 132 号(1983 年 9 月 15 日)、187-238；田村紀雄・蓮池紀生「日系新聞研究ノート(7) 紐育日系新聞小史」『東京経済大学会誌』第 140 号(1985 年 3 月 20 日)、119-158；田村紀雄・藤野雅己「日系新聞研究ノート(8) オークランド『新日本』新聞の基礎的研究」『東京経済大学会誌』第 144 号(1986 年 1 月 15 日)、363-406

を参照されたい。

- ⁴ 田村紀雄・白水繁彦編『米国初期の日本語新聞』勁草書房（1986年9月20日）；田村紀雄『アメリカの日本語新聞』新潮社（1991年10月20日）；田村紀雄『海外の日本語メディア-変わり行く日本町と日系人』世界思想社（2008年2月10日）を参照されたい。
- ⁵ 田村紀雄・蓮池紀生「日系新聞研究ノート(7) 紐育日系新聞小史」『東京経済大学会誌』第140号（1985年3月20日）、119-158。
- ⁶ 山本岩夫「翁久允と『移民地文芸論』」『立命館大学言語文化研究』第5巻5・6合併号（1994年2月28日）、11-42。
- ⁷ 中郷芙美子「『移民地文芸』の先駆者翁久允の創作活動—『文学会』創設から『移植樹』まで—」『立命館大学言語文化研究』第3巻6号（1992年3月20日）、1-23；中郷芙美子「翁久允移民地文芸の特徴—『生活』と『思想』について」『立命館大学言語文化研究』第4巻6号（1993年3月20日）、49-64。
- ⁸ 水野真理子『日系アメリカ人の文学活動の歴史的変遷—1880年代から1980年代にかけて』風間書房（2013年3月31日）。
- ⁹ 日比嘉高「日系アメリカ移民一世の新聞と文学」『日本文学』第53号（2004年11月10日）、23-34；日比嘉高「永井荷風『あめりか物語』は「日本文学」か？」『日本近代文学』第74集（2006年5月15日）、92-107；日比嘉高『ジャパニーズ・アメリカ移民文学・出版文化・収容所』新曜社（2014年2月20日）。
- ¹⁰ 山本岩夫「アメリカ東海岸唯一の文芸誌『NY文藝』」篠田左多江・山本岩夫編『日系アメリカ文学雑誌研究—日本語雑誌を中心に』不二出版（1998年12月15日）、106-126。
- ¹¹ 浦西和彦「前田河広一郎と『日米時報』」関西大学国文学会『国文学』第83・84合併号（2002年1月31日）、357-373。
- ¹² 岡義明「清水登之、生涯を綴った日記」大川美術館『企画展 No.24 清水登之 滞米日記と素描』財団法人大川美術館（1994年9月27日）。
- ¹³ 安來正博「石垣栄太郎スクラップ資料」『和歌山県立近代美術館紀要』第1号（1996年3月31日）、15-66；「石垣栄太郎スクラップ資料」『和歌山県立近代美術館紀要』第2号（1997年3月31日）、55-103。
- ¹⁴ 安來正博「資料に見る戦前の渡米画家たち—その活動の軌跡—」和歌山県立近代美術館編『アメリカの中の日本 石垣栄太郎と戦前の渡米画家たち』（展覧会図録）（1997年11月11日）、57-64。
- ¹⁵ 浅野徹「大正・昭和前期の在米画家についてのノート」和歌山県立近代美術館『アメリカに学んだ18人 太平洋を越えた日本の画家たち』（展覧会図録）（1987年）76-82。
- ¹⁶ Wolf, Tom “The Tip of the Iceberg in Early Asian American Artists in New York,” in *Asian American Art A history 1850-1970*, Chang, Johnson, Karlstrom, eds. (Stanford California: Stanford University press 2008) ,83-109.
- ¹⁷ Wolf, Tom. *The Artistic Journey of YASUO KUNIYOSHI*. (Washington DC: Smithsonian American Art Museum, 2015).
- ¹⁸ 星野睦子「『アメリカン・シーン』絵画と1930年代の国吉康雄」『欧米文化研究』第14号（1997年10月）、56-82；「アメリカ美術家会議と国吉康雄」『筑波大学芸術学研究誌 藝叢』第14号（1998年3月1日）、1-30；「国吉康雄と1930年代ニューヨークの日系人画家—アメリカ美術家会議を糸口として—」『大学美術教育学会誌』第32号（2000年3月10日）、275-281。

第1章

日本人が発行した英字雑誌『Japan and America』

— 星一のメディア活動 —

はじめに

19世紀末から20世紀初頭を中心に、労働や修学のためにアメリカに渡った日本人は、各地で慰安や情報伝達的手段として日本語新聞、雑誌を発行した。その文芸欄には詩や小説、俳句などが掲載され、日本人社会を背景とした独自の文学が生まれた。海外における日本語の文学の発展は、これまで日本人社会と日本語新聞や雑誌などの発表媒体が基盤となっていることが、日比嘉高の論考で指摘されてきた¹。またアメリカで発行された日本語新聞や雑誌については、蛭原八郎や²、田村紀雄らの調査により解明されつつある³。しかし、これらの研究は日本語新聞や雑誌は散逸が著しいため、調査が困難な現状にある。そのためアメリカにおける日本人社会の実態を究明するには、当地で発行された日本語新聞や雑誌だけではなく、日本人が発行した英字雑誌も調査の対象にすることが必要だろう。

アメリカで日本人が発行した英字雑誌は、これまで蛭原八郎の『海外邦字新聞雑誌史』で取り上げられている。そこには、「外字の新聞雑誌は外人を読者の対象として拵へたもの」であり、「海外に於ける邦人発行の外字新聞雑誌は、吾人の立場を闡明して、外人をしてそれを正しく認識せしめ、延いては又吾等の学術なり商業なりの上に何等かの利益を齎さんとするが、其目的である」と述べている⁴。そして、このような外国人を購読者とした英字メディアには、星一が1900年にニューヨークで発行した『日米 (Japan and America)』を始め、佐野喜代治が1897年にサンフランシスコで発行した『日米の声 (Japanese-American Voice)』や、橋口次平が1908年にシアトルで発行した『日本潮流 (Japan Current)』について言及がある⁵。このほかにも『Japanese-American Voice』は、川嶋保良の『Japanese-American Voice—米国で発行された日本人による最初の英字誌—』(1999)で内容について言及しているものの、日本人が発行した英字雑誌の相対的に見た研究はまだないといえる⁶。

そこで本章は、ニューヨークで発行された『Japan and America』を中心に⁷、サンフランシスコで発行された『Japanese-American Voice』(後に『Chrysanthemum』と改題)と⁸、シアトルの『Japan Current』の比較検討を通して⁹、『Japan and America』の特色を解明する。

1. 西海岸の日本語新聞

英字雑誌について述べる前に、まずは西海岸の日本人社会の形成と共に発行された日本語新聞、雑誌の成立過程を以下にたどる。

アメリカで最初に日本人社会が形成された西海岸では、19世紀末から日本語新聞や雑誌が発行されている。その最も初期のものは、サンフランシスコで1886年頃発行された『東

雲雑誌』だと考えられる。さらに同地では、『新日本』、『第十九世紀』、『自由』、『愛国』、『第十九世紀新聞』が発行された。これらの日本語新聞は、日本での言論弾圧を逃れた自由民権運動系の有志者によるものがほとんどで、その内容も日本政府の批判を書いた政治色の強い雑誌だった¹⁰。その後、同地では邦人の増加に伴い、慰安や情報伝達のために『桑港新聞』や『金門日報』といった日刊の日本語新聞が発行されている。以後、日本語新聞は廃刊、買収、合併をくり返し、1894年5月25日に『新世界新聞』が、1899年4月3日に『日米』が発行されており、サンフランシスコでは、この二大日本語新聞の時代となる。

また、同時期にはシアトルでも日本語新聞が発行される。まず、東洋貿易会社の資金で1899年10月に『おもしろ誌』（後の『西北新報』）が発行されている。またシアトルの日本人会の機関誌として1901年には『日本人』（後に『新日本人』と改題）が、そして1902年には『北米時事』がそれぞれ発行された。さらに、『玉手箱』が『旭新聞』と改題しており、1905年には『大北日報』の前身の『あめりか』が発行された。このように、1900年代初頭のシアトルでは、『旭新聞』、『あめりか』、『北米時事』の三紙が発行されたのだ¹¹。そして、これらの日本語新聞の文芸欄には、翁久允の小説「別れた間」、「破魔子」（「旭新聞」）といった、シアトルの日本人社会を描いた文芸作品も掲載された¹²。

そしてロサンゼルスでは、1988年5月に『新日本』が発行されているし、1903年4月には『羅府新報』が発行された¹³。ロサンゼルスは、1906年のサンフランシスコ大地震以降、被災地から日本人が移り住み、日本人社会が発展し、新聞雑誌の発行も盛んになった。

このように、日本人が多く在留したアメリカ西海岸では、19世紀末から移民地の日本人社会の情報伝達や慰安を意図した日本語新聞や雑誌が発行されている。しかし新聞や雑誌の出版は経営が厳しく、短命に終わるものも多かった。またこれらの資料は散逸が著しく、調査は極めて困難である。

2. ニューヨークの英字誌『Japan and America』

東海岸の日本語メディアは、どのように発展したのだろうか。蛭原八郎によれば、ニューヨークで初めて発行された日本語新聞は、1897年頃ブルックリンの大学生、松本黙が発行した『紐育週報』だとしている¹⁴。そして1900年12月8日に、星一が『日米週報』を発行している。同紙発行の目的は、在留邦人の慰安のために日本の実情を記すとともに、米国の実情を邦人に伝えることだった。だが、購読者は在留邦人だけでなく外国人もあり、発行部数の増加と共に、現地の英語話者に日本の実情を明確に伝える英字メディアの必要が生じた。そこで、1901年7月に『Japan and America』が発刊されたのだ。

『Japan and America』の初刊は10,000部が発行され、その後も毎号7,000部を発行している。このうち900部を日本に、300部を清韓その他のアジア諸国に、また300部を欧州及び豪州に配送し、5,500部は合衆国内に発売頒布している。このほかにも、アメリカ国内では上下議院中の外交家や東洋関係の調査委員、合衆国政府の各部局の報告寄贈の応酬として無料で送付するものが200部、このほかにも知名の政治家や経済学者、新聞記者、

商工実業家に 300 部を贈呈している。また各新聞雑誌との交換に 150 部を用いている。またアメリカ、カナダ、メキシコのアメリカ人の購読者に 1900 部、在留邦人に 300 部を送付している¹⁵。以上のことから、『Japan and America』は、アメリカだけではなく、欧州やアジア諸国の有識者に日本の商業や貿易、経済の実状を伝える重要な雑誌だったといえよう。

本誌の体裁は、第 1 巻第 1 号によると、英文欄 11 ページ、ローマ字で記した日本語欄 10 ページ、広告が 2 ページあり、編集には星一、安楽英治、スタンホープ・サムス(Stanhope Sams)が携わっている。英文の紙面には、「東洋のニュースの概略 (Summary of News of the East)」「極東の発展 (Progress in the Far East)」「論説 (Editorial Articles)」「総論 (General Articles)」があり、新聞同様の雑誌だった¹⁶。

『Japan and America』の発刊について、星一は「英文「日米」雑誌発行の顛末」で、次のように述べている。日本との「通商交通の親密なる合衆国の邦土に於て、未だ一も外字新聞の邦人の手に経営され、邦人の思想を以て日本の実情を注入するの機関なきは、実に今日の最大欠点にして、在米邦人の普く遺憾とする処に係れり」とある¹⁷。さらに、『Japan and America』の第 1 号では、「日本の事情を外国人に示し、外国の事情を日本人に知らしむるは、日本国の位置を高くする階段である。『日米』即ち『Japan and America』は、この目的を持って生まれたものでございます。西洋人に知らしむるために、英文をもって日本のことを書き、日本人に西洋の事柄をよく知らしめんためにローマ字をもってアメリカおよびヨーロッパにおける事柄を書きます」とある。また、日本はアメリカの大得意であり「将来の最もよい得意であると思います。故さらに、この国とますます親密を図ることは、目下緊要のことと思います。この雑誌は、この目的を持って出来たものである」と発行の意図を述べている¹⁸。

また同誌は、日本語欄にローマ字の表記を用いた点が特異な点だろう。英字新聞はこれについても言及している。例えば、『ワシントン・ポスト(Washington Post)』は、日本当局がローマ字をもって、漢字を排除しようとしていることから、星一が英文とローマ字の雑誌を発行するに至ったと述べている¹⁹。また、『ニューヨーク・トリビューン(New York Tribune)』は²⁰、日米両国の経済の発展を促進するものだとしている。さらに、『メイル・アンド・エクスプレス(Mail and Express)』では、本誌の編集者スタンホープ・サムスが、日本語の「かな」や漢字の習得の困難な実状について言及し、ローマ字を勧める最も現実的な方法として『Japan and America』が発行されたと述べている²¹。そして、アメリカ国内だけではなく、日本の『中外英字新聞』でも、『Japan and America』の発行について、「本紙の特色とする所は前半は英文にして後半は羅馬字の日本を以て書けり。但し英文と羅馬字とは其記事を異にす。肖像。景色等の写真銅板を数種挿入し。紙質良好印刷鮮明外国発行の雑誌たるに恥ぢず」とあり、英文欄の記事目録を挙げた上で、「一年に僅か貳圓にて米国発行の雑誌を購読し得るとは面白き世の中と為りたり」と伝えている²²。

さらに、『Japan and America』の英文の記事は、英字新聞にも転載されている。例えば、

日本の新しい銀行のシステムや、鉄道の建設計画を伝えた、「Chino-Japan Bank System」は²³、『アナコンダ・スタンダード(*Anaconda Standard*)』に²⁴、「Tokyo's Electric Railway」は²⁵、『ロサンゼルス・タイムズ (*Los Angeles Times*)』にある²⁶。また、日本に女子大学が創設されたことについて言及した「Education of Women in Japan」は²⁷、「アナコンダ・スタンダード」に転載されている²⁸。そして、日本における煙草や果物の栽培について取り上げた、「Japan to Grow Tobacco」は²⁹、『メール・アンド・エクスプレス』に³⁰、「Fruit Growing in Japan」は³¹、『ワシントン・ポスト』でそれぞれ伝えられている³²。また、日清戦争や日本と韓国の関係、日英同盟をふまえた極東の政情、日韓の統治者について記した「The Birth of the Emperor of Japan」は、『スプリング・フィールド・リパブリカン (*Springfield Republican*)』に転載されている³³。そして、アイヌ民族の習慣とインディアンとの類似を指摘した「Savage Japanese」は³⁴、『メール・アンド・エクスプレス』と、『アイダホ・ステータスマン (*Idaho Statesman*)』で取り上げられている³⁵。このほかにも日本の選挙の状況を記した「“Clan” Government and the Japanese Party Leaders」が³⁶、『リテラリー・ダイジェスト(*Literary Digest*)』に掲載されている³⁷。また、日本の国歌を紹介した「A Short National Anthem」は³⁸、『プレスコット・イブニング・クーリア (*Prescott Evening Courier*)』にある³⁹。このように転載された記事のほとんどが「極東の進展 (Progressive in far East)」欄に掲載されたものだ。つまり『Japan and America』は、遠く離れた日本の情勢をアメリカ社会に伝える重要な媒体だったのだ。

英字欄は英語話者に向けたものだったが、その一方、ローマ字で記した日本語の記事は、日本の雑誌に転載されている。例えば『太平洋』には、「世界第一の製鉄会社」や⁴⁰、「紐育市の建物」⁴¹、「紐育の地下鉄道」⁴²といったニューヨークの近況を伝えるものがある。このほかにも工業学校の設立について書かれた「カーネギー氏の工業学校」⁴³や、バッファローで開催された万国博覧会の近況を伝える記事として、「バッファロー博覧会の景況」⁴⁴が転載されている。『Japan and America』の記事が、博文館から発行された『太平洋』に掲載されたことは、本誌がアメリカの現状を伝える重要な媒体だったと言えるだろう。

以上のことから、『Japan and America』は、アメリカ国内を始めアジアや欧州諸国の有識者に日本の実状を伝えただけではなく、日本の有識者にもアメリカの実状を伝える意図があった。これらのことから、本誌は、日米両国の友好と商業や貿易の発展を意図した重要な活字メディアだったと言えよう⁴⁵。

3. 西海岸で発行された英字雑誌

『Japan and America』のほかにも日本人が発行した英字雑誌は存在した。それらはどのようなメディアだったのだろうか。サンフランシスコの『Japanese-American Voice』とシアトルの『Japan Current』について以下にたどる。

サンフランシスコでは、1896年に佐野喜代治が『Japanese-American Voice』を発行した⁴⁶。発刊の辞にあるように、同誌は日米両国の相互理解と友好を深めるために、アメリカ

の人々には、日本人の思考や状況を伝えることを、そしてアメリカに暮らす日本人には、アメリカの人々との情報伝達の手段となることを意図して発行された英字雑誌だった。そのため紙面には、野口ヨネの詩や浦島伝説といった文芸や日本の文化、歴史、風俗、習慣を伝えるものや、政治や経済、産業を伝える記事が中心になっている。このような記事を通して、現地の人々に日本を紹介することは、太平洋沿岸地域で頻繁に起った日本人排斥の動きを抑止する意図があったと考えられる。この後、佐野喜代治はサンフランシスコで『Japan Tribune』という英字雑誌を発行したようだ。蛸原八郎によると、本誌は「一時は毎号一万部以上も印刷頒布したさうであるが、永続はしなかった」とある⁴⁷。さらに同誌については、『日本人』の広告欄にも、「本誌は米国日本人間に於ける唯一の英字雑誌なり今般ヴァンクーバー、ヴィクトリア、タコマ、ポートランド地方の購読者諸君の便宜を計りシアトル日本人社に取次を依頼致し置き候間此段広告仕候也 桑港ジャパントリビン社、シアトル日本人社」とあり⁴⁸、アメリカとカナダの西海岸を中心に購読者がいたようだが、同誌の所在は不明だ。

また、シアトルでは1907年に橋口次平が『Japan Current』を発行している。同誌について蛸原八郎は、「明治41年(1908年)頃、シアトルに於て橋口次平が『日本潮流』“The Japanese Carrents”を創刊した。3、4号で廃刊した」と述べている⁴⁹。だが、『Japan Current』の第1巻第3号から第2巻第7号(1907年11月から1908年8月)が、ニューヨーク市立図書館(The New York Public Library)に所蔵されていることが確認できた。同誌の表紙には、「アメリカで日本の思想の種を蒔くために毎月発行する」という発行の意図が明確にされている⁵⁰。また紙面は、日露戦争後の日米の関係改善を目的とした記事や、日本と諸外国との対外貿易の歴史、相撲の仕方、正月行事など日本の文化の紹介や新渡戸稲造の「武士道」、アメリカと同化することを進める論説、詩や小説の懸賞作品があり、日本の歴史や文化をアメリカの人々に紹介する記事で構成されている⁵¹。このような紙面と発行時期を考慮すると、同誌は1907年に日本からの移民を制限した紳士協定の影響と日本の歴史や文化を紹介し、排日の抑止を目的として発行されたと考えるのが妥当だろう。

このように、世紀転換期のアメリカで、日本人により発行された英字雑誌を比較検討すると、以下の点が明確になる。まず、サンフランシスコとシアトルでそれぞれ発行された『Japanese-American Voice』と『Japan Current』は、西海岸を中心とする日本人排斥の抑止を目的とした雑誌だった。そのため、これらの雑誌には、日本の歴史や習慣、風俗を取り上げて、日本文化の理解を求める内容が多かった。ところが東海岸のニューヨークで発行された『Japan and America』は、日米の発展のために、日本の情報や経済、産業、貿易の発展や日露戦争前の日本とロシア、アジア諸国の対外関係を中心に、東洋の発展を実況的に伝える雑誌だった。そのため『Japan and America』は、各地の英字新聞や雑誌からも反響があり、日本の実状をアメリカ社会に伝達する重要な媒体だったのだ。そのため、発行期間も、『Japanese-American Voice』や『Japan Current』が僅か1年足らずだったのと比較して、『Japan and America』は、経営難であったにも拘らず、約5年間という長

期にわたり発行されたのだと考えられる。

おわりに

19 世紀末から 20 世紀にかけてのアメリカにおける日本語新聞や雑誌は、サンフランシスコで発行された政治色の強い雑誌に始まり、西海岸の都市を中心にした日本人の人口の増加に伴い、慰安や情報伝達的手段として発行されるようになった。

一方、東海岸のニューヨークでも、1900 年に星一により『日米週報』が発行されている。また星一は、翌年に英字雑誌『Japan and America』も発行している。これまで『Japan and America』は、ほとんど言及されてこなかったが、同誌は、日米両国の親善と商業、貿易を促す目的で発行されていたのだ。その特色は、日本と東洋の実情を記した英文欄とアメリカの実情をローマ字で記した日本語欄の紙面にあった。英文欄は、日本の政治や経済、産業、貿易の現状を伝えており、それらの記事は、英字新聞や雑誌にも転載された。そして日本語欄は、アメリカの情報として日本の雑誌に転載されている。これらのことから『Japan and America』は、日本とアメリカの情報伝達的手段として日米双方の重要な役割を担っていたのだ。

西海岸で発行された『Japanese-American Voice』と『Japan Current』も、『Japan and America』と同様に、日米親善を意図して日本の文化を英字で伝えた雑誌だが、西海岸の英字雑誌は、日本人排斥運動の抑止を意識した雑誌だった。これに対して、ニューヨークで発行された『Japan and America』は、これらの雑誌とは異なる。それは日本の経済や産業、貿易を中心とした日本の実情を、アメリカの人々に伝える目的で発行された点だ。本誌がアメリカ社会でいかに重要なメディアだったかは、英字新聞や雑誌に転載されていることから明らかだ。

ニューヨークは、欧州諸国との商業、貿易の中継地点として発展した経済の中心都市だ。そのため、当地の日本人社会も、官吏や日系企業の支店の駐在員を中心に形成された。このような都市を背景に、星一は日本人社会の情報伝達的手段として週刊の『日米週報』を発行する傍らで、日米親善と商業や貿易の促進を意図した日米両国の情報を相互に伝える媒体として英字誌『Japan and America』を発行したのだ。『日米週報』は、散逸が著しく一貫した調査が困難な日本語新聞だ。そのため本章で取り上げた『Japan and America』は、1900 年代のニューヨークの日本人社会の実状を知る重要な資料だといえよう。本誌は、発行者の星一が日本に帰国する 1905 年の夏まで発行されていたとされているが⁵²、創刊号から第 3 巻第 11 号（1901 年 7 月から 1903 年 11 月）までの現存が確認されたのみで、それ以後の所在が明らかになっていない。在留邦人の出版の歴史や、1900 年頃の日本の対外貿易を考えるだけでなく、ニューヨークの日本人社会の発展を明らかにする上で、『Japan and America』の未発見の巻号は究明する余地があるだろう。

- 1 日比嘉高「日系アメリカ移民一世の新聞と文学」『日本文学』第53巻第11号(2004年、11月10日)、23-34。
- 2 蛭原八郎『海外邦字新聞雑誌史』学而書院(1936年1月13日)。
- 3 田村紀雄・白水繁彦「在米日系新聞の発達史研究序説」『人文自然科学論集』第61号(1982年9月25日)、33-90；田村紀雄・新井勝紘「在米日系新聞の発達史研究(5) 自由民権期における桑港湾岸地区の活動」『人文自然科学論集』第65号(1983年12月5日)、75-136；田村紀雄・山本英政・阪田安雄「在米日系新聞の発達史研究(7) 安孫子久太郎—永住を主唱した『日米』新聞経営者」『人文自然科学論集』第68号(1984年12月10日)、61-96；田村紀雄「在米日系新聞の発達史研究(11) 反ファシズムの新聞『同胞』—1937年～1942年」『人文自然科学論集』第78号(1988年3月15日)、139-178；田村紀雄・坂口満宏「在米日系新聞の発達史研究(17) シアトル初期の日本語新聞」『人文自然科学論集』第92号(1992年12月5日)、39-70；田村紀雄「在米日系新聞の発達史研究(18) 1880-1910、Portland 日本語新聞と伴新三郎—外交官辞し、日本語新聞発刊へ」『人文自然科学論集』第93号(1993年3月16日)、65-89；田村紀雄・大澤隆「在米日系新聞の発達史研究(21) 『蒸気船』新聞と萌芽期の桑港日本町—大澤栄三の活動を中心に」『人文自然科学論集』第97号(1994年7月20日)、3-32；田村紀雄・山本武利「日系新聞研究ノート(1) 加州日系紙の新聞広告と経営—1910～1940」『東京経済大学会誌』第132号(1983年9月15日)、187-238；田村紀雄・蓮池紀生「日系新聞研究ノート(7) 紐育日系新聞小史」『東京経済大学会誌』第140号(1985年3月20日)、119-158；田村紀雄・藤野雅己「日系新聞研究ノート(8) オークランド『新日本』新聞の基礎的研究」『東京経済大学会誌』第144号(1986年1月15日)、363-406；田村紀雄・白水繁彦編『米国初期の日本語新聞』勁草書房(1986年9月20日)；田村紀雄『アメリカの日本語新聞』新潮社(1991年10月20日)；田村紀雄『海外の日本語メディア—変わり行く日本町と日系人』世界思想社(2008年2月10日)。
- 4 蛭原八郎『海外邦字新聞雑誌史』学而書院(1936年1月13日)、319。
- 5 Ibid. 319-332。
- 6 川嶋保良『Japanese-American Voice—米国で発行された日本人による最初の英字誌—』精文堂印刷(1999年12月16日)。
- 7 *Japan And America*. Vol.1- Vol.3 No.11. July 1901 –November 1903. Library of Congress 所蔵。
- 8 *Japanese-American Voice*. No.1- No.6. February 1897-October 1897. 1897年12月発行の第2巻第1号から *Chrysanthemum* と改題(No.1- No.3. December 1897-February 1898)。
- 9 *Japan Current*. Vol.1 No.3-Vol.2No.7. November 1907-August 1908.
- 10 田村紀雄『アメリカの日本語新聞』新潮社(1991年10月20日)、37-90。
- 11 竹内幸次郎『米国西北部日本移民史』大北日報社(1929年7月1日)、539-371。
- 12 『翁久允全集』第二巻、翁久允全集刊行会(1972年2月25日)、90-94；175-184。
- 13 『羅府新報』第20000号、1970年3月14日。
- 14 紐育日本人会編『紐育日本人発展史』PMC出版(1984年9月10日[1921年3月30日])。
- 15 「星一『英文「日米」雑誌発行の顛末』」蛭原八郎『海外邦字新聞雑誌史』学而書院(1936年1月13日)、325。
- 16 Ibid. 321-329。
- 17 Ibid. 321-322。
- 18 “Hakko no Kotoba” *Japan and America*. July, 1901.
- 19 “Plans Half Japanese Paper. Correspondent of Tokyo Chuwo Visits Washington to Study Newspaper Work” *Washington Post*, April 24, 1901.
- 20 “Bonds Drawing Closer. New Paper Started to Increase Sympathy Between Japan and America” *New York Tribune*, July 14, 1901.

-
- ²¹ “Hajime Hoshi’s Patriotic Task. To free Japanese Tongue” *Mail and Express*, August 24, 1901.
- ²² 『中外英字新聞』1901年9月15日、「日米 Japan and America」。
- ²³ “Proposed Chino- Japanese Bank System” *Japan and America*, August, 1901.
- ²⁴ “Chino-Japan Bank System” *Anaconda Standard*, September 12, 1901.
- ²⁵ “Tokyo’s Electric Railway” *Japan and America*, July, 1901.
- ²⁶ “Tokyo’s Electric Railway” *Los Angeles Times*, August 21, 1901.
- ²⁷ “Education of Women in Japan” *Japan and America*, July, 1901.
- ²⁸ “Women of Japan” *Anaconda Standard*, August 17, 1901.
- ²⁹ “Japan to Grow Her Own Tobacco” *Japan and America*, September, 1901.
- ³⁰ “Japan grow Tabacco” *Mail and Express*, September 14, 1901.
- ³¹ “Fruit Growing in Japan” *Japan and America*, July, 1902.
- ³² “Fruit Growing in Japan” *Washington Post*, July 13, 1902.
- ³³ “The Two Nation of the Far East” *Springfield Republican*, February 16, 1902.
- ³⁴ “The Ainus” *Japan and America*, July, 1901.
- ³⁵ “Savage Japanese” *Mail and Express*, July 20, 1901; *Idaho Statesman*, August 15, 1901.
- ³⁶ “Clan” Government and the Japanese Party Leaders” *Japan and America*, July, 1902.
- ³⁷ “Prospects of the Japanese Elections” *Literary Digest*, July 26, 1902.
- ³⁸ “Japanese National Anthem” *Japan and America*, November, 1901.
- ³⁹ “A Short National Anthem” *Prescott Evening Courier*, February 12, 1902.
- ⁴⁰ “Sekai Dai-Ichi no Sei-Tetsu Kwaisha” *Japan and America*, July 1901.掲載記事を『太平洋』1901年4月21日「世界雑俎」に転載。
- ⁴¹ “New York Shi no Tatemono” *Japan and America*, November, 1901.掲載記事を『太平洋』1901年12月16日「世界雑俎」に転載。
- ⁴² “New York no Chika Tetsudo” *Japan and America*, December 1901.掲載記事を『太平洋』1902年3月17日「世界雑俎」に転載。
- ⁴³ “Carnegie Shi no Kogyo Gakko” *Japan and America*, December 1901.掲載記事を『太平洋』1902年2月10日「世界雑俎」に転載。
- ⁴⁴ “Baffallo Hakurankwai” *Japan and America*, October 1901.掲載記事を『太平洋』1901年12月2日「世界雑俎」に転載。
- ⁴⁵ “Aim of Japan and America” *Japan and America*, October 1901.には、発行の目的として、日米両国の友好と商業の発展を目的に、通商、文芸、芸術、共感することで両国の人々を互いに引き寄せることを意図した雑誌だとある。またこれ以降に発行された号の冒頭には同様の発行の意図が掲載されている。
- ⁴⁶ *Japanese-American Voice*, Vol.1 No.1- Vol.1 No.6, February, 1897- October, 1897; *Chrysanthemum*, Vol.1 No.1-Vol.1 No.3. December, 1897 -February, 1898. Library of Congress 所蔵。なお川嶋保良は、『Chrysanthemum』第2巻第2号は所在不明としているが(川嶋保良『Japanese-American Voice—米国で発行された日本人による最初の英字誌—』精文堂印刷、1999年12月16日、132) 第2巻第2号は、Library of Congress に所蔵されていることが確認できた。
- ⁴⁷ 蛭原八郎『海外邦字新聞雑誌史』学而書院(1936年1月13日)、330。
- ⁴⁸ 『日本人』(シアトル)1901年4月20日、「広告」。
- ⁴⁹ 蛭原八郎『海外邦字新聞雑誌史』学而書院(1936年1月13日)、330。
- ⁵⁰ *Japan Current*, Vol.2.No3.以降すべての号に同様の記載がある。
- ⁵¹ *Japan Current*, Vol.2 No.5.は欠号。
- ⁵² 星新一『明治・父・アメリカ』筑摩書房 (1975年9月30日)。

第2章

永井荷風と雑誌『太西洋』 —「夜の女」の初出をめぐって—

〔付〕『太西洋』第1号—第3号目次

はじめに

永井荷風(1879-1959)は、1903年(明治36年)9月から1907年(明治40年)7月までアメリカで過ごし、その間に執筆したほとんどの作品を、『あめりか物語』(1908)として出版した¹。アメリカ滞在時に書かれた23篇の作品のうち16篇は、1907年7月までの20ヶ月にわたって滞在したニューヨークで書かれた作品である。

これまで永井荷風のニューヨーク滞在時の研究は、『あめりか物語』に収録された諸作品と『西遊日誌抄』や書簡を主な資料にした武田勝彦や²、末延芳晴の研究により明らかにされつつある³。また、移民文学に観点から『あめりか物語』を捉えようとした日比嘉高の論考もあり⁴、永井荷風のアメリカ滞在時の作品の研究は、一応の展開を見せているものの、必ずしもその内実が明らかになっているとはいいいがたい。当時の実態解明の基礎となる、作品の詳しい検討作業を阻害してきたのは、『あめりか物語』に収録された作品のうち、ニューヨーク滞在時に書かれた9篇が初出誌未詳となっていることである。本章で取り上げる「夜の女」も初出雑誌の存在が確認されていなかった作品だ。これまで「夜の女」は、エミール・ゾラ(Emile Zola)の「メゾンテリエ」の模倣だと指摘する論考⁵や、モーパッサン(Guy de Maupassant)の影響と耽美主義的傾向を指摘したものや⁶、当時のアメリカ社会の暗部と頹廃を表した作品として位置付けられてきた⁷。しかしここでは、作品の執筆と発表の時点に立ち帰り、作品の成立を以下に解明していく。

1. 「夜の女」の初出

「夜の女」は、『荷風全集』第4巻の後記に、「現在まで初出雑誌の存在が確認されておらず、『あめりか物語』初版にはじめて収められたと考えられている」とある⁸。しかしニューヨーク市立図書館(The New York Public Library)に照会調査した結果、当地で出版された日本語雑誌『太西洋』の第1巻第2号の小説欄に掲載されたことが判明した。

これまで『太西洋』は、山本昌一により第3号に、「一月一日」が掲載されていることが明らかになっているものの⁹、同誌第2号の所在は不明だったため、初出の確認ができなかったのだ。本誌について工藤美代子は、『^マ大西洋』は現存していないので¹⁰、どのくらいの期間発行されたのかは不明だが、あまり長くは続かなかったようだ、「この頃、永井荷風もニューヨークにいたが、『^マ大西洋』のグループに加わった形跡はない」と記している¹¹。しかし、『太西洋』第1号から第3号までが発見されたことで、本誌と永井荷風との関係を究明する必要が生じたのだ¹²。

2. 雑誌『太西洋』の発刊

『太西洋』は、ニューヨークで最初に発行された日本語雑誌だと考えられる。そこで、『日米週報』を手掛かりにして、『太西洋』の創刊の経緯を以下にたどる。

『太西洋』の広告が初めて掲載されたのは、1907年4月27日の『日米週報』だった¹³。そして同年6月1日の『日米週報』には、「太西洋 朝井氏主幹にて経営中の月刊雑誌太西洋は初刊の事として種々準備の為め手間取りしも今や悉皆完成し来る二十日に配布の運びに至る可し内容は実業通商上幾多の利益ある論文あり且つ鮮麗なる写真版数葉を挿入し表紙の如き尤も意匠を凝らしたるものなりと云ふ代価一部二十仙」とあり、雑誌の詳細が明らかになる¹⁴。そして、『太西洋』第1号は、1907年6月30日に「北米合衆国ニューヨーク州同市東58町目213番」の太西洋社より創刊された。奥付には、「編集兼発行人 朝井外門／印刷人 寄田美之介／印刷所 シアトル市南第2街216番 古屋商店印刷部」とある¹⁵。古屋商店は、周知のように永井荷風がシアトルに滞在した際に世話になった日系の雑貨商で、永井荷風の父、久一郎の知人で古屋政次郎が経営する店だ。永井荷風と『太西洋』とは、この古屋商店を介して、第一の接点をもつのである。

『太西洋』の発行人、朝井外門^{ほかと}はペンネームを「青葉」といい、『新世界』のサクラメント支部の記者を経てニューヨークに来た人物だ¹⁶。彼は太西洋社の主幹のほかにも、1907年5月1日に発足した紐育記者同志会の発起人も務めていることから¹⁷、ニューヨークの日本語メディアの中心的な存在だったといえよう。朝井外門は、『太西洋』の「発刊の辞」を次のように述べている。

異域に在留するの諸士、事に触れ物に感じ、心裏を刺激する事必や多し、それを言に発し筆に表はし、相互相笑談するの機関を得ば以て寂寥の一端を慰するに足るべし、加ふるに日米の国交日に親密を加へ貿易月に繁盛を致し、邦人の此地に來り或は通過するの士益々多きを見る、此際に於て十分の調査を短時日の間に為さしむるの方法を給するは新來者に対す先住者の任務にあらずや。考慮一度茲に及ば々之が機関設置は焦眉の急にして一日の速かなるを希望して止まざるなり、然し、顧みれば此地既に同胞先覺の経営に成れる二箇の週間新聞あり、一面の目的を貫徹するに余蘊なし、然れ共新紙は報道の迅速の使あるも之を保存するに不便を免れざる所、且つ長文を掲載するの余裕少なし、之れ月刊雑誌を生れしむるの間隙ありと信ずる所以なり¹⁸。

ここにあるように、『太西洋』の発刊は、当時ニューヨークに在留した約3,000人の日本人の慰安はもとより、商業や貿易を目的に渡米する者への手引き書として、また移民地における情報の保存を意図して発行されたのだ。本誌の創刊について、『紐育時報』は「太西洋岸に於ける唯一の日本雑誌として此に太西洋の発刊を見たるは吾人の深く喜ぶ所にして之が発行者朝井外門氏の労を多とするものである、其体裁といひ内容といひ初号としては先づ

申分はない」、「此調子を以て号一号改善せば蓋し発刊の辞に於ける如き発行者の大目的を貫徹することを得べしと信ずる」と批評している¹⁹。このほかにもサンフランシスコの『桑港新聞』では、『太西洋』は「外装内容とも流石に善く整ひて一特色を存せるもの」である。ニューヨークには「文芸同倶楽部ありて研讃の外俳壇として蝸牛会あり発起人は田村松魚、佐藤静軒、河島天涯、須氏大学に在りし永倉勝哉の諸氏なりと言へば『太西洋』は是等文士の手によりて今後益々花を添へ行くことなる可し」とある²⁰。また『日米週報』では、「印刷鮮明、体裁美麗、時事評論、論説、文芸等ありて内容亦豊富若し夫れ更らに経済的方面の材料を聚集し実業上の調査を紹介せば読者の参考に資するもの莫大なるものあらん吾人は同誌が号を追ふて健全なる発達を遂げんことを熟望する」とあり²¹、体裁の良さを称賛すると共に、文芸面と経済面への期待が寄せられている。これらの批評から、本誌の創刊がアメリカの日本人社会で如何に好評を博したかがうかがえる。

3. 『太西洋』の編集体制

創刊から一月後の1907年7月20日に、『太西洋』の第2号が発行された。第2号から編集者として中村春雨が同社に入社している。その事情を『日米週報』では「中村春雨氏 東京文壇に青年小説家として其名高き氏は今回太西洋社に入り第二号より専ら編集の任に当る」と述べている²²。また『日米週報』の広告欄にも「主筆中村春雨／面目大刷新一大展開／太西洋第二号予告」とある²³。そして、サンフランシスコの『新世界』では、「中村春雨氏は紐育市に於て去月より発行したる月刊『太西洋』雑誌社の聘に応じて編集の任に当る事となれり」と報じている²⁴。

『太西洋』第2号から編集に携わった中村春雨は、演劇研究のため1906年5月11日に渡米し、シアトル、サンフランシスコを経由した後、ニュージャージー州のプリンストン大学に留学しており、同年11月頃にはニューヨークに赴いている。『欧米印象記』(1910)によれば、当時ニューヨークにあった日本人教会は、「ブルツクリン市のコンコード街十七といへば紐育附近にゐる日本学生のホーム」であり、中村春雨もしばらくここに身をよせていた。そして、この教会で「教会牧師M君と日米週報A君との紹介で、『太西洋』のA君と会見し、同発行所へ引移る事になつた」とある²⁵。「入社の際」で中村春雨は、「文明の焼点を見たいとの希望抑へ難き折柄、本社の招を受けて、編集の任に当る事となつたのは、自分の幸福であると信じている」と述べている²⁶。だが中村春雨が当地から小林政治に宛てた書簡には「〇〇失敗のため学資補給の途杜絶し、渡欧計画も意の如くならざる次第、抱月兄早稲田大学の方を骨折りくれらるゝ筈に候へ共、是とて未だ確たる所報に接せざる」とあり²⁷、彼の生活は、学資不足で苦悩していたようだ。このことから、中村春雨が太西洋社に入社した背景には、留学資金の調達が目的だったと考えられる。いうまでもなく、中村春雨は永井荷風と同じく広津柳浪の門人であり旧知の間柄だった。つまり、永井荷風と『太西洋』との関わりは、第一にシアトルの古谷商店の印刷所を通して、第二に中村春雨の入社によって生じたのだ。

また、『太西洋』第2号の予告として、「文芸及文苑欄に斯界の大斗たる田村松魚氏担任を快諾せられ小説より美文よりさては俳壇情歌等に至るまで遺漏なく掲載せらるゝが故に本号よりは大々の飛躍を試ることを得べし」とある²⁸。第2号の編集には中村春雨に加えて、田村松魚も関わることになっている。田村松魚は幸田露伴の門人で、佐藤露英（田村俊子）の夫として知られているが、1903年8月11日に、当時婚約中だった俊子を日本に残して渡米する。そしてアメリカ西海岸の都市を転々とした後、インディアナポリスを経て1907年2月頃、ニューヨークに赴いている。そして『太西洋』に「蹄鉄」と²⁹、「病室」を発表している³⁰。この田村松魚の「病室」とともに掲載されたのが、荷風の「夜の女」だった。「夜の女」は、1頁が27字×23行の2段組の総ルビで、18ページの下段から28ページ上段までの掲載で、タイトルに天使のカットがあり、署名は「在紐育 永井荷風」、末尾に「(完)」とある。また、第2号の奥付は「編集兼発行人 朝井外門／印刷人 寄田美之介／印刷所 米真舎活版所 オレゴン州ポートランド市クーチ街三〇四／発行所 太西洋社 米国ニューヨーク州ニューヨーク市東五十八街二一三番」とあり、印刷所が第1号の古屋商店印刷所から、ポートランドに変っている³¹。本作品の初出と初版『あめりか物語』の間には大きな異同はないが³²、底本の校異表にあるように、春陽堂元版全集収録時と中央公論社版全集収録時に作者の手が若干加えられている³³。

このように『太西洋』第2号は、二人の日本人作家が編集に加わり、「内容更らに豊富小説訪問録文芸欄第一段の光彩を放ちたるは喜ばしく」と評価されている³⁴。この小説、文芸欄の好評は、中村春雨、田村松魚の働きによるものだろう。とするならば、第2号に荷風の「夜の女」が掲載されたことは決して偶然ではない。それは「夜の女」の成稿が、底本には明治「40年4月」とあることから³⁵、時期的には『太西洋』第1号に掲載することは可能だったのだ。だが第2号に掲載されたのは、そこに中村春雨と田村松魚の存在があったことは間違いない。なぜなら第3号には、永井荷風の「一月一日」が掲載されているからだ。それだけではなく、『日米週報』に掲載された第4号の広告には、「小説には田村松魚子の『緑城H誌』鬼谷子の『みなしご』等各編佳作を収めたり／雑録には永井荷風子の『落葉』みこと子の『東京市と紐育市』青葉子の『女人嶋漂流実話』等を始め数編の興趣、実益共に兼ねたる好什を集む」とあり³⁶、第4号には、「落葉」の掲載が予定されているからだ³⁷。「落葉」もまた『あめりか物語』に収録された初出誌未詳の作品であり、『太西洋』第4号に初出掲載された可能性が極めて高い。また、永井荷風が西村恵次郎に宛てた書簡には、「僕の短篇を発表する様な可い文学雑誌があつたらお世話して下さい」とある³⁸。このように永井荷風は作品の発表を望んでいることから、1907年7月に永井荷風が渡欧する際に中村春雨と田村松魚が編集に携わっていた雑誌に、「一月一日」と共に「落葉」も置土産として、ニューヨークの文壇に発表したのだろう。そして、1907年7月11日付の黒田湖山宛の書簡では、「ニューヨークでは目下中村春雨氏田村松魚氏の二人が雑誌をだし大いに文芸趣味を鼓吹して居る」と述べている³⁹。また1907年9月23日付の西村恵次郎宛書簡では、「ニューヨーク発行の雑誌『太西洋』と云ふのを送った、春雨君がたのまれて主筆をして居る」と

『太西洋』について言及している⁴⁰。これらのことから、1907年にニューヨークで発行された『太西洋』は、中村春雨と田村松魚、永井荷風の三人の文芸家の交流が背景にあったのだ⁴¹。

4. 第4号以降の『太西洋』

永井荷風は1907年7月に念願だったフランスに渡る。彼がニューヨークを去った後の『太西洋』はどうなったのだろう。『太西洋』第4号以降は所在不明だが、工藤美代子は同誌の発行期間について「おそらくは40年10月にアメリカを襲った大恐慌のあおりを受けて、廃刊の憂目にあったのではないかと述べている⁴²。また蛭原八郎は、「中村吉蔵氏のお話では、氏が米国を去る頃、翌四十一年六月頃までは確かに続刊していたさうである。面白いのは、普通の雑誌は大概初め謄写版で後活版になるものであるが、此雑誌に限って、其逆に初め活版で後に謄写版となつたさうである」⁴³と言及している。

そこで『日米週報』を手掛かりに『太西洋』第4号以降の発行を以下にたどる。まず『太西洋』の第4号発行について『日米週報』では、「本号は太平洋沿岸に於ける本紙印刷所の都合に依り、不得止、十月十五日発行の事となれり、第五号は十一月天長節を期して無遅滞発刊し、社友及愛読者諸君の厚志に酬みんとす」とある⁴⁴。さらに第4号の体裁については、「遠隔の地に於て印刷する為め編集上に連絡を欠ぎ何にかにつけて不便勝ちのこと多きより第四号より謄写版を以て印刷発行することとなりたるが同号には初経験のこととて印刷不明瞭のページ多かりしも尚精読に価すべき記事少なからず第五号は体裁整頓し印刷も明瞭に時事評論を初め訪問録小説雑報等見るべきの記事頗る多し」とあることから⁴⁵、同誌は第4号以後、謄写版になり第5号までは発行していたようだ。そして同誌はこの後、一時休刊し1908年12月に再刊したようだが⁴⁶、それ以後の発行状況は不明だ。

おわりに

永井荷風は1905年12月から1907年7月までニューヨークに滞在し、当地で執筆した作品を日本の雑誌だけではなく、ニューヨークで発行された『太西洋』に発表していた。

「夜の女」が掲載された『太西洋』第2号は、中村春雨が主筆となり、田村松魚が文芸欄の担当となった時期と重なることから、同誌に掲載された契機は、中村春雨と田村松魚の斡旋により生じたといつてよい。「夜の女」と「一月一日」が『太西洋』に初出掲載されたことに加え、「落葉」が同誌第4号に発表された可能性が高い。「落葉」も『太西洋』に掲載されたとすれば、『あめりか物語』に収録されたうちの3作品が、ニューヨークの在留邦人文壇のメディアに発表されたことになる。これまでアメリカ滞在時の永井荷風の執筆活動は、作品の初出の「ほとんどが『文藝倶楽部』『太陽』といった日本の雑誌となっている。一方、確認されている『大西洋』掲載の「一月一日」をのぞいて、荷風は一篇も移住地ベースの媒体に発表していない。これは、日本語新聞の文芸欄という格好の発表媒体がすぐ傍にあったはずであることを考えれば、明らかな彼の選択を示すものと見るほかない。永井荷風

は移民地文壇とはっきりと距離をとっていた」⁴⁷と言及されてきた。しかし、『太西洋』第1号から第3号の様態が明らかになった以上、移民地文壇と永井荷風の距離は、これまで考えられていた以上に近かったと言えよう。

永井荷風と移民地文壇の関係をさらに明確にするためには、今後も『あめりか物語』に収録された初出誌未詳の作品の究明を続ける必要があるだろう。

¹ 永井荷風『あめりか物語』博文館(1908年8月4日)。また永井荷風のアメリカ滞在時の作品は、「船室夜話」、「野路のかへり」、「岡の上」、「酔美人」、「長髪」、「春と秋」、「雪のやどり」、「林間」、「悪友」、「旧恨」、「寝覚め」、「夜の女」、「一月一日」、「暁」、「市俄古の二日」、「夏の海」、「夜半の酒場」、「おち葉」、「支那街の記」、「夜あるき」、「六月の夜の夢」、「舎路港の一夜」、「夜の霧」の23篇だが、「舎路港の一夜」は『文芸倶楽部』(1904年5月1日)に、「夜の霧」は『文芸界』(1904年7月1日)にそれぞれ掲載されたものの、初版『あめりか物語』には収録されなかった。

² 武田勝彦『荷風の青春』三笠書房(1973年3月15日)。

³ 末延芳晴『荷風とニューヨーク』青土社(2002年10月30日)；『荷風のあめりか』平凡社(2005年12月7日)。

⁴ 日比嘉高「永井荷風『あめりか物語』は「日本文学」か？」『日本近代文学』第74集(2006年5月15日)、92-107。

⁵ 河盛好蔵「永井荷風」『文学講座』第1巻、筑摩書房(1951年9月5日)、227。

⁶ 笹淵友一「永井荷風『あめりか物語』論」『国文学論集』第6号(1973年1月)、27-76。

⁷ 坂上博一「永井荷風『あめりか物語』—異国風土の発見—」『解釈と鑑賞』第62巻第12号(1997年12月)、93-98。

⁸ 『荷風全集』第4巻、岩波書店(1992年7月8日)。

⁹ 「月報」27、『荷風全集』第27巻、岩波書店(1973年3月30日)。

¹⁰ 在留邦人に関する資料では『太西洋』と表記しているものが多いが、本誌は『太西洋』となっている。

¹¹ 工藤美代子『晚香坡の愛—田村俊子と鈴木悦』ドメス出版(1982年7月15日)、42。

¹² 〔表2-1〕『太西洋』第1号—第3号の目次を参照されたい。

¹³ 「広告」『日米週報』1907年4月27日。

¹⁴ 「太西洋」『日米週報』1907年6月1日。

¹⁵ 『太西洋』1907年6月30日。発行所は、伊藤一男『北米百年桜』北米百年桜実行委員会(1969年9月30日)814によれば、古屋商会本店と同一の住所である。

¹⁶ 「浅井青葉氏」『日米週報』1906年9月1日。

¹⁷ 「紐育記者同志会」『日米週報』1907年5月4日。

¹⁸ 朝井外門「発刊の辞」(原文ルビなし)『太西洋』第1号1907年6月30日。

¹⁹ 「本誌に対する反響(紐育時報)」『太西洋』第3号1907年8月20日。

²⁰ 「本誌に対する反響(桑港新聞)」『太西洋』第3号1907年8月20日。

²¹ 「太西洋の発刊」『日米週報』1907年7月13日。

²² 「中村春雨氏」『日米週報』1907年6月15日。

²³ 『日米週報』1907年7月6日。

²⁴ 「中村春雨氏の消息」『新世界』1907年7月28日。

²⁵ 中村春雨『欧米印象記』春秋社書店(1910年6月20日)、127; 131。M君はブルックリン教会牧師の三浦金吉、日米週報A君は安楽栄治、太西洋社A君は朝井外門。

²⁶ 中村春雨「入社」『太西洋』第2号、1907年7月20日。

²⁷ 小林政治「親友中村吉蔵君と私(1908年1月9付書簡)」『書物展望』第129号(1942年3

月 1 日)、16。

²⁸ 『太西洋』第 1 号、1907 年 6 月 30 日。

²⁹ 田村松魚「蹄鉄」『太西洋』第 1 号、1907 年 6 月 30 日。

³⁰ 田村松魚「朝顔」『太西洋』第 2 号、1907 年 7 月 20 日。

³¹ 『太西洋』第 2 号、1907 年 7 月 20 日。

³² 『あめりか物語』博文館(1908 年 8 月 4 日)。

³³ 『荷風全集』第 4 巻、岩波書店(1992 年 7 月 8 日)。

³⁴ しのぎ「太西洋 (第二号)」『日米週報』1907 年 8 月 10 日。

³⁵ 『荷風全集』第 4 巻、岩波書店(1992 年 7 月 8 日)、169。

³⁶ 『日米週報』1907 年 9 月 7 日。

³⁷ 初版『あめりか物語』では「おち葉」と表記されているが、広告には「落葉」とあり、初出は「落葉」であった可能性が高い。本章では表記を「落葉」に統一した。

³⁸ 西村恵次郎宛書簡(1907 年 5 月 29 日付)、『荷風全集』第 27 巻、岩波書店 (2011 年 6 月 24 日)、115。

³⁹ 黒田湖山宛書簡(1907 年 7 月 11 日付)、『荷風全集』第 27 巻、岩波書店(2011 年 6 月 24 日)、19-20。

⁴⁰ 西村恵次郎宛書簡(1907 年 9 月 23 日付)、『荷風全集』第 27 巻、岩波書店(2011 年 6 月 24 日)、118-119。

⁴¹ 『太西洋』については、『新小説』第 12 年第 9 巻(1907 年 9 月 1 日)でも「中村春雨氏は目下紐育に滞在せるが同地に於いて「太西洋」なる雑誌発行を企画中なり」と報じている。また『趣味』第 2 巻第 11 号(1907 年 11 月 1 日)には「中村春雨永井荷風田村松魚の在米三文士は『太西洋』と云ふ日英両文の文芸雑誌を発行していると」とある。さらに『文庫』第 35 巻第 4 号(1907 年 11 月 3 日)には「田村松魚氏は目下米国のニューヨークに居るが、同市から先月声を挙げた太西洋の文芸欄を担当して居る。」とあり、春雨と松魚が編集にあたっていることが伝えられている。

⁴² 工藤美代子『晚香坡の愛 一田村俊子と鈴木悦』ドメス出版(1982 年 7 月 15 日)、42。

⁴³ 蝦原八郎『海外邦字新聞雑誌史』学而書院 (1936 年 1 月 13 日)、209-210。なお同書には謄写版のものと見られる、『太西洋』の写真も掲げられている。

⁴⁴ 広告欄「太西洋第四号」『日米週報』1907 年 9 月 28 日。

⁴⁵ 雑報欄「太西洋(四号、五号)」『日米週報』1907 年 11 月 16 日。

⁴⁶ 雑報欄「太西洋」『日米週報』1908 年 11 月 14 日；広告欄「太西洋之発行」『日米週報』1908 年 11 月 21 日。

⁴⁷ 日比嘉高「永井荷風『あめりか物語』は「日本文学」か？」『日本近代文学』第 74 集(2006 年 5 月)、92-107。

第3章

田村松魚のアメリカ滞在記

— 日本語新聞の文芸欄と移民地文芸 —

〔付〕 田村松魚著作年表（1903〔明治36〕年8月から1913〔大正2〕年4月）

はじめに

幸田露伴の門人だった田村松魚(1874-1948)は、1903〔明治36〕年9月から1909〔明治42〕年6月までアメリカに滞在した。そして滞米中に書いた作品の多くを『北米の花』(1909)¹、『北米世俗観』(1909)²に発表した。田村松魚のアメリカ滞在時期については、これまで工藤美代子がアメリカでの田村松魚の大まかな足跡をたどっている³。このほかにも、林かおりは「アメリカ各地での見聞が彼の小説に彩りを添えた」と述べている⁴。また林寿美子は、渡米以前の田村松魚の文芸活動に着目し、日本の文芸雑誌における彼の創作活動は、渡米の資金調達を目的としたものだと⁵、彼の渡米は、渡米熱を背景にした立身出世の夢をかなえるためだったと言及している⁶。

このような先行論文により、田村松魚の渡米については解明されつつある。だがアメリカにおける彼の創作活動を明らかにするには、日本国内で発行された雑誌とアメリカで発行された日本語新聞や雑誌の調査が必要だ。そこで本章は、アメリカで発行されていた日本語新聞、雑誌を手がかりに、アメリカ滞在時の田村松魚の創作活動〔表3-1〕と、ニューヨークの日本語メディアとの関わりを解明する。

1. 渡米当初

田村松魚の渡米は、「田村松魚氏は此度泰西の文学美術を研究する目的を以て、去る8月11日米国シヤトルへ向け出発せられたり」とあることから、1903年8月11日に旅順丸で横浜港を出帆し、シアトルに渡ったことが明らかだ⁷。だがシアトルでの彼の動静は明らかになっていない。それは当地で発行されていた日本語新聞『北米時事』や『旭新聞』、雑誌『玉手箱』の所在が不明なためだ⁸。この間の田村松魚の動静は、「ヘレナの離別」⁹、「合奏」¹⁰といった、日本の雑誌に発表された作品に頼らざるを得ない。このうち前者は、カリフォルニア州ナパバレー近くのセントヘレナの町で、アメリカ人家庭でスクールボーイをする浦田譲二と、その家の女主人の姪スパダとの悲恋を描いたものだ。また後者は、サンフランシスコで開かれた天長節の式典の余興を描いたものだ。この式典には、銀行頭取佐山夫人、妙子とサクラメントで林業に従事する澤木が匿名で合奏を披露する。しかし、双方の合奏は曲の流れと共に乱れ、妙子が奏でる琴の弦が切れる。演奏の乱れ狂う様子は、二人の心の乱れを反映しており、この二人が世間では許されぬ親密な関係だったことが推測できる。これらの作品は、サンフランシスコの日本人の移民社会を背景にしていることから、田村松魚はシアトル到着後、日本人移民が多かったサンフランシスコに移ったことが推察できる。当地における田村松魚の足取りが明確になるのは、1905年5月にロサンゼルス

『平民』新聞に入社した時点だ。『南加州日本人史』(1956)によれば、『平民』入社について、「大鉄新聞、平民新聞と改題して大山鉄之助の退社と共に日本に於て青年小説家として名ありし田村松魚入社す」とある¹¹。田村松魚は、『平民』の紙面に、「詩文吟咏の如きは節物を飾り、世態を諷し硬軟其宜しきを得せしめん。所謂彼の実益に鑑みて娯樂を与へ平易に添ふるに簡潔を主とし、行は義に勇み、道は正しきに喜び、強きに媚びず柔きに誇らず、真率事を取り誠意業に従ひ、以て聊か操觚社会の革正に当らんことを期す」と執筆の意欲を述べている¹²。以後同紙には、ロサンゼルス^{ママ}の邦人文壇の批評を描いた「羅城文壇一夕話」¹³や、「日の出旅館」の経営者の成功譚を描いた「桃の実」を掲載している¹⁴。この後、彼は西海岸の移民地を去り、アメリカ東部に移動する。その経緯を工藤美代子は、「明治 39 年 4 月 18 日、サンフランシスコは記録的な大地震に襲われた」「松魚はこれを機会に、かねて念願の東部行きを決行する。もちろん、懐中は無一文である。まず、知人を頼ってインディアナポリスに到着」したと述べている¹⁵。だが、『平民』には「田村松魚子東行日限 本社の松魚子は本月 10 日当地出発の予定なりしが都合ありて来る 20 日頃出発せらるべし」とあることから¹⁶、田村松魚がサンフランシスコを去り東部に向ったのは、1906 年 4 月のサンフランシスコ地震とは無関係だったようだ¹⁷。また『平民』には、「世を夢と観じ、ては覺めて現に口惜しかりき。現と思へば夢に入りて迷はんことの心細さよ。明日は羅城の鐘の音に送られて夕の霧に袖しぼる旅衣」「さらばとの声を合図に降る時雨」と当地を去る寂寥を詠んだ松魚の句がある¹⁸。さらに同紙には、田村松魚の退社を「松魚氏は此儘当地を去るも氏の文壇に於ける遺芳は俄かに消ゆ可くもあらず氏は一身上の都合を以て一時東部に行くも切ても切れぬ氏のラ府に於ける文運振作の偉蹟は長く平民紙上に其光彩を放つになん」と述べている¹⁹。このことから、1905 年秋にロサンゼルス^{ママ}を離れたことが明らかになる。

これ以降の田村松魚の消息をたどると、『平民』には、「ソートレーキボデーにて、夕暮れの離別に旅の人となりてより客車の上の夢うつゝ七百哩は一日二夜に飛び去って荒涼平歌の謠ふべきものなかりき余まりに大陸的な野と山とは繊維なる詠吟にあまりにあわれなるものなりき、木なく草なき山のあらはにして落日の夕暮れに影黒くさしたるは寧ろ黙して云はざるに如かざるを思ひぬ、水の乏しき平野に野草花もなくて自然の美は死に近き秋に入りて墓に遠からぬ冬をまつは如何ばかり旅人の魂をいたましめしことよ」とあることから、ユタ州のソルトレイクに赴いていたことが判明する²⁰。そして同州のオグデンで驚津尺魔（文三）に逢い、二人でハットスプリングに行く²¹。また『文芸界』には、「日本にて著名なる青年小説家田村松魚氏は、来々年卒業の見込みを以て、今度インディアナ大学に入学せり」「同氏の我が北米へ来りしは今より二年前にて暫くシアトルにて日本新聞記者となり後ちローサンゼルス^{ママ}の新聞記者となりしが、其後桑港の弁護士宮澤益治氏(旧インディアナ大学卒業生)の助力にて本校に入学せしなり」とある²²。このことから、田村松魚は、1905 年 9 月頃にロサンゼルス^{ママ}を去り、インディアナ州に赴いたことが明らかだ。そしてインディアナポリス滞在を背景にしたのが「天幕生活」だ²³。ここには、1905 年夏に田村松魚を

含む三人の邦人学生が、郊外のリバーサイドパークで学資を得るために投球遊びの店を出し、ホワイトリバーの河畔でテント生活をした事が描かれている。しかしこの後、彼らは事故で友人を失い、それを機に、「進藤はケンタッキー州のルイスヴィール市へ「働きに行き、自分は紐育へ旅立つことに」したとある。そして、この後の田村松魚の消息は、「病間録」にある。悪天候でのテント生活のためか、「風邪を引いてしまつた蓐に就いた。其の晩からもう大病人だ、サアしまつた、と思つたが頭が上らぬ、医者が来る、薬を飲む、それでも癒らぬ、薄暗らい窓の方を枕にして昏々として眠つてゐる。三日、四日、一週間、病は次第と重くなるばかり、如何したらよからう、いろいろ考えた、唯悲しくなるばかりである」²⁴。このことから田村松魚は、インディアナポリスで体調を崩し、回復を待ってからニューヨークに赴いたと考えられる。

以上のことから田村松魚は、1903年に横浜を發つて米国に向い、まずシアトルに上陸、そしてサンフランシスコを経て、ロサンゼルス日本語新聞『平民』の編集に携わっている。そして、1905年9月下旬には、ユタ州のオクデン、インディアナ州のインディアナポリスに移動しここで病に倒れる。この間の経緯は、西海岸の日本語新聞『平民』や『新世界』に掲載された自身の滞米生活を題材にした作品に表れている。そして、この後1907年2月にはニューヨークに赴くのだ。

2. ニューヨークでの文芸活動

ニューヨークに來た田村松魚は、ブルックリン、コンコルド通り17番地にあった日本人教会に身をよせている。そして当時の様子を綴った「閑畝君足下」を²⁵、サンフランシスコの日本語新聞『新世界』に載せている²⁶。このほかにも、1907年3月30日からニューヨークの日本語新聞『日米週報』に、「北米相摸取り草」の撰者として、永倉勝美、佐藤静軒らの俳句の批評を3回掲載している²⁷。そして同年5月には、ニューヨークの文芸愛好家の集まりだった、「文芸同志倶楽部」と「蝸牛会」を發足している²⁸。またこのほかにも「紐育記者同志会」の發起人に名を連ねており²⁹、田村松魚はニューヨークの日本語メディアで積極的に活動を始めている。

当時のニューヨークには中村春雨もあり、ブルックリンの日本人協会の様子を以下に述べている。「今一人、文学者のX君が此教会にゐた、X君は呑気で樂天的で五年間ほどカリフォルニア、ローサンゼルス辺をぶらつき、インディアナの大学へも入つたさうだが、それも面白くなく、とうとう紐育へ廻つて來た、金があれば飲む、なくなれば稼ぐ、ゴルキーの漂浪的生涯をX君の現実に読む気がした」とある³⁰。この「X君」の在米遍歴は、松魚の在米遍歴と酷似していることから、中村春雨と田村松魚はブルックリンにあった日本人協会を知り合つたと推察できる。中村春雨が編集に携わつた『太西洋』には、「文芸及文苑欄に斯界の大斗たる田村松魚氏担任を快諾せられ」とあることから³¹、田村松魚も同誌の編集に携わっている。

田村松魚は、『太西洋』の文芸欄に「朝顔」³²、「鉄蹄」³³、「病室」を發表している³⁴。「朝

顔」は、ロサンゼルス「客舎にて日記帳の余白に書^マいつけたる「風流草枕」の一節」で、作者と思しき日本人の青年が、スクールボーイとして働くアメリカ人の家庭で、早朝の庭を散歩する雇い主の女性の姿を語ったものだ³⁵。また「鉄蹄」では、スクールボーイとしてアメリカ人家庭で働く日本人青年が、庭で鉄蹄を見つけたのを転機にニューヨークに行き、支那賭博で得た金で、南米の精糖会社を経営するという、在留邦人の一獲千金を描いている。そして「病室」は、ニューヨークの日本人教会で病死する日本人労働者を娼婦が尋ねて来るもので、娼婦と在留邦人の設定は、「出世間」と類似している³⁶。

このように田村松魚の作品は、自身をモデルにした、アメリカにおける日本人の移民労働者の成功譚を描いたのだ。また、これだけではなく、田村松魚は英文の小説も創作している。『太西洋』第1巻第3号の英文欄には、「這是田村松魚氏が^マニューヨークのウォールド新聞の懸賞小説に当選したるもの氏の許可を得て載す」とあり³⁷、『ニューヨーク・ワールド (The World)』の懸賞小説に当選した、田村松魚の英文小説「The Ghost of Old Japan」の全文が転載されている。これは、ブルックリンに住む日本人青年が、幼少期を回想するかたちで、語り手「私」と叔父が浅草の近くの寺の僧に会いに行った際、「私」は墓地で母親の幽霊に会い、母親は叔父に殺害されたのだと聞く。そして叔父と住むのがいやになり、アメリカに渡り、ブルックリンに住むことになったという物語だ。『ワールド』に掲載された本作品には、「Showgio Tamura, 70 Sands street, Brooklyn, N.Y」と署名がある³⁸。ここにある田村松魚の住所は、岡野庄八の経営する旅館「自由亭」があった³⁹。ブルックリンのサンズ街は、『太西洋』の売捌店だった「堀商会」もあることから⁴⁰、田村松魚は、日本人移民労働者や青年が集まるブルックリンの日本人街を生活の拠点にしていたことが判明する。

田村松魚の英文作品の当選を『太西洋』では、「田村松魚先生新約のウォルト新聞の懸賞小説に当撰して金五十弗を得た、所で先生オホンとお出なすつて、これでこそ露伴先生にお目にかゝることが出来るわい」とある⁴¹。以上のことから、田村松魚の作品が英字紙の懸賞小説に当選したことは、在留日本人社会でも名誉なことだったことが窺える。

3. 再び西海岸へ

ニューヨークで日本語新聞および英字新聞に作品を発表した田村松魚は⁴²、1908年9月頃、再びサンフランシスコに戻る⁴³。ニューヨークの邦人社会は、永井荷風や中村春雨の送別会を催したが⁴⁴、田村松魚の送別会が開かれたという記録は見当たらない。彼がニューヨークを去った時期は不明だが、「既忘此地松魚名 折角遠来誰不迎 去者日疎軫気毒 須帰聞女義太声」とあることから、1908年初秋にサンフランシスコに戻ったことが判明する⁴⁵。そして、鷺津尺魔（文三）と再会し、大和殖民地に行く⁴⁶。大和殖民地は、1906年に、安孫子久太郎が経営する日米銀行と日米勸業社が、スタクトンとフレスノの中間に位置するマセド郡リヴィングストンの未開地300エーカーを買い、在留邦人の入植と永住を目的に、土地を一区切り40エーカーの分譲地にし、農家として入植希望者に売ったものだ。同地に

について『商工世界太平洋』では、「同植民地はカリフォルニア州の唯中に在つて、何等北米人の妨害も排斥も嫉視も受くることなくして、着々として北米の天地に理想の新会社を作り居るなり」とあることから⁴⁷、同地は、西海岸で興った日本人排斥の影響を受けずに発展した日本人コミュニティだった。その背景には、当地のアメリカ人経営の店舗と無駄な競争を避けるために、入植した日本人には店舗を開かせず、近所のアメリカ人の店で買い物をさせ、現地のコミュニティと日本人移民を共存させようとする、サンフランシスコの日本語新聞『日米』とも関係の深い日米勸業社の計らいがあったのだ⁴⁸。

その大和植民地に来た田村松魚は、「此れが自分の再度のカリフォルニア州の生活だ。自分の朋友Y君と云ふ男が、此の大和植民地に農園を持つて居る。」「家の四周は大根畠や茄子畠、青いものは、もう秋の末で、無い時分だが、それでも処柄野菜物は沢山だ。その野菜物と、手製の葡萄酒と、鶏と、七面鳥と豚と云ふやうなものを、最初は御馳走された。が、肉類はさう沢山にない。実は甚だ払底なのである。肉屋だつて一ト月に一度程しか来ない」とある⁴⁹。このほかにも、同植民地については、鷺津家の生活を背景にした作品として「野調」、「蹄鉄の鉤」、「霜夜」、「坊は五歳」、「旅の尺魔に寄す」⁵⁰、そして大和植民地の日本人の生活を描いた「大和植民地詩」があり⁵¹、これらの作品からは、のどかな農村風景も思わせるものの、松魚が訪れた当時の植民地は、開拓されたばかりの発展に乏しい農地だったことがうかがえる⁵²。

このようにニューヨークから西海岸に戻った田村松魚は、「土着永住」を目的とした日本人が暮らす大和植民地に行き、そこで農業を営む日本人移民の生活を描いている。

おわりに

田村松魚は、1903年9月から1909年6月までアメリカで過ごした。彼は、アメリカ西海岸の移民地を点々と移動した後、ロサンゼルス『平民』の主筆を務めており、同紙に、アメリカの日本人社会を背景にした文芸作品や、西海岸の文壇批評を発表している。この後インディアナポリスを経て東海岸のニューヨークに赴き、ニューヨークで中村春雨と共に雑誌『太西洋』の編集に携わっている。また、彼は日本語メディアだけではなく、英字新聞の懸賞小説にも作品を発表している。

ニューヨークで目覚ましい文芸活動をしていた田村松魚は、1908年の秋頃にニューヨークを去り、再び西海岸に戻る。そして旧友、鷺津尺魔が住む大和植民地に赴いている。同植民地は、土着永住を目的に農地を購入した日本人のコミュニティだ。ここで彼は、永住を目的にした日本人の生活を作品に残している。

アメリカ大陸を往復した田村松魚は、当地で生活する日本人移民を作品に描いている。それは、同時代の立身出世や就労を目的に渡米した自身と等身大の日本人青年の生活を描いた移民地文芸だといえるだろう。これらは、日本の雑誌やアメリカの日本語新聞に発表された後、『北米世俗観』や『北米の花』にも収録されている。アメリカで創作された田村松魚の作品は、20世紀初頭に立身出世と一攫千金を夢見た渡米青年の体験を語った記録と

いえよう。彼にとってアメリカ滞在は、新聞や雑誌の編集や創作の技法を習得する重要な経験だったのだ。

-
- 1 田村松魚『北米の花』博文館（1909年9月13日）。
 - 2 田村松魚『北米世俗観』博文館（1909年12月20日）。
 - 3 工藤美代子『晚香坡の愛 田村俊子と鈴木悦』ドメス出版（1982年7月15日）、40-43。
 - 4 林かおり「失意の作家 田村松魚」『羅府新報』1997年2月1日。
 - 5 林寿美子「田村松魚の渡米まで—付田村松魚著作目録〔自明治31年至明治36年〕」『国際日本学研究』第2号（2006年3月31日）、19-39。
 - 6 高橋〔林〕寿美子「田村松魚と〈アメリカ〉—渡米先としてのアメリカ」『国際日本学研究』第3号（2007年3月31日）、99-113。
 - 7 「時報」『新小説』1903年9月1日。
 - 8 邦字新聞、雑誌について書かれたものには、蛭原八郎『海外邦字新聞雑誌史』学而書院（1936年1月13日）や、竹内幸次郎『米国西北部 日本移民史』大北日報（1929年7月1日）、539-593。田村紀雄・坂口満宏「在米日系新聞の発達史(17)—シアトル初期の日本語新聞」『東京経済大学 自然科学論集』第92号（1992年12月5日）、39-70があるが、シアトルの文壇に田村松魚の名はない。
 - 9 田村松魚「ヘレナの離別」『新小説』第9年12巻（1904年12月1日）。これはサンフランシスコ郊外に住む、アメリカ人の家庭で、スクールボーイをしている日本人学生と、現地の女性との恋を描いた。
 - 10 田村松魚「合奏」『女鑑』第15年1号（1905年1月1日）。本作品は、サンフランシスコで行われた天長節の行事に、元恋人同士だった澤木と妙子が再会し、合奏をする作品。
 - 11 南加州日本人商業会議所『南加州日本人史』（1956年1月30日）、86。このほかにも在米日本人会『在米日本人史』（1940年12月20日）、514に「桑港より田村松魚を聘して大いに伸展を図ったが、社運意に任せずいく千もなく『平民』と改題」したとある。
 - 12 田村松魚「今後の我が平民」『平民』1905年5月28日。
 - 13 田村松魚「羅城文壇一夕話」『平民』1905年9月12日、16日、19日。
 - 14 田村松魚「桃の実（上）」『平民』1905年7月9日、「桃の実（中）」『平民』1905年7月16日。本作は、『成功』第16巻第6号、1909年9月1日に再掲載され、後に『北米世俗観』博文館、1909年12月20日に収録されている。また林かおりは「桃の実」もロサンゼルス の邦字新聞に最初に発表された小説であったかもしれない。（『羅府新報』1997年2月3日）と述べている。
 - 15 工藤美代子『晚香坡の愛 田村俊子と鈴木悦』ドメス出版（1982年7月15日）、40。
 - 16 「東西南北」『平民』1905年9月9日。
 - 17 「田村松魚子東行日限」『平民』1905年9月9日。このほかにも、「平民の友 田村松魚君を送る」『平民』1905年9月21日には、「氏は一身上の都合を以て一時東部に行く」とある。
 - 18 「別れの辞」『平民』1905年9月19日。
 - 19 「田村松魚君を送る」『平民』1905年9月21日。
 - 20 「旅硯（第一信）」『平民』1905年9月26日。
 - 21 「旅硯（第二信）」『平民』、1905年9月30日。
 - 22 「時報 田村松魚の消息」（インディアナポリス紙、1905年12月7日の訳）『文芸界』第5巻第4号（1906年4月1日）。
 - 23 田村松魚「天幕生活」『北米世俗観』博文館（1909年12月20日）。
 - 24 松魚病夫「病間録」『新世界』1907年2月15日。
 - 25 「閑畝」は、桑原作太郎。

-
- 26 紐育田村松魚「閑畝君足下」『新世界』1907年2月24日。
- 27 「北米相漠取り草」は、『日米週報』1907年3月30日、4月6日、4月13日に掲載。
- 28 『太西洋』第1巻第1号(1907年6月30日)には、「文芸同志倶楽部会則」とあり、その発起人には、田村松魚、佐藤静軒、河嶋天涯、永倉勝哉の名がある。しかし、この会については、これ以外に資料がなく、実際の活動は不明である。
- 29 「紐育記者同志会会則、一、名称 紐育記者同志会。二、範囲 新聞雑誌に関係せる同志を以て組織す。三、会合 毎月例会を開き時機に応じて臨時会を開く事。四、方針日米間に起りし国際問題其他重要な事件に対しては提携して故国の輿論を喚起するに勉むる事」『日米週報』1907年5月4日。
- 30 中村春雨『欧米印象記』春秋社書房(1910年6月20日)、130。
- 31 「次号予告」『太西洋』第1巻第1号(1907年6月30日)。
- 32 「朝顔」『太西洋』第1巻第1号(1907年6月30日)は、「朝のおもかげ」『平民』1905年9月21日の再掲載である。
- 33 「鉄蹄」『太西洋』第1巻第1号(1907年6月30日)。
- 34 「病室」『太西洋』第1巻第2号(1907年7月20日)。
- 35 「朝顔」『太西洋』第1巻第1号(1907年6月30日)。
- 36 「出世間」『新世界』1907年11月27日～12月26日、本作品は後に『北米の花』博文館(1909年9月13日)に収録。
- 37 Shomgio[sic] Tamura. 「A Ghost of Old Japan」『太西洋』第1巻第3号(1907年8月20日)。
- 38 「The Ghost of Old Japan」*The World*. 14 July, 1907.
- 39 『紐育の日本』日米週報社(1908年)、41に、「自由亭 武市サンヅ町七十番」とある。
- 40 『太西洋』第1巻第3号(1907年8月20日)の広告には、同誌の売捌店として、ポートルランドの伴商店、シアトルの古屋商店、サンフランシスコの中央堂、ロサンゼルス佐藤商店、ブルックリンの堀商会、ニューヨークの太西洋社営業部とあることから、松魚の作品が英字新聞の懸賞小説に当選したことは、西海岸の邦人社会にも知られていたのである。
- 41 万歳万歳生「ビツクリ箱」『太西洋』第1巻第3号(1907年8月20日)。
- 42 「粉煙草集」『日米週報』1908年8月29日; 9月12日; 20日には、松魚のほかに、当時のニューヨーク総領事、水野幸吉(酔香)と、晨月の俳句が掲載されている。
- 43 「田村松魚来る 文士田村松魚昨日東部より来着目下筑紫館に止宿す尚ほ氏は不日鷺津氏と共に大和植民地に向ふべし」『新世界』1908年9月18日とある。
- 44 「永井荷風氏の送別会 去九日生稲に於て同氏の送別会ありたり来会者は朝井外門、中村春雨、福富青尊、中村嘉壽、田村松魚、竹内三樹三郎なりき」『日米週報』1907年7月13日。「中村春雨氏送別会 十七日生稲にて開会来集者三十余人福富氏開会の辞春雨氏の謝辞小山鈴木朝井篠崎竹内秋山氏等の演説油谷田村氏の即吟佐藤氏の俳句あり余興には詩吟都々逸等ありたり」『日米週報』1908年5月23日。
- 45 「田村松魚」『新世界』1908年9月26日。
- 46 「田村松魚来る」『新世界』1908年9月18日。
- 47 風来坊「大和植民地(YAMATO COLONY)を紹介す」『商工世界 太平洋』(1908年9月15日)。
- 48 安孫子久太郎と大和植民地については、田村紀雄、ユージ・イチオカ、山本英政、阪田安雄「在米日系新聞の発達史研究(7)安孫子久太郎―永住を主唱した「日米」新聞経営者―」『東京経済大学 人文自然科学論集』第68号(1984年12月10日)、61-96や、『在米日本人史』在米日本人会(1940年12月20日)、814-816に詳しい。
- 大和植民地については、Kesa, Noda『Yamato Colony 1906-1960』(Livingston-Marced JACL, 1981)に詳しい。
- 49 Y君は、鷺津尺魔(文三)だと考えられる。「北米の日本人村」『冒険世界』第5巻第5号(1912

年 3 月 25 日)

⁵⁰『北米の花』博文館(1909 年 9 月 13 日)。

⁵¹「大和殖民地詩」『新世界』1908 年 11 月 29 日。これは後に『北米の花』博文館(1909 年 9 月 13 日)に再収録。

⁵²『在米日本人史』在米日本人会 (1940 年 12 月 20 日)、 814-816 には、「第一次欧州大戦と弊国の参戦に基く好景気に恵まれ、大和コロニーも亦主産物の葡萄、桃の収穫が殖へ市場相場は上騰し農家は何れも好成績を挙げ土地代は殆ど払込みを終り、其上家屋も見事に新築し生活様式が改善され、地方の白人種以上の生計振りを見せる様になつた」とあり、殖民地が黄金期を迎えたのは、第一次世界大戦後の 1915 年より 1922 年頃だった。

第4章

石垣栄太郎の文芸活動 —『日米週報』と『紐育新報』の文芸欄—

はじめに

アメリカで発行された日本語新聞には、祖国日本の近況や移民地の情報を伝える社会面のほかにも文芸欄が設けられていた。このうちサンフランシスコで発行された日刊紙『新世界』や『日米』の文芸欄は、日本の新聞に掲載された小説の転載や、移民地を背景とした詩歌や俳句、小説が掲載されている。このような文芸を移民地文芸として提唱したのが、翁久允だ。アメリカ西海岸の日本語新聞の文芸欄は彼の文芸活動を中心に調査研究が進められている¹⁾。

ではアメリカ東海岸はどうだったのだろうか。農業や漁業に従事する労働者が多かった西海岸の都市に比べて、東海岸のニューヨークは日本人社会の規模は小さかったものの、生糸や陶磁器、東洋雑貨を扱う日系商社の駐在員や官吏、学生、芸術家など様々な階層の日本人が集まる都市だった。当地では戦前まで週刊の『日米週報』（1919年より『日米時報』と改題）と週2回の『紐育新報』が発行されている。これらの日本語新聞にも詩歌や俳句、小品を中心にした文芸欄があった。このうち『日米週報』は、徳富蘆花の勧めで渡米した前田河広一郎が1918年から1920年まで文芸欄を担当しており、前田河広一郎の滞米時代を調査した中田幸子や²⁾、浦西和彦の研究がある³⁾。しかし東海岸の日本語新聞は、資料の入手が困難なことに加えて、資料が散逸しているため、断片的な調査に留まっている。

そこで本章では、現存する『日米時報』と『紐育新報』の調査から、前田河広一郎と同時期にニューヨークで活動した、石垣栄太郎の文芸作品を取り上げる。石垣栄太郎(1893-1958)は、1893年和歌山県太地の船大工の家に生まれ、1909年に父親の呼び寄せでアメリカ西海岸のベーカーズ・フィールドに渡った。そして、サンフランシスコ郊外のウォーキン・ミラー(Joaquin Miller)の山荘を訪ねた際に、英詩人、管野衣川とその夫人で、彫刻家のガートルード・ボイルと出会い、彼女の勧めでサンフランシスコの美術学校で学ぶ。この後、石垣栄太郎とガートルードは、恋愛関係に発展し、日本人青年画家と人妻であるアメリカ人彫刻家とのスキャンダルとして日本語新聞で報道される。この後、二人は西海岸の移民地を追われるようにして、1915年初夏にニューヨークに移動する。ニューヨークで石垣栄太郎は、アート・ステューデント・リーグ(Art Student League of New York)のジョン・スローン(John Sloan)のクラスで美術を学び、1925年の独立美術家協会展に《鞭を打つ人》を出品している。これ以降、彼はアメリカの美術展覧会に⁴⁾、都市の生活者をありのままに描いた、社会派リアリズムの作品を発表している。だが、これ以前の美術作品は現存するものが極めて少なく、彼の創作活動は解明の余地がある。

では、アメリカで美術活動を始める以前の石垣栄太郎は、どうだったのだろうか。石垣綾子によれば、彼は「ニューヨークで発行されていた日本人移民の新聞『紐育新報』や『日米週

報』にペンネームで毎週文芸時評や随筆を発表していた」とある⁵。また、1922年にニューヨークで開催された画彫会の展覧会には、《死の勝利》、《神秘の光》、《果物》、《日没の光》の4点の油絵を出品している⁶。石垣栄太郎は『紐育新報』の美術批評で、《死の勝利》は「5、6年前の作品だ。私がワイルドのデカダン哲学の感化を受けボードレーの悪魔主義に感染していた時分の作品なので、其後思想に激変を来して居る今の自分から見て余程遠縁のものだ。今度の展覧会が玉石同架のショーであるとすれば自分のものは確かに石の最も粗悪なものであるに違ひない」と述べている⁷。このことから、同作品は1916年から翌年頃に制作された、世紀末文芸の影響を受けた作風だったと考えられる。いっぽう、独立美術家協会展に石垣栄太郎が最初に出品した《鞭打つ人》は、キュビズム風の技法が英字新聞で絶賛されている。これらのことから、《死の勝利》は《鞭打つ人》とは異なる技法の作品だったようだ。すると、石垣栄太郎が述べる「思想の激変」は、《死の勝利》を制作した1910年代後半から、《鞭打つ人》が発表された1925年の間に起ったものと推察できる。

そこで本章では、石垣栄太郎の創作活動の変遷を日本語新聞からたどる。まず石垣栄太郎が西海岸の移民地からニューヨークに移った経緯と、ガートルード・ボイルとのスキャンダルの真相を探る。そして、この事件を背景にして書かれた小説「その夜」と日本語新聞の報道を照らし合わせながら、石垣栄太郎とガートルードのスキャンダルと、作品の関連性を明確にしていく。次に日本語新聞の文芸欄の調査から、美術活動始める以前の彼の文芸活動を取り上げ、文芸作品の様相と創作活動における思想の転機を検討する。このように日本語新聞の記事から画家の創作活動を検討することは、これまで見過ごされてきた石垣栄太郎の創作上の思想の変遷を見出すことができるだろう。

1. サンフランシスコでの創作

1-1 サンフランシスコでのスキャンダル(1915年)

渡米当初、石垣栄太郎はシアトル近郊の木材工場や、カリフォルニア州ベーカーズフィールドのメキシコ人労働者相手のレストランで働いた後、サンフランシスコに移っている。そこで美以教会の小室篤次の紹介でウォーキン・ミラーの山荘で詩作をする菅野衣川を訪ねた際に、菅野衣川の妻で彫刻家のガートルード・ボイルと出会う。石垣栄太郎とガートルードは15歳もの歳の差があったが、二人は恋愛関係へと発展する。二人の事情を知った菅野衣川は、石垣栄太郎に対する憎悪の感情を抑えられず、傷害事件を起こす。その様子を石垣栄太郎は「アメリカ放浪四十年」で次のように述べている。

彼の黒々とした長髪は額に垂れ、汗でぬれた髪の毛は高い頬にひっついていました。恐しい形相でした。殺意がみなぎっていました。インテリで力仕事をしたことの無い彼に、どうしてこの力がでるだらうかと思ふほどの力が、私を床板のうへに、つき倒しました。この場合、私は衣川を憎む知友はありませんし、また彼と闘ふといふ意志もありませんでした。生まれつき腕力の弱い私でしたから、たやすく組み伏せられました。と見ると、

彼の手金槌が振り上げられていました。私は咄嗟に手で頭をかばひました。私の頭から血が迸りました。血は床板を赤く染めました。おびただしい血でした。傷は急所をはずれたと見えて、私の意識ははっきりとして、周囲に起っているでき事が一つ一つ私の印象に刻みつけられています⁸。

ここでは、嫉妬に駆られた菅野衣川が石垣栄太郎の頭を金鎚で殴るという緊迫した様子が語られる。だが、日本語新聞が傷害事件を報道した記録は管見の限りでは確認できず、むしろこの後、起ったガートルードが顛狂院に拘引された事件を大きく報じている。例えば『日米』には「夫人は昨日電話にて妹ヘレン嬢に対し『殺してしまう』と脅迫したる由にてヘレン嬢は之を正気の沙汰とは思はずテッキリ気が触れたに相違なしと恐怖の余り驚いて警察に訴へ出たるが為なり」とあり⁹、ガートルード拘引の理由は彼女が妹の殺害をほのめかす脅迫電話をかけたことにあると報じている。ところがこれはガートルードをサンフランシスコに留めておくために菅野衣川が謀ったものだった¹⁰。この後ガートルードはグラハム判事の裁判所で菅野衣川との離婚訴訟を起こすが、彼女の精神状態が落ち着いたとして訴訟は取り下げられている¹¹。この事件は日本人と白人夫婦の家庭に日本人の青年画家が入り込んで起きたスキャンダルだとして『新世界』、『日米』、『桜府日報』、『羅府新報』などの西海岸の日本語新聞をはじめ、東海岸の日本語新聞『紐育新報』や『ロサンゼルス・タイムズ (Los Angeles Times) 』、『サンフランシスコ・クロニクル (San Francisco Chronicle) 』などの英字新聞にも取り上げている¹²。その中でも、日本語新聞は石垣栄太郎を非難しており、『新世界』はこの事件を詳細に報道した理由を次のように述べている。

此芸術家夫婦は人も羨む程に仲が好かった、夏は緑葉の繁る山荘に冬は桑港のタウンに極めて簡単な生活をしていたが、今は羅府に去った石垣栄太郎なる美術生が其家庭内に這入るに及んで遂に今回の悲劇を生むに至た、或は二人携えて日本に帰り日本に於て残る生涯を送ると云ふ噂もあつたが悲劇は行き詰まる所迄行かず已まず遂いに訴訟、提起を見るに至つのである、黄白結婚で満足に終りを完ふする者が何人あるであらうか、記者が比較的詳細に此事件を報道するのは此辺の事を読者に見て貰ひたいが為めである¹³。(傍線筆者)

日本語新聞がこの事件を詳細に報道した背景には、日本人と白人の結婚の賛否を問う目的があると述べている。移民地ではこのような痴情を基にした事件がしばしば起っていた。また、日本語新聞は、移民地で起った不倫や駆け落ち、心中事件を大々的に報道することも少なくなかった。それは娯楽的要素を含みつつも、これらの記事を掲載することで、移民地社会の秩序を統制する意図があったからだ。このようなことから日本語新聞が石垣栄太郎とガートルードの事件を詳細に報道した背景には、彼らの行動を諷めるとともに、移民地社会の秩序改善を図る目的があったと考えられる。

1-2 小説「その夜」に描かれた離婚訴訟

石垣栄太郎とガートルードは、スキャンダルを機に西海岸の移民地を去り、ニューヨークに移る。その際、石垣栄太郎はガートルードの離婚訴訟を背景にした小説「その夜」をサンフランシスコの『新世界』に寄稿している¹⁴。では「その夜」を以下にたどる。

『貴女の述べられた理由は法律上甚だ薄弱なるもので離婚の理由として何んらの価値は認められません、次回裁判は○月○日に開廷しますが、若しその時は現今以上の有力なる証人を有するにあらざれば貴女の訴訟は成立しません』斯した宣言をあの恐しく苦み走った顔の老判事から聞かされた¹⁵。

冒頭に描かれた法廷の様子は、『新世界』の「トラウト判事は夫人の述べたる理由は法律上甚だ薄弱であつて離婚の理由と為らざる旨を宣告し次回の裁判は来る5月10日であるが若し其節現今以上の有力なる証人を連れ来るに非ざれば訴訟成立せずと申し渡した」というガートルードの離婚訴訟を報じた記事と酷似していることから、この作品は石垣栄太郎の私小説だといえよう¹⁶。さらに「その夜」では、ガートルードと思しき主人公のオドルスタが法廷の様子を次のように語っている。

愛のない男女の共同生活、そこに何の意義があらう、愛の純潔さを欠いた夫を捨てて、純心な愛に向ふのが何故に罪とせ[ら]れるだらう離婚の理由として『妾は夫を愛してはいませんから』それで十分なのだ、妾は今日法廷で馬鹿々々しい虚言を吐いた、妾は偽りを言[は]ねば生きられないような、弱い女ではなかったのに、妾はなぜ他の若い男を愛していますから離婚をして、愛の自由と歓楽とに生きたいからですと言はなかったか(略)妾はウイリアムに自分を養ふ収入がないからとて、離婚をするやうな弱い女ではない、夫が自分に対して如何に残虐でも、それに泣くような平凡な女ではないのだ、只青春の真赤な血が血管に充溢している若い真一の芳烈な肉の香りとあのローマンチックな桃色の夢に憧憬れている熱烈な恋人の心を求めたいばかりに、今日のような解りきった嘘をついたのだ。¹⁷ (括弧内筆者補足、傍線筆者)

オドルスタが法廷で述べた「馬鹿々々しい虚言」とは『新世界』にある「『貴女は今後管野氏から離婚する積りです乎』と問へば手を振て『今どうぞそんな事を聞かないで下さい』と逃げた」という¹⁸、離婚訴訟の法廷で判事の質問に対するガートルードの発言を基にしたのだろう。また夫に自分を養う収入が無いことや夫が彼女に対して残虐であるという点は、『新世界』にある「結婚して共同生活を送るに当りて此哲学はパン一切スプー腕の価値すらなかりしなり二人の生活費は全然妾の腕にて之を得来りたり云々と云へり離婚の理由の中には此外夫管野猛氏は余りに虐待せり」という¹⁹、ガートルードが法廷で述べた離婚

の理由と同じである。おそらく石垣栄太郎はこれらの新聞記事を読んでいたのだろう。「その夜」では、法廷の様子を次のように語っている。

今の夫ウィリアムは英国生れで、頭の極めて古臭い頑固な哲学者で、三年前に結婚したのであるが、千秋を契った夫婦のなかには、日本の若き詩人のために破られて妻のネドルスタは法廷に離婚の訴訟を提起したのである。殖民地の寂寥に泣く日本の詩人若き真一は本当に純な愛の温かさを求めては性欲の木に実を結ぶ新しい生命の美しさを夢見ていた(略)たとへ彼が彼女の力強い芸術の崇拜者であったとはいへ、運命は恋を求めて得ず、愛を求めて失望し、生の不満に泣く二人の男女に悲痛な恋の苦き矢を放って去った、オオ苦き恋の流矢！(略)快樂の花に戯れていた二つの胡蝶は運命の残虐に抗する能はず、悲痛な離別の涙に押流されて真一は遠き遠き東の国に又と還ることなき過去の夢に泣く身となった。²⁰ (括弧内筆者補足、傍線筆者)

ウィリアムとオドルスタ夫妻の離婚の原因が、オドルスタと日本の若き詩人との恋にあったという点は、菅野衣川とガートルード夫妻と石垣栄太郎との間に起ったスキャンダルと酷似している。また、オドルスタが語る法廷の様子は、実際の離婚訴訟と重ね合わせることができる。このことから「その夜」は、新聞の報道を下敷きにした私小説だといえよう。だが、そこには事実とは異なる部分もある。例えば「その夜」の末尾では、オドルスタの恋人の日本人画家、真一が日本に送還されるが、石垣栄太郎自身は、アメリカに留まり芸術活動が続けている。これは『日米』が報じた「菅野衣川氏は夫人の実妹ヘレン嬢と夫人の友人エスル嬢を伴ひて総領事館を訪問し夫人と所謂ヤング美術家石垣某(略)との関係に就て泣いて其実情を陳述し石垣某の送還運動を懇願する所ありたるも事件の内容が総領事館の関与すべき性質にあらざれば桑港の日本人会に依頼したら宜しからんと注意したそうだ」という記事から発想を得た、石垣栄太郎の虚構だと考えられる²¹。

また、オドルスタが「妾はきつときつと真一を探し出して『死の勝利』のデオルヂョとイポッタとが住ったような静かな海岸の隠れ家で一生涯を恋と芸術の酒に酔って愚かな人間への面あてに思ふぞんぶん狂って死んでやりたい」とダヌンチオの『死の勝利』にオドルスタと真一を重ねている場面がある。これは「当時、翻訳されていたダヌンチオの『死の勝利』や、オスカ・ワイルドの『ドリアン・グレーの肖像』などを読んで、ひとかどのデカダンになり済ましていた」という、作者の読書経験が背景にあるだろう²²。

石垣栄太郎は、この作品を匿名もしくは「燈台守」という雅号で発表することを望んだが、本作品は 1915 年 5 月 16 日の『新世界』に清沢冽の次のような前書きと共に本名で掲載された。

我等は石垣の行為を以て恩人を売る大背徳、相当なる制裁を加へずに己む事が出来ないものとした、我等は今も猶斯くの如く信じている、(略)小説は彼の事実の告白ではな

い併し其の非行にヒントを取たのである事は動かす事が出来ないものである、記者は之を載すべきか否かに就いて相当なる考慮を費した。手紙には『小説は寧ろ燈台守と云ふ号だけで掲げて下されば幸甚です』と付け加へてある。こうやれば一個の小説、誰にも遠慮のない事である、併し記者は敢へて彼の名を出した、之は人間の判断は一個の弁解によって動かされるもので無い事を信じたからである、而うして道德の裁判所に引き出された被告の一応の主張は、世人の喜んで知らんとする所なるを思ふたからである（清沢生）²³。

サンフランシスコの日本語新聞は、ガートルードと石垣栄太郎の恋愛騒動をめぐる一連の事件を、道德に背く石垣栄太郎の大背徳だと非難している。そこで『新世界』は、スキャンダルの真相を明確にするために、石垣栄太郎の主張として、作者の実名で「その夜」を掲載したのだ。石垣栄太郎は、この作品の発表により移民地社会に一連のスキャンダルの申し開きをする結果になったのだ。

2. ニューヨークにおける頽廢的な作品

2-1 自伝的小説

1915年にニューヨークに来た石垣栄太郎は、茂木商会で美術工芸品の修理や傘の柄の製造を手掛けて生計を立てていた。では、彼の当時の生活を描いた、短編小説「除夜の鐘」を以下にたどる²⁴。この作品は、大晦日の夜、ニューヨークのアパートの一室で、石垣栄太郎と思しき日本人画家とその妻が「思出の多き一年間」を振り返る物語である。この中には画家の妻の次のような描写がある。

彼女は幼なかりし日の、その夜をスカンジナビアの片田舎で、木靴を穿いた数多い兄弟達と共に雪に戯れつつ新しい年の希望の光に抱擁せられて楽しく過した自分が、……今凡ての風俗習慣を異にする極東に生れた日本人画家と偕老の契を結んで世智からひ浮世の旅路を歩るいている、因縁の不思議さに、彼女の心は驚異の波に漂ふていた。……遠く故里を去って人情の荒野に彷徨しているこの身が、木枯の吹き荒む秋の夕暮れに人里離れた深山に踏み迷ふている旅人のような恐怖と、寂寥と哀愁との不安定な心持ちで、過ぐる日も、また来る日も毎日激しい労働に血の汗にまみれながら、衣食住の重荷を背負って居る良人と共に、限りなき現実の苦悩の扉を切り抜けつつある今の自分が頼母しくもあり、臆て生れて来る新しい生命のゆく末を思ふと、その日暮しの自分達の貧しい境遇を悲しまずには居られなかった²⁵。（傍線筆者）

画家の妻が語る「旅人のような恐怖」、「寂寞と哀愁との不安定なる気持ち」からは、ニューヨークでの石垣栄太郎とガートルードの「その日暮らし」の貧しい生活が窺える。また画家の心情も次のように語られている。

彼女の奥床しい心を思ふて、遂に癡滅の悲惨な運命に逢着すべきデカダンの気分に圍繞されて居る自分の醜くも荒廃してゆく魂を省みて、共倒れになるべき彼女を憐み只管自分の愚さを悔ひ、耻かしい思ひに耳朶の赤く染められて居るのを覚るのであった²⁶。(傍線筆者)

ここにある「癡滅の悲惨な運命に逢着すべきデカダンの気分」、「荒廃してゆく魂」は、スキャンダル末に西海岸から東海岸に移り、慣れない土地での生活に困窮する当時の作者の退廃的な心情を投影したものだと考えられる。この後、画家は傘の柄を作る工場働くことになるが、その劣悪な労働環境を理由に一週間でやめる。ここに描かれた画家の動静は、ニューヨークに来て間もない頃の石垣栄太郎の生活と一致している²⁷。それは当時の彼の生活は次のようなくだりからも窺える。

人間が静に開けゆく黒き死の門辺に立った時程…厳粛な自我本然の性に立ち帰るときはない。凡べての虚飾も虚体も虚勢も彼等が組織する社会の法則さへも無視して偽らざる自己に生き切る道を求めるであらう。愚な俺は夢中になつて金銭を求め喘いだのである、貪婪にして飽くなき支那人の賭博の筈に引掛って、烈しい労働の結晶した清い金は飛ぶが如くに去って、一日を食はずに過したことさへあった、失望と懊悩と、悲痛とに萎縮した私の神経は新らしい刺激を求め始めて、若い女の脂ぎった肉の香り果敢ない歓楽を求め、強烈なウイスキーの舌触りに生の苦悩を忘れ、神経の麻痺をさへ求めるようになって居た。(略)嗚呼この悲惨な境遇から逃れ出て清浄な自由の空気が層をなして静かに流れている、愛の世界に甦るために何をすれば良いのだ、どうすれば自己を生きる事が出来るのだ²⁸。(括弧内筆者補足、傍線筆者)

「除夜の鐘」は、物質にあふれる大都会を背景に「金銭を求め喘」ぎ、支那賭博に手を染め、「失望と懊悩と、悲痛とに萎縮した」、「悲惨な境遇」から逃れようとする、終始退廃的な作者の心情が吐露されている。以上のことから、「除夜の鐘」は、石垣栄太郎がそれまでに発表した私小説と世紀末文芸に感化されたデカダン思想の延長線にあることが判明する。

2-2『紐育新報』の小品

1917年夏に、前田河広一郎が編集した文芸雑誌『共存』が発行される。ここには、石垣栄太郎も「出獄の前夜」という頹廢的な詩を発表している²⁹。同誌は1号のみの発行だったようだが、石垣栄太郎は「出獄の前夜」と同様の頹廢的な作品を『紐育新報』にも発表している。そこで、1917年6月に発表された、小品「野に叫ぶ人の声を」を取り上げる。

沈滞した恋の悩しい空気が、もの憂く私の薄暗い室をとじ込めている、赤く腐爛した惨

ましい肉慾の臭い、死の影に漂ふている頽廢の気分が、暗く暗く我が若き日の生活の河に漲っている。私の頭は重き灰色の雲に閉され、身体は綿の如くに疲れ、恐しい病熱にでも冒された時のやうに凡べての関節が弛るみ動き難きまでに痛み出した。私は悪夢に魘されているやうな落ちつきのない気分で 震へ戦慄しながら罪の寢床に横っている。と、小さな好奇心の窓が開いて微かな光が、恰度、冬の夜明けがた牢獄に苦しむ囚人の寥れた頬に訪れる時のやうな蒼白い光りが、私の暗い生活の室に流れ込んで来た³⁰。(傍線筆者)

冒頭では、暗い部屋を背景に、恋の悩ましい、物憂い空気に満ちた、作者と思しき語り手の、死の影が漂うやうな、頽廢的な気分が語られている。ここには、菅野衣川との離婚訴訟の途中だった、ガートルードと駆け落ち同然でニューヨークに来た作者の心情と、当時、彼らの後を追うようにして同地に来た菅野衣川に脅える作者の状況が反映されているだろう。そのため、語り手は落ち着きなく、悪夢にうなされるやうな気分、震え慄きながら罪の床に横たわっている。

そして、この後、語り手は教会で伝道師の話を聞くが、不安は消えることなく、再び暗い部屋に戻る。末尾では、その様子を次のように語る。

私の暗い室は運命の浪間に漂ひつつ流れてゆく、時は広大無辺の未来に流れ、神秘の雲間に消へて行く。(略)宿命の糸の靈妙な力は人間の単細胞時代から類人猿の時代に生息していたといふ幾百万年もの過去から、神々の時代に進化するかも知れぬ人間の未来にまでも、纏れつ離れつ、人と人との怪しい縁を男と女との不思議な接触を司っている。我が若き日の生活を彩る宿命の糸の鮮かさ。好奇心の小さき窓からさす微かな光の不思議さ。大凡俗ビリーと私との間にはただほんの一瞬間の糸の纏れがあるばかりだ、私は再び暗い暗いもとの室に帰って罪の寢床に横っている(6月3日)³¹。(傍線筆者)

ここに描かれた、「宿命の糸の靈妙な力」によって、纏れながら結ばれた人と人との怪しい縁とは、ニューヨークに移るきっかけになった、石垣栄太郎とガートルードと菅野衣川との間で纏れた、三人の人間関係を表しているのだろう。そして再び罪の寢床に横たわる末尾の描写は、スキャンダルの末に西海岸を追われるようにしてニューヨークに来た、作者の罪の意識が表れている。このようにスキャンダルを起こした罪の意識から、死をテーマにした暗澹たる作品は他にもある。そのうちの一つである「滅亡の門辺に」は、作者の分身と思しき画家が、肺病を煩って日本に帰国した友人の手紙の内容を語る物語だ。

重い悲愁と懊悩とに曇った、灰色の空は、黒い夜の衣を纏った、死の表徴のやうに、蒸し暑い夏の日の午后を、暗く暗く包んで居て、燈火を点けねば仕事を為得ぬほど、その色を濃く漂はせて居た³²。(傍線筆者)

語り手は、重苦しく垂れこめるような曇天の空の下で、悩みもだえる心情を語る。この後、彼は、夕立と雷鳴が鳴り響く夏の夕方に、長い間音信不通になっていた友人の手紙を読む。作者の一人の分身である友人は、次のように書き送っている。

自分は近いうちには、どうしても死なねばならぬやうな気がしてならぬ。然し自分は死にたくはない。自分にはまだまだなさねばならぬ仕事が残っている。だが…、あゝ、死、死が来るべき私の運命なのか。(略)死、死は今の私の病苦から、のがれる唯一の道であるかも知れませんが、然し、自分には、死と云ふことを思ふと、ぞっとする。私は死にたくはない、どこまでも生きられるだけ生きて居たい。だが、一度受けた死の宣告…、いっそ死ぬのなら日本へ帰って、日本の風に吹かれて死にたい、横浜の棧橋の上で、紅い血を吐いて死んでも私はそれで満足だ……、此の頃私はこんなことを考へてならぬ。それで七月十二日桑港発の日本丸で帰国する³³。(傍線筆者)

手紙を書いた友人の渡米理由は明らかにされていないが、石垣栄太郎を含め、当時アメリカに渡った日本人の多くが出稼ぎ目的の移民労働者だったように、この友人も同じ目的でアメリカに来たのだろう。しかし、不治の病に侵された友人は、志半ばで日本に帰国する。作者は、アメリカにおける自身の苦悩を、病に苦しむ友人として表したのだろう。彼の手紙には、果たし得ない夢を残して帰国する無念さと、郷愁が綴られている。手紙を読み終えた語り手は、友人の帰国の途を思い、次のように語る。

永い間の病苦で痩せ衰へた彼が、まだ二十を少し過ぎたばかりの身を、薄暗い三等室に横〔た〕へて、懐かしい故郷に残って居る一人の母を慕って、長い航海を続けて居る、その哀れな心根を思つて、私は泣かざるを得なかった。生者必滅会者定離、自然の理法は悲しい、闇浮堤に吹く諸行無常の風荒れて、我が友は死を覚悟して日本へ帰^マへた。(略)嗚呼人は人類的に滅亡の門^マ辺へと近づいて居る。人間は皆肺病患者だ、滅亡への門^マ辺に、正義があらうか、人道があらうか、自由があらうか……。夕靄にとざされた第十四街の小さな私のアトリエは悲愁の闇に漂って居る。友の手紙を持った私の手は、限りなき悲しみに漂って居る。彼は今どうして居るだらう(7月23日)³⁴。(括弧内筆者補足、傍線筆者)

語り手は、死を覚悟の上で帰国を決意した友人の身の上に無常観に重ねて、悲しみに漂っている。「野に叫ぶ人の声を」と同様の頹廢的な語り手の心理描写は、友人や人類が向かう「滅亡の門」に表象される。これは、死の世界と現実世界を隔てる境界なのだ。

作品に表れたこのような死のモチーフは、この後の小説「髑髏に接吻する女」に描かれる³⁵、「秘密の扉」にも置き換えられる。

2-3「髑髏に接吻する女」

『紐育新報』の1918年新年号（1917年12月29日）に掲載された小説「髑髏に接吻する女」は以下の描写がある。

彼は寒さに慄へながら、秘密の扉の前に立ち竦んでゐた。そこには芳烈な肉慾の享樂に匂う清淨な空氣と、宗教に汚がされた心靈の血煙とが、混乱し、舞ひ立って居た。(略)その秘密の扉は、鋭い感受性と、聰明な理知との鍵を所持して居る人には容易すく開かれるのであった。彼の持つて居た鍵は、その頑強な鉄の扉を開くには小さ過ぎる。彼は涙に曇る眼を鍵穴に押し当てて、扉の向ふ側を覗いて見た。と、世にも美しい女が、その豊麗の皮膚を露出して、絢爛の絹布の上に横って居る。(略)芳ばしい白粉や、葦の香りの漂ふ享樂の世界が展開して居る。迷ひの国、不夜の城、歡樂の巷が輝いて居る。そこには、靈魂の頹廢を早めた、人間的な生活の光輝を語る、科学文明の勝利を謳ふ、奏樂の音波が流れて居る。純淨な噴水の滾る池の鏡のような水面に、緑の滴る柳の木が妙なる姿を映して居る。妖艷な印度の美女が織り出す舞踏の綾にあはせて、不思議な樂器の悲しい曲につれて、亡国の哀歌をうたひながら、亡びゆく人の世を悲しみながら、死んでゆく年若い詩人が居る。と死後の醜い人間の形が彼の足下に浮んで居る。彼は恐怖に震へながら、人間的な生活の本体に侵入し得ない、自分のみじめな姿をながめて居る。彼もやはり、あの門の外で死なねばならぬ運命の圧迫に脅へて居るのだ³⁶。(傍線筆者)

物語は「享樂の世界」、「迷ひの国」、「不夜城」、「歡樂の巷」といった「人間的な生活」に通じる「秘密の扉」の前に漂う作者の分身と思しき画家、川島庸一の空想に始まる。「秘密の扉」の向こう側には世にも美しい女が住む「靈魂の頹廢を早めた」、「科学文明の勝利を謳ふ、奏樂の音波が流れ」る世界が広がっている。庸一の頹廢的世界の空想と憧憬は、物語の後半部分で、「社会は鈍感な人間の集団である、生活に疲れた人間の、幽霊のようにふらふら揺めいて居る哀れな姿をその眼前に眺めながら、一滴の涙をさへ流さぬのである。俺は生きるために、如何なることも、善悪正邪の差別なしに為さねばならぬ、否、凡ての行為は、その生命の前に最善であらねばならぬ」という現実の世界にも表れる。そこには、ワイルドの「サロメ」を引き合いにした、次のようなくだりがある。

現世の生活に於て、自分達の求めるものゝ総てに、死の暗影が宿つてゐるではないか。その時、彼が幻想の湖面にサロメ王女の恋が浮んで来た。現実の最高の権勢を以てしても、如何とも為し難い恋の懊みに、死したるヨカナンの生首に接吻して、まゝならぬ浮世の恋の苦しさをかこち、恋人の血潮の苦がさを嘆く、戯曲サロメのシーンを思ひ浮かべて見た。然し彼の想像のうちに生きてゐたサロメ王女は、ヨカナンの首をでなく、

「髑髏に接吻する女」であった。その想像のうちの女こそ、世の中の総ての欲望を象徴する一つの芸術だと庸一は思っている³⁷。(傍線筆者)

「世にも美しい女」は、サロメ王女であり、「秘密の扉」の先にある、「享楽の世界」に住む「髑髏に接吻する女」なのだ。以上のことから、初期の石垣栄太郎の文芸作品には、頹廢的な作者の心情を描く、一貫したテーマがあったのだ。

2-4 新報詩壇

石垣栄太郎は、1918 年の『紐育新報』に、小品「エイの手紙」³⁸、オスカー・ワイルド (Oscar Wilde) の「審判の庭」の翻訳³⁹、詩「祈り」⁴⁰、トルストイの「生ける屍」の劇評の合計四編を発表している⁴¹。さらに同時期の新報詩壇には「坩堝」というペンネームで詩も発表している。では、新報詩壇に発表された詩から、「ある連続せる感覚」を取り上げる。

不安は、
どんよりと
曇る空より
魔の如く黒き、
翼を拡げて
われに来る、
胸に、おもき、
鉛をやどせる。

青き糸の
もつれつ、立ちのぼる、
煙草。
どす黒き、灰色の
吐きだされ、
舌と、のんどを
焼きつくせど
鉛はとけず。

音なく、赤かく
性慾は、
もへてつきず。
灰は、死して、
落つ。

黒く、かろく。

紅き色に、ふるゝ勿れ、
黒き色を、見る勿れ
きちがひの如く
錯覚は、荒れくるふ
われに、色を見せる勿れ⁴²。

ここに表れた連続する感覚とは、作者の不安の心情だろう。一連では、どんよりと曇った空に広がる、鉛のような重苦しい作者の不安がある。鉛の色と重みに例えられた不安は、二連で、煙草の熱でも溶けない残像となる。そして三連では、不安の要因でもある、赤く燃える性慾は、燃え尽きることなく、黒い灰となる。鉛色、黒、赤の色彩に、終始消えることのない不安な気持ちは、四連では四連では荒れ狂う錯覚となる。この詩は、不安にさいなまれる陰鬱な様子を詠んでいる。

この作品が発表されたのと同時期には、「哀傷の夕」を発表する。

暗き窓、
眠りて墓場の如し、
星かすかに見へつ、
どんよりと空に、
月かかりぬ。
血のごとく生臭き月なり、
金色の傘をもつ。
夕闇はしづかに、
ゆれ、
われ、何んとなく寂し、
たゞ悲しき夕べなり。
あゝ都市は、
寂し⁴³。

「哀傷の夕」には、暗い窓辺から見える、夕闇に包まれた寂しい暮れ方の街の情景が読まれている。静寂と闇の中で光りあるものは、かすかな星の輝きと、曇った空に架かる、血のように生臭い月だけだ。人気もなく寂しい都会の光景からは、作者のもの悲しい心情が表れている。

このような暗く哀傷を帯びた詩に続いて、「死の誘惑」が発表される。

自省なく、
自責なく、
自戒なき、
吾れ、
何んの故に
生きんとはするぞ。

腐れたる、一塊の肉のごとく、
みにくき、耻しらずの
吾れ、
何んの故に、
神は、
この生を許し給ふや。
あゝ、

われ、苦しきかな。
悲しきかな、
寂しきかな、
目的なく、光なき、
生命を抱ける、吾れ。
あゝ苦し、
死は唯一の隠家なれど、
吾れ、
死を恐るゝこと甚だし。
神秘は恐怖なれば⁴⁴。

ここでは、自らの言動や過ちを認めることも、慎むこともない、自身の生命の意味を問うている。生きることに對する不安は、「ある連続せる感覚」に詠まれた、不安な心情を髣髴とさせる。また、苦しく、悲しく、寂しく、目的もなく生きる様子は、「哀傷の夕」の、墓場のように静まり返った夜の街にたたずむ、哀傷にも共通している。1919年に発表した石垣栄太郎の詩には、作者の不安や陰鬱の連鎖的な心情があり、これらは「野に叫ぶ人の声を」や「滅亡の門辺に」にも共通している。石垣栄太郎の文芸作品は、自身の滞米生活を描いた私小説であり、また、頹廢的な作者の心情を表した、デカダンな世紀末文芸の影響が表れているのだ。

3-1 小品「アダムの死の床」

1919 年夏には、詩のほかにも「アダム之死の床」が掲載されている。これは、旧約聖書の「エデンの園」の神話に着想を得た作品で、アダム之臨終の場面で交わされる、アダムと彼の子孫、エノクとメホエル之会話を描いた作品だ。樂園を追放され、地上に降りたアダムとイヴと、その子孫である人間は、地上で労苦と共に生きることを強いられている。人間が労役に苦勞する姿を悲しむアダムに対してエノクとメホエルは、労働は神聖なものだと答える。労働をめぐる話し合いの末、アダムは、「禍ふる哉、呪はれし地の子等よ塵にして塵に皈るべき人の子等よ！」と言ひ残して息絶える⁴⁵。

そして、「アダム之死の床」には美術作品も掲載されている[図 4-1]。石垣栄太郎は、『共存』や「髑髏に接吻する女」の挿絵も手掛けていたことから、この絵もまた彼の 1910 年代後半の作品だと推察できる⁴⁶。美術作品は、森を背景にアダムとその家族を描いた穏やかな構図だ。また、後年の石垣栄太郎の作品に見られる、社会之実状を写實的に描く社会派リアリズムの画風ではなく、既成之テーマをもとにした《死之勝利》と同様の初期之習作と言える。 「アダム之死の床」は、1910 年代之彼の美術作品之様相を示す重要な資料であり、これ以後之創作活動に影響を及ぼした思想之転機はこれ以後に起ったのだと推察できる。

3-2 小説「罪人あるなし」

1920 年に掲載された小説「罪人あるなし」は、画家之死をテーマにした特異な作品だ⁴⁷。これは、柳瀬というニューヨーク在留之日本人が、ペンシルヴァニア州之監獄病院に画家西田之亡骸を確認しに行くというもので、主人公之柳瀬による、西田之死之過程を語る物語だ。西田は、ロサンゼルスでスクール・ボーイをした後、芸術家を志してニューヨークに來たが、病に倒れ、狂人となる。そこで日本に帰国するために、シアトルに向った。西田之帰国を巡っては、シアトル之日本人牧師が同行することになっていたが、牧師がそれを断ったため、西田は一人でニューヨークを發ち、途中で力尽きたのだった。「罪人あるなし」は、語り手が、友人之物語を語る二重構造と、在留邦人之頹廢的な生活を描いた作品だ。では、なぜ芸術家之死をテーマにした小説を日本語新聞之新年号に發表したのだろうか。ここに描かれた芸術家之死は、何を意味しているのだろうか。

そこで作品が發表された時期と、石垣栄太郎之画歴と照らし合わせてみると、彼は本作品を發表する数ヶ月前之、1919 年 10 月から 11 月に、アート・ステューデント・リーグ之ジョン・スローン之クラスで、美術を學んだことが判明した⁴⁸。石垣栄太郎は、ここで庶民之生活や社会風俗を写實的に描いた、社会派リアリズム之画風之影響を受けている。つまり、「罪人あるなし」執筆之背景には、美術学校に通ひ、社会派リアリズム之画家に師事するという、創作上之転機があつたのだ。そのため、本作品で、西田が氣狂ひになった理由の一つに、「画の方も彼が非常に崇拜していた画家からも、前途を悲觀してしいるやうな口振りを聞かされていたので、それやこれやが氣狂ひになった原因なのであらう」とある⁴⁹。石垣栄太郎之分身と思しき西田に、悲觀的な意見を述べた画家とは、石垣栄太郎之創作に影響を与えた、美術学校之関係者だつたと考えられる。また、作者之もう一人之分身である柳瀬は、

西田は「生きていても立派な画師にはなれなかっただろう」と語っている。彼の画風は不明だが、西田が創作に行き詰まっていたことが窺える。このことから、画家西田は石垣栄太郎自身をモデルにしているのではないだろうか。とするならば、作品に描かれた画家の死は、世紀末芸術に傾倒した石垣栄太郎の創作活動の一つの終わりを示したもので、彼は本作品に美術活動の転機を表したと考えられる。以上のことから、「罪人あるなし」は 1920 年頃の石垣栄太郎に訪れた創作の転機を示した作品だと位置づけられる。

おわりに

石垣栄太郎は、ガートルード・ボイルとのスキャンダルを機に、サンフランシスコの日本人社会を追われ、1915 年に彼女とニューヨークに移る。これまで石垣栄太郎については日本生まれ、アメリカに学んだ画家として、1925 年の独立美術家協会展以降の画業を中心に調査研究がされてきた。しかし、彼は画家として創作活動を始める以前に、小説や小品、詩歌の文芸作品を日本語新聞に発表しており、文芸家としての一面も持っていたのだ。『新世界』に発表された小説「その夜」は、西海岸の日本語新聞で連日のように報道された石垣栄太郎とガートルードのスキャンダルを背景にした私小説だ。「その夜」は、彼の意味とは逆に石垣栄太郎という署名で『新世界』に発表されたことで、彼を非難する日本人社会に対する申し開きをする形になった。また、オドルスタの語りには、ダヌンチオの『死の勝利』が連想される。以上のことから「その夜」は、作者をモデルに頹廢的な心情を基調にした私小説であり、石垣栄太郎が世紀末文芸の影響を受けた時期の創作だといえよう。

この後、石垣栄太郎はニューヨークで『日米週報』と『紐育新報』の文芸欄にも作品を発表する。それは短編小説「除夜の鐘」や小品「野に叫ぶ人の声を」のように、自身を背景にした自伝的作品だった。また「滅亡の門辺に」では、死の世界の境界として「滅亡の門」が描かれる。このように現実と異界を隔てる境界は、「髑髏に接吻する女」の「秘密の扉」にも象徴される。作品に表れた退廢的でデカダンな世界には、世紀末文芸の影響が表れていると推察できる。

以上のことから、1910 年代に石垣栄太郎は、移住地での生活を背景にした文芸作品を日本語新聞に発表している。これらの作品は、ダヌンチオやワイルドに感化された石垣栄太郎の頹廢的でデカダンな当時の思想が表れている。だが、1920 年に発表された「罪人あるなし」は、作者の分身と思しき、画家の死を描いた特異な作品だった。これ以前の詩や小品にも、死を予感させる頹廢的な描写はあったが、本作品は芸術家の死をテーマにした特異な作品だ。石垣栄太郎は、本作品が発表される直前にアート・スチューデント・リーグで、社会派リアリズムの画家に美術を学び始めており、ここで旧約聖書や世紀末文芸をテーマにしたそれまでの創作から、作風が変化したのだと推察できる。つまり、作者は「罪人あるなし」で画家の死を描くことで、それまでの創作活動における思想の転機を示していたのだ。

石垣栄太郎の活動は、これ以降、社会批評や美術批評に変化する。その背景には、アート・スチューデント・リーグに通い、美術の技法を本格的に学んだことと、1921 年に組織され

た日本人画家の団体、画彫会で役員に選出され、活動の中心が文芸から美術作品の創作に移ったことがあるだろう。そして 1925 年の独立美術家協会展への出品を機に、彼はアメリカの美術展覧会で作品を発表している。1910 年代の彼の創作は、移民地における自身の内情を描いた私小説から、世紀末文芸の影響を受けたデカダンな作品、そして自身に起った転機を画家の死になぞらえた、画家小説へと変容している。日本語新聞に表れた石垣栄太郎の文芸作品は、美術の創作を始める以前の、彼の活動を裏付ける重要な資料であり、画家が描いた移民地文芸だと言えよう。

¹ 翁久允と移民地文芸については、中郷芙美子「『移民地文芸』の先駆者翁久允の創作活動—「文学会」創設から『移植樹』まで—」『立命館大学言語文化研究』第 3 巻第 6 号

(1992 年 3 月 20 日)、1-23; 中郷芙美子「翁久允移民地文芸の特徴—「生活」と「思想」について」『立命館大学言語文化研究』第 4 巻第 6 号 (1993 年 3 月 20 日)、49-64; 山本岩夫「翁久允と『移民地文芸論』」『立命館大学言語文化研究』第 5 巻第 5・6 合併号 (1994 年 2 月 28 日)、11-42; 糸井輝子「在米」日本人『移民地文芸』覚書(1)アメリカの亡者—翁久允の長編二部作『悪の日陰』と『道なき道』」『白百合女子大学研究紀要』第 41 号 (2005 年 12 月)、117-134; 日比嘉高「移植樹のダンス—翁久允と『移民地文芸』論」筑波大学文化批評研究会編『テキストたちの旅程—移動と変容の中野文学』花書院 (2008 年 2 月 23 日)、46-61; 日比喜高『ジャパニーズ・アメリカ移民文学・出版文化・収容所』新曜社 (2014 年 2 月 20 日); 水野真理子「翁久允のアイデンティティと移民地文芸論の変遷」『人間・環境学』第 16 巻 (2007 年 12 月 20 日)、77-92; 水野真理子『日系アメリカ人の文学活動の歴史の変遷—1880 年代から 1980 年代にかけて』風間書房 (2013 年 3 月 31 日) などがある。

² 中田幸子『前田河廣一郎における「アメリカ」』国書刊行会 (2000 年 10 月 20 日)。

³ 浦西和彦「前田河広一郎と『日米時報』」『国文学』第 83・84 合併号、関西大学国文学会 (2002 年 1 月 31 日)、357-373。

⁴ 独立美術家協会展については Clark, Marlor. *The Society of Independent Artists The exhibition Record 1917-1944*. (Mill Road, Park Ridge New Jersey: Noyes Press, 1984) に、サロonz・オブ・アメリカについては Clark, Marlor. *The Salons of America 1922-1936*. (Madison Connecticut: Sound View Press, 1991) にそれぞれ出品作品のタイトルがある。

⁵ 石垣綾子『海を渡った愛の画家 石垣栄太郎の生涯』御茶の水書房 (1988 年 7 月 25 日)、66。

⁶ [表 5-3] 参照。

⁷ 石垣栄太郎「『玉石同架』(下) 画彫会展覧会」『紐育新報』1922 年 11 月 15 日。

⁸ 石垣栄太郎「アメリカ放浪四十年 (3) 恋の大陸横断」『中央公論』第 67 年 9 号 (1952 年 8 月 1 日)、224-225。

⁹ 「^{マツノ}管野氏の米夫人は狂へる乎」『新世界』1915 年 3 月 13 日; 「^{マツノ}管野夫人の拘留」『日米』1915 年 3 月 13 日。

¹⁰ 石垣栄太郎「アメリカ放浪四十年 (3) 恋の大陸横断」『中央公論』第 67 年 9 号 (1952 年 8 月 1 日)、224-225。

¹¹ 「^{マツノ}管野夫人離婚問題」『日米』1915 年 4 月 1 日。

¹² 「^{マツノ}管野姦通問題」『桜府日報』1915 年 3 月 17 日; 「^{マツノ}管野姦通問題 (続)」『桜府日報』1915 年 3 月 18 日; 「^{マツノ}管野夫人離婚訴訟を提起す」『羅府新報』1915 年 4 月 1 日; 清沢生

-
- 「温かい死の手に抱かれた女」『新世界』1915年4月4日；「^マ管野衣川氏離婚問題」『桜府日報』1915年5月12日；「詩人の妻青年画家に恋す」『紐育新報』1915年3月20日；“Girl Artist Prefers Japs”. “Second Jap Wins Gertrude Boyle Insane? Sculptress Says It’s Love”. *Los Angeles Times*, March 13, 1915; “Charged with Insanity Ward of Late Joaquin Miller Arrested on Sister’s Complaint”. *Idaho Daily Statesman*, March 13, 1915; *San Francisco Chronicle*, March 14, 1915; “Married to One Jap, with Girl is Fickle”. *Salt Lake Telegram*, March 16, 1915 でこの事件を取り上げている。
- 13 「^マ管野夫人離婚訴訟提起」『新世界』1915年4月1日。
- 14 燈台守「その夜」『新世界』1915年5月16日。
- 15 Ibid.
- 16 「^マ管野夫人に不利」『新世界』1915年4月8日。
- 17 燈台守「その夜」『新世界』1915年5月16日。
- 18 「^マ管野夫人放免」『新世界』1915年3月16日。
- 19 「^マ管野離婚訴訟」『新世界』1915年4月7日。
- 20 燈台守「その夜」『新世界』1915年5月16日。
- 21 「恋に狂へる女彫刻師」『日米』1915年3月14日。このほかにも同様の報道が「卅七歳の女と廿三歳の恋人」『新世界』1915年3月14日にある。
- 22 石垣栄太郎「アメリカ放浪四十年（2）日本からの亡命者達」『中央公論』第67年8号（1952年7月1日）219。
- 23 清沢冽「その夜」の序文『新世界』1915年5月16日。
- 24 燈台守「除夜の鐘」『日米週報』1916年12月30日。
- 25 Ibid.
- 26 Ibid.
- 27 石垣栄太郎「アメリカ放浪四十年（4）ニューヨークの香具師」『中央公論』第67年10（1952年9月1日）、209-210。
- 28 燈台守「除夜の鐘」『日米週報』1916年12月30日。
- 29 この詩について、「今見ると顔の赤くなるやうな私の詩も載っていました」と作者自身が述べている。石垣栄太郎「アメリカ放浪四十年（六）一片山潜とその同志たち」『中央公論』（1952年12月1日）、235；『共存』共存社（1917年夏）は、日本近代文学館所蔵。また『共存』については、石垣綾子『海を渡った愛の画家石垣栄太郎の生涯』御茶の水書房（1988年7月25日）、66-69；浦西和彦「前田河広一郎と『日米時報』」『国文学』第83・84合併号、関西大学国文学会（2002年1月31日）、357-373で言及されている。
- 30 石垣栄太郎「野に叫ぶ人の声を」『紐育新報』1917年6月9日。
- 31 Ibid.
- 32 石垣栄太郎「滅亡の門辺に」『紐育新報』1917年8月1日。
- 33 Ibid.
- 34 Ibid.
- 35 石垣栄太郎「髑髏に接吻する女」『紐育新報』1917年12月29日。
- 36 Ibid.
- 37 Ibid.
- 38 石垣栄太郎「エイの手紙」『紐育新報』1918年2月13日。
- 39 石垣埧埧譯「審判の庭 オスカー・ワイルド」『紐育新報』1918年7月17日。
- 40 埧埧「祈り」『紐育新報』1918年10月12日。
- 41 石垣埧埧「レデンプションと名を改へて上演された『生ける屍』プリモス座のトルストイ劇」『紐育新報』1918年10月26日。
- 42 埧埧「ある連続せる感覚」『紐育新報』1919年7月30日。
- 43 埧埧「哀傷の夕」『紐育新報』1919年8月16日。

-
- ⁴⁴ 埜埜「死の誘惑」『紐育新報』1919年8月20日。
- ⁴⁵ 石垣埜埜「アダムの死の床」『紐育新報』1919年7月19日。
- ⁴⁶ 石垣栄太郎は、雑誌『共存』(1917年 夏)や小説「髑髏に接吻する女」(『紐育新報』1917年12月29日)の挿絵を手掛けている。
- ⁴⁷ 石垣栄太郎「罪人あるなし」『紐育新報』1919年12月31日。
- ⁴⁸ Art Students League of New York, Registration record, Eitaro Ishigaki, Account No.12692, Register No.700. Address, 246West 14th St, Art Students League of New York.これまで石垣栄太郎がアート・ステューデント・リーグで学んだ時期については、明確にされていなかったが、授業登録記録から、1919年10月から11月に同校のジョン・スローンに師事したことが判明した。
- ⁴⁹ 石垣栄太郎「罪人あるなし」『紐育新報』1919年12月31日。

第5章

ニューヨークの邦人美術展覧会と日本語新聞 — 紐育日本美術協会と画彫会の展覧会 —

はじめに

戦前期のアメリカにおける日本人画家の創作活動は、近年渡米画家をテーマにした展覧会により、有名無名を問わず様々な画家たちが紹介されつつある¹。

これらの展覧会の図録以外にも石垣栄太郎の新聞スクラップ資料を調査した安來正博や²、清水登之の滞米日記を翻刻した岡義明³、20世紀前半のニューヨークの日本人画家の活動を調査したトム・ウルフの論がある⁴。このうち安來正博は、1922年の画彫会の展覧会は記録に残る限りでは、ニューヨークで開催された最初の邦人美術展覧会であり、画彫会の結成はそれまで作品発表の場がほとんどなかった日本人画家に期待を抱かせるものであったと位置付けている⁵。このほかにもトム・ウルフは、それまでの研究では取り上げられなかった1917年と1918年の邦人美術展覧会の開催について述べているものの⁶、この展覧会の様相は明らかにされていない。また、これらの諸研究では日本人画家の活動の基盤となった邦人美術家の団体や邦人美術展覧会の反響については、十分な調査、検討がされてこなかった。

邦人美術展覧会の調査研究を阻んできた理由は、作品の所在や出品目録のほか、彼らの活動を裏付ける新聞や雑誌の美術評などの資料の入手が困難な点がある。しかしニューヨークの日本語新聞『日米週報』（1918年から『日米時報』と改題）と『紐育新報』には、展覧会の批評や画家たちの動静も掲載されていることから、これらの新聞記事と展覧会の目録を照らし合わせることで、これまで明らかにされていない邦人美術展覧会の様相を浮かび上がらせることは可能だろう。

本章では、『日米週報』と『紐育新報』の記事と邦人美術展覧会の目録をもとに、1917年と1918年に開催された紐育日本美術協会主催の展覧会と1922年の画彫会主催の展覧会を取り上げて、戦前のニューヨークの日本人画家の団体の変遷とそれぞれの展覧会の様相を明らかにする。

1. ニューヨークの日本人社会と日本語新聞

異国に渡った日本人は、各地で邦人社会を形成し、慰安や情報伝達のために日本語新聞を発行しており、ニューヨークでも戦前まで『日米週報』と『紐育新報』が発行されている。これらの新聞には、当地の日本人社会の様子だけではなく、画家たちの活動も記されている。そこでまずは日本人画家たちの活動を伝える媒体としてニューヨークの日本語新聞の発行の経緯と変遷をたどる。

戦前のニューヨークの日本語新聞の研究は蝦原八郎の『海外邦字新聞雑誌史』（1936）や⁷、高須正郎の「ニューヨーク日系紙の変遷と発展」（1983）⁸、そして田村紀雄・蒲池紀生・芳賀

武の「日系新聞研究ノート(7)紐育日系新聞小史」(1985)がある⁹。このうち田村紀雄らは、ニューヨークの日本人語新聞発行の歴史について、当地で発行された最初の日本語新聞は、1898年頃から松本黙によって発行された『紐育週報』だったと述べている。そして1900年12月に星一と福富青尊によって『日米週報』が、さらに1911年には、甲斐健一によって『紐育新報』がそれぞれ発行されたとある。また、このほかにも1904年から1910年頃まで『紐育時報』が発行されていたと述べている¹⁰。しかし、『紐育時報』の発行と日本人会との関わりについては言及されていない。そこで、これらの先行論に若干の補足を加えるために、ここでは『紐育新報』に掲載された、「紐育邦字新聞の歴史」を手がかりに日本語新聞の発行をたどる¹¹。

「紐育邦字新聞の歴史」によると、1900年に発刊された『日米週報』は1904年のセント・ルイス万国博覧会の際に本社をセント・ルイスに移したため、ニューヨークには日本語の新聞が一つもなくなった。ところが日露戦争の開戦にともない、当地で情報伝達の手段がないことに不便を感じた、総領事内田定槌、高峰譲吉、村井保固らは支那字新聞にいた守屋賢吾を勧誘し、1904年6月11日に『紐育時報』を発行する。しかし万博閉会後に『日米週報』がニューヨークに戻ると、『紐育時報』は経営難になり1907年11月に廃刊する。そして『紐育時報』が廃刊した後、しばらくは『日米週報』一紙のみの発行だったが、1911年6月22日、甲斐健一によって『紐育新報』が発行されたとある¹²。この資料から『紐育時報』の発行には、総領事や日本倶楽部の役員が携わっていたことが判明する。

ニューヨークの在留邦人は『日米週報』発刊の1900年頃には僅か1000人程だった¹³。しかし『紐育新報』が発刊した1911年には、在留邦人の数は4000人に達し¹⁴、次第に富裕層を中心にした日本倶楽部、日本人の救済を目的に宗教家や医師を中心に設立された共済会や青年会などの組織が形成された。そして1914年には、この様々な階層の在留邦人を統括する機関として紐育日本人会が設立される。日本人会の初代会長には高峰譲吉(日本倶楽部会長)、副会長に一宮鈴太郎(横浜正金銀行支店長)、高見豊彦(共済会会長)、会計に瀬古孝之助(三井物産株式会社紐育支店長)が選出され¹⁵、幹事にはニューヨークの日系企業の関係者が名を連ねている¹⁶。

1917年に書記をしていた前田河広一郎によれば¹⁷、ニューヨークの日本人会は、会長の高峰譲吉を中心とした日本倶楽部系と、副会長の高見豊彦を中心とした共済会系、そして会計の地主延之助を中心とした商店系とそれぞれの派閥に別れていたようだ¹⁸。そして日本人会を中心に発行されていたのが二つの日本語新聞だった。

このうち『紐育新報』の第1号は、日本倶楽部の役員が働きかけて発行された『紐育時報』と同じ守屋賢吾の印刷所で発行されたことから、『紐育時報』と『紐育新報』は日本人会会長系、つまり日本倶楽部系の新聞だったと考えられる。いっぽう『日米週報』は1916年から日本人会の副会長高見豊彦が経営に携わっていることから共済会系の新聞だったといえよう。以上のことから、ニューヨークの日本語新聞は日本人会内部の派閥と同様、日本倶楽部系の『紐育新報』と共済会系の『日米週報』とで対立する関係にあった。

『日米週報』は毎週土曜日発行の 8 ページの新聞で、ニューヨークの日本人社会やアメリカ社会の情勢、祖国日本の情報のほかにも詩歌、短篇小説などを載せた文芸欄や石垣栄太郎、平本正次、渡辺寅次郎などによる美術評も掲載されている。これに対して『紐育新報』は、発刊当初は毎週土曜日発行の 4 ページの週刊新聞だったが、1917 年から毎週水曜日と土曜日の週 2 回発行されている。そして『紐育新報』も『日米時報』と同様に、アメリカの情勢や日本の近況、ニューヨークの日本人社会の様子を伝える紙面のほかにも、詩や劇評などの読み物のほかにも、岡田九郎¹⁹、石垣栄太郎による美術批評があった。これらの日本語新聞の紙面から、ニューヨークの日本人画家の動静が明らかになるだろう。

2. 紐育日本美術協会の展覧会

では、日本人画家たちの活動を日本語新聞ではどのように報じたのだろうか。彼らの活動を 1910 年代の『日米時報』と『紐育新報』からたどる。1915 年の『紐育新報』には美術家の懇親会の予告があり、そこには永井、妻沼、菊地の名がある²⁰。このうち菊地は菊地写真館の経営者、菊地東陽²¹、妻沼はニューヨーク最大の建築会社ツロウブリッジ、アンド、リビングストーン建築会社設計部の技師、妻沼巖彦だと考えられ²²、二人とも日本人会の設立や会館設置の際の役員になっている²³。

彼らが主催した紐育日本美術協会の懇親会は、1915 年 11 月 20 日に日本倶楽部で開催され、東京美術学校の洋画撰科を卒業した画家、葦原曠の司会に始まり²⁴、出席者には中村総領事や高峰譲吉（日本倶楽部会長）、瀬古孝之助（三井物産株式会社紐育支店長）、一宮鈴太郎（横浜正金銀行紐育支店長）、家永豊吉（哲学博士）、牛窪第二郎（山中商会支配人）など日本倶楽部を中心とした日本人会の幹部や日系企業の重役の名がある²⁵。このことから、日本人画家たちが日本倶楽部と親密な関係にあったことは明確だ。紐育日本美術協会の発足の時期や経緯は不明だが、同会の懇親会で高峰譲吉は、日本人の美術思想を応用し日本製の陶器を中心とした貿易の発展の期待を述べていることから²⁶、日系企業は日本人画家たちに東洋趣味の商業目的な美術品の創作を求めていたことが推察できよう。

そして 1917 年 3 月 12 日から 24 日まで紐育日本美術協会主催の展覧会が山中ギャラリーで開催される。同展覧会の出品目録〔表 5-1〕には、菊地東陽や葦原曠のほかにも、東京美術学校を卒業し、森村ブラザーズ意匠部に勤務する古田土雅堂²⁷、京都工芸高等学校の浅井忠の門下生でアメリカ自然史博物館に勤める洋画家の霜鳥之彦をはじめとした 11 名の出品者と油絵、水彩画、建築図案、写真を含む 75 点の作品のタイトルがあり、会場は五番街 254 番地の山中商会の店舗兼ギャラリーとなっている。

会場となった山中商会は、山中定次郎が大阪で創業し、19 世紀末から 20 世紀にかけてロックフェラー家(Rockefeller)、ヴァンダーヴィルト家(Vanderbilt)、フリーア(Freer)、ボストンのスチュアート・ガードナー夫人(Isabella Stewart Gardner)やフェノロサ(Fenollosa)、ハヴマイヤー(H.O. Havemeyer)など現在日本美術のコレクションを所有するアメリカ有数の美術館の基礎を築いたコレクターたちを顧客に、ニューヨーク、ボストン、ロンドンに支

店を置く日本美術商だった²⁸。アメリカで有数の日本美術商が展覧会の会場となっていることから、出品作品には東洋美術に傾倒したものがあったことは想像に難くない。

出品目録は作品のタイトルが記されているのみで、展覧会の様相は不明だ。しかし、同展覧会を『アメリカン・アート・ニュース(American Art News)』では、日本人の美術家が西洋風のアイディアを作品に取り入れようとしていると評価している。また、多くの作品が商業目的だが、出品した画家のうちの二名は出版社に勤めるファッションデザイナーで、彼らの作品には東洋と西洋が混ざっており、商業的ではないと述べている。さらに、鷹栖、小野の建築図案は和洋折衷のよい例であり、濱地清松の《ブルー・シフォン (Blue Chiffon)》や葦原曠、古田土雅堂、香川、和気の作品を取り上げて展覧会全体を評価している²⁹。いっぽう『紐育新報』では濱地清松、葦原曠の作品を米国風の作品、そして宇和川や霜鳥之彦、土屋の雪景や千本桜の狐火を描いた作品をフランス風の絵画だと評価しているが、日本を題材とした作品の多くはアメリカ人の東洋趣味に迎合したものだとしている³⁰。そして『日米週報』では、古田土雅堂の《曇 (Fairly Clouds)》〔図 5-1〕は悪魔と天女が雲の上で戦っている様子を描いた構図で、配色が日本画風な点や³¹、鷹栖の《暖炉 (A Fireplace for Dining Room)》を純日本式の食堂を西洋化した建築図案であると述べている。また小野の作品は田舎家の床の間の和洋折衷の模範画、土屋の屏風はアメリカ人好みの作品であるとしており、応用美術を中心に日本風の作品があることを指摘している。このほかにも絵画では霜鳥之彦の《茶瓶 (Tea Pot)》〔図 5-2〕³²、葦原曠の高架線上の夜汽車、濱地清松の人物画は推賞するに足りないとする³³。さらに『日米週報』では、邦人美術展覧会は、芸術作品の発表なのか商売目的なのか開催の意図を明確にするべきだと批評している³⁴。この展覧会で東洋趣味の作品が目立った背景には、日本人画家の多くが応用美術の創作や博物館、日系企業で働く傍らで創作活動をしていたことが影響していると考えられる³⁵。

ではなぜ邦人美術展覧会では東洋趣味が批判されたのだろうか。そこで同時代のアメリカ画壇を以下に取り上げる。1917年に独立美術家協会展の第1回展が開催されている。同展覧会について『日米週報』は、秀作も駄作もある中でロックウエル・ケント(Rockwell Kent)、ホーマー(Winslow Homer)などアメリカの新進画家の作品のほかに、ピカソ(Pablo Picasso)、ピカビヤ(Francis Picabia)などヨーロッパの画家には濃厚な色彩の立体派の作品が目立っていると指摘している³⁶。このことから当時のアメリカの美術界では、保守的なアカデミー派の作品に加え立体派、未来派などの新しくアメリカに入ってきたヨーロッパの近代美術の技法による作品が展示されたことが判明する。このようなアメリカの展覧会と比べて、紐育日本美術協会主催の展覧会には19世紀から20世紀にかけて欧米でもてはやされた東洋趣味の作品が目立ち、時代遅れと評されたのだろう。

この後、再び紐育日本美術協会主催の展覧会が1918年2月1日から10日までマクドウェル・クラブで開催される。出品目録〔表 5-2〕によれば、同展覧会は12名55点の油絵のみの展覧会で、このうち濱地清松の《幻想 (Illusion)》と国吉康雄の《帰る家路 (Homeward)》は1917年の独立美術家協会展に出品されている³⁷。そして寺徹圓の《若い

男 (Young Man)》と《マリオン (Marion)》は 1917 年のペンシルバニア・アカデミー (Pennsylvania Academy of the Fine Arts) に³⁸、犬飼恭平の《霧 (The Fog)》、《寒風 (The Cold Wind)》はシカゴ・アート・インスティテュート (The Art Institute of Chicago) の年次展覧会に出品された作品である³⁹。

この展覧会を『トリビューン』では、寺徹圓の《赤い袖 (Red Sleeves)》の色の組み合わせや、宇和川の《花 (The Flower)》の装飾的で色鮮やかな点、霜鳥之彦の作品の線と色との調和を評価しているが、古田土雅堂の《茸狩 (Take Gari)》〔図 5-3〕は⁴⁰、西洋画風の背景に日本の少女を描いた「まぜこぜ」の絵だとしている⁴¹。このほかにも『アメリカン・アート・ニュース』では、東洋風な坂口の《雀 (Sparrows)》、《東洋の追憶 (Thought of Orient)》、古田土雅堂の《茸狩》以外の作品には日本人の創作に西洋の影響がはっきりと表現されており、そのなかでも宇和川の《花》、霜鳥之彦の《菊 (Chrysanthemums)》、《紫羽織 (Purple Haori)》、土屋の静物画を評価しているほか、濱地清松の《五番街 (Fifth Avenue)》はチャイルド・ハッサム (Childe Hassam) に発想を得たようだとしている⁴²。いっぽう『日米週報』では、霜鳥之彦の静物画と寺徹圓の肖像画以外は、センチメンタリズムや後期印象派の模倣で時代遅れと未成品ばかりの展覧会だとある⁴³。また『紐育新報』では、英字新聞で絶賛された洋画は足取相撲の作品だと指摘している⁴⁴。これらの美術批評から、1918 年の展覧会は英字新聞では好評を得ているものの、日本語新聞では西洋画の技法の習得を求めていることが推察できる。

このように 1910 年代に開催された紐育日本美術協会主催の展覧会は、当時のアメリカ画壇と比べると東洋趣味に迎合した時代遅れの作品や技法の未熟な点が批判されている。以上のことからアメリカにおける日本人画家たちの洋画の創作は黎明期だったといえるだろう。

3. アメリカ画壇における日本人画家

紐育日本美術協会主催の展覧会では、東洋趣味や技法の未熟さに批評が集ったが、アメリカの美術界で日本人画家はどのような活動をしていたのだろうか。1919 年の独立美術家協会展には、古田土雅堂、清水登之、萩生田真陽、山成弘禪、鍋島四郎が出品しており、英字新聞では古田土雅堂の《地下鉄のラッシュアワー (Rush Hour in Subway)》は、描かれた風景の精神状態がよくわかる。《災難 (An Accident)》〔図 5-4〕は好奇心の強い観衆の騒ぎの感覚がよく出ており、二点ともキュビズムの作品だと評価している⁴⁵。さらに『紐育新報』では、1918 年の紐育日本美術協会の展覧会に出品された古田土雅堂の《茸狩》は、東洋趣味に迎合した作品だったが、《地下鉄のラッシュアワー》はすべての形式と因襲を打ち破った傑作だとある。また、清水登之の《自動ボードヴィル (Automatic Vaudeville)》⁴⁶と、《公園の一隅 (In the Park)》は陰惨な自然の皮肉を赤裸々に描き出した作品だと評価されており⁴⁷、日本人画家の作品は日本語新聞と英字新聞ともに好評を得ている。

そして、1921 年の独立美術家協会展には、萩生田真陽、国吉康雄、平本正次、古田土雅

堂、清水登之、久米が出品している。このうち古田土雅堂の《交通 (The Traffic)》は⁴⁸、キュビズムの作品と評され、清水登之の《横浜の印象 (Impression of Yokohama)》は同年秋のシカゴ・アート・インスティテュートの年次展覧会にも出品し、オーガスタス (Augusts) 賞の受賞を外国人であることを理由に取り下げられ話題になった作品だ⁴⁹。また、1920 年のナショナル・アカデミー (National Academy of Design) では加藤健太郎の《若い女性 (Young Woman)》が \$200 の賞を受賞している⁵⁰。そして犬飼恭平の《反映 (Reflection)》〔図 5-5〕は⁵¹、1918 年のナショナル・アカデミーや⁵²、1919 年のシカゴ・アート・インスティテュート⁵³、1921 年のペンシルバニア・アカデミーの展覧会にも入選している⁵⁴。これらのことから、1910 年代の後半には、アメリカ画壇で活躍する日本人画家が増えていることが明らかなだ。

4. 日本人画会と画彫会の発足

アメリカの美術会に日本人画家が進出していくのと同時に、紐育日本美術協会の活動は 1920 年 4 月に結成された「日本人画会」に集約される。同会の発起人には紐育日本美術協会の幹事だった古田土雅堂や、このほかにも濱地清松、犬飼恭平、国吉康雄、萩生田真陽、平本正次、加藤健太郎、渡辺寅次郎の名がある⁵⁵。紐育日本美術協会には日本で美術教育を受けた画家もいたが、ここでは国吉康雄や犬飼恭平のようにアメリカで絵を学び始めた画家や萩生田真陽、平本正次、加藤健太郎のようにナショナル・アカデミーや独立美術家協会展に作品を発表する画家も加わり、活動の中心は渡米画家たちへと移り変わる。

そして 1921 年 3 月 20 日に開かれた「日本人画会」の例会では、古田土雅堂、清水登之、石垣栄太郎が新役員に選出され⁵⁶、同会は 1921 年に画彫会と改名する。その際、次のような事項が決議された。

〔一〕 来る十月廿四日より十一月廿一^{ママ}迄ホテル マゼスチックに於て展覧会を開催する事〔二〕 展覧会開催中十月廿九日を期して同ホテルに於て仮装舞踏会を催して日米人相互の親善を計る事〔三〕 名称を彫刻家をも抱擁する意味に於て「画彫会」と改称する事〔四〕 在紐育の名士有志家を賛助会員に推薦する事〔五〕 展覧会開催中在紐の諸団体の後援を乞ふ事〔六〕 本会に入会希望者は会員二名の推薦を要する事⁵⁷。

画彫会については、『画彫会第一回作品展覧会後援者名簿』という、趣意書、会員名簿、後援者名簿からなる手書きの資料が和歌山県太地町立石垣記念館に所蔵されている。趣意書には、日本人の美術を世に紹介するという同会発足の目的と展覧会を 11 月 3 日から 3 週間シヴィック・クラブで開くこと⁵⁸、展覧会開催の資金集めのために有志の後援を仰ぐことのほか、安藤邦衛、原誠之助、平本正次、稲葉正太郎、石垣栄太郎、川村吾蔵、古田土雅堂、国吉康雄、松下篁斎、三鬼良吉、三崎道夫、丘辺杳、清水登之、寺徹圓、臼井文平、渡辺虎次郎^{ママ}の署名がある⁵⁹。

この資料は浅野徹⁶⁰、安來正博も取り上げているが⁶¹、これまでの研究では趣意書と会員名簿の画家たちに焦点が当てられてきた。しかし、この資料でもう一つ重要な点は、次にあげる後援者名簿に記載された人物だ。13名の後援者のうち判読できる人物を所属と照らし合わせてみると、地主延之助（森村ブラザース支配人）、白江信三（山中商会紐育支店支店長代理）、児玉嘉四郎（太洋貿易会社紐育支店支配人）、堤彦一（高田商会紐育支店）、熊崎恭（総領事）、田島繁二（三井物産紐育支店支配人代理）、田村羊三（南満州鉄道出張所長）、南 治之助（神戸鈴木商店紐育支店支配人）、高田孝雄（高田岩井商会紐育支店長）、西 巖（商務官）となる⁶²。

このように総領事や日本人会、日系企業の人々が画彫会の活動を支援していることから、画彫会も紐育日本美術協会と同様に日本人会の中心人物たちと関わりがあったのだ。そして1922年11月1日から21日まで、画彫会主催の展覧会がシヴィック・クラブで開催された。展覧会閉会後には、同会から紐育新報社に後援の謝状が贈られていることから⁶³、この展覧会の開催には、ニューヨークの日本人社会が尽力したことが明白だ。

5.画彫会主催第一回邦人美術展覧会

画彫会の展覧会の出品目録〔表 5-3〕によると、同展覧には14名 53点の作品が展示されたことが判明する。このうち清水登之の《ヨコハマ・ナイト》、古田土雅堂の《地下鉄のラッシュアワー》、《交通》、平本正次の彫刻《仏像 (Buddha)》、《ロダン (Rodin)》、《ジェフリー (Joffre)》は、独立美術家協会展や⁶⁴、シカゴ・アート・インスティテュートの年次展覧会にも出品し、好評を得た作品だ⁶⁵。出品作品の多くが、所在不明で図版も残されていないため作品の様相は判明しない。だが新聞記事に残された展覧会の批評から推察すると次のような点が浮かび上がる。例えば、『アメリカン・アート・ニュース』では、多くの画家が西洋画の愛好者で、稲葉正太郎の《聖女 (Virgin)》にモダニズムの魅力があり、古田土雅堂の《鶏小屋 (Chicken House)》、《家族 (Family)》にはタッチにユーモアがある。このほかにも三崎道夫の静物画は、写實的に描かれたリンゴに対して現代的な背景と色彩に魅力があると述べている⁶⁶。また『紐育新報』では、玉石同架の展覧会だとしながらも、古田土雅堂、国吉康雄、臼井文平、渡辺寅次郎、稲葉正太郎の作品を未来派の作品、三鬼良吉、安藤邦衛、原誠、三崎道夫の作品を官校派としてそれぞれの画家を評し、三崎道夫の静物画は果物だけを切り離せば立派な写実主義の傑作だが、背景がルドンの模倣のようだ⁶⁷、技法が混同している点を批判しているほか、『日米時報』では展覧会全体を通して作家の個性と抱負が発揮されていて、出品作品には新鮮で趣向の向上が見えると評価している⁶⁸。このような新聞記事から、画彫会の展覧会は、それまでの邦人美術展覧会で話題になった、東洋趣味への傾倒や未熟な技法を脱却し、アカデミー派や前衛美術の影響が表れていたことがうかがえる。

この展覧会は、それまでの紐育日本美術協会主催の展覧会と同様に日系企業の後援で開催されたが、画彫会結成の趣意書にもあるように「日本人の作品を世の中に紹介する」目的

で、アメリカ画壇でも好評を得た、保守的な写実画や、未来派、立体派の前衛美術の技法による作品が発表されたのである。

おわりに

1910年代から1920年代のニューヨークでは、紐育日本美術協会と画彫会という邦人美術家の団体があり、邦人美術展覧会が開催された。ここで発表された作品の多くが所在不明で図版も殆んど残されていないことから、これまで展覧会の様相は明確にされてこなかった。しかし、ニューヨークの日本語新聞に掲載された美術批評と、展覧会の目録を手がかりにして日本人画家の団体の変遷と創作活動を知ることは可能だ。

1917年と1918年に開催された紐育日本美術協会の展覧会には、日系企業や応用美術の創作に従事する画家が多かった。そのため同展覧会は、東洋趣味の作品が目立ちアメリカの批評家からは好評を得たが、日本人の間では時代遅れだという批判や、西洋画の技法の習得を促す批評が多数を占めていた。ところが1920年代になると日本人画家はアメリカで美術を学び、アメリカ画壇で活躍する渡米画家へと移り変わっていく。1922年の画彫会の展覧会は、日本人社会が画家の活動を後援して開かれた、欧米の近代美術の影響を受けた渡米画家たちの作品を、ニューヨークの在留邦人社会とアメリカ社会に紹介する展覧会だったのだ。この後ニューヨークで活動する日本人画家は、東洋と西洋の両方の文化をいかに作品に反映させるかを模索しながら、アメリカ画壇にも活動の場を広げていく。

¹ 『アメリカに学んだ日本の画家たち 国吉・清水・石垣・野田とアメリカン・シーン絵画』(展覧会図録)東京国立近代美術館(1982年); 『アメリカに学んだ18人 太平洋を越えた日本の画家たち』(展覧会図録)和歌山県立近代美術館(1987年); 『終戦50年企画 アメリカに生きた日系人画家たち 希望と苦悩の半世紀 1896-1945』(展覧会図録)東京都庭園美術館(1995年); 『アメリカの中の日本 石垣栄太郎と戦前の渡米画家たち』(展覧会図録)(1997年11月11日)和歌山県立近代美術館を参照。

² 安來正博「石垣栄太郎関係スクラップ資料と、その補足的考察(1)」『和歌山県立近代美術館紀要』第1号(1996年3月31日)、15-66; 安來正博「石垣栄太郎関係スクラップ資料と、その補足的考察(2)」『和歌山県立近代美術館要』第2号(1997年3月31日)、55-103; 安來正博「資料に見る戦前の渡米画家たち—その活動の軌跡—」『アメリカの中の日本 石垣栄太郎と戦前の渡米画家たち』(展覧会図録)和歌山県立近代美術館(1997年11月11日)、57-64 また、和歌山県立近代美術館所蔵の石垣栄太郎のスクラップ資料の中で画彫会に関する新聞記事は “Yang Japanese Artists Finds Strange Contrasts in American Men and Women” *The Evening Telegram* November 4, 1922.のみである。

³ 岡義明「清水登之、生涯を綴った日記」大川美術館『企画展 No.24 清水登之 滞米日記と素描』財団法人大川美術館(1994年9月27日)、4-31。

⁴ Wolf, Tom “The Tip of the Iceberg in Early Asian American Artists in New York,” in *Asian American Art A history 1850-1970*, Chang, Johnson, Karlstrom, eds. (Stanford California: Stanford University press, 2008), 83-109.

⁵ 安來正博「資料に見る戦前の渡米画家たち—その活動の軌跡—」『アメリカの中の日本 石垣栄太郎と戦前の渡米画家たち』(展覧会図録)和歌山県立近代美術館(1997年11月11日)、58。

-
- 6 Wolf, Tom: 85-86.
- 7 蝦原八郎『海外邦字新聞雑誌史』学而書院(1936年1月13日)、205-209。
- 8 高須正郎「ニューヨーク日系紙の変遷と発展」『別冊新聞研究』17号(1983年12月)、8。
- 9 田村紀雄・蒲池紀生・芳賀武「日系新聞研究ノート(7)紐育日系新聞小史」『東京経大学会誌』第140号(1985年3月20日)、119-158。
- 10 Ibid. 121-128.
- 11 千本木生「紐育邦字新聞の歴史」『紐育新報』1915年1月2日。
- 12 Ibid.このほかにも2・3号で廃刊になった邦字新聞もあったようだ。
- 13 「過去二十年を回顧して」『日米時報』1920年1月1日。
- 14 「時事一束」『紐育新報』1911年9月23日。
- 15 各人物の所属は、日米週報社編「在米日本人紳士録」『日米大勢年鑑』日米週報社(1914年1月1日)、1-111を参照。
- 16 紐育日本人会編『紐育日本人発展史』PMC出版(1984年9月10日[1921年3月30日])、443-464。
- 17 前田河広一郎「地獄」『三等船客』自然社(1922年10月30日)、208-210。
- 18 地主延之助は1917年5月から地主が会計になっている。(『紐育新報』1917年5月12日)
- 19 中村不折に師事した洋画家(日本美術年鑑編集部『美術年鑑』画報社、1913年、39)。1917年1月からニューヨークに滞在、後にパリに渡る。「紐育より」(『読売新聞』1918年1月29日(朝刊); 1918年1月30日(朝刊))に邦人美術展覧会について言及している。
- 20 「美術家の懇親会」『紐育新報』1915年10月30日。
- 21 日米週報社編「在米日本人紳士録」『日米大勢年鑑』日米週報社(1914年1月1日)、56。
- 22 Ibid.25.
- 23 紐育日本人会編『紐育日本人発展史』PMC出版(1984年[1921年3月30日])、449、451。
- 24 1903年7月東京美術学校西洋画撰科卒業。太平洋画会会員(日本美術年鑑編集部『美術年鑑』画報社(1913年)、155。
- 25 「邦人の美術思想は国家の財産なり」『紐育新報』1915年11月27日。
- 26 Ibid.
- 27 古田土雅堂は、杉村浩哉「古田土雅堂について」『美術運動史研究会ニュース』87号(2007年4月20日)、1-7に詳しい。
- 28 朽木ゆり子『ハウス・オブ・ヤマナカ 東洋の至宝を欧米に売った美術商』新潮社(2011年3月25日)。
- 29 “Young Japanese Artists’ Display” *American Art News*, March 17, 1917.
- 30 岡田九郎「在紐日本美術家の作品展覧会を観て」『紐育新報』1917年3月21日。
- 31 ふみの森もてぎ所蔵の《雲》[図5-1]だと考えられる。
- 32 霜鳥之彦遺作展実行委員会.『霜鳥之彦遺作展—遺作展記念画集』(展覧会図録)、光琳社、(1983年11月1日)収録の《7.日本茶》(水彩、1916年)[図5-2]だと考えられる。
- 33 エス ワイ生「邦人の美術展覧会を観る」『日米週報』1917年3月24日。
- 34 額屋生「美術展覧会覗き」『日米週報』1917年3月31日。
- 35 「文展乎サロン乎 荒井陸男氏談」『紐育新報』1917年3月24日には、展覧会に出品した日本人画家のうち、宇和川以外は応用美術の創作や企業、博物館で働く傍らで創作活動をしていることが記されている。
- 36 台燈守り「五十行雑感(二)」『日米週報』1917年4月21日。
- 37 *Catalogue of The First Annual Exhibition of The Society of Independent Artists, 1917*. (Exhibition catalogue). (New York, Grand Central Palace, New York: Rudge,

William Edwin).

³⁸ Falk, Peter Hastings, ed. *The Annual Exhibition Record of The Pennsylvania Academy of the Fine Arts*. Volume III 1914-1968. (Madison Connecticut: Sound View Press, 1989)、453.

³⁹ Falk, Peter Hastings, ed. *The Annual Exhibition Record of The Art Institute of Chicago 1888-1950*. (Madison Connecticut: Sound View Press, 1990)、469.

⁴⁰ 道の駅もてぎ、古田雅堂邸所蔵。

⁴¹ “Art” *New York Tribune*, February 3, 1918.

⁴² “Japanese Artists at MacDowell Club” *American Art News*, February 9, 1918.

⁴³ 黄四郎「紐育の画壇 二展覧会拝見記」『日米週報』1918年2月9日。

⁴⁴ 岡田九郎「日本美術会漫録」『紐育新報』1918年2月13日。

⁴⁵ “Notes on Current Art” *New York Time*, March 30, 1919.

⁴⁶ 《地下鉄のラッシュアワー》と《自動ボードヴィル》の図版は Society of Independent Artists. *Catalogue of The Third Annual Exhibition of The Society of Independent Artists*. (New York, Grand Central Palace, 1919). (Exhibition catalogue)にある。

⁴⁷ 石垣埜嶋(石垣栄太郎)「独立美術協会の日本人画家」『紐育新報』1919年4月2日。

⁴⁸ 《交通》の図版は Society of Independent Artists. *Catalogue of The Fifth Annual Exhibition of The Society of Independent Artists*. (Exhibition catalogue). (New York, The Waldorf Astoria, 1921).にある。

⁴⁹ 同一のタイトルの作品が、和歌山県立近代美術館と横浜美術館にそれぞれ所蔵されている。本作品は1921年の独立美術家協会展および同年のシカゴ・アート・インスティテュートの第34回年次展覧会に《Impression Yokohama》の題名で出品した。オーガスタス賞の受賞取り消しについては“Chicago Overrides Jury and Bars Jap” *American Art News* November 12, 1921; 「籠欄」『紐育新報』1921年11月5日がある。

⁵⁰ “Art Prizes Awarded” *New York Sun*, March 31, 1920; “W.E. Schofield Wins \$1,000. New York Artists Takes Highest Prize in National Exhibition” *Washington Post*, April 1, 1920 を参照。

⁵¹ 東京国立近代美術館所蔵。

⁵² Falk, Peter Hastings, ed. *The Annual Exhibition Record of The National Academy of Design 1901-1950*. (Madison Connecticut: Sound View Press, 1990)、282.

⁵³ Falk, Peter Hastings, ed. *The Annual Exhibition Record of The Pennsylvania Academy of the Fine Arts*. Volume III 1914-1968. (Madison Connecticut: Sound View Press, 1989)、469.

⁵⁴ Falk, Peter Hastings, ed. *The Annual Exhibition Record of The Art Institute of Chicago 1888-1950*. (Madison Connecticut: Sound View Press, 1990)、248.

⁵⁵ 「日本人画会成立す」『紐育新報』1920年4月17日。

⁵⁶ 「日本人画会新役員」『紐育新報』1921年3月23日。

⁵⁷ 「日本人画会画彫会と改称」『紐育新報』1921年5月28日。

⁵⁸ 展覧会の開催期間は『画彫会第一回作品展覧会後援者名簿』では11月3日から21日までとしているが、和歌山県太地町立石垣記念館所蔵の同展覧会目録、*Exhibition of Paintings and Sculptures by The Japanese Artists Society of New York City*. (Exhibition catalogue). (New York, The Civic Club, 1922)では11月1日から21日となっている。

⁵⁹ 『画彫会第一回作品展覧会後援者名簿』(1922年10月1日)和歌山県太地町立石垣記念館。

⁶⁰ 浅野徹「大正・昭和前期の在米画家についてのノート」『アメリカに学んだ18人 太平洋を越えた日本の画家たち』(展覧会図録)和歌山県立近代美術館 (1987年、76-77)。

⁶¹ 安来正博「資料に見る戦前の渡米画家たち—その活動の軌跡—」『アメリカの中の日本 石垣栄太郎と戦前の渡米画家たち』(展覧会図録)和歌山県立近代美術館(1997年11月11日)、57-64。

⁶² 『画彫会第一回作品展覧会後援者名簿』(1922年10月1日)和歌山県太地町立石垣記念館所蔵。各人物の所属は、紐育日本人会編『紐育日本人発展史』PMC出版(1984年9月10日[1921年3月30日])、田村羊三「私の満鉄史」満鉄会編『満鉄会叢書① 思い出の満鉄』龍溪書舎(1986年10月20日)、161-165。外務省通商局編『通商公報』(帝国地方行政学会936号、1922年5月1日、936; 33。名刺広告『紐育新報』1921年12月31日、名刺広告『日米時報』1921年1月1日、1922年1月1日を参照。

⁶³ 「画彫会」『紐育新報』1922年12月20日。

⁶⁴ Society of Independent Artists. *Catalogue of The Third Annual Exhibition of The Society of Independent Artists*. (Exhibition catalogue). (New York, The Waldorf Astoria, 1919); Society of Independent Artists. *Catalogue of The Fifth Annual Exhibition of The Society of Independent Artists*. (Exhibition catalogue). (New York, The Waldorf Astoria, 1921); Society of Independent Artists. *Catalogue of The Sixth Annual Exhibition of The Society of Independent Artists*. (Exhibition catalogue). (New York, The Waldorf Astoria, 1922).

⁶⁵ Falk, Peter Hastings, ed. *The Annual Exhibition Record of The Pennsylvania Academy of the Fine Arts*. Volume III 1914-1968. (Madison Connecticut: Sound View Press, 1989)、238.

⁶⁶ “Japanese Artists’ Show” *American Art New*, November 18, 1922.

⁶⁷ 石垣栄太郎「玉石同架(下)」『紐育新報』1922年11月15日。

⁶⁸ 唐変木生「藪にらみの記 画彫会展覧会偶感」『日米時報』1922年11月18日。

第 6 章

独立美術家協会とサロonz・オブ・アメリカの日本人画家

—狂騒時代のアメリカ美術界を背景に—

はじめに

1910 年代から 1920 年初めにかけて、ニューヨークの日本人画家は、日本人社会の支援を受けながら、紐育日本人美術協会(後に画彫会と改称)を組織し、邦人美術展覧会で作品を発表している。1920 年代のアメリカで美術活動をした日本人の多くは、修学や出稼ぎを目的に渡米した後、芸術活動に目覚め、アメリカの美術学校で学んだ画家だった。彼らの活動は、これまで安來正博や岡義明、トム・ウルフらの研究により明らかにされつつある¹。だが国内の研究では、アメリカで開かれた展覧会の図版や新聞の美術批評欄といった一次資料の調査が困難なことから、断片的な研究に止まっていると言わざるを得ない。また、アメリカ美術史と国吉康雄の研究では、英字新聞に掲載された美術批評を中心に調査が進められてきたものの、ニューヨークで発行された日本語新聞の美術欄は見過ごされてきた。

1920 年代のアメリカは、第一次大戦後の産業の発展と好景気を背景に、近代文明が発達した時代だった。街ではフラッパーといわれた、断髪に丈の短いスカート姿の女性たちが闊歩し、ラジオや映画、ダンスホールなどの大衆文化が発展した。また当時は、禁酒法の制定に伴い、違法営業の酒場や酒の密造が横行した、狂騒の時代でもあった。アメリカ美術界では、ヨーロッパの古典絵画を基調としたアカデミーの作品と、モダニズムの影響を受けた作品の、新旧の両方の画風が混在する時期だった。これは古典的絵画の模倣から脱し、1930 年代にアメリカの美術として確立した、アメリカン・シーンの模索期でもある。その先駆けとなったのは、1908 年に、ニューヨークで開催された、ジ・エイトといわれる 8 人の美術家のグループ展だ。マクベス・ギャラリーで開催されたこの展覧会は、街の路地裏や社会の風俗を写實的に描いた、ジョン・スローン(John Sloan)やロバート・ヘンライ(Robert Henry)らの作品が展示され、話題となった²。そして 1913 年には、これらの画家も参加した、アーモリー・ショーが開催される³。これは、印象派から、野獣派、未来派、立体派といった抽象芸術すなわちモダニズムまで、ヨーロッパとアメリカの近代絵画、彫刻、グラフィックを約 1600 点展示したもので、アメリカの美術界に大きな影響を与えた。さらに 1917 年には、ジ・エイトの一人だったジョン・スローンを中心に、独立美術家協会が設立され、無審査無賞の展覧会が開催される。この展覧会では、アカデミーに落選した古典的画風の作品からモダニズムの作品まで、様々な国籍の画家の多様な作品が展示された。また 1922 年には独立美術家協会から枝分かれする形で、ハミルトン・イースター・フィールド(Hamilton Easter Field)によって、サロonz・オブ・アメリカが設立され、ここでも無審査無賞の展覧会が開かれる。このように、技法や画歴を問わず、誰でも出品が可能だった独立美術家協会とサロonz・オブ・アメリカの展覧会は、日本人画家も作品を発表する重要な場だった。しかし、戦前のニューヨークで活動した日本人画家は、ほとんどが無名の画家で、作品も所在

不明なものが多い。また、現地で出版された展覧会の出品目録や図版、美術批評の資料は入手が困難なことから、これまで十分な検討がされなかった。

そこで本章は、1920年代の独立美術家協会とサロズ・オブ・アメリカの展覧会における日本人画家の作品に着目し、展覧会の出品目録〔表 6-1〕⁴、〔表 6-2〕と共に⁵、日本語新聞や英字新聞に掲載された美術批評を資料にして、日本人画家の作品の様相と活動の意義を解明する。

1. 初期の独立美術家協会の展覧会

1917年に設立された独立美術家協会の第1回目の展覧会は、既成の便器にR・マットとサインした、マルセル・デュシャン(Marcel Duchamp)の《泉》が、出品を拒否されて話題になった⁶。その一方、同展覧会には日本人画家も出品している。出品目録によると、葦原曠の《娘(A Girl)》、《静物(Still Life)》、濱地清松の《幻想(Illusion)》、佐場リンノスケの《偶像を手にせる少女 (Girl with an Idol)》、《彩飾した花(Illumined Flower)》、国吉康雄の《帰る家路(Home Ward)》、《十字架(Modern Crucifix)》、重松岩吉の《女性(A Cala Woman)》、《女性(A Woman)》がある⁷。これらの構図は不明だが、『日米時報』では、葦原曠の《娘 (A Girl)》は写実的な技法で日本の女性を描いたもので、《静物》は後期印象派風の作品、そして濱地清松の《幻想》は、柔らかな線で裸体を描いた写実的な作品だと指摘している。また、重松岩吉の《女性》は、「感じの良い色彩の調子と線の曲線が錯雑して入り組んでいる中に真白な裸体の女が動いている水絵」であり、佐場リンノスケの《偶像を手にせる少女》は、1915年と1916年のナショナル・アカデミーに入選した彼の《うたた寝 (Utatane)》、《赤い着物 (The Red Kimono)》⁸と比較すると、「技巧は相当に進んで居るが内容はますます貧弱なものになっている。氏は『日本画を油絵具で描く』てふ趣味に囚はれているから古代日本の大家に依って描かれた深刻な人間性を感じ得ないで単なる骨董品外面的に模写して居られるような感じがする」と批評がある⁹。このことから、第1回目の独立美術家協会の展覧会に出品した日本人画家の作品は、技法は未熟だったものの、アカデミーに傾倒した写実画から、ヨーロッパの前衛美術の影響を受けた未来派まで、様々な作品が展示されたことが判明する。また、佐場リンノスケと葦原曠の作品は、日本の文化を西洋画の技法で描いたものだったことが窺える。

日本の文化を題材にした同様の作品は、1918年の独立美術家協会展にもある。ここでは、安藤邦衛の《バルコニーの女性(Woman in the Balcony)》、萩生田真陽の《赤い風呂(The Red Bath)》〔図 6-1〕、《書き物(Writing)》、国吉康雄の《裸婦(Nude)》、《静物(Still Life)》、重松岩吉の《ロサンゼルス5番街(Fifth Street Los Angeles)》、《ローボート(Row Boat)》、J.B. カワチの《新しい着物(The New Kimono)》、《春(Spring)》が出品されている¹⁰。このうち、萩生田真陽の《赤い風呂》は¹¹、日本の公衆浴場を描いたものだ。これを『日本人』では、「第一回インデペンデントに『血の湯』なんて、ダンテの地獄煉獄にありさうなすご味のある題名の大作を公けにして時分てんぐ連共を驚かした」と述べており¹²、萩生田真陽の作品

は、日本の文化を題材にした西洋画の手法で表した、奇抜な着想がアメリカの鑑賞者に新鮮な印象を与えたのだろう。彼は、1920年の独立美術家協会展にも、アメリカ人が餅つきをする様子を描いた《餅つき (Mochituki)》という作品を発表しており¹³、これも《赤い風呂》と同様の日本文化を西洋画で描く手法の作品だと推察できる。また、絵画だけではなく、作品の形状にも日本文化を表象するものがあった。例えば、1923年の独立美術家協会展に出品された、渡辺寅次郎の《正義の象徴 (Symbol of Righteousness)》〔図 6-2〕は、龍の昇天を描いた屏風だ¹⁴。これを『アート・ニュース(Art News)』は、外国風の意図が表れた作品と述べている¹⁵。また、『日米時報』では「慥か現今米国人の要求しておる室内裝飾用として歓迎せられるであらう」¹⁶とあり、アメリカ人が好むような、東洋趣味の応用美術として取り上げている。

以上のことから、初期の独立美術家協会の展覧会で日本人画家は、写実画やモダニズムを模倣した西洋画や、日本文化を題材にした西洋画や屏風などの東洋風な作品を通じて、アイデンティティの混在を表象したといえよう。

2. 独立美術家協会と前衛美術

第一次大戦後にヨーロッパで興った、未来派や立体派といった抽象芸術は、アメリカ美術界にも影響を与えた。日本人画家の中でも古田土雅堂は、未来派の技法を基調にした画家だ。彼は東京美術学校の日本画科を卒業した後、アメリカに渡り、森村ブラザース（現在のノリタケ）の意匠部で陶器の絵付けの仕事をする傍らで創作活動をしている。アメリカ画壇での彼の画歴をたどると、まず独立美術家協会展には、1919年にニューヨークの街の雑踏を描いた《地下鉄のラッシュアワー (Rush Hour in Subway)》と《災難(An Accident)》〔図 5-4〕を¹⁷、そして1920年に《入浴後(After the Bath)》、《真意(The Sprit)》¹⁸、1921年に《交通 (Traffic)》、《裸婦(Nude)》¹⁹、1922年に《舞踏会 (The Ball)》〔図 6-3〕²⁰、1923年に《ブロック・パーティー (Block Party)》〔図 6-4〕²¹、1924年に《地下鉄の連絡 (Communication in the Under Surface)》を出品している²²。またサロonz・オブ・アメリカにも1922年に《幼児(An Infant)》²³、1923年に《救急搬送(Ambulance)》〔図 6-5〕を発表している²⁴。これらは、いずれも未来派の技法で描かれた油絵だが、なかでも、《地下鉄のラッシュアワー》と《災難》について、『紐育新報』では、「未来派的ムードを遺憾なく、心持ちの好い筆独と整然とした調和とで表現」しており「凡ての形式と因襲とを打破して直截な感じをキャンバスの上に投げ付けたこの作品は氏の芸術的生涯に新紀元を劃するものである故に『地下鉄のラッシュアワー』は記念すべき傑作である」と絶賛している²⁵。また『日本人』は、「線形色の配合によりて人類の感覚乃至靈性に慇へようとして居る。若し彼の作により何等かの感動をうけるとしたら自然模倣を排した微妙なる色調の音響の作用であることを知らねばならぬ。諸所の展覧会の騒がした『地下線の雑沓』は慥かにその気分を現はしてある。最近の作でブラッキパーティーに色調の進歩は著しく見ゆるか、雑沓中に活躍する男の帽子があまりに写真的であるやうに思はるゝ」とあり、鮮やかな色彩で描かれた未来派

の技法が評価されている²⁶。このように古田土雅堂は、未来派の技法を駆使した作品を発表し、1924年に帰国するまで、当地の美術界で注目を集めていたのだ。

このほかにも、日本人画家による抽象主義の作品は、1925年の独立美術家協会の展覧会に表れている。この展覧会は、作品を抽象主義、半抽象主義、写実主義の技法ごとに分けて展示した特異な展覧会で、出品目録によると、渡辺寅次郎の《紐育の高架鉄道(“L” Train New York)》〔図 6-6〕²⁷、臼井文平の《夜の屋根(Roof at Evening)》〔図 6-7〕、石垣栄太郎の《鞭打つ人(Man with the Whip)》〔図 6-8〕が立体派(キュビズム)の作品だったことが判明する²⁸。同展覧会について『日米時報』では、日本人画家の作品が「展覧会の特色と雰囲気をも語るアブストラクトデパートメントの中に異才を放っている」と評価している²⁹。展示作品全体の5分の1が抽象主義で、それ以外の作品は写実主義だったことから、日本人画家の抽象主義絵画が非常に際立ったことが明らかだ。なかでも、石垣栄太郎の《鞭を打つ人》は、立体派風の描写が『ポスト(New York Post)』や³⁰、『タイムズ(New York Times)』で評価されており³¹、これ以降、石垣栄太郎はアメリカの美術展覧会で精力的に活動をしている。また、1923年に屏風を発表していた渡辺寅次郎も、抽象主義の作品を発表している。これらのことから、日本人画家は、東洋趣味から前衛美術へと、美術界の変容と共に画風を変化させたのだ。

3. 日本人の創作の意図

20世紀初めのアメリカでは、ヨーロッパの写実画や前衛美術の模倣だけではなく、ロバート・ヘンライやジョン・スローンの作品に見られる、アメリカの現代社会を写實的に描く、アッシュ・カン・スクール(ゴミ箱派)が興る。彼らは、独立美術家協会の設立にも携わっている。またそれだけでなく、多くの日本人画家が、アート・ステューデント・リーグで、このような新進画家に師事したことから、日本人画家がアッシュ・カン・スクールの技法に影響を受けたことは想像に難くない。そして1922年には、独立美術家協会から枝分かれする形で、サロンズ・オブ・アメリカも設立されている。これらの美術団体が主催した無審査無賞の展覧会は、日本人画家の重要な作品発表の場だった。サロンズ・オブ・アメリカでディレクターを務めた、国吉康雄は、「美術我観」を以下のように述べている。

背景の無い米国、直覺的にコムマアシャリズムを想像させる米人、この空気に囲まれて居る米国は一芸術を要求しない。この米国にどうして本統の芸術が生れやう。自分は今少し真面目な空気に触れたい。こんな処にぐずぐずして居れば自分の持つてゐるピュアなソールまでコムマアシャライズされてしまふであらう……。私の或る友人はこんな理由で欧州へ旅立った。又多数の米人が欧州を空想し巴里を夢み、以上の様な理由で米国を飛び出す青年画家が益々多くなり、一種の流行熱となって居る。(略) 芸術を要求しない国に芸術家は生れない、と私の友人は論じた。勿論要求しないと定めるのは其人個人の感想である。然し今少し広い意味で考へたら恐らく世界の何れの地も本統の

芸術を要求しない処は無いと思ふ。現下、否何れの時代に於ても世界は常に本統の芸術にハングリである。何ものかゞ表顕された物があるならば世間はそれを見逃がしはしない。然しこの商売的な米国にもウォルト・ホイットマンが生れ、エー・ビー・ライダアの様な画家も生れた。米国を非芸術国とするよりか、今少し大きな心を持って自然の美を感受し得たならば、このアメリカの空気も其研究者に対して、ライダアに対するが如く又ホイットマンに向った如く、偉大な自然美を感じ得さすであらう。独歩の曰く「山林に入りて自由なる霊に接するを要せず。自由なる霊は到る処にあり³²。

アメリカで創作をした日本人画家には、ヨーロッパに渡る資金調達を目的にした、一時的滞在者も多くいた。当時の芸術の中心はヨーロッパだったが、国吉康雄は、歴史の浅いアメリカにも、詩人ウォルト・ホイットマン(Walt Whitman)や画家エー・ビー・ライダー(Albert P. Ryder)が生まれたことを指摘した上で、アメリカの美術界にも、アメリカの芸術が興るべきだと述べている。これが掲載された1922年に国吉康雄は初めて個展を開いている。日本語新聞の紙面で彼は、日本に生まれアメリカで活動する自身の創作の意図を日本人社会に表明しただけではなく、彼と同様に、アメリカで創作する同胞画家に対して、異郷で創作する意義を説いたと言えるだろう。

これ以降、独立美術家協会とサロonz・オブ・アメリカの展覧会には、多くの日本人画家が作品を発表している。そして彼らの作品は、日本人独自の創作として英字新聞にも取り上げられている。

4.1920年代後半の日本人画家の作品

アメリカの展覧会で日本人画家の作品が注目され始めたのは、1925年のサロonz・オブ・アメリカだ。同展覧会には、国吉康雄の《油彩(Painting)》、藤岡昇の《凝視 (Note of Admiration)》、石垣栄太郎の《尼僧と少女 (Nun and Flappers)》、清水清の《バーレスク (Burlesque)》、角南壮一の《ユニオン・スクエア (Union Squire)》、臼井文平の《風景 (Landscape)》が出品されている。このうち、石垣栄太郎の《尼僧と少女》は、14丁目の交差点を背景に、フラッパーと言われる当時の風俗を象徴した新しい女性像と、保守的な尼僧を配置した作品だと判明する³³。また清水清の作品は、構図は不明だがタイトルから推察するとは、バーレスクと言われる、大衆的なショーを描いた作品だと考えられる。これらの作品を『ポスト』では、「最も興味深い印象を日本人は描いている、なぜなら彼らは新鮮な視線で西洋世界を見ており、それは私たちの目には輪郭がぼやけて映るものを彼らの作品にはさわやかで鮮明に表現されているからである。彼らは芸術的伝統により私たちの世界に新しい視線を与えている」と批評している³⁴。このことから、同展覧会で日本人は、アメリカの人々がそれまで気づかなかった、アメリカの大衆文化と風俗を鮮明に描いた、斬新さが評価されたのだ。

このような作品は、1926年の独立美術家協会の展覧会にも見られる。ここで注目を集め

たのが、ポーカーゲームをする人々を描いた藤岡昇の《アメリカン・スピリット (American Spirit)》〔図 6-9〕と、14 丁目の街角を行く尼僧とフラッパーを描いた石垣栄太郎の《行列聖歌 1925 (Processional 1925)》、夜の 14 丁目の街路を描いた清水清の《14 丁目 (14 Street)》〔図 6-10〕、そして夜の屋上でパーティーをする人々を描いた臼井文平の《サマー・イブニング (Summer Evening)》だ。これらの作品を『紐育新報』では、藤岡昇の《アメリカン・スピリット》には「正義人道を標語とする米国魂を表象したものではない。彼等の本能性を発揮する賭博場を氏独特のヒーモテアーに表現して見るからに愉快の画だ。センシチーブの色彩とナイヴな構図は氏のキャラクターを語っている」。石垣栄太郎の《行列聖歌 1925》は「題材から左程の欠点もなく克く描き上げたことに敬服する。シンプルな取扱とリッチな色彩は君の進歩を物語っている」とあり、臼井文平の《サマー・イブニング》は、「題材も着想もパッショネートの作」だと述べている³⁵。また、『日米時報』では、石垣栄太郎の《行列聖歌 1925》は「同氏の最近の傑作であると信ずる。14 丁目の通りに立って静かに眺めた無名の行列は人間生活の偽りの頭はれである。人物配列の苦心は技巧の上にも色彩の上にも優秀な陰影を遺憾無く捉へて居る」そして藤岡昇の《アメリカン・スピリット》は「アメリカに渡来してからかなり永い歳月を経て居るけれども私はアメリカ人のスピリットを何にたとへていゝか知らなかった。此の作は四六時中銭と肉との事ばかりを夢に見て居る彼等のライフは即ちギャンブルだ。此の刹那の感情を私はトワールの上に表現して見たいと試みた」のだと述べている³⁶。藤岡昇と石垣栄太郎の作品を日本語新聞では、当時のアメリカの世相をユーモラスに描く日本人の特徴があると述べている。また、日本語新聞だけではなく、英字新聞でも彼らの作品を取り上げている。例えば『トリビュン (New York Herald Tribune)』では、石垣栄太郎の《行列聖歌 1925》を「高架鉄道とタクシーのムードのなかにニューヨークのフラッパーを風刺して描いている」とあり³⁷、『ワールド』では、独立美術家展の絵は「アメリカ人の生活を写した皮肉がある。忙しいアメリカを描いた絵はアメリカ人ではなく、日本人によるものである。日本人はアメリカの画家が目の前にある新しい題材を使わないことを絶えず責めており、アメリカの画家が見過ごしている題材に彼らの痕跡を表している。日本人はユーモアのセンスはあるが、それがどのくらい善意で描かれているのか西洋人にはわからない。例えば藤岡昇の《アメリカン・スピリット》、石垣栄太郎の《行列聖歌 1925》、清水清の《十四丁目》、角南壮一の《ダイクマンのテニスコート》、臼井文平の《サマー・イブニング》だ。彼らはニューヨーク・シーンを非常に活気的に面白く表現し、それを新しい芸術論とするのではなく、むしろ明快に表そうとしている」と評価している³⁸。

以上のことから、日本人の作品は、1920 年代のアメリカの大衆文化や風俗を題材にした作品だったことが判明する。これらの作品を英字新聞では、アメリカの人々が気付かなかった近代社会の実像を諷刺した作品として批評しており、日本語新聞では、アメリカの近代文化の側面をユーモラスに表現したものとして評価していたのだ。

5. 日本人画家の作品に表れた特色

日本人画家の作品の特色は、1920年代のアメリカの大衆文化や風俗を、ユーモラスに諷刺して描いた点が、日本語新聞と英語新聞の両方に評価されていた。日本人の作品に見られるこれらの特色は、1927年の独立美術家協会とサロonz・オブ・アメリカの展覧会で一層鮮明になる。例えば、1927年の独立美術家協会の展覧会には、石垣栄太郎の《禁酒法の狂態 (Delirium of the Eighteenth Amendment)》〔図 6-11〕、清水清の《楽器店 (Music Shop)》〔図 6-12〕、藤岡昇の《ジャッジメント・オブ・ニューヨーク (Judgment of New York)》〔図 6-13〕³⁹⁾、都筑隆の《ビューティー・ショップ (Beauty Shop)》〔図 6-14〕⁴⁰⁾、渡辺寅次郎の《モブ・アンド・プロセキューション (Mob and Prosecution)》〔図 6-15〕⁴¹⁾が出品されている。これらについて、『紐育新報』は、患者に投薬する医師を描いた石垣栄太郎の《禁酒法の狂態》は「アメリカに禁酒法が実施されて茲に十年、禁酒励行官の威令は白河法王の御嘆息通り『坊主とサイコロとアルコールの跋扈は如何も出来ぬ』と見へて到る処バッカーズが狂舞している…その矛盾の皮肉を描いたものだ。あのグルーミーな空気の中に作家の感情が滲み出ている。都下の新聞が何れも筆を揃へて批評しているから駄足するのは要はあるまい」と、禁酒法の制定後に酒の密造や違法営業の酒場とアルコール依存症者の増加といった社会の矛盾を皮肉ったものだとしている。そして14丁目の楽器店の店先を描いた、清水清の《楽器店》には「近来レデオが流行して有名な音楽家の声に何処にいても接することが出来得るやうになったが、尚ほ大都にはこれに恵まれない哀れな多くの貧しい人達のあることを忘れてはならない。是等の群れが宵の散歩に楽器店の前で無銭で肉をそそるやうな音楽に聞きとれている有様を同氏のテクニックで現はしたものだ。人物配列の点からも、色調の上からも申し分のない力作」である。このほかにもニューヨークの街と群衆の中心に一人の後ろ向きのフラッパーを配置した藤岡昇の《ジャッジメント・オブ・ニューヨーク》は、「紐育のサイドウオークは現象旋律の面白い場面を縦横に現はしているではないか。大都七百万の心は一瞬時に七百万の行為となって表現される。環境と物質とが驚く程異種多様な人間型を鑄造する。官能淫者、恋の遊行者、社会反逆者、国家礼讃者、黄金狂、無魂者、病者等の無限不惻の形容と内容を持つ都会生活者の群れに触れて俺はフト或る閃きを描かうとした」のだと、作者の創作の意図が述べられている⁴²⁾。また英字新聞にも同様の批評がある。例えば『アート(Arts)』では、藤岡昇、清水清、土井勇の作品の図版を掲載し、「扇情的な分野を侵略した石垣栄太郎の《禁酒法の狂態》、写真のような藤岡昇の《ジャッジメント・オブ・ニューヨーク》と都筑隆の《ビューティー・ショップ》には西洋文明の皮肉がある」としている。さらに渡辺寅次郎の《モブ・アンド・プロセキューション》を取り上げて、「日本人画家はアメリカの文明に対する皮肉を描いているがそこには悪意は薄い」と批評している⁴³⁾。これらの作品は、禁酒法の制定とその陰に表れた社会の矛盾や、美容院で頭髮を加工する女性に表れる機械産業の発達と、奇抜なファッションの女性に表された当時の風俗を描いたものだ。アメリカのメディアでは、これらの作品を日本人画家の独自の手法だと伝えている。

また、同年のサロonz・オブ・アメリカにも当時の風俗を題材にした作品がある。例えば、清水清の《ビリヤードとチャプスイとムービー (Billiards, Chop Suey and Movies)》〔図 6-16〕⁴⁴、藤岡昇の《フラターナル・プレジャー(Fraternal Pleasure)》〔図 6-17〕⁴⁵、保忠蔵の《グレープフルーツ (Grape Fruit)》⁴⁶。これらの作品について『紐育新報』は、藤岡昇の《フラターナル・プレジャー》は「君の描かんとした社会の裏面を例によりて風刺的に掴んで居る。然し之は着想の上からのみの成功で画全体からは私には共鳴出来ない点はある。然し画面に活動する男女のブラックバトムやチアルズトンより前者を捕ひ得たかも知れむ人物の配置はラインを隠して目的物を結びつけて居る。ジャズの音楽を聞く様な所に何かの音調を見出し得た」作品であり、清水清の《ビリヤードとチャプスイとムービー》は「かく俗悪な題材を取扱って然も高尚に仕上げるに妙を得て居る。若し評者に一言の批難を許すならば君の作には奥行がない深味を暗示して居ない。あまりにむき出しだから観者に想像の余裕を与へない。もう少し俳味、禅味あって欲しい」と述べている。そして保忠蔵の《グレープフルーツ (Grape Fruit)》は「事務時間の前に云ふ場を画いたものだ。忙しそうに軽食する男女の動作をよく現はして居る。グループの人々を新聞紙でスペースを取った所に君の腕の冴へがある。室内の空気を漂はして滋ひ色彩を施した所に君の長所がある。然し施色の変化が充分でない」と述べている⁴⁷。これらの作品は、ニューヨークの近代社会の側面を題材にした点が評価された。このほかにも『アート』では、「清水清の《ビリヤードとチャプスイとムービース》には、ムービーハウスとその隣のチャプス店の前の歩道の風刺が描かれている。藤岡昇の《フラターナル・プレジャー》は、当時流行したチャールストンを踊る二人の男女を描いたユーモアの要素がある。保忠蔵の《グレープフルーツ》は堅実な題材に皮肉を交えて描いたもの」であり、「日本人の作品にはニューヨークのあわただしい生活が面白く反映されている」と述べている⁴⁸。

以上のことから、独立美術家協会とサロonz・オブ・アメリカにおける、日本人画家の作品は、現地の人々が見過ごしてきた、当時のアメリカの社会問題や風俗を、外国人の視点で客観的に捉え、ユーモアや風刺の要素を含んだ描き方が、日本人の独自の芸術として認められたのだ。

おわりに

独立美術家協会やサロonz・オブ・アメリカの展覧会を通して、日本人画家は、アメリカで創作活動をする芸術家として位置づけられ、独自の手法を形成していった。国吉康雄は1927年のサロonz・オブ・アメリカを次のように述べている。

現代生活を風刺してサテイリクにかいた、藤岡、清水、石垣、保諸氏の作に東西人の目を引いた出品であった。一般日本人は先天的に奥深いヒューマーを持って居る。然しそれのみにたよらず諸氏の技芸と頭脳とが平衡を保てばもっと動かす事のできぬ重みのある作品が出来ると思ふ⁴⁹

日本人画家は、アメリカの近代文明や社会の側面を客観的に捉え、ユーモアと諷刺の要素を用いて描出した点が、日本人独自の手法として認められた。国吉康雄は、アメリカの美術界における日本人画家の立場をより確かなものにするには、技術の鍛錬が重要だと指摘している。そこで、創作技術の向上と研究を目的にした、「美術同人会」が 1927 年に設立される。同会で会長を務めた国吉康雄は、設立の趣意を以下に述べている。

在米の日本人で洋画、彫刻を研究して居る人々は真に多い。そして大部分の重なる人々は紐育に在留して居る美術家である従来在米の日本人社会に於て、如何なる了解の中に立って居るか、また平常相互の関係如何といへば、悲しいかな何等の交渉もなく、相互の了解は勿論ない、つまり何んにもないのだ。それにひきかへ実に現時の邦人美術家は米国の識者の間に、公衆の間には少くとも芸術的に東洋人の特色を認められ、了解もされて居る。美術家の打ちたてゝ行く旗色も常に明白であり尚ほ信光の歩調も律然として居るからだ。兎に角吾々美術家は機会のある毎に、常に米国人の間に介在して活動しつつ日米人相互の了解の歩を進めて居る日本人である。(略) 同人会の美術家は軽薄なる時代の風潮に乗らず、米国人の好奇心に投じて彼等の称賛を受くるが如きことなく、何処までも根本的に研究を基として打ち通して行かふと意志の下に動く集団でなくてはならないのだ⁵⁰。

独立美術家協会とサロズ・オブ・アメリカの展覧会は、1920 年代のアメリカで活動する、日本人画家の重要な作品発表の場だった。設立初期の展覧会に発表された日本人の作品は、日本文化を題材にした写実的な作品や抽象芸術に傾倒した作品だった。このうち前者は、西洋画の技法と日本人のアイデンティティが融合したもので、後者はヨーロッパの前衛美術の模倣にすぎなかった。その一方で、当時のアメリカ美術界では、街の路地裏や風俗に表れる、社会の側面を写実的に描出した、アッシュ・カン・スクールが興り、1930 年代のアメリカン・シーン絵画の一つとして、社会派リアリズムに発展していく。このような新進画家に師事した日本人画家も、大衆文化と社会風俗を鮮明に描く手法に変化したのだ。彼らの創作は、アメリカ美術史との変遷と共に変化いく。

だが、注目すべきは、1920 年代のニューヨークで活動した日本人画家の多くが、市民権がない一世の移民だということだ。英字新聞では、彼らの作品を、東洋人の特有の視点でアメリカの近代文明と大衆文化や風俗を客観的に描いた芸術作品として批評している。その一方で、日本語新聞では、これを都市の側面をユーモアと風刺で描いた作品だと評価している。以上のことから 1920 年代のアメリカ美術界における日本人画家の創作活動は、近代アメリカの文化の実証であり、アメリカで活動する日本人の米化を表象したといえよう。

- 1 安來正博「石垣栄太郎関係スクラップ資料と、その補足的考察(1)」『和歌山県立近代美術館紀要』第1号(1996年3月31日)、15-66;「石垣栄太郎関係スクラップ資料と、その補足的考察(2)」『和歌山県立近代美術館紀要』第2号(1997年3月31日)、55-103;「資料に見る戦前の渡米画家たち—その活動の軌跡」『アメリカの中の日本—石垣栄太郎と戦前の渡米画家たち』〔展覧会図録〕和歌山県立近代美術館(1997年11月11日)、57-64;岡義明「清水登之、生涯を綴った日記」大川美術館『企画展 No.24 清水登之 滞米日記と素描』大川美術館(1994年9月27日); Wolf, Tom. “The Tip of the Iceberg: Early Asian American Artists in New York” in *Asian American Art, a history 1985-1970*, eds. Gordon H. Chang, Mark Dean Johnson, Paul J. Karlstrom and Sharon Spain. (Stanford: Stanford University Press, 2008)、83-109; *The Artistic Journey of YASUO KUNIYOSHI*, (Washington DC: Smithsonian American Art Museum, 2015).
- 2 バーバラ・ローズ (桑原住雄訳)『二十世紀アメリカ美術』美術出版社 (1970年7月25日) 35-43。
- 3 ニューヨーク市レキシントン街26丁目の第69連隊兵器庫で開催された展覧会。Ibid, 75.
- 4 Marlor, S.Clark. *The Society of Independent Artists The exhibition Record 1917-1944*. (Mill Road, Park Ridge New Jersey: Noyes Press. 1984). 参照。
- 5 Marlor, S.Clark. *The Salons of America 1922-1936*. (Madison, Connecticut: Sound View Press. 1991). 参照。
- 6 デュシャンはこの事件がもとで、独立美術家協会の委員を辞任した。Ibid, 91.
- 7 Society of Independent Artists: *Catalogue of the First Annual Exhibition of the Society of Independent Artists*. (Exhibition catalogue). (New York: Grand Central Palace, 1917).
- 8 Peter H. Falk, Andrea Ansell Bien; *National Academy of Design, The Annual exhibition record of the National Academy of Design, 1901-1950: incorporating the annual exhibitions, 1901-1950 and the winter exhibitions, 1906-1932* (Madison, Connecticut: Sound View Press, 1990).
- 9 台燈守り「五十行雑感」『日米週報』1917年4月21日、28日。
- 10 Society of Independent Artists: *Catalogue of the Second Annual Exhibition of the Society of Independent Artists*. (Exhibition catalogue). (New York: 110-114 West 42nd Street, 1918).
- 11 萩生田真陽《赤い風呂(The Red Bath)》, Ibid, unpagued.
- 12 渡辺寅次郎「画彫会会員側面観」『日本人』(ニューヨーク)第99号1923年2月25日。
- 13 山成無声「三人の同胞画家 独立美術協会展」『紐育新報』1920年3月17日。
- 14 渡辺寅次郎《正義の象徴 (Symbol of Righteousness)》, (Society of Independent Artists: *Catalogue of the Seventh Annual Exhibition of the Society of Independent Artists*. (Exhibition catalogue). (New York: The Waldorf Astoria, 1923), unpagued.
- 15 “Independent Show Actually Academic”. *The Art News*, March 3, 1923.
- 16 モーニングサイド蔭士「独立派美術展覧会を観て」『日米時報』1923年3月17日。
- 17 Society of Independent Artists: *Catalogue of the Third Annual Exhibition of the Society of Independent Artists*. (Exhibition catalogue). (New York: The Waldorf Astoria, 1919). 本作品は、「ふみの森もてぎ」に所蔵されている。
- 18 Society of Independent Artists: *Catalogue of the Fourth Annual Exhibition of the Society of Independent Artists*. (Exhibition catalogue). (New York: The Waldorf Astoria, 1920).
- 19 Society of Independent Artists: *Catalogue of the Fifth Annual Exhibition of the Society of Independent Artists*. (Exhibition catalogue). (New York: The Waldorf Astoria, 1921).
- 20 Society of Independent Artists: *Catalogue of the Sixth Annual Exhibition of the Society of Independent Artists*. (Exhibition catalogue). (New York: The Waldorf Astoria, 1922). 本作品は、「ふみの森もてぎ」に所蔵されている。

-
- ²¹ 清水登之《ブロック・パーティー (Block Party)》(Society of Independent Artists: *Catalogue of the Seventh Annual Exhibition of the Society of Independent Artists* (Exhibition catalogue). (New York: The Waldorf Astoria, 1923), unpagued. 本作品は、ふみの森もてぎに所蔵されている。
- ²² Society of Independent Artists: *Catalogue of the Eighth Annual Exhibition of the Society of Independent Artists*. (Exhibition catalogue). (New York: The Waldorf Astoria, 1924).
- ²³ Salons of America: *Spring Salon*. (Exhibition catalogue). (New York: The American Art Association Anderson Galleries, 1922).
- ²⁴ Salons of America: *Spring Salon*. (Exhibition catalogue). (New York: The American Art Association Anderson Galleries, 1923). 本作品は、「ふみの森もてぎ」に所蔵されている。
- ²⁵ 石垣増埜「独立美術協会の日本人画家」『紐育新報』1919年4月2日。
- ²⁶ 渡辺寅次郎「画廊会会員側面観」『日本人』(ニューヨーク)第99号1923年2月25日。
- ²⁷ 渡辺寅次郎《紐育の高架鉄道(“L” Train New York)》(Society of Independent Artists: *Catalogue of the Ninth Annual Exhibition of the Society of Independent Artists*. (Exhibition catalogue). (New York: The Waldorf Astoria, 1925), unpagued.
- ²⁸ Society of Independent Artists: *Catalogue of the Ninth Annual Exhibition of the Society of Independent Artists*. (Exhibition catalogue). (New York: The Waldorf Astoria, 1925). 本作品は東京国立近代美術館に所蔵されている。
- ²⁹ 渡辺寅次郎「第九回独立画展を覗いて」『日米時報』1925年3月14日。このほかにも同展について、“The World of Art” *New York Times*, March 8, 1925; 石垣増埜「色とりどりの美術展 邦人出品者十六人」『紐育新報』1925年3月11日がある。
- ³⁰ “Independent Show Displays Vast Array of Mediocre Work Along with a Few Good Things—Its Reason for Existence and How It Has Passed” *New York Post*, March 14, 1925.
- ³¹ “The World of Art”: Independent Artists and Others: American Rhythm” *New York Times*, March 15, 1925.
- ³² 国吉康雄「美術我観」『紐育新報』1922年2月18日。
- ³³ Salons of America: *Autumn Salon*. (Exhibition catalogue). (New York: The American Art Association Anderson Galleries, 1925).
- ³⁴ “Japanese Artists” *New York Post*, October 31, 1925.
- ³⁵ 渡辺寅次郎「独立美術展」『紐育新報』1926年3月10日。
- ³⁶ 藤岡昇「独立美術展覧会 在紐邦人画家十一名出品」『日米時報』1926年3月13日、3月20日。
- ³⁷ “Independent Show is opened for tenth time All Schools Represented at Exhibit of 1,200 Works in Waldorf; Hangings Are Held Democratic Triumph. Amateurs Given Place Japanese-American Painters There with Long Island Woman Who Taught Self” *New York Herald Tribune*, March 6, 1926.
- ³⁸ “Independent Exhibition has Over a Thousand Works by Beginners and experts” *World*, March 21, 1926.
- ³⁹ 藤岡昇《ジャッジメント・オブ・ニューヨーク (Judgment of New York)》(Society of Independent Artists: *Catalogue of the Eleventh Annual Exhibition of the Society of Independent Artists*. (Exhibition catalogue). (New York: The Waldorf Astoria, 1927), unpagued.
- ⁴⁰ 都筑隆《ビューティー・ショップ (Beauty Shop)》(Society of Independent Artists: *Catalogue of the Eleventh Annual Exhibition of the Society of Independent Artists*. (Exhibition catalogue). (New York: The Waldorf Astoria, 1927), unpagued.
- ⁴¹ 渡辺寅次郎《モブ・アンド・プロセキューション (Mob and Prosecution)》(Society of Independent Artists: *Catalogue of the Eleventh Annual Exhibition of the Society of*

Independent Artists .(Exhibition catalogue). (New York: The Waldorf Astoria, 1927), unpagged.

⁴² 藤岡昇「独立美術展」『紐育新報』1927年3月19日。

⁴³ Lloyd Goodrich, “The Independent 1927” *The Arts*, April, 1927.このほかにも
“Artists Show Life in Several Phases; Cubism, Futurism and Abstract Subject to Be
Displayed at Independent’s Exhibition” *New York Times*, March 10, 1927.がある。

⁴⁴ 清水清《ビリヤードとチャプスイとムービー (Billiards, Chop Suey and Movies)》
(Salons of America, *Spring Salon*. (Exhibition catalogue). (New York, The American Art
Association Anderson Galleries, 1927), unpagged.

⁴⁵ 藤岡昇《フラターナル・プレジューア(Fraternal Pleasure)》,(Salons of America,
Spring Salon (Exhibition catalogue). (New York, The American Art Association
Anderson Galleries, 1927), unpagged.

⁴⁶ Salons of America, *Spring Salon*. (Exhibition catalogue). (New York, The American
Art Association Anderson Galleries, 1927), unpagged.

⁴⁷ 渡辺寅次郎「美術展印象」『紐育新報』1927年4月30日。

⁴⁸ Forbes Watson, “The Spring Salon” *The Arts*, May 1927.

⁴⁹ 国吉康雄「サロン展寸評」『日米時報』1927年5月7日。

⁵⁰ 国吉康雄「美術同人会」『紐育新報』1927年4月30日、同様の記事が国吉康雄「同人
の叫び」『日米時報』1927年4月30日にもある。

第7章

紐育新報主催の邦人美術展覧会 —角田柳作のジャパニーズ・カルチャー・センターとの関わり—

はじめに

1910年代のニューヨークでは、紐育日本美術協会が組織され、1917年と1918年に邦人美術展覧会が開催された。この後、紐育日本美術協会は日本人画会と改称し、1921年に画彫会が結成される。そして1922年11月には画彫会主催の邦人美術展覧会が開かれている。これらの展覧会については、これまで美術展覧会の目録をもとにした論考や¹、当時の英字新聞のスクラップをもとに調査が進められてきた²。このうち安來正博は、石垣栄太郎の新聞スクラップ資料と邦人美術展覧会の出品目録の調査から、石垣栄太郎を中心にアメリカの日本人画家の活動を述べている³。しかし、この石垣栄太郎の新聞スクラップ資料は、掲載紙や掲載日時の不明な資料も多く、本章で検討する1927年の紐育新報社主催の邦人美術展覧会を報じた記事は、1927年2月20日の『トリビューン』のみだ⁴。1927年の紐育新報社主催の展覧会について安來正博は、同展覧会は、日本人画家の集りをうたっているため、作品に表れた日本の伝統文化の関連性を指摘するのはやむを得ないが、むしろニューヨークの美術界での日本人画家の状況に注目すべきだと述べている⁵。だが、『トリビューン』の記事だけでは、この展覧会では、なぜアメリカにおける日本人の芸術活動と日本の伝統文化の関連性が指摘されたのか、また同展覧会の開催の趣旨も判明しない。

そこでニューヨークの英字新聞と日本語新聞を調査したところ、同展覧会は、『紐育新報』や『日米時報』、『タイムズ』、『ポスト』、『クリスチャン・サイエンス・モニター(*The Christian Science Monitor*)』、『ワールド』にも取り上げられていることが明らかになった。また、同展覧会が企画された1926年の『紐育新報』には、日本人会の書記長を務める角田柳作の「日本文化学会」(*The Japanese Culture Centre*)⁶に関する記事が掲載されている。角田柳作は、文化交流と日米親善を目的にした「日本文化学会」の設立を唱えており、同事業はこの後、コロンビア大学の日本研究所(*The Institute of Japanese Studies*)に発展している。角田柳作が提唱した「日本文化学会」設立の趣旨と邦人美術展覧会の開催の趣旨は酷似していることから、紐育新報社主催の邦人美術展覧会の開催は日本文化学会と関わりがあったのではないだろうか。

そこで本章は、1927年に紐育新報社主催で開催された邦人美術展覧会を取り上げ、展覧会開催の意義と趣旨、そしてこの展覧会と角田柳作の日本文化学会との関連を検討する。

1. 画彫会の活動

日本人会の支援で1922年に開催された画彫会の展覧会の後、渡辺寅次郎は、「^マニューヨーク市在留の邦人画家をして日本人と云ふ字を取り去るの日が近き将来に迫って来た」と、日本人の作品に見る米化を指摘している。さらに、「排日屋の本家本元の一黄色紙が、嘗て

邦人の作品を批評していわく『西洋画が日本の感化を受け之に接近しつつあると思ふ矢先に、日本画が西洋画になりかけたのは面白い現象である。之は東西思想の一致する前兆として祝すべきである。東西思想の一致こそ実に永遠の平和の実現である』という英字新聞の批評を踏まえて、「私たちの古びれた汚さぶらしい画齋より生み出す芸術品が、日本人を代表しての平和の天使であるとしたら大したもの」だとして、美術作品が日米間の架け橋になりうる指摘している。また、1922年の画彫会の展覧会について、「当時の英字紙は筆をそろへて称賛してくれた。想像以上に成功した展覧会であった。少なく共此これらの一事によりて在留邦人の技量と云ふ以外の其の芸術、趣味、共鳴を透して日白両種の親しみを新らしくし、またより以上強めたことゝと思ふ」と述べている⁷。

このことから、画彫会の展覧会は、在留日本人画家の作品に表れた米化をアメリカ社会に広めるといふ、開催の意図を果したと言えるだろう。この後も、画彫会の活動は継続しており、1925年には、第二回展覧会の開催が企画されている。第二回展について『紐育新報』では、「種々の事情のため之まで立消へとなっている展覧会を来秋 11 月を期して開催するに決し、先づ予備委員として渡辺、原、石垣の三氏活動することとなり」、「非常な成功を以て終った第一回展覧会は日本画なかりしたため錦上花を欠くの憾ありしが、今回は故国画壇に閨秀画家として有名な村田香雪女史及び玉堂門下の逸足吉田石堂氏等の日本画家もあり、彫刻家は平本、川村両氏のみなりしも今回西野、雨田、野口勇、大塚の諸氏を加へたるため来秋の展覧会は頗る見るべきものあらんと一会員は語っていた」とある⁸。そして、日本人画家の展覧会をニュー・ギャラリーで開催すると報じている⁹。しかし、この後、画彫会の第二回展覧会は、資金不足のため実現していない¹⁰。そこで紐育新報社の援助により、1927年に邦人美術展覧会が開催されたのだ。

2. 邦人美術展覧会の様相

紐育新報社主催の邦人美術展覧会は、1927年2月16日から3月5日まで、アート・センターで開催された¹¹。出品目録〔表 7-1〕によると、ここには25名 55点の作品が展示されている。ではどのような作品が展示されたのだろうか。紐育新報では1927年の新年号に邦人美術展覧会の特集を組んでおり、作品の図版と共に画家による創作に対する記事が掲載されている。それまで日本語新聞には、渡辺寅次郎や石垣栄太郎が美術批評をたびたび掲載していたが、邦人美術展覧会の特集は前例がない。このような特集は、日本人画家の思想を伝える重要な資料だろう。そこで、新聞記事から展覧会の様相と画家に依る創作の意図を以下にたどる。

まず、静物画と肖像画を出品した三崎道夫は、「自然の美しい物象を目の当り見る悦ばしさと感謝で、私の心は一杯です。そしてそれを心のままに表現し礼讃することに幸であり、且つ多忙であります」として、写実画の創作の意図を述べている¹²。また、母の肖像〔図 7-1〕を出品した角南壮一は、「余は俗念を去って宇宙間の神秘を『キャンバス』の上に獲得せしめんとすることを欲する」しかし、たびたび「吾人が日本人であるといふ理由のもとに、何故に

純日本美術を捨つるか」という奇態の質問を受けるに当たり、迷惑すると述べたうえで、「余は、其の思想の自由を以て詐らざる自己の主観を表現すればよい」¹³、と名誉や利益を得ることよりも、自身が選んだ対象を写實的に描くことを念頭においていると述べている。そして風景画二点を出品した保忠蔵は、暗い色彩を基調にした自身の画風について、色彩の知識の欠如や技巧の未熟さ、構図の欠陥にがあると分析したうえで、「新らしい派は幾何もある。それ等は多く経験の時代に属する。経験の時代のその一部のみを延長したものを取って絵の全体と心得る一部の画家もある。そしてそれを現代派の作物と称する人さへある。然し自分はそれはなし得なかった。それがため真直に現代派に進むことが出来なかった」と、流動的に変化する美術界の流れを背景に、自身の作品における欠点として色彩と構図に欠点があると分析している¹⁴。さらに、14丁目の街路を描いた清水清は、「我々が生きている此社会組織を背景として、我々と共に感ずるところの作者のキャンヴァスがわからぬ筈はない」とした上で、アメリカの近代美術の先駆者である、トマス・エーキンス(Thomas Eakins)やライダー、ウィンスロー・ホーマーを挙げ、「アメリカの近代作者達は夫々アートの伝統に自己の分け前を加へ、殊に近年顯しき進出を見せ、其の急先鋒中の一人に邦人ヤスオ・クニヨシを見出すことは注目に値する」と、近代美術の進展とアメリカ画壇における国吉康雄の功績を賞讃している。そして近代美術の発展には、『絵とはかくあるべきもの』的な偏狭な、固定した先入主を潔よくかなぐり捨てることと、近代人の持つ『鋭さ』を失はないことが重要だと述べている¹⁵。また、清水清と同様に、近代社会を写實的に描いた藤岡昇は次のように述べている。画家の筆は「物それ自身の持つ感情を画き出すべきものである。画家の技巧は単に写すのではなくて生かすのでなければならない」。それは、「無雑作の線の中に物体の感情が画家の手を通して表はれて来る技巧には如何に『正確に写すか』の問題ではなく『如何に正確を生かすか』でなければならぬ」と現代社会の実体を写し取るのではなく、事実を画の中に活かすことが重要だと述べている¹⁶。このほかにも、カラーの花を描いた〔図7-2〕都筑隆は、「芸術は自己の内面生活の描写で、それを如何に表現するかは各個人の趣味と主義によって自由である。その自由な心境から、自分の個性がのんびりと芽生へ、そして自己の新らしい芸術が生れる」と述べたうえで、「洋画の道を歩んでいる私は、個性といふことを思ふ時、日本人であることを強く意識する。私の心も血も、東洋の哲学の影響を受けて居り、宗教的人生観、文学的感化から白紙のやうに解放され切られないから。私は日本人としての自分の個性の特長を、最も濃厚に表現して行きたい」と¹⁷、日本人のアイデンティティをどのように作品に表現するかを創作上の課題としている。そして、フレデリック・マクモニスの胸像〔図7-3〕を出品した彫刻家の川村吾蔵は、「彫刻の領分は色や音、即絵画や音楽で表現することの出来ない他の人間の感情思想を『形』に表さうとする芸術である。他の言葉を以て云ふならば形を通じてゝなければどうしても表現することの出来ない思想感情である」と、彫刻創作の醍醐味を語っている¹⁸。

このほかにも『紐育新報』には、日本人画家による展覧会の合評も掲載されている。そのなかで、日本画を出品した村田雪子の《春宵》〔図7-4〕について、石垣栄太郎は、「空の色

と花の感じがよく、人物に悠長な感じが出ている。西洋画の感化を受けた日本」だと、日本画の中に西洋画の要素を見出している¹⁹。そして、吉田石堂の《イースト・リバー》〔図 7-5〕について石垣栄太郎は、「もう少し日本画の特徴を現はして線で行ったらもっと気品があるものが出来たらう」と批評している。また臼井文平の《少女の肖像》〔図 7-6〕と《工場（大工部屋）》〔図 7-7〕については、清水清が「場内で最も特色あるものの一人だ。この人のキャンヴァスはそのどれもが君の個性で充満されていて見る人に異常な圧迫力を与える。「大工部屋」は君の力作であり出世作でもあるが、私は「小娘の肖像」を好むよどみなく描かれていて愉快的な画だ」、と評価している²⁰。そして渡辺寅次郎の《自画像》〔図 7-8〕を石垣栄太郎は、「顔の色彩が強いために冷めたい周囲の感じと熱帯的な顔とがそぐはない。顔と体との間に距離の隔りを感じずる」と批評している²¹。さらに保忠蔵の作品について、まず石垣栄太郎は、『裏庭』の画がいゝ色彩がリッチで構図に無理がない」と述べ、次に藤岡昇が「色の調子は特にいい」とし、最後に清水清が、「一体に敬虔な作だと思ふ。どこかウッスラとうら淋しい画だ。構図の妙味は山ある風景に、色調の冴へは肖像に見る一寸グルーミーではあるが可なり暗示に富む」と色彩と構図に見る絵画技法を評価している²²。

『紐育新報』の批評から、紐育新報社主催の邦人美術展覧会は、画彫会の展覧会と同様、日本人画家の多様な作品が展示されたことが判明する。日本に生まれ、アメリカで芸術を学んだ画家は、保守派や前衛美術、社会派といった画風の入り混じる両大戦間のアメリカ美術界で、米化や自身のアイデンティティを如何に作品に表現していくかを模索していたのだ。

3. 邦人美術展覧会と「日本文化学会」

では、主催者側の日本語新聞はどうだったのだろう。新聞紐育新報社主催の邦人美術展覧会の開催に先立ち、『紐育新報』は次のような広告を掲載している。

日本人美術家の作品が漸く米国の美術界にその価値を認められる機会に到達したことは、文化を通じて国と国との親交を温めることを理想とする我々が在留民にとりては、まことに喜ばしい現象であります。(略) 本社同人は、一は以てこれ等美術家諸氏が平素の努力に酬ゆると共に、美術を通じて更らにアメリカとの国交を温める意味に於て、美術を鑑賞される人々の賛同を得たる上、本社主催の第一回邦人美術展覧会を開催することと致しました²³。

ここでは、アメリカにおける日本人画家の活躍を背景に、文化を通じた国交親善を目的に意美術展覧会を開催すると述べられている。さらに展覧会開催の直前にも次のような記事がある。

この計画は、当時も発表した如く、一は以てこの世智辛い^マニューヨークの大都会にありて、外国人としてのハンデキャップを課せられているのみならず、常に生活苦に直面し

ながら尚ほ且芸術境に生きつゝあるこれ等邦人美術家の努力と、その力作を広く世に紹介し、実生活者の眼から見るならば、算盤の世界に埋もれている草木をして、光りを吸はしめんとするにある。更らに我々は、これを機会として日本に生れ、日本の血を受けたこれ等美術家が、いかに泰西の思潮に同化し、そこに創造的努力を試みつゝあるかを、この国の人々の鋭い批判に求めんと欲するのである。

芸術に国境なしとは古昔から云ひ尽された言葉であるが、米国美術壇の檜舞台であるこのニューヨーク市に於て、斯く多数の邦人美術家を網羅した展覧会を開催し得ることは、日本とアメリカの文化的接近を増進すべき一助たるを疑はぬ。共に意義ある催しとして、在留同胞諸氏の協賛を希ふ所以である²⁴。

開催予告にあるように、紐育新報社主催の邦人美術展覧会は、日本人画家の作品をアメリカ社会に紹介し、文化を通じた国際親善と日米文化交流を意図したものだ。これは1927年以前の紐育日本美術協会や画彫会主催の展覧会の開催とは異なる。ではなぜこのような目的で1927年に邦人美術展覧会が開催されたのだろうか。その背景には、1929年に設立される日本文化学会と関係があるのではないだろうか²⁵。

この展覧会の開催が発表される1月前の1926年10月に角田柳作は日本人会の書記長を辞し、「日本文化学会」設立の趣意書を関係機関に配っている²⁶。そして趣意書は日本人会の水谷渉三が経営する『紐育新報』にも掲載されている。

The Japanese Culture Centre とは、簡単に申さば日本二千有余年文化の実相と、其文化が他国異種の特に西洋の、又特に米国の文化と接触せる際に起った問題の真相を明らかにする為めに、第一に根本資料の蒐集整理展覧、第二に其調査研究報告等を使命とする機関で、資料の蒐集展覧といふ方面からは一種小形の日本博物館、展覧会、陳列所で、邦文のものは勿論、世界各国語で出版せられた日本及日本人に関する図書の整備といふ方面からは小規模の日本図書館、また相当包括的に組織的に調査研究を継続する点からは変態の単科大学、常例講壇を設け、調査研究の結果を公演する点からは宗教宗派を超越せる特種の教団、或は図書の刊行に、或は通信に、或は招請に应じて弘く日本文化の説明紹介にあたるといふ側からは文化情報局と申せぬ事ありません。(略) 国家文明の交会接触する場合には文化は必ず国家国民の政治的経済的活動と相須って、国交を深厚にする上に特別の働をする従って欧米各国が交りを海外に求める際には、屹度文化を先頭に立てる。(略) 文化事業の本質的価値は単に政治経済と相須ち相輔けて国交を深厚ならしむるにあるのみではなく、却て幾何米国文化の集大成に貢献し、裨補する所に見出さる可きである²⁷。

角田柳作は、ハワイ滞在時代から日本文化学会の中核となる「東西文明の渾融」を提唱している²⁸。また日本文化学会の発案は移民問題からであると述べており²⁹、移民問題の解決

策として日本のことをアメリカに周知してもらう必要性を考え設立を促したのである。趣意書にある日本の文化がアメリカの文化に接触した際に生じる問題と、その真相を解明するという日本文化学会設立の目的は、邦人美術展覧会開催の趣旨である「邦人美術家の努力と、その力作を広く世に紹介し」、「日本に生れ、日本の血を受けたこれ等美術家が、いかに泰西の思潮に同化し、そこに創造的努力を試みつつあるかを、この国の人々の鋭い批判に求めんと欲する」ため、と同じであり³⁰、文化による国交親善は、「日本人美術家の作品が漸く米国の美術界にその価値を認められる機会に到達したことは、文化を通じて国と国との親交を温めることを理想とする我々在留民にとりては、まことに喜ばしい現象」である³¹、という点と一致する。紐育新報主催の邦人美術展覧会と日本文化学会は、どちらも日本人会と関わりがあったことは明白だ。1926年11月16日の紐育日本人会の理事例会では、日本文化学会の設立を後援することが満場一致で決議されている³²。また角田柳作は、日本文化学会の趣意書の印刷と発表には、日本人会の役員を務める紐育新報社の水谷渉三の協力があつたと述べている³³。これらのことから、紐育新報社が邦人美術展覧会を開催した背景には、日本人会による日米親善と文化交流を意図した、日本文化学会の事業との関連があつたと考えるのが妥当だろう。

4. 招待会と美術展評

紐育新報社主催の展覧会が日本文化学会設立に向けた事業の一環として、日米の文化交流を目的としていたことを裏付ける動機は審査委員の顔ぶれにも表れている。同展覧会の審査委員には、独立美術家協会の役員を務めるジョン・スローン、ウォルター・パッチ(Walter Pach)、ロックウェル・ケントや1922年からサロンズ・オブ・アメリカのディレクターを務める国吉康雄が審査委員（後に顧問とする）になっている³⁴。ここでは具体的な審査内容は明らかにされていないが、アメリカ美術界の新進画家が審査委員を務めた展覧会は、日本人の美術作品に表れた東西文化の融合と、日本人の米化を日本人社会だけではなく、アメリカ社会にも紹介する意図があつたと考えられる。そして展覧会の初日の1927年2月16日には、英字新聞の記者も招待したレセプションが開かれており³⁵、ニューヨークの英字新聞は同展覧会の批評を掲載している。では、英字新聞にはどのような批評が掲載されたのだろうか。ここでは日本語新聞に掲載された翻訳記事の内容を以下にたどる。

まず、同展覧会について述べた『タイムズ』の記事について³⁶、『紐育新報』では次のように報じている。

アート・センターには昨今紐育新報社主催第一回美術展覧会が開催されているが、是等多数の日本人美術家諸氏は打ち見た処日本人として祖先から受けた最も尊い賜物を捨て、何処までも泰西思潮とその実際に近づかうと焦り、従てその観察眼は泰西化したものと思惟しているらしいけれどもそれが泰西の観察眼でないことは勿論である。この芸術的混乱は己むを得ないものであらうが、而かも米人の眼から見ればそれがいかに

も沐猴に冠と云ったやうな感じから免れることは出来ない。が、この中でも最も興味あるニューヨークの生活断片として見るべきものは藤岡昇君の「チャールストン」と「地下鉄の午後」であり、一刻をも争ふやうな忙がしいアメリカ人にとって印象を深めるものは村田雪子女史の「春宵」と齋藤龍江氏の画にして、これは伝統の力のいかに尊いものであるかを示すと共に伝統を離れてものを味ふことのいかに難かしいものであるかを物語っている³⁷

また『日米時報』では同じ記事を次のように取り上げている。

紐育新報主催の絵画彫刻を網羅した第一回美術展がアーツセンターで開かれた。出品の美術家諸君は祖先天稟の才能を発揮せんと意識し彼等が西洋着眼点と感ずる洋法を採用して居る。勿論この見地は間違っている。而して美術的イデオムの混同により米国の公衆は何となく瞞着にちかい模倣の恐怖を感じざるを得ない。

紐育の面影を止めどんな人種の紐育人にも興味深く感ずる美術家の作品中に藤岡昇の「地下鉄の午後」がある。かず多い出品中村田紅雪の「春宵」は米人に懂がれ齋藤龍江の「迎客有情」は日本画の真価を発揮して居る。日本の伝統的趣味を外部に適用するは実に至難の業である³⁸。

このように、『タイムズ』は、日本人画家の展覧会を通じて、日本人が西洋文化を享受することの難しさを指摘した上で、展示された日本人の作品は西洋画の模倣だと批評している。ではこのほかの英字紙の記事はどのように報じられたのか。次に『トリビューン』の記事を³⁹、『紐育新報』では次のように報じている。

紐育新報社主催紐育在留日本人美術家の展覧会は我々の前に再び美術に対する民族の固執性といふ問題を提示して呉れた。日本人の美術に対する才幹はこの展覧会で遺憾なく発揮されていることは、清水登之氏の「横浜の夜」のみでも立証され得る。若しそれ技巧上の優秀な表現は幾多の出品に発見し得るが、特に我等の興味を惹くのはその源泉が純真な日本人味に満ちていることである。素より泰西の流れを汲んだ幾多の画即ちウイスラーばりな寺徹圓氏の「少女」犬飼恭平氏の完全に近い油絵、加藤健太郎氏の「漁村」など彼等の同化性を優秀に発揮したものもあるけれどもこれによりて日本人味を消すやうなことはないのみならず、展覧会の全般を通じて受ける印象は彼等の国民性なるものが鮮明に示されていることである。これ等の中に二三点即ち齋藤龍江氏の「迎客有情」村田雪子夫人の「春宵」等は日本古来の伝統に発した絵画で如何にも自然にのんびりとした筆致を見ることが出来る。同時に泰西の思潮に圧迫されて東洋人的な心性を失った幾多の絵は遠慮なく云へば極めて平々凡々である。併し斯うした絵画の中にも石垣栄太郎氏の「尼僧と少女」の如き除外例はある。この画に於て彼は泰西の感化から離れ

て日本人らしい線の動きを見せている。換言すれば日本人がその美術的習性を泰西化していることは我々に対する大きなコンプリメントではあるが、日本人は飽くまでも日本人としての習性に忠実であることは彼等に対する最も大きな報ひであらなければならない⁴⁰。

また『日米時報』では、同じ記事を次のように掲載している。

紐育在留の日本人画家は第一回美術展を催して人種的美術美を天下に誇らうとした。約五十の絵画と彫刻をアーツセンターにあつめた紐育新報主催の美術展は即ちそれである。此出品から見て今日の日本人に画才のある事がよくわかる。清水登之氏の「横浜の夜」だけでも十分之を証している。

然し画の全体から見て全然其国民性を發揮しやうとした傾向はある。二三の日本画例へば齋藤氏の「迎客有情」紅雪氏の「春宵」などは明かに古風を型ったものである。是等の作には余裕があり力がある。洋風をまねた東洋風の作品は忌憚無く言へば平凡で何の面白味も無いものだ。

この中には石垣栄太郎君の画の様な例外はあるが一口に言へば日米^{ママ}人の洋画は単にお世辞に過ぎず寧ろ全然日本画に執着する方が彼等のために安全である⁴¹。

以上のように『トリビューン』では、西洋画の技法を模倣した日本人の作品は、平凡で面白くないと批判したうえで、日本人は日本の伝統を創作に生かすべきだと指摘している。また、『ポスト』は同展覧会を批判的に書いている⁴²。それを『紐育新報』では以下のように掲載している。

ニューヨークタ刊ポスト紙はこの土曜日の美術欄に長文の批評を掲げ、「東は東、西は西」の詩句を引例して泰西式な力作品の中にひしめく伝統の力の偉大さを謳歌し『これ等日本人の眼に映じた鋭い批評が種々な作品に現れて居る、藤岡昇君のアメリカ魂、臼井文平君の工場⁴³、清水清君の十四丁目等は我々の狂気染みた生活に対する外来者の観察である。而かもこのフランテックなそして常に不合理な生活の反映なるものは見る者にとって決して愉快なことではない。これに反して東洋の伝統的な絵画に対し我々は画としての美しさと強さとを觀取し得る。即ち村田雪子さんの春宵や齋藤龍江氏の画、加藤健太郎氏の漁村、清水登之君の横浜の夜等は天賦の豊かなこれ等芸術家の伝統を踏襲したものとして興味を与える』⁴⁴

ここでは、作品に表れた西洋画の技法と、日本人の鋭い批評をとらえた構図を指摘している。また同じ記事を『日米時報』も翻訳している。

紐育有力の夕刊紙ポーストは前土曜日の紙上で紐育新報主催の邦人美術展を酷評し甚だしきは排日論者などが引用する「東は東西は西」の文句を使って人真似はせぬものだ」と諷しなぜ日本人は難かして西洋風を無理に真似ようなどとせず日本固有の画風画才に拠らぬのだらうと余計なしん配迄して居た⁴⁵。

『日米時報』に掲載された英字新聞の記事の翻訳は、管見の限りではここで取り上げた三紙だけだが、『紐育新報』にはこのほかの英字紙もある。たとえば、日本人が西洋文化をいかに巧妙に取り入れているかを紹介した『クリスチャン・サイエンス・モニター』や⁴⁶、作品に表われた東西の融合を指摘した『ワールド』の批評がある⁴⁷。このように日本語新聞は、日本人による展覧会の批評だけではなく、英字新聞に掲載されたアメリカ側の批評も翻訳して日本人社会に伝えている。この展覧会に対するアメリカ社会の批評は、好意的なものではなかったが、紐育新報社主催の邦人美術展覧会は、使用言語が異なる異郷の地で、言語を用いない意思疎通の手段として、日本人の米化を発信するとともに、美術作品を通した文化交流と日米親善の意図があったのだ。

5. おわりに

商売的で非芸術国だとされたアメリカだが、この地にも芸術を志す者の間でアメリカン・シーン絵画は創造された。かつて国吉康雄は、日本に生まれアメリカで美術を学んだ日本人による芸術が、アメリカの美術界にも表れるだろうと述べた⁴⁸。1920年代のアメリカにおける日本人画家の活動は、独立美術家協会やサロonz・オブ・アメリカといったアメリカ美術界にも及んでいる。そして1927年には、画彫会の展覧会以来となる邦人美術展覧会が紐育新報社主催で開催される。この展覧会は、日本人の芸術作品の展示を通して、作品に表れた東西文化の融合と日本人の米化を伝える目的で開催された。その趣旨は、角田柳作が提唱した、日米親善と文化交流を目的にした日本文化学会の設立の趣意と一致している。

角田柳作は、「日本文化学会」を設立の資金調達、資料蒐集のために日本に一時帰朝しており、1927年の展覧会を見ていない⁴⁹。しかし1927年の邦人美術展覧会は、彼と親交があり、また日本人会の役員でもあった水谷渉三が経営する紐育新報の主催で開催される。日本語新聞は、邦人美術展覧会の宣伝はもとより、反響や展示された作品の様相を広範囲に伝える格好の媒体だったのだ。

展覧会の閉会后、国吉康雄は、日本人画家はアメリカの文化に深く触れることが可能な立場にあると述べたうえで、芸術家はその立場を活かして東西の文化の理解を進めていくことが必要だと指摘している⁵⁰。このことから1927年の邦人美術展覧会は、彼らの創作活動の方向性を見出す契機となったのだろう。日本に生まれ、アメリカで美術を学んだ画家は、この後も西洋画の技法を駆使しながら、日本人独自の視点でアメリカの近代社会の実相を皮肉っぽく風刺的に描いた作品を、アメリカ画壇で発表している。そしてアメリカで活動する日本人画家の作品を集めた展覧会が、1935年と1936年に再び紐育新報社後援で開かれ

る。

以上のことから、1927 年に開かれた紐育新報主催の邦人美術展覧会は、日本人の芸術作品の展示を通して、日本人の米化と文化の融合をアメリカ社会に伝える事を目的にした展覧会だった。そして開催の背景には、文化交流と日米親善を掲げた「日米文化学会」設立に向けた日本人会のメディア政策があったと考えられる。

¹ 浅野徹.「大正・昭和前期の在米画家についてのノート」『太平洋を越えた日本の画家たち アメリカに学んだ 18 人』〔展覧会図録〕和歌山県立近代美術館(1987 年)、76-82。

² 安来正博「石垣栄太郎関係スクラップ資料と、その補足的考察(1)」『和歌山県立近代美術館紀要』第 1 号(1996 年 3 月 31 日、15-66;「石垣栄太郎関係スクラップ資料と、その補足的考察(2)」、『和歌山県立近代美術館紀要』第 2 号(1997 年 3 月 31 日、55-103;「資料に見る戦前の渡米画家たち—その活動の軌跡」『アメリカの中の日本—石垣栄太郎と戦前の渡米画家たち』〔展覧会図録〕和歌山県立近代美術館(1997 年 11 月 11 日)、57-62。

³ Ibid.

⁴ Royal Cortissoz. “The Modern Japanese How He Functions as an Artist in the Western World” *New York Herald Tribune*, February 20, 1927.

⁵ 安来正博「資料に見る戦前の渡米画家たち—その活動の軌跡」『アメリカの中の日本—石垣栄太郎と戦前の渡米画家たち』〔展覧会図録〕和歌山県立近代美術館(1997 年 11 月 11 日)、60。

⁶ 角田柳作の日本文化学会は、1928 年 3 月に日本側で「日米文化学会」が、1929 年 7 月にアメリカ側で「The Japanese Culture Centre」がそれぞれ設立されている。この事業については、荻野富士夫『太平洋の架橋者 角田柳作「日本学」の SENSEI』芙蓉書房(2011 年 4 月 25 日)。内海孝「角田柳作のハワイ時代—1909 年の渡布前後をめぐって」『早稲田大学史記要』通巻 34(1998 年 7 月 31 日)、121-174;「角田柳作のハワイ時代再論—1909 年～17 年の滞在時機を中心にして」『早稲田大学史記要』通巻 35(1999 年 7 月 15 日)、91-124;「角田柳作のコロラド時代—コロンビア大学「日本学」生誕前夜をめぐって」『東京外国語大学論集』75 号(2007 年 12 月 21 日)、235-268 に詳しい。

⁷ 『渡辺寅次郎「画斎のまどより 新年雑感、新しいものと古いものに題す」『日本人』(ニューヨーク) 98 号 1923 年 1 月 25 日。

⁸ 「画彫会主催で秋に展覧会 準備委員も選定」『紐育新報』1925 年 2 月 28 日。

⁹ 「画彫会の主催で秋季展覧会準備」『紐育新報』1925 年 3 月 21 日。

¹⁰ 「画彫会懇親会盛況」『紐育新報』1925 年 11 月 4 日。

¹¹ 出品目録は、和歌山県立近代美術館所蔵。

¹² 三崎道夫「踊り子の画」『紐育新報』1927 年 1 月 1 日。

¹³ 角南五天「邦人美術展を前にして 感想 芸術座談」『紐育新報』1927 年 1 月 1 日。

¹⁴ 保忠蔵「自分の絵に対する心持」『紐育新報』1927 年 1 月 1 日。

¹⁵ 清水清「創作と鑑賞」『紐育新報』1927 年 1 月 1 日。

¹⁶ 藤岡昇「画家としての私の態度」『紐育新報』1927 年 1 月 1 日。

¹⁷ 都筑隆「芸術と個性」『紐育新報』1927 年 1 月 1 日。

¹⁸ 川村吾蔵「彫刻断想」『紐育新報』1927 年 1 月 1 日。

¹⁹ 「美術展合評」『紐育新報』1927 年 3 月 5 日。

²⁰ 「美術展合評」『紐育新報』1927 年 3 月 9 日。

²¹ Ibid.

²² Ibid.

²³ 「本社主催『邦人美術展』来年二月一日より二週間に亘り東部在留邦人美術家を網羅し

-
- て」『紐育新報』1926年11月17日。
- 24 「邦人美術展」『紐育新報』1927年2月12日。
- 25 「日本文化学会産まる」『紐育新報』1929年8月3日。
- 26 角田柳作「The Japanese Culture Centreの創立に就て」外務省『本邦ニ於ケル文化研究並同事業関係雑件』（1926年）。
- 27 「紐育に創設せらるる日本の文化的事業 紐育日本人会書記長 角田柳作氏意見」（上）（下）『紐育新報』1926年10月13日、16日。
- 28 角田柳作『書斎・学校・社会』布哇便利社（1917年1月16日）、271。
- 29 角田柳作・松本重治・田中耕太郎・嘉治隆一「座談会 アメリカの真実を認識せよ一老紐育人角田氏を囲んで」『心』（1955年8月1日）に同じ。
- 30 「邦人美術展」『紐育新報』1927年2月12日。
- 31 「本社主催「邦人美術展」来年二月一日より二週間に亘り東部在留邦人美術家を網羅して」『紐育新報』1926年11月17日。
- 32 「紐育日会の理事例会」『紐育新報』1926年11月20日。
- 33 坡土遜小叟「曼陀羅と達磨」『紐育新報』1931年12月30日。
- 34 「紐育新報社主催第一回邦人美術展覧会規定」『紐育新報』1926年12月4日。
- 35 「近代派官学派入乱れて 咲誇る邦人美術展」『紐育新報』1927年2月19日。
- 36 Elizabeth Cary “An American A Slav and Some Japanese Painters “Westernized” Japanese” *New York Times*, February 20, 1927.
- 37 「尊い日本人の伝統を捨て乍ら 泰西化し切れない美術展 タイムスのケリー女史が鋭い批評【アート・センターに於ける邦人美術展の賑ひ】」『紐育新報』1927年2月26日。
- 38 「紐育新報主催美術展の批判 英字新聞美術記者により」『日米時報』1927年2月26日。
- 39 Royal Cortissoz “The Modern Japanese How He Functions as an Artist in the Western World” *New York Herald Tribune*, February 20, 1927.
- 40 「『日本人味』を忘れないで 特色のある美術展 ヘラルド トリビューン紙の批評 昨今売約の交渉がぼつりぼつり」『紐育新報』1927年2月23日。
- 41 「紐育新報主催美術展の批判 英字新聞美術記者により」『日米時報』1927年2月26日。
- 42 Margret Breuning “Japanese Artists” *The New York Evening Post*, February 26, 1927.
- 43 本作品は現在ニューヨーク、メトロポリタン美術館に《Furniture Factory》というタイトルで所蔵。
- 44 「三月五日に閉幕する 第一回邦人美術家展 米人批評家の眼に映じた日本人 モーダニスト 伝統的な日本画」『紐育新報』1927年3月2日。
- 45 「紐育夕刊ポストの美術展酷評 飽迄馬鹿にして居る」『日米時報』1927年3月5日。
- 46 Ralph Flint. “New York Art Miscellany” *The Christian Science Monitor*, February 24, 1927.については、「三月五日に閉会する 第一回邦人美術展 米人批評家の眼に映じた日本人 モーダニスト 伝統的な日本画」『紐育新報』1927年3月2日に翻訳が掲載されている。
- 47 “New York Japanese” *The World*, February 27, 1927. については、「三週間も何時か過ぎて『邦人美術展』はけふ閉会 内外人より名残を惜しまれて」『紐育新報』1927年3月5日に「この展覧会がいかに深い興味を彼等に与へたかを窮知するに足るであらう。現にニューヨークウォールド紙の如きも美術を通じた東西融和を高調して居る」とある。
- 48 国吉康雄「美術我観」『紐育新報』1922年2月18日。
- 49 日本文化学会は、組織としては実現しなかったものの、角田柳作が勤めていたコロンビア大学の日本文化研究の基礎となった。

⁵⁰ 国吉康雄「同人の叫び」『日米時報』1927年4月30日；国吉康雄「美術同人会」『紐育新報』1927年4月30日。

第8章

1930年代のニューヨークの邦人美術展覧会

—芸術活動と日米外交政策—

はじめに

1910年代から1920年代にかけてのニューヨークでは、当地で活動する日本人画家の美術展覧会が開催されていた。このうち紐育日本美術協会による1917年と1918年の邦人美術展覧会は、ジャポニズムの影響を受けた作品や、東洋趣味に迎合した商業目的の作品、前衛美術の影響を受けた作品が展示された。そして、1922年代には、紐育日本美術協会を再編成した、画彫会の展覧会が開催されている。また、1927年には紐育新報社主催で邦人美術展覧会が開催された。さらに、日本人画家は、独立美術家協会展やサロズ・オブ・アメリカといった、同時期のアメリカの美術界でも作品を発表しており、彼らの作品は、両世界大戦間の狂騒時代のアメリカ社会と文化を描出した、アメリカン・シーンの作品としてアメリカ社会で評価されていた。

ではこの後の1930年代のアメリカで、日本人画家はどのような創作活動をしていたのだろうか。1930年代は、1929年秋のニューヨーク株式市場の株価大暴落に端を発した、未曾有の大不況の時代だ。世界恐慌のニューヨークでは労働運動が盛んになり、リベラルな思想を持った画家によるアメリカ美術家会議が1936年に結成される。また満州事変と日本の国際連盟脱退により、日本を巡る国際情勢が悪化した時期でもある。

世界恐慌と悪化する国際情勢を背景に、1935年と1936年に紐育新報社後援で邦人美術展覧会が開催されている。この二回の展覧会については、現存する出品目録から開催の事実は判明していたものの¹、同展覧会の開催に関する資料は極めて少ないことから、展覧会の様相や開催の意図はほとんど言及されてこなかった。しかし同展覧会の出品目録と当時の新聞や雑誌の美術批評を調査したところ、1935年と1936年に開催された邦人美術展覧会はアメリカの美術界で活躍していた日本人画家の作品はもとより、画業を本業としない素人の作品や総領事夫人、商務書記官といった官吏も作品を出品していることが判明した。では、なぜ素人や官吏がこの展覧会に作品を出品したのだろうか、また同展覧会が、アメリカ美術家会議が結成される直前の1935年と1936年に開催されたのはなぜだろうか。紐育新報社後援の邦人美術展覧会は、それまでの邦人美術展覧会とは異なる、重要な意図があったのではないだろうか。

そこで本章は、1935年と1936年に紐育新報社後援で開催された邦人美術展覧会について、同展覧会の出品目録やニューヨークで発行された日本語新聞と英字新聞の美術批評と独立美術家協会展やサロズ・オブ・アメリカの図録の調査を通して展覧会の様相と開催の意図を検討する。

1. 世界恐慌と日本人画家

ニューヨークの日本人画家の団体は、1910年代から紐育日本美術協会や画彫会と改称しながら断続的に続いていた。そして1929年11月に在米日本人美術協会と名称を改め、太平洋沿岸地域にも支部を置き、活動を全米規模に拡大することを決議している²。しかし1929年10月24日の株価大暴落に始まる世界恐慌の影響で画廊は閉鎖され、絵の販売は落ち込み、画家たちは発表の場を失っていく。世界恐慌に始まった1930年代のニューヨークで、日本人画家はどのような活動をしたのだろうか。

世界恐慌で作品の発表の場を失った画家たちは、自身の作品を手には野外へと出る。このような画家による展示にワシントン・スクエアの野外展がある。これは1932年にホイットニー美術館の創立者ガートルード・ホイットニー(Gertrude Vanderbilt Whitney)の発案で開催されたもので、不況下で生活に困窮した画家が野外で作品の展示即売を行った催しである。『紐育新報』は1932年6月の最初の野外展では総売り上げが363点1794ドルに上ったと報じている³。以後、毎年のように開催されたこの美術作品の展示即売会には石垣栄太郎や保忠蔵、中川菊太が参加している⁴。さらに1934年には商務書記官ら日本人会の有力者の後援により、2月10日から20日まで日本倶楽部で日本人画家の救済を目的にした、邦人美術展覧会の企画が持ち上がる。『紐育新報』によれば、この展覧会は日本人社会と画家との親善を図る意図があったようだが⁵、展覧会は開催直前に中止となる⁶。その理由として考えられるのは、満州事変以後、悪化する日米関係の打開策として1933年12月に齋藤博が駐米大使に任命されたことだ。彼の歓迎会が、邦人美術展覧会の開催を予定していた前日の1934年2月9日に日本倶楽部で開かれている⁷。この歓迎会には井上商務書記官ら展覧会の発起人となった日本人社会の有力者も当然出席していることから、邦人美術展覧会は主催者側と場所の都合で中止されたのだろう。

不況下で日本人画家はジョン・リード・クラブや労働者文化同盟といった、後にアメリカ美術家会議の結成にも関わるリベラルな団体や、ワシントン・スクエアの野外展、WPAといった失業対策を目的にした事業に活動の場を広げていったのだ。このように日本人画家とリベラルな団体との関わりを考えると、1934年に日本倶楽部で開催される予定だった邦人美術展覧会は果たして本当に画家救済が目的だったのだろうか。『紐育新報』では、邦人美術展覧会は近い将来、米人ギャラリーで開催することになったと報じている⁸。そしてこの展覧会は1935年にハーマン・バロン(Herman Baron)のA.C.A.ギャラリーで実現することになる。

2. 1935年の紐育新報社後援の邦人美術展覧会

1934年に企画倒れに終わった邦人美術展覧会は、1935年2月10日から3月2日までA.C.A.ギャラリーにおいて紐育新報社後援で開催されている。『紐育新報』には「在留日本人美術家のムーブメントは在留同胞発展史に一光彩を添へるものと自負するものであります。今回美術展覧会を開催するに際し、この範囲を拡大して一般同胞から作品を募集する」という作品の募集広告が掲載されていることから⁹、この展覧会は画家だけではなく在留日

本人社会全体に出品を呼び掛けたものだった。また 1935 年 1 月の『紐育新報』には「今回の展覧会に異彩を放つべきは第二世の進出であるが、昨年度は第二世美術家の当り年であった由で、彫刻家野口勇氏はメトロポリタン美術館に名舞踏家アグナ・エンターズの肖像を、土井勇氏は油絵をロックフェラー夫人に、野田英夫氏はホイットニー美術館に風景画を売却して居る。国吉画伯の如き老練な邦人画家と新進気鋭の第二世美術家の作品とが一室に展覧される今回の美術展は多数日米人間に興味の中心となって居る」とある¹⁰。邦人美術展覧会は、国吉康雄のようにアメリカ画壇で既に著名な地位にある画家のほかにも、イサム・ノグチや野田英夫のような日系二世の画家の作品まで、幅広い世代の日本人の作品を一堂に展示するというものであり、開催前から日本人社会だけではなくアメリカ社会からも注目されている。さらに開催直前の 1935 年 2 月 9 日の『紐育新報』には「紐育に於ける有名無名の日本人美術家の作品殆んど全部を一堂に集め得たことは在留同胞文化発展の途上に於ける一大金字塔であります」という広告があり¹¹、アメリカにおける日本人の文化発展を促す重要な展覧会になると謳っている。

ではこの展覧会には、どのような作品が展示されたのだろうか。出品目録〔表 8-1〕では 27 名 52 点の出品が確認できる。このうち国吉康雄の《テーブルの上の果物 (Fruits on Table)》〔図 8-1〕は 1934 年のペンシルバニア・アカデミーでテンプル・ゴールド・メダルを受賞した作品であり、臼井文平の《室内 (Interior)》〔図 8-2〕と《風景 (Landscape)》〔図 8-3〕は 1934 年のワナメーカーのレジオナル展で賞を受賞した作品とシラキュース美術館の展覧会に出品されたものである。また角南壮一の《ヘイ・スタック (Haystack)》〔図 8-4〕とトーマス永井の《風景 (Landscape)》〔図 8-5〕も構図が判明している。さらに中川菊太の作品については「赤い花の『静物』よりも『糸の切れたヴァイオリン』の方に、より多くの創意の動きを見る」という批評があり¹²、この「糸の切れたヴァイオリン」は 1932 年のサロンズ・オブ・アメリカに出品された《壊れたロマンス (Broken Romance)》〔図 8-6〕と構図が一致することから同一の作品だと考えられる¹³。また同展覧会ではこれ以外にも画業を本業としない日本人の作品や官吏の作品も展示されている。例えば、洋画家マリー・ローランサン (Marie Laurencin) に師事し、パリのサロンにも入選したことがある日本総領事夫人澤田美喜は《静物 (Still Life)》と《肖像画 (Portrait)》を出品しているし、ニューヨーク在勤の商務書記官井上豊次は《エチュード (Etude)》と《グランド・オールド・パー (“Grand Old Parr”)》、井上夫人も《人形 (Doll)》二点、そして日本総領事館の書記生である野村浩達は《冬木立 (Snow)》と《短冊 (“Tanzaku”)》、またベスレヘム製鉄会社の製図科に勤務する青木実は《カレッジ・チャペル (College Chapel)》と《ハミルトン通り (Hamilton Street)》を出品している。これらのことから紐育新報社後援の邦人美術展覧会はニューヨークに在留する様々な日本人の作品を一堂に展示した展覧会で、ほかの展覧会とは異なる企画だった。それだけではなく、同展覧会は入場料無料で作品の販売をしていないことから営利目的ではなく、美術作品の展示を通した何らかの広報的な意図があったのではないだろうか。

そこで展覧会開催の意図を探るために開催期間中に催された招待会について取り上げる。

1935年2月15日にA.C.A.ギャラリーで日米人約70名を集めた招待会が開催されている。

『紐育新報』によると同会は「国吉康雄画伯司会者として邦人美術展の沿革を述べて当夜の講演者を紹介した。第一に古倫比亞大学の角田柳作氏講演の草稿を本社社主代読し＝角田氏病欠席の爲め＝支那より学んだ日本に於ける絵画が泰西感化を受けた点を挙げ外国情趣と回顧思想の表現を比較して日本の特色に言及した。彫塑家ゾラック氏は『絵画は言語である』と冒頭して努力の必要を説き、講演家コムロスワミ博士、ウイットネー近代美術博物館主事グラスゴー氏の講演」があった¹⁴。ここで角田柳作は「異国情緒と回顧主義」と題した英語の講演を予定しており、『紐育新報』には講演の内容を翻訳した記事が掲載されている。そのなかで角田柳作は「日本人画家が泰西絵画の技法」を取り入れた点は冒険的な異国情緒主義であると述べたうえで、これに対して「日本人は日本人だけでとどまって居る限りに於てのみ良さ」があるとするアメリカ側の思想を保守的な回顧主義と述べている。また日本と支那が歴史上文化的な影響を相互に与えたことと、明治維新以後泰西の文化が流入した結果、特に近代の日本画家が泰西の手法を取り入れたという背景を踏まえるならば、「日本の絵画は可なり早熟な異国情緒主義」だと言え、「日本の絵画が依然としてよく古来の名声を維持し得るか否か」はこの邦人美術展覧会に陳列された日本人画家の作品によってわかると説いている。そして「アジア大陸文明の足跡を踏むことに依って日本は東洋文明の正統的世襲者となった。泰西文明の跡を慕ふことによって日本はまたその最善を尽さんと願っている。世界文化の開する限りに於て、日本はやがて東西の両者と結合融和して一大調和を建設し得る日の近からんことを熱望する」と結んでおり¹⁵、この角田柳作の講演には芸術作品を通して日米両国の協調と親善を説く意図があったと考えられる。さらに当夜はアメリカ近代美術を蒐集するホイットニー美術館の館長やサロンズ・オブ・アメリカのディレクターを務める彫刻家のウィリアム・ゾラック(William Zorach)も講演をしている。

なぜこのような招待会が開かれたのだろうか。ここで注目すべきは、この展覧会の出品目録である。同展の出品目録には展覧会のタイトルのみが日本語と英語で表記されているが、画家の氏名と作品のタイトル、そして目録の裏面に印刷された招待会の案内はすべて英語で記されている¹⁶。また招待会の案内は『タイムズ』や¹⁷、『トリビューン』にもあることから¹⁸、この会は英語話者、つまりアメリカ社会を重視して開催されたのだろう。だとするならば、邦人美術展覧会の開催も日本人社会だけではなくアメリカ社会にも向けたものだったと考えられる。また会場となったA.C.A.ギャラリーは、ジョン・リード・クラブの展覧会や左翼系の芸術家の個展を開いていたが、ギャラリーの所有者であるハーマン・バロンは1935年の邦人美術展覧会によりギャラリーの評価が上ったと述べている¹⁹。このことから邦人美術展覧会は左翼系の色彩が強かったA.C.A.ギャラリーの方針とは趣を異にする企画だったことがわかる。

ではこの展覧会で日本人の作品はアメリカ社会にどのような印象を与えたのか、英字新聞に掲載された展覧会の批評を見てみよう。まず『ポスト』では「東洋的なデザイン感覚は、率直なリアリズムや西洋的感覚だけでなく展示を通して明らかである。最も興味深い作品

は、東西の融合で、現代モダニズムの特徴を修正し、伝統的特色の小気味よい手法を用いている。例えば、青木実の《ハミルトン通り》は書道の手法を用いた絵であり、中溝不二の《ボーイ・コーリング(Boy Calling)》は東洋風な感情表現の修辞法と鮮明さが描かれている。門脇ロイの《ファンタンゲーム(Fantan Game)》は東洋風なものが西洋画の中に移植されており、人を引きつけると評価している²⁰。また『サン (New York Sun)』では、「この展示には奇妙な混合があり、出品者の多くは西洋の技法で描いているが、時折ネイティヴの特徴がややごちなく表記されている」と述べている。さらに作品については、澤田美喜の《静物》と《肖像》はパリで習得した技法を上品に発展させたものであり、宮本要の作品は、もしもこれが油絵であったならば日本の装飾の抽象画であり、展示の中で最も興味深い作品の一つであると評価している。このほかにもイサム野口、永井トーマス、臼井文平、雨宮要生、石垣栄太郎、土井勇、門脇ロイ、国吉康雄の作品は芸術的表現や人種の融合の予想のつかない作品であると述べている²¹。このように英字新聞では作品に表れた東西文化の融合を評価したものもあるが、その一方では批判もある。例えば『ワールド テレグラム (New York World Telegram)』では「多くの画家の作品は西洋の技法と視点によって描かれており、日本人が古い日本の着想を捨て去っていることは残念に思う」とある²²。この批判に対してアデレイド・リチャードソンは次のような投書を『紐育新報』に寄せている。「此意見は米国に生活して居る日本美術家の可能性を破滅的に局限するもので、斯かる批評に耳を傾けないことを望みます[……]私は山崎君の『冬の景色』が暗示の力と真剣な抑制味と単純化を示すものとして亦其『自像』の個性を発揮せる点を認めます、雨宮君の『風景』もクール、テンダアネスと深さによる暗示に富むだ、作品である思ひます。この二つの風景画は『何者かを語らんとして居る』感じを含み観る者をして、省察せしめて居ます。野口君の『私の叔父』は浸透と精力とを明かに表現した作品」と評価している。そしてこのような意見を述べる背景には「或る人が日本人美術家の一団は日本と米国との理解を促進する上にも貢献したいと云ふ目的を持って居る」というのを聞いたからだ²³、日本人画家の活動の意図について言及している。

紐育新報社後援の邦人美術展覧会は、ニューヨークに在留する日本人画家と画業を本業としない日本人の作品を一堂に展示した特異な展覧会であった。それは官吏や製鉄業に携わる素人の作品も展示することで、作品に表れた東西文化の融合を当地の様々な業界の人々に芸術作品に広める、日本側の広報的な意図があったのだろう。そのため、英字の出品目録の作成やアメリカの報道陣を招いた招待会の開催、展覧会の様相を伝える英字新聞の批評はといった広報的戦略は、この展覧会開催の意図をアメリカ社会に伝える有効な手段だったのである。

3. 1930年代の日米外交

ニューヨークの日本人社会は祖国日本がファシズムに傾倒していった 1930 年代になぜこのような美術展覧会を開催し、日本人画家や素人の画家の作品の展示を通して、東西文化

の融合を説く必要があったのだろう。その背景を探るために 1930 年代の日米外交を以下にたどる。1931 年の満州事変の後、日本は国際連盟を脱退し国際社会から孤立していく。その一方では満州開拓や重工業の発展にともない、石油や鉄くずなどの資源の輸入は必要不可欠であり、アメリカは貿易相手国として重要だった。そこで日本政府は悪化する国際情勢の下、日米親善と文化外交を進めるために、1933 年 12 月当時オランダ大使だった齋藤博を駐米大使に任命している。齋藤博は 1934 年 2 月 17 日の CBS ラジオで行った就任の挨拶の中で、日米両国の経済関係および海軍比率問題、移民問題、満州問題、日露衝突説への否定を述べたうえで、「多年日米両国間に存続せる情誼を尊重して結合と交友とを促進せしむるために全力を傾倒すべきは予の任務である」と述べている²⁴。さらに 2 月 18 日には NBC ラジオで日米戦争論を否定する演説もしている²⁵。齋藤博の大使就任は日本とアメリカの友好関係を築く外交上の重要な切り札であり、この後、彼は各地の集会で日米親善を説いている²⁶。例えば、1935 年 2 月 9 日のシカゴの外交関係評議会主催の晩餐会での演説を見て見ると「極東に於ける日本政策の動機」と題した講演をしている。この中で齋藤博は日本の満州事変の意義を明らかにし「日本は支那に対する軍事的若くは政治的攻略の再起を望まない。泰西諸国の軍港増設を望まない[……]支那本土が蘇聯に併呑されるのを望まない。[……]支那と日本との関係は単なる通商利権の問題ではなく自然の地理的接壤に基き通商貿易の問題に加ふるに支那の独立、保全の根本問題に至大の関心を持つ」と日本の極東政策の根幹に触れ、「千九百二十五年以後露国は北満を通じて共產主義的思想の伝播を試み茲に再び日本の脅威となれるを痛論し、満州軍閥の日本人逐放政策は日本の資源を奪還せむと試みたものである。とて日本の南満経営の苦心と秩序の維持に任ぜる犠牲とを語りて満州事変の由来を闡明」し、「支那の秩序を恢復するは日本の熱望する所である」と述べている²⁷。そして 2 月 11 日のスプリングフィールドの午餐倶楽部主催の会合では、リンカーンと乃木大将を比較し「この最も相異なれる二人は互いに完全に理解し得たであらうと考へる。何となれば二人は孰れも相似たる精神の所有者である」からだとして「東西相融和し得べき根本的思想の共通を強調」する演説をしている²⁸。この齋藤博の演説の記事と東西文化の融合と日米親善の推進を目的に開催された邦人美術展覧会の招待会の記事が 1935 年 2 月 20 日の紐育新報の同じページに掲載されていることは、唯の偶然だったのだろうか。

齋藤博のほかにも同時期のアメリカで日米親善を説く動きはあった。例えば日本総領事澤田廉三は 1934 年 5 月に開催されたボストンの日本協会の定期総会で次のように述べている。「日本の文化は決して単なる模倣にあらず」「印度、支那の文化は勿論、泰西文化の要素をも咀嚼してこれを日本自身に同化せしめつつあり」「日本は其伝統的美術、文学、戯曲及び音楽を礼讃尊重し且つ発展せしめて居る」「頃者米国に於て日本人と日本の文化研究の趣味を拡大するの傾向ありとせらるるは両国の理解と友誼との恒久的基礎である点より考察して予の喜びに堪えない所である」²⁹。このように澤田廉三も東西文化の協調と日米親善の必要を説いている。この総領事の講演と総領事夫人である澤田美喜が 1935 年の邦人美術展覧会に作品を出品していることを考慮すると、邦人美術展覧会の開催は日本の文化外交

政策と関連した事業だったといえるだろう。

紐育新報社後援の邦人美術展覧会は駐米大使や総領事が日米親善と文化協調を説き日米関係の修復に努めた 1935 年に開催されている。つまり、この展覧会はアメリカにおける日本人の創作活動を通じた芸術による文化外交政策の一環だったのである。

4. 1936 年の展覧会と二世画家への期待

1935 年の邦人美術展覧会は、アメリカ画壇で活躍する日本人画家の作品だけではなく、日系二世や画業を本業としない様々な立場の日本人の作品を展示することで、アメリカ在留の日本人が、いかに西洋と東洋の文化の両方を享受し、融合させているかを伝える特異な展覧会であった。この展覧会の開催は日本人会とのつながりが深い紐育新報社が後援していることや日米両方の有識者を招いた招待会の開催、日本語新聞や英字新聞の批評から、1930 年代の悪化する国際情勢を背景にした、日米親善を図る外交上の意図があったのである。

この展覧会の成功を受けて、翌年 1936 年 4 月 20 日から 5 月 2 日まで A.C.A. ギャラリーで、30 名 44 点の作品を展示した邦人美術展覧会が、紐育新報社後援で再び開催される〔表 8-2〕。『紐育新報』には「昨年私ども美術家団体を中心に一般同胞諸君の作品を蒐めて所謂『同胞美術展』を開催致したところ各方面に多大の反響を呼び起し、邦人文化の紹介に尠からざる効果あり」「今年度は更にその趣旨を徹底する為に一層規模を拡大して諸君の自信ある作品を募集致す次第であります」とあり³⁰、日本人の文化を紹介するという展覧会開催の趣旨が明確である。このことは、ハーマン・バロンが 1936 年の邦人美術展覧会を A.C.A. ギャラリーで開催した他国の芸術を奨励した展覧会の一つだと位置づけていることからわかる³¹。また『タイムズ』では展示された「いくつかの作品はアメリカン・シーンやフランスのモダニズムの影響が見られるが、ほとんどの作品は東洋的な部分を保っており、大変興味深い」とし、国吉康雄やトーマス永井の作品に見られる画家の個性や、澤田美喜のアカデミックな作品、鈴木盛の作品には構成のセンス見られる超現実的な点を指摘している。また、日本の水彩版画の技法を取り入れた野路オリヴァーの作品や野村浩達の山の眺望は東洋風な屏風だと指摘している³²。そして『ポスト』では、「この展覧会は現在の伝統の横断面を展示している」とあり、その中には小室ディヴィットのアカデミックな肖像画や、社会の変化を抽象的に描いた鈴木盛の作品、野村浩達の東洋風な作品があると述べており³³、芸術作品に表れた東洋風な画風を指摘するとともに日系二世の作品を高く評価している。さらに『紐育新報』では展示された作品のうち、総領事館書記生の野村浩達の作品は「お得意の南画にリンとした墨痕のすがすがしい気品をたたえ、色彩画に新奇軸を示している」と東洋風の技法を評価している。そして日系二世の画家の作品は、玄ポール(Hyun Paul)の《フルートを吹く男(Man With Flute)》は「東洋的な太い線のうちに新らしい構図をうみ出し美しいリズムに波打っている」。また中野ケーネスの《クイーズボロ・ブリッジ(Queensborough[sic] Bridge)》は「日本画的な柔に感じて、橋下を流れゆく渡舟の哀愁と、

水面に落ちる光と影を巧みに拾っている。落ちついた佳作である」。このほかにも野路オリヴァーの《釣り船(Fishing Crafts)》は「散在する魚舟の群と水面に引く美しい影の交錯に澄んだリズムをたたえ、日本画の繊細な感じを出している」と、日系二世の作品に表れた東洋的な要素を指摘している³⁴。

このように 1936 年の邦人美術展覧会は国吉康雄や石垣栄太郎などアメリカの画壇で活躍する画家と澤田美喜や井上商務書記官夫妻、野村浩達といった官吏の作品、そして日系二世の作品が展示されており、その中でも日本画と洋画の両方の要素が表れたものとして特に日系二世の作品が評価されたのである。また『紐育新報』には「来年の邦人展に第二世新人諸氏の雄躍を期待」するとあることから³⁵、この後も邦人美術展覧会が開催されることを期待している。

おわりに

1935 年と 1936 年に紐育新報社後援で開催された邦人美術展覧会は、東西の文化の融合を説き、日米両方の社会に大きな影響を与えた。しかし 1937 年以降はこのような展覧会が開催されていない。その理由として考えられるのは、1936 年の邦人美術展覧会が開催される直前に結成された、アメリカ美術家会議があるだろう。反戦・反ファシズムを掲げたこの美術家の団体の結成にはジョン・リード・クラブが尽力しており³⁶、1936 年 2 月 14 日に開かれた結成集会には国吉康雄、石垣栄太郎、保忠蔵といった邦人美術展覧会の中心的役割を担っていた日本人画家が参加している³⁷。また当時の日本政府は日本人が共産主義の活動に関わることを懸念しており、ニューヨーク在留の共産主義活動家のリストの中にはジョン・リード・クラブやアメリカ美術家会議で活動していた石垣栄太郎、臼井文平、中川菊太、清水清、保忠蔵、野田英夫の名がある³⁸。ニューヨークで活動する日本人画家がリベラルな思想と反戦・反ファシズムを掲げるアメリカ美術家会議に傾倒していったことは、画家たちと日本人社会の決裂を意味していたといえよう。それだけではなく邦人美術展覧会の会場として使用した A.C.A. ギャラリーは、この後アメリカ美術家会議が主催する展覧会を度々開催している。1936 年以降、リベラルな政治的活動に日本人画家が関与したことに加えて、展示施設の確保が難しくなったため、1937 年以降、紐育新報社主催の邦人美術展覧会の開催は困難になったのだろう。この後、国吉康雄と石垣栄太郎、保忠蔵は、アメリカ美術家会議の展覧会に出品し、同組織で势力的に活動している。また 1937 年には、市民権がない事を理由にアジア系画家が WPA のプロジェクトを解雇されたことに対する抗議の展覧会がアメリカ美術家会議とアーティスト・ユニオン(Artist Union)、WPA の市民委員主催で開催される³⁹。そして 1938 年には、市民権が無い一世の日本人画家が、ニューヨーク市主催の美術展覧会で、邦人美術展覧会を開催している⁴⁰。その一方で二世の画家は、1931 年に日本倶楽部が後援して設立された東西倶楽部の主催で 1937 年と 1939 年に二世画家の展覧会をインターナショナルハウスで開催する⁴¹。

1930 年代に開催された紐育新報社後援の邦人美術展覧会は、アメリカで美術を学び当地

の画壇で活躍する一世の日本人画家とアメリカで生まれ市民権を有する日系二世の画家や官吏など、ニューヨークに在留する様々な立場の日本人の作品を展示したのだ。このように画業を本業にしないアマチュアの画家の作品と美術家の作品を同時に展示は、それまでに類を見ない特異な企画だった。また、同展覧会は、不況下でリベラルな思想に傾倒する日本人画家を同胞社会に引き留め、アメリカに暮らす在留日本人の連帯を図ろうとする、日本人会の文化外交政策が背景にあったのだ。だが、この後、ニューヨークの日本人画家たちは、1930年代後半のアメリカで、それぞれの立場や思想により発表の場を異にしていくのだ。

¹ 安来正博「資料に見る戦前の渡米画家たち—その活動の軌跡」『アメリカの中の日本 石垣栄太郎と戦前の渡米画家たち』(展覧会図録)和歌山県立近代美術館 (1997年11月11日)、57-64。

² 「日本人美術協会の絵画研究会」『紐育新報』1929年11月2日。

³ 「当地に珍しい失業画家展」『紐育新報』1932年6月1日。

⁴ 石垣綾子『海を渡った愛の画家 石垣栄太郎の生涯』御茶の水書房(1988年7月25日)、139。

⁵ 「春浅き如月の初旬邦人画家作品展覧」『紐育新報』1934年1月27日。

⁶ 「洋画家展覧会沙汰やみ」『紐育新報』1934年2月7日。

⁷ 「懸命の重任を痛感して最善を尽さむと大使の声明」『紐育新報』1934年2月14日。

⁸ 「日本美術協会寄附の作品抽籤」『紐育新報』1934年2月17日。

⁹ 「邦人美術展作品募集」『紐育新報』1934年12月29日。

¹⁰ 「ラテン区の春二月…邦人美術展を開催 新進気鋭の二世美術家も参加」『紐育新報』1935年1月19日。

¹¹ 広告欄「邦人美術展覧会」『紐育新報』1935年2月9日。

¹² 清水清「邦人美術展(下)」『紐育新報』1935年2月20日。このほかにも「美術展覧会の出品五十点」『紐育新報』1935年2月6日に作品の詳細がある。また国吉康雄の《テーブルの上の静物》が『紐育新報』1934年3月3日に、臼井文平の《風景》〔図8-3〕と《室内》〔図8-4〕が *New York Times*, October 14, 1934 と *New York Post*, February 16, 1935 に、永井トーマスの《室内(Interior)》〔図8-5〕が *New York Sun*, February 16, 1935 にそれぞれ図版が掲載されている。

¹³ *Salons of America. Spring Salon. (Exhibition catalogue). (New York, The American Art Association Anderson Galleries. 1931).*

¹⁴ 「美術展講演ジャパナイト盛況」『紐育新報』1935年2月20日。

¹⁵ 角田柳作「異国情緒と回顧主義」(1)~(4)『紐育新報』1935年2月27日; 3月2日; 3月6日; 3月9日。

¹⁶ 〔表8-1〕参照。

¹⁷ “Art Brevities” *New York Times*, February 15, 1935.

¹⁸ “Going on Today” *New York Herald Tribune*, February 15, 1935.

¹⁹ Herman Baron. “Writings and Notes: “A.C.A. Uptown” Herman Baron papers, circa early 1950s. unpublished typescript, A.C.A. Galleries records, 1917-1963. Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.

²⁰ “Exhibit by Japanese Artists in New York” *New York Post*, February 16, 1935

²¹ “East Meets West” *New York Sun*, February 16, 1935.

²² “Japanese Art; Work of Local Orientals in Exhibited” *New York World Telegram*, February 16, 1935.

²³ 「美術展覧会に就て アデレイド・リチャードソン投」『紐育新報』1935年2月20日。

²⁴ 「米国々民に呼び掛ける齋藤新大使の放送」『紐育新報』1934年2月21日。

²⁵ Ibid.

²⁶ 齋藤博の演説は Saito Hiroshi. *Japan's policies and purposes, selections from recent addresses and writings*. (Boston, Massachusetts, Marshall Jones Co. 1935) に詳しい。

²⁷ 「我等の大使の二大演説 日本と米国と支那 (上)」『紐育新報』1935 年 2 月 13 日。

²⁸ 「我等の大使の二大演説 日本と米国と支那 (下)」『紐育新報』1935 年 2 月 20 日。

²⁹ 「文化の相互的交換は理解と友誼の恒久的基礎」『紐育新報』1934 年 5 月 26 日。

³⁰ 「邦人美術展作品募集」『紐育新報』1936 年 3 月 21 日。

³¹ Herman Baron. “Writings and Notes: McCarthyism and American Art articles”. Herman Baron papers, circa early 1950s. unpublished typescript, A.C.A. Galleries records, 1917-1963, Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.

³² “In Local Art Galleries” *New York Times*, April 26, 1936.

³³ “The Critic Takes a Glance Around the Galleries –Local Japanese Exhibit” *New York Post*, April 25, 1936.

³⁴ 石垣綾子「邦人美術展」(A)～(C)『紐育新報』1936 年 4 月 25 日; 4 月 29 日; 5 月 2 日。

³⁵ Ibid.

³⁶ Herman Baron. “Writings and Notes: A.C.A. Uptown”. Herman Baron papers, circa early 1950s. unpublished typescript, A.C.A. Galleries records, 1917-1963, Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.

³⁷ American Artists' Congress. *First Annual Membership Exhibition American Artists Congress*. (Exhibition catalogue). (New York: Rockefeller Center. 1937) では国吉康雄、石垣栄太郎、保忠蔵、鈴木盛の出品が確認できる。

³⁸ 外務省. 1935. 「米国ニ於ル共產主義運動ニ関スル件 (1935 年 10 月 22 日)」『各国共産党関係雑件/米国の部 (属領地ヲ含ム) 第二巻 1』外務省外交史料館所蔵。

³⁹ 「日支ルンペン美術展覧会」『紐育新報』1937 年 9 月 8 日; 「今年も亦邦人画展」『日米時報』1937 年 9 月 18 日。

⁴⁰ 「邦人画家作品展覧」『紐育新報』1938 年 6 月 25 日; 「市主催の美術展」『日米時報』1938 年 6 月 25 日。

⁴¹ 「東西倶楽部主催の美術展覧会」『紐育新報』1937 年 3 月 27 日; 「第二世美術展覧会 精彩奕々たる若き人々の力作」『紐育新報』1939 年 3 月 18 日。

第9章

世界恐慌期の日本人画家 —ニューディール政策とリベラルな美術家の活動—

はじめに

1929年の秋のニューヨーク株式市場の株価大暴落により世界恐慌が始まる。本章では、世界恐慌下のアメリカの美術界と日本人画家について以下の4つ団体を取り上げる。まず、1929年にリベラルな思想を持った文化人が集まって結成された、ジョン・リード・クラブの美術展覧会。次に、連邦政府が打ち出した雇用促進政策の Work Progress Administration(WPA)とニューヨーク市が不況政策の一環として打ち出した、ニューヨーク市美術委員会の美術展覧会。さらに、1936年にジョン・リード・クラブのメンバーを中心に、反戦・反ファシズムを掲げて結成された、アメリカ美術家会議での日本人画家の活動を考察する。

これらの団体が隆盛を極めた1930年代後半は、日本の中国侵入とファシズムの拡大に伴い、世界情勢が悪化していた。同時期のニューヨークでは、日本に生まれ、アメリカで創作活動を始めた日本人画家が当地で開催された美術展覧会に参加している。中でも特筆すべきは、1937年9月にアメリカ美術家会議とアーティスト・ユニオン、WPAの市民委員会が主催した「日本人と中国人の合同」展覧会と、1937年12月に開催されたアメリカ美術家会議の「世界の民主主義を防衛する、スペインと中国の人民に捧ぐ」展、そして1938年6月のニューヨーク市美術委員会主催の展覧会に日本人画家の団体が参加した展覧会だ。

このうち「日本人と中国人の合同展覧会」は、市民権がないアジア系画家がWPAから解雇されたことへの抗議を意図した展覧会だった。また「世界の民主主義の防衛、スペインと中国の人民に捧ぐ」展は、日本の中国侵入とスペインの内乱に抗議し、反戦・反ファシズムを訴えたもので、どちらもアメリカ美術家会の後援で開かれた政治色の強い展覧会だった。いっぽう、三つ目のニューヨーク市美術委員会の展覧会は、日本人画家のグループが、市の美術展覧会に参加したもので、前述の二つの展覧会とは趣旨が異なる。

そこで本章は、世界恐慌下のニューヨークの美術団体における日本人画家の活動を、新聞や雑誌、各団体が作成した公文書や私文書の調査から明らかにする。そして、1937年にアメリカ美術家会議主導のもとで開催された「日本人と中国人の合同展覧会」と「世界の民主主義の防衛を防衛する、スペインと中国の人民に捧ぐ」展、さらに1938年のニューヨーク市美術委員会の展覧会での日本人画家の展覧会の様相と、展覧会が開催された意義を解明する。

1. ジョン・リード・クラブと日本人画家(1929-1935)

1930年代のニューヨークで、画家たちはパトロンやギャラリー、美術館の援助を失い生活は困窮した。そのため芸術家の中には、労働運動やプロレタリア運動に傾倒する者もあり、

1929 年 11 月には、リベラルな思想を持った作家や画家を中心に、ジョン・リード・クラブが結成される¹。

同クラブが主催した美術展覧会には日本人画家も加わっている。そこで、まずはジョン・リード・クラブでの日本人画家の活動を新聞記事からたどる。

ジョン・リード・クラブが主催した最初の展覧会は、1929 年 12 月だと考えられる²。ここでは、アート・ヤング(Art Young)、ルイス・ロゾウィック(Louis Lozowick)、ウィリアム・グロッパー(William Gropper)らと共に石垣栄太郎が出品している³。さらに石垣栄太郎は、1932 年 1 月 16 日から 31 日のウィリアム・シーゲル(William Siegel)との合同展覧会にも、《8 月 1 日》と《リンチ》を含めた合計 6 点を出品している⁴。これらの作品を『タイムズ』では、「アメリカ人よりもアメリカ的で東洋風な要素や不調和は示唆していない」と述べている⁵。また『トリビューン』は、「彼の作品は、現代生活の具体例で、警察の踏み込みを描いた作品は、優れた構図で当時の様子を巧みに描いた真実の強烈な記録だ」と写実性を評価している⁶。このほかにも『ニュー・マッセス(New Masses)』には《アメリカのコサック》の図版が掲載されたことから⁷、石垣栄太郎はジョン・リード・クラブ結成当初から精力的に活動していたことが明らかだ。

また同クラブは、日本人労働者文化同盟とも関係の深い団体だった。片山潜の社会主義研究会から発展した日本人労働者文化同盟は、1932 年 2 月 20 日、ジョン・リード・クラブで発会式を開催している。当夜は、石垣綾子の会務報告、西村義雄の帝国主義戦争への反対演説、中国人労働者クラブのチャンによる日本の帝国主義打破を説いた演説や、藤森成吉の「ブルジョアに抗戦するプロレタリア文化」と題した講演があった⁸。発会式の様子から、日本人労働者文化同盟は、ジョン・リード・クラブとも関係の深い、リベラルな思想を持った人々の交流の場だったと考えられる。この後も文化同盟では、国吉康雄や⁹、石垣栄太郎の美術講演会が開かれており¹⁰、1932 年 11 月には日本人画家のグループ展も開催している¹¹。このことから、リベラルな思想を持った日本人画家が、労働者文化同盟とジョン・リード・クラブの双方で活動していたことが明らかだ。

以後、ジョン・リード・クラブの展覧会には、石垣栄太郎を含む、数名の日本人画家が出品している。例えば、1932 年 11 月 7 日から 11 月 25 日の「プロレタリアと急進的なジョン・リード・クラブの 20 人の画家 (Twenty John Reed Club Artists on Proletarian and Revolutionary)」展には、ウィリアム・グロッパー、ルイス・ロゾウィック、ウィリアム・シーゲルと共に、石垣栄太郎が《ベンチの上 (On the Bench)》を出品している¹²。また 1933 年 1 月 26 日から 2 月 16 日の「美術作品における社会的視点(Social View Point in Art)」展には、石垣栄太郎の《団結 (Solidarity)》、保忠蔵の《大衆の力 (Force of the Masses)》、《15 丁目からユニオン・スクエア(Union Square from 15th St.)》、山崎近道の《ユニオン・スクエア(Union Square)》、《コロンブス・サークル(Columbus Circle)》が出品されている。同展を企画したジェイコブ・ブルック(Jacob Burck)は、「絵画は現代社会の人間のドラマであり、作品に描かれた階層の苦闘を広く社会全体に訴える必要がある」と開催の意図を述

べている¹³。また、『トリビューン』では、失業者の行進やニグロの迫害、日本の軍国主義をテーマにした作品の中でも、保忠蔵の《大衆の力》を賞讃している¹⁴。これ以後も、1933年12月8日から1934年1月7日の「飢饉とファシズムと戦争(Hunger Fascism War)」展では、石垣栄太郎の《私は話さない(I will not Speak)》、野田英夫の《デモンストレーション(Demonstration)》、《アラバマ(Alabama)》、《6番街の朝(Morning at Sixth Avenue)》、《崩壊(Break Up)》、《混乱の時代(Chaotic Age)》が出品されている¹⁵。さらに1934年6月の「芸術におけるニグロとモダンシアター (The Negro in the Art and the Modern Theatre)」展にも、石垣栄太郎、保忠蔵、山崎近道、野田英夫が出品している。『ディリー・ワーカー』では「保忠蔵の作品は毛筆とインクで仕上げた、最も興味深い大きな壁画で、野田英夫の作品は見事な壁面パネルだ。そして帝国主義擁護に対して群衆の反乱を描いた石垣栄太郎の大きな作品は、昨年の反帝国主義展にも出品されたものだ。また山崎近道の水彩画は素朴な特徴と神経質に制作されている」と¹⁶、日本人の作品を評価している。そして、1934年11月の「革命の最前線 1934 (Revolutionary Front 1934)」展には、山崎近道が《日本人労働者クラブ(Japanese Worker's Club)》を出品しており¹⁷、同展覧会について『タイムズ』は、「昨年の展覧会よりも作品の質が向上し、プロパガンダや革命的アイディアの芸術的功績が前進した」展覧会だと述べている¹⁸。そして1935年11月に開かれた「資本主義者の危機 (Capital Crisis)」展について『ポスト』は、社会主義を表した展示で、保忠蔵と石垣栄郎の作品が賞讃されている¹⁹。

このように、ジョン・リード・クラブは、日本人画家にとって重要な活動の場だったのだ。また、同クラブが主催した美術展覧会は、画家たちのリベラルな思想を発信する機会となり、1936年2月にはジョン・リード・クラブを中心に、アメリカ美術家会議が結成される。

2. 世界恐慌と不況政策

2-1 WPA と日本人画家(1935-1937)

1929年に組織されたジョン・リード・クラブの展覧会に、日本人画家はリベラルな作品を発表していた。その一方では、連邦政府主導の雇用政策にも従事している。1933年に施行された Public Works of Art Project (PWAP)には、国吉康雄の斡旋で日本人画家も携わっており²⁰、同事業は1935年に Work Progress Administration(WPA)になる。では、WPAにおける日本人画家の活動を以下に述べていく。

WPAは政府主導の下で芸術家に公共施設の壁画などの制作を依頼し、失業者を援助する目的で開始した雇用促進政策だった。行政官吏局(General Series Administration)の記録によれば、1935年から国吉康雄、石垣栄太郎、鈴木盛、保忠蔵、山崎近道、臼井文平、門脇ロイ、雨宮要生、トーマス永井、中溝不二、土井勇がWPAに従事していたことが判明する²¹。

WPAには壁画やイーゼル、ポスター部門が設けられおり、このうち壁画部門では、石垣

栄太郎がハーレム裁判所にアメリカの歴史をテーマにした壁画を制作していたことは周知の通りだ²²。だが、このほかにも鈴木盛がウィラード・パーカー病院の待合室の壁画を制作したことはあまり知られていない。WPA の依頼を受けた鈴木盛は、伝染病との闘いの歴史をテーマに、パスツール(Louis Pasteur)やジェンナー(Edward Jenner)、そして野口英世を配置した壁画を制作した〔図 9-1〕²³。その完成を『紐育新報』は、鈴木盛は「名誉あるこの選に入るやあらゆる面から故博士を研究し約一年余を費したが、無名の新進画家をして想ふが儘に描かしたと云ふことは驚異とされて居る」と伝えている²⁴。

また絵画部門は、フェデラル・アート・プロジェクト・ギャラリーで展覧会を開催している。この展覧会の出品目録からは、1936 年 1 月 27 日から 2 月 19 日の第 2 回展に、門脇ロイの《室内 (Interior)》、保忠蔵の《夏の午後 (Summer Afternoon)》が²⁵、そして 1936 年 4 月 30 日から 5 月 20 日の第 7 回展には国吉康雄の《綱渡りの曲芸師(Tight Rope Performer)》、保忠蔵の《セントラルパーク南(Central Park South)》〔図 9-2〕、中溝不二の《リードバード(Reed Birds)》、《空中ぶらんこ(Trapeze)》、《雁の飛び立ち(Canada Honker Rising)》が出品されたことが判明する²⁶。このような作品は公共施設にも寄付されており、1936 年から 1940 年の間に寄付された作品のリストによると、管見の限りでも 9 名 127 点の日本人画家の作品が約 40 の学校や病院に送られたことが判明する²⁷。

このように WPA から美術作品を寄付された施設の一つに、ニューヨーク州リビングストンのマウント・モリス結核療養所があった。1936 年に開設された同施設には、1930 年代後半に約 240 点の WPA の作品が贈られた。そして 1971 年に療養所が閉鎖された後は、州政府が建物と所蔵作品を買い取り、現在はニューディール・ギャラリーとして、WPA の作品を展示している²⁸。所蔵作品には、中川菊太の《丘の家(House on a Hill)》〔図 9-3〕、《静物 花(Flower Still Life)》〔図 9-4〕、中溝不二の《アメリカンウッドコック(American Wood Cock)》〔図 9-5〕、《クジャク(Peacock Pheasant)》〔図 9-6〕、《キツツキ(Wood Pecker)》〔図 9-7〕、雨宮要生の《心地よい港(Snug Harbor)》〔図 9-8〕、門脇ロイの《郊外の工事(Country Construction)》〔図 9-9〕、《日本庭園 (Japanese Garden)》〔図 9-10〕、《日本の植物 (Japanese Plant)》、〔図 9-11〕、《フラワー・アレンジメント (Flower Arrangement)》〔図 9-12〕、《静物 花 (Flower Still Life)》〔図 9-13〕²⁹、永井トーマスの《野原 (Greenfields)》〔図 9-14〕、《小さな入り江 (Small Inlet)》〔図 9-15〕、《静物と模様のある布(Still Life with Figured Cloth)》〔図 9-16〕がある³⁰。石垣栄太郎と鈴木盛が制作した壁画が、歴史をテーマにしたものだったのに対して、これらの絵画作品は、植物や野鳥、風景を描いた、穏やかな画風の油画、水彩画、版画だ。以上のことから、WPA では市民権がない日本人画家も、アメリカの画家と同様に美術作品の制作に従事していたことが判明する。

2-2 ニューヨーク市主催美術展覧会(1934-1938)

連邦政府の雇用促進政策のほかにも、ニューヨーク市が 1934 年に打ち出した市民美術委員会(Municipal Art Committee)は、画家たちにとって重要な事業だった。ここでは 1934

年 2 月 28 日に、ラ・ガーディア市長の呼びかけでニューヨーク市民美術展覧会(First Municipal Art Exhibition)がロックフェラー・センターで開催される³¹。政府主導の WPA は雇用促進を目的にした政策だったが、市民美術委員会は、作品の展示を通して街を活性化させると共に、社会の関心を刺激し、美術作品に対する人々の購買意欲の促進を目的にした文化事業だった³²。約 400 名が参加した同展覧会には、国吉康雄の《サーカスの玉乗り (Circus Ball Rider)》、《赤い牛 (Red Cow)》、《彫刻型とグレープ (Sculpture Mold and Grapes)》、土井勇の《休息 (Repose)》、《日の出 (Dawn)》、《赤いベレー帽 (The Red Beret)》、《マウイと太陽 (Maui and the Sun)》が展示された³³。ニューヨーク市民美術展覧会のレポートによれば、展覧会の開催後、一週間で売却された作品の総額は\$10,000 にのぼる。購入者には、ラ・ガーディア市長やジョン・D・ロックフェラー、ニューヨーク近代美術館の名があることから、展覧会の盛況振りが窺える³⁴。しかし、会場となったロックフェラー・センターでは、同展が開催される直前にメキシコ人画家ディエゴ・リベラ(Diego Rivera)の壁画《十字路に立つ人 (Man, at the Crossroads)》が破壊された³⁵。これに抗議した画家たちは、美術委員会 (Artists' Committee of Action) を組織して、ムニシパル・アート・センターとムニシパル・アート・ギャラリーの開設を市長に提案する³⁶。そこで 1934 年 6 月、ラ・ガーディア市長は、政治評論家であり有力な事業家でもあったヘンリー・ブリキンライド夫人(Henry Breckinridge)に働きかけ、美術、舞台、音楽といった広範囲にわたる芸術の普及事業としてニューヨーク市美術委員会を発足する。さらに美術部門の副委員に、著名な芸術家である、レオン・クロール(Leon Kroll)、ジョン・スローン、ルイス・ロズウィックらを採用し、1935 年にはテンポラリー・ギャラリー(53 丁目西 62 番地)の設置を決める。4 階建てのギャラリーは、フロアーごとにグループ展を開催し、マクドーウェル・クラブ(55 丁目西 108 番地)³⁷と同様の展示方針が取り入れられた³⁸。

この展覧会には、国吉康雄も出品を希望したが、出品資格には、アメリカの市民権を持つ者、という条項が設けられており、市民権がない日本人画家には出品資格がなかった³⁹。しかし、国吉康雄は、アメリカに長く住み、当地の美術界で確固たる地位を築いていたことから、彼の出品を巡り、条項は改正される。そして、これ以後ニューヨーク市美術委員会の展覧会には、日本人画家も作品を発表している⁴⁰。

では、ニューヨーク市美術委員会の展覧会に、日本人画家のいかなる作品が展示されていたのか、展覧会の出品目録と新聞記事を手掛かりにたどる。まず、第 2 回展 (1936 年 1 月 21 日から 2 月 1 日) には、国吉康雄が《鏡 (Mirror)》〔図 9-17〕と《造花とほかのもの (Artificial Flower and Other Things)》〔図 9-18〕を出品している⁴¹。これについて『タイムズ』では、「ダウントOWN・ギャラリーの重要なメンバーの一人である国吉康雄は、今回の展覧会に素晴らしい人物画《鏡》と大型の静物画《造花とほかのもの》を出品している」とあり⁴²、国吉康雄をアメリカの美術界の重要なメンバーと位置づけている。また、第 6 回展 (1936 年 4 月 8 日から 4 月 26 日) には、山崎近道が《昼寝 (The Noon Day Rest)》を出品しているし⁴³、第 8 回展 (1936 年 5 月 20 日から 6 月 7 日) には、石垣栄太郎の《ウ

オー・トラクター (War Tractor)》、鈴木盛の《秋 (Autumn)》、《床屋 (Barbershop)》、《近代文化 (Contemporary Culture)》、そして 1936 年の紐育新報社後援の邦人美術展覧会にも出品していた、日系二世の中野ケーネスの《ベティの頭部 (Head of Betty)》、《フィリスの肖像画 (Portrait of Phyllis)》、《習作 (A Study)》、草信ムレーの《アメリカン・シーン (American Scene)》、《裸体画 (Nude)》、《サザバドス博士 (Dr. Szabados)》が出品されている⁴⁴。第 8 回展について、『タイムズ』では、「中野ケーネスと草信ムレーの作品が展示された 2 階の展示室では、将来有望な作品が展示されている」とある。また、「第 3 展示室のウィリアム・グロッパーと同じグループに展示された、石垣栄太郎の作品は、野心的で、人物の構図などが優れている」と評価している⁴⁵。そして 9 回展 (1936 年 6 月 10 日から 6 月 28 日) に出品された⁴⁶、保忠蔵の《平和な谷 (Peace Valley)》〔図 9-19〕について⁴⁷、『タイムズ』では、緑の影の習作だと評価している⁴⁸。この作品は、タイトルと新聞記事から推察すると、1935 年のシカゴ国際美術展に出品されたものと同一のものだと考えられる⁴⁹。このほかにも、同展覧会のカタログによれば、第 11 回展 (1936 年 7 月 22 日から 8 月 10 日) に、中川菊太とトーマス永井。第 16 回展 (1936 年 12 月 2 日から 12 月 20 日) に、中溝不二が出品している⁵⁰。また、第 20 回展 (1937 年 3 月 17 日から 4 月 4 日) には⁵¹、門脇ロイ、トーマス永井、中川菊太が出品しており、『タイムズ』では、「第 3 展示室のローランス・レブダスカと同じグループに門脇ロイの作品があり、2 階の展示室のモダンなグループに中川菊太の《F.D.R. の哲学 (F.D.R. Philosophy)》とトーマス永井の《荷降ろし (Unloading)》が展示されている」。このうち、中川菊太の《F.D.R. の哲学》は、「岩の頂上から二つの英雄の像を彫り出す彫刻家を示している」とあることから、これらの作品はニューディール政策をテーマにしたものだと推察できる⁵²。ここで取り上げた画家のうち、中野ケーネスと草信ムレー以外は、アメリカの市民権がない一世だが、市民権の有無に関わらず、彼らもニューヨーク市の美術展覧会に作品を発表している。

以上のように、世界恐慌下のニューヨークで、市民権がない一世の日本人画家は、政府が打ち出した雇用促進政策の WPA とニューヨーク市民美術展覧会の両方でアメリカの画家と同様に作品を制作し、アメリカ社会に貢献していたのだ。

3. アメリカ美術家会議

3-1 アメリカ美術家会議(1936 年-1937 年)

世界恐慌のニューヨークで画家たちは、ニューヨーク市美術委員会の展覧会や WPA に従事し、生活の糧と創作活動の場を得ていた。また一方では、労働運動やヨーロッパで拡大するファシズムを懸念する動きから、画家たちは社会的な活動へと行動をひろげていく。1936 年 2 月には、ジョン・リード・クラブの画家を中心に、「反戦・反ファシズムと文化の防衛」をスローガンにして、アメリカ美術家会議が結成された。結成の「呼びかけ」には、国吉康雄、石垣栄太郎、トーマス永井、鈴木盛、保忠蔵、イサム・ノグチ、土井勇、山崎近道の名がある⁵³。展覧会委員長を務めた国吉康雄は、結成当初から幹部会に出席し、展覧会の開

催に尽力している⁵⁴。

アメリカ美術家会議は、1936年から1941年の間に年次展覧会と企画展を合計22回開催している⁵⁵。このうち年次展覧会は、作品の発表を通して美術制作の威信をかけた大規模な展覧会だった。いっぽう企画展は、組織の資金調達を目的にした展覧会だった⁵⁶。

団体の資金調達のために開かれた企画展の中でも、特色ある展覧会に競作展がある。1936年の第1回競作展（1936年6月15日～6月30日）は、A.C.A.ギャラリーのオーナーである、ハーマン・バロンの依頼により開催された⁵⁷。これは新進画家の発掘を目的にした展覧会で、入選者にはA.C.A.ギャラリーで個展開催の権利が与えられた。200名を越す応募作品には、リベラルな作品や、社会を風刺するものが目立ったが、審査委員のマックス・ウェーバー(Max Weber)、スチュアート・デーヴィス(Stuart Davis)、ヒューゴ・ゲラート(Hugo Gellert)、国吉康雄が選んだのは、鈴木盛の《彼女の過去(Of Her Past)》〔図9-20〕だった⁵⁸。競作展に入選した鈴木盛は⁵⁹、1936年11月15日から29日までA.C.A.ギャラリーで個展を開催する。個展の開催に際して、ハーマン・バロンは「鈴木作品は成熟した、個性あるもの」であり、賞を受賞するにふさわしいと絶賛している⁶⁰。そして石垣栄太郎は、「大胆なアブストラクトな構図、新鮮な強烈な色彩、光、影の極端な対象がすべてがモダンな感じである。画面がテクスチャを出すために相当の苦心をしているので氏独特の技術が明確に認められる」と批評したうえで、展示された作品の中では『花瓶のある静物』、『マーポリックへの途』⁶¹、『秋』等々落ち付きのあるチャーミングな作品である『今代文化』、『山の声』、『自然と理性』、『戦争』⁶²、などの象徴的なものよりも写実的なものに底力を感じさせるのである。シンボリックなものでは『彼女の過去』が一番好きだ」と、シュールレアリスムの斬新な技法と色彩を評価している⁶³。これらのことから、アメリカ美術家会議の第一回競作展で、日本人画家が入選したことは、大変名誉なことだったに違いない。石垣栄太郎は、ニューヨークで活動する日本人画家は「現在の商品価値を度外視して、より高い、より純な画を描くといふことに重点を置き、その他に目的意識を持っていないので、その題材の如何を問はず豊饒な芸術味に富んでいる。アメリカ画壇から邦人画家達が多大の敬意をはらはれているのもその為め」だと述べている⁶⁴。以上のことから、当時のアメリカ美術界で、日本人画家の作品は技法と芸術的センスの両方が高く評価されていたことが窺える。

展覧会委員長を務めた国吉康雄は、自身も年次展覧会や企画展に出品している。例えば、1936年12月の「今日のアメリカ(America Today)」展に「《海岸の板敷遊歩道にて(From the Board Walk)》」⁶⁵を出品しているし、風刺画を展示した、1937年2月19日から3月5日の「フレーム・アンド・ハング(Framed and Hung)」展にも出品している⁶⁶。そして1937年4月16日から29日まで開催された、第1回年次展覧会には、国吉康雄をはじめ、石垣栄太郎、保忠蔵、トーマス永井、鈴木盛、山崎近道が出品している⁶⁷。

以上取り上げてきた、WPA、ニューヨーク市美術委員会、アメリカ美術家会議は、それぞれ異なる目的をもった団体だ。しかし、ニューヨークで活動した多くの画家が、これらの組織に重複して関わっていたことは重要な点だ。特筆すべきは、WPAとニューヨーク市美

術委員会は、公共事業だったのに対して、アメリカ美術家会議は画家たちによって組織されたことだ。つまり、市民権がない一世の日本人画家とアメリカの画家との結束は、アメリカ美術家会議の活動を通して、より親密になったと考えられよう。この後、アメリカ美術家会議は、1937年7月に興ったWPAのアジア系画家の排斥と、それに抗議する展覧会を開催している。

3-2 WPA解雇(1937年)

日本人画家は、ニューヨーク市が主催する展覧会で作品を発表し、またWPAにもアメリカの画家と同様に従事していた。しかし1937年7月、WPAはアメリカの市民権がないすべての画家を解雇する⁶⁸。事実上これは、アジア系の画家を対象にした人種差別的なものであった。行政管理局の雇用記録によれば、雨宮要生、トーマス永井、中溝不二、保忠蔵がそれぞれ1937年7月15日に、そして山崎近道が1937年7月16日にそれぞれ解雇されたことが判明する⁶⁹。

この不当な解雇に対して、アメリカ美術家会議は1937年7月15日の夜に公開会議を開いている。出席者は、スチュアート・デーヴィス、ヒューゴ・ゲラート、ヘンリー・グリーンテンカンブ(H. Gltenkamp)、ハリー・ゴットリーブ(Harry Gottlieb)らアメリカ美術家会議の幹部と石垣栄太郎、保忠蔵を含む19名だ。ここで保忠蔵は、「今日11名の日本人画家と1名の中国人画家がFAPから解雇された、東洋人画家に対する特別な委員会が必要だ」とアジア系画家の救済を訴えており、アメリカ美術家会議は、WPAの外国人画家の解雇に抗議することを決議している⁷⁰。この会合が、如何に重要な会議だったかは、この後、1937年7月から9月にかけて、A.C.A.ギャラリーでWPAの不当な解雇に抗議する展覧会が3回開催されたことで明白だ。まず、解雇通知が出された直後に「ピンク・スリップス・オーバー・カルチャー(Pink Slips Over Culture)」展(1937年7月19日から7月31日)が開催されている。ここには、石垣栄太郎の《クー・クラックス・クラン(K.K.K)》、保忠蔵の《牧草地の小屋(House on the Meadow)》、と山崎近道が出品している⁷¹。また、8月には「500人の画家のうち4人がW.P.A.から解雇された(4 out of 500 Artists dismissed from the W.P.A.)」展(1937年8月30日から9月11日)が⁷²、そして9月に「ニューヨーク 中国人と日本人画家(Paintings by New York Chinese-Japanese Artists)」展(1937年9月12日から9月26)が開催されている。初めの二つの展覧会は、出品目録の確認ができなため詳細は不明だ。また、三つ目の中国人と日本人画家の合同展覧会は、これまで新聞記事の調査から、「世界恐慌下で多くの日本人が、W.P.A.やアメリカ美術家会議に参加していたかを」示すものだったという指摘や⁷³、「アジア系差別に焦点をあてた」展覧会だと位置付けられており⁷⁴、展覧会の様相は不明だった。しかし、出品目録〔表9-1〕によると、この展覧会には14名33点の日本人画家の作品が展示されたことが判明する。このうち構図が判明する作品は、石垣栄太郎の《クー・クラックス・クラン》、保忠蔵の《ファイヤー・トラップ(Fire Trap)》〔図9-21〕がある。このほかにも山崎近道の《昼寝(Noonday Rest)》

は第7回ニューヨーク美術委員会の展覧会に出品した作品、そして門脇ロイの《ジョージ・ワシントン・ブリッジ (George Washington Bridge)》は、第28回ニューヨーク市美術委員会の展覧会に出品した《リバーサイド・ドライブ (Riverside Drive)》〔図9-22〕と同一作品だとそれぞれ推察できる。

ハリー・ゴットリーブは序文で、「市民権がないために W.P.A. から解雇されたにアジア系の画家は、私たちの文化的生活に重要な貢献をした。彼らはアメリカの美術館で作品を展示し、アメリカ人画家の組織のメンバーであり、アメリカ人として受け入れられてきた。この解雇は彼らの才能を奪っただけではなく、芸術家としての本質も否定するものである」と述べている⁷⁵。このことから日本人画家は、アメリカの美術界の重要なメンバーとして、受け入れられていたことが明らかだ。そして保忠蔵は、この展覧会の会期中に開かれたアメリカ美術家の幹部会議（1937年9月15日）で、「WPAの外国人解雇を抗議する集会に誰も来ない、しかし他の集会には来る。中国人や日本人に市民権を与えるために修正をアメリカ人が支援することが重要だ。アメリカ美術家会議はその運動を支援するべきだ」とアジア系画家の支援の重要性を訴えている⁷⁶。

『紐育新報』と『日米時報』では、この展覧会の開催を僅かに伝える程度だったが⁷⁷、ゴットリーブの序文を裏付けるかのように、英字新聞では大きく取り上げられている。例えば、『ニューヨーク・サン』では、「この展覧会には東洋風な要素が無いのが皮肉な特徴であり、西洋画の影響が作品のテーマにまで、くまなく表れている。素晴らしいシュールレアリストの鈴木盛の作品や、兵士を軽々と投げるバスクの女を描いた石垣栄太郎の作品にも西洋の影響が見られる。彼らは現代の社会問題を現代風に描いている。また保忠蔵は最もアメリカナイズされた画家で、写実的な《ジャージー・ステーション (Jersey Station)》と《ファイヤー・トラップ》がある。そして門脇ロイの《ジョージ・ワシントン・ブリッジ》は橋に向う道路の曲線が繰り返されている点が、リズムカルな効果になっており、独得の構図である。山崎近道、田川文治の作品はおおざっぱな描き方で鋭く特徴を描いている」と評価している⁷⁸。このほかにも『ワールド・テレグラム』では、「国吉康雄の有名な《座る女》とリトグラフ、石垣栄太郎のバスクの女を描いた二点の油絵がある、鈴木盛の作品は、昨年個展にあったものと類似がある。夏の風景の中に超現実主義的な白と茶の握られている手や未完成の像や壊れたマーブルの頭などが同じシンボルとして絵がかれている。彼の作品は一貫して優れており、初期の作品より色彩が強烈になっている」と指摘している⁷⁹。また『ディリー・ワーカー』では、「トーマス永井のグワッシュと水彩画に表れた巧みな技法」を評価している⁸⁰。

そして注目すべきは、同展覧会を取り上げた『ポスト』の記事だ。ここには、保忠蔵が解雇通知を抗議する一団の代表としてワシントンへ代表として赴いた際、「私たちの多くがアメリカの画家として 25 年から 50 年活動している。国吉康雄は日本人としてではなく、アメリカ人としてカーネギー・インターナショナル展に招待された。私たちはここに住み続けたいと思う。戦争になっても、先の大戦のようにアメリカ人として参戦するつもりである、

なぜ社会的な利益のために私たちは差別されるのか、私たちはアメリカ政府と同様に平和と文化に協調してここに住むつもりだ、だから私たちは不当に中国に侵入する日本の軍国主義を支持しない」と画家が明白に反戦を唱えたことを報じている⁸¹。

以上のことから、日本人と中国人の合同展覧会は、これまで理解されてきたように「アジア系差別に焦点をあてた」だけではなく、日本人画家による写実的作品やシュールレアリスムの作品が展示され、彼らがいかにアメリカナイズされているかを示した重要な展覧会だったのだ。さらに、この展覧会の開催が、日本の中国侵入と日中戦争の開戦と時期が重なったことも重要な点だ。同展覧会における抗議活動と日本人画家の参加は、彼らが日本の軍国主義に異議を唱え、市民権がない外国人でありながらも、長年、生活してきたアメリカを支持し、反戦、反ファシズムの立場をとる契機となったのだ。

3-3 「世界の民主主義の防衛スペインと中国の人民に捧ぐ」展(1937年)

日本人画家は、アメリカ美術家会議の展覧会や、ニューヨーク市民美術委員会の展覧会、WPAの活動を通して、アメリカの画家として認識されつつあった。しかし日本の中国侵入とファシズムの拡大が懸念される中、アメリカ社会で日本人は、市民権が無いことで厳しい立場にあった。そのような情勢の下で1937年12月に開催されたのが、「世界の民主主義を防衛するスペインと中国の人民に捧ぐ」展⁸²。出品目録によると同展覧会には、石垣栄太郎の《逃亡 (Flight)》〔図 9-23〕、保忠蔵の《日本を覆う軍国主義 (Militarism Over Japan)》〔図 9-24〕、鈴木盛の《戦争 (War)》〔図 9-25〕を含む138名142点の作品が展示され、石垣栄太郎は実行委員も務めている。これまで同展覧会の開催に、国吉康雄の展覧会委員は関与していないとされていたが⁸³、アメリカ美術家会議の議事録によると、国吉康雄は1937年5月に展覧会委員長を辞職していることが判明した⁸⁴。国吉康雄の後任として開催実行委員長を務めたグリーンテンキャンプは、ファシズムと日本の戦争に抗議し、平和と民主主義の必要を明確にする展覧会だと趣旨を述べ、開催に際してスペインと中国の人民のために作品を寄付した画家の一人に国吉康雄を挙げている⁸⁵。このことから、国吉康雄も同展覧会の開催に尽力していたことが明らかだ。

また、この展覧会の特異な点はこれだけではない。それは日本人画家による日本の軍国主義を非難した作品が展示され、それらが英字新聞で取り上げられたことだ。例えば、『ポスト』では、「公然と戦争を非難」した作品として、保忠蔵の《軍国主義が覆う日本》の図版を掲載し、「保は豪華に飾り立てた民衆と威張った戦車につぶされる日本人の農民」を描いた作品だとしている。そして「石垣の《逃亡》は中国人の小作農と子供が火の手のあがる家から急いで逃げる様子を描いたもので、鈴木は《戦争》は頭蓋骨、死人、ガスマスク、ヘルメット、塹壕の集まったシュールレアリスムの作品だ。」と日本人の作品の様相を詳細に伝えている⁸⁶。この後も『ポスト』では、この展覧会において、「日本の軍国主義を非難する日本人の作品が社会的な注目を集めている」と述べ、「石垣栄太郎と保忠蔵は極東の無関係な被害者への同情を表している」と日本人の作品を評価している⁸⁷。また『ワールド・テレグ

ラム』は、鈴木盛の《戦争》の図版を掲載し、この展覧会で「最も憤りを表した作品は、石垣栄太郎と鈴木盛の日本人の作品だ。《戦争》は胸に銃剣を差した、軍隊帽の骸骨に抱かれた死んだ中国人を描いている」と述べている⁸⁸。そして『ディリー・ワーカー』では、「多くの作品は世界のファシズム、特にスペインと中国におけるファシズムに対する抗議を掲げている。その大部分は市民の自由の抑制に抗議する動き表している。保忠蔵の作品はメダルで飾った凶暴で残酷な戦争屋を描いている」とあり⁸⁹、いずれも反軍国主義をテーマにした日本人画家の作品を評価している。

このように英字紙の紙面で日本人の作品が注目された背景には、当時の世界情勢があった。1937年7月の盧溝橋事件を受け、同年10月、ルーズベルト大統領はシカゴの演説で、「侵略国を隔離せよ」と日本を非難している。これを『紐育新報』は、「平和的ではない平和演説」として、大統領の演説要旨を掲載している。そして日本は同年11月のブリュッセル会議への参加を拒否し、九か国条約が破棄される。これは1922年のワシントン軍縮会議から続くワシントン体制の崩壊だった。さらに12月にはパナイ号事件が起こり、アメリカでは日本の中国侵入と軍国主義への非難が高まった。このような世界情勢を背景に、市民権がない日本人画家は、アメリカ美術家会議の展覧会で、日本の軍国主義を非難し、反戦の立場を明確にしたのだ。さらに、アメリカ美術家会議は、この企画展の開催と同時に、公開シンポジウムを開いている。『タイムズ』は、これを「公然と日本を批判した会議」と述べている⁹⁰。それは、この会議で日本の中国侵入とスペイン内乱への抗議と、日本製品のボイコットが決議されたからだ⁹¹。さらにここでは、スペインの内乱を描いた《ゲルニカ》の作者パブロ・ピカソが「芸術家は人類と文明という最も尊いものを脅かす戦争に無関心であるべきではない」とメッセージを伝えている。また、国吉康雄は当夜の演説で、アメリカの市民権がないことを理由に、メトロポリタン美術館に作品が購入されなかったことは、WPAの日本人の解雇と同様の差別だと述べている⁹²。

これらのことから、1937年12月の「世界の民主主義を防衛するースペインと中国の人民に捧ぐ」展には、石垣栄太郎と保忠蔵、鈴木盛が日本の軍国主義を非難した作品を発表していた。また、同展覧会の開催に際して、国吉康雄がスペインと中国の人民のために自身の作品を寄付し、公開会議で民主主義を訴えている。この企画展は、アメリカ美術家会議の支援のもとで、それまで反戦・反ファシズムを訴えていた保忠蔵だけではなく、世界恐慌のニューヨークで創作活動をした日本人画家が反戦思想を表し、アメリカを支持する立場を明確にした展覧会だったのだ。

4. 1938年の日本人画家の展覧会

アメリカで活動する日本人画家は、1937年にアメリカ美術家会議が主催した二つの展覧会で作品を発表し、反戦を唱えていたものの、市民権が無いことで社会的には厳しい立場にあった。その中で、1938年6月22日から7月10日まで、ニューヨーク市美術委員会の第31回展で日本人画家のグループ展が開かれる。これは1937年に申し込んでいたものが、

ようやく実現した展覧会で、日米間の情勢の悪化を理由に、出品を辞退する画家もいた⁹³。これまで同展覧会は、「それまでに開催された邦人美術展覧会と比較して規模が小さく、画家が自ら企画した展覧会だ」と述べられてきた⁹⁴。しかし、日中戦争の開戦と、WPA のアジア系画家の解雇に対する抗議の展覧会が開催された後、開催されたこの展覧会は、重要な意図があったのではないか。そこで 1938 年 6 月に開催されたニューヨーク市美術委員会主催の第 31 回展における日本人画家のグループ展の様相と開催の意図をたどる。

この展覧会は出品目録の確認できないため、新聞記事から様相をたどると、同展には 9 名 (10 名) 16 点の作品が展示されたことが判明する [表 9-2] ⁹⁵。『日米時報』では「邦人側の作品は何れも進境を示して居ると雖も傑作はない。ただ、中溝不二君の『イーストサイドのスカイライン』ローイ門脇君の『カフテリア』保忠蔵君の『静物』くらいが佳作と云へやう」と報道している⁹⁶。また『紐育新報』では、出品者の名前を紹介した小さな記事を掲載したのみである⁹⁷。だが、この展覧会は日本語新聞よりも、むしろ英字新聞で取り上げられている。それは、反軍国主義をテーマにした作品が展示されたからだ。例えば『タイムズ』では、石垣栄太郎の《逃亡》と《戦争の犠牲者》を取り上げて、「何人かの画家は明らかに日本より中国に共感しており、反軍国主義を表している」とある⁹⁸。『トリビューン』でも、石垣栄太郎の作品に表れた、反軍国主義を指摘したうえで、このほかの画家についても「過去と個人的なつながりを想像的に構成させた、鈴木盛の《追憶 (Remembrance)》、鋭い感覚で奇抜な、保忠蔵の《ガスタンクと花々 (Gas Tanks and Flowers)》、国吉康雄の《横たわる人体 (Reclining Figure)》の巧妙な色彩」を取り上げている⁹⁹。また『ポスト』では、「鈴木盛の作品は崩壊と新しい創造の力強いシンボルを表している。石垣栄太郎はドラマチックな戦争のシーンであり、トーマス永井の水彩画は抒情的である」と述べている¹⁰⁰。そして『ワールド・テレグラム』では、「トーマス永井の作品二点を除く、すべての画は西洋画のアプローチや技法で描いている。日本の伝統的技法に近いのは、むしろ下の階で展示されているグロッパーの《カウボーイ (Cow Boy)》である」と批評している¹⁰¹。このほかにも『タイムズ』は、「ブルックリン植物園を描いた門脇ロイの《ボタニック・ガーデン (Botanic Garden)》は日本の主題であり、リバーサイドを望む小屋を扱った亘理武夫の《自室の窓より》、熱帯夜にイーストサイドの貧しい人々が屋上で涼む様子を描いた中溝不二の《チューダー・シティの夜 (Tudor City Sky Line)》」があると紹介している¹⁰²。

この展覧会に出品した画家は、いずれも日本生まれの一世だが、その中には英語名の雅号を使うものや、あえて日本語を話さない画家もいた¹⁰³。中溝不二は『タイムズ』の取材に対して、「日本の画は売れないので、アメリカの技法でニューヨーク・シーンを描いた」と述べていることから¹⁰⁴、彼の作品は、ニューヨークの街を写實的に描いたものだと推察できる。また普段、日本語を話さなかったトーマス永井が、東洋風の作品を発表していることは、特異な点といえよう。展示された作品の中で構図が判明するのは、ニューヨークの街を描いた保忠蔵の《ガスタンクと花々》 [図 9-26]、日本の侵略により、被害を受ける中国の民衆をテーマにした石垣栄太郎の《逃亡》¹⁰⁵、《戦争の犠牲者》¹⁰⁶、そして国吉康雄の《横たわ

る人体》〔図 9-27〕がある。《横たわる人体》は、椅子に横たわるマネキンを描いた構図だ。世界情勢を報道する新聞紙の下で、不安定なポーズをとるマネキンは、ともすれば椅子から崩れ落ちてしまいそうだ。この作品は、日中戦争以後、日米関係が悪化する中で、アメリカに暮らす日本人の不安定な立場を表したのだろう。

1938 年の日本人画家の展覧会は、戦前のニューヨークで開催された、おそらく最後の展覧会だと考えられる。かつて紐育新報社後援で開催された邦人美術展覧会が、東西文化の融合と日米親善を意図した、日本の外交政策だったのに対して、この展覧会は開催の趣旨が異なる。それは同展覧会が、従来解釈されてきたような「作家たちが自ら企画し会場を確保して開いた」というだけではなく¹⁰⁷、日中戦争以後、日米関係が悪化する中で、アメリカの市民権がない日本人画家が、反軍国主義と、彼らの帰属意識の葛藤を提示する重要な展覧会だったからだ。

おわりに

世界恐慌のニューヨークで日本人画家は、労働者を中心に組織されたジョン・リード・クラブに参加し、同クラブ主催の美術展覧会には、リベラルな思想を表した作品を発表していた。また、彼らは政府の雇用促進事業の WPA や、ニューヨーク市美術委員の展覧会にも参加し、アメリカの近代文化の発展と公共事業に貢献していた。だが 1937 年 7 月に、彼らは市民権が無いことを理由に 1937 年に WPA から解雇される。

そこで、アメリカ美術家会議は WPA を解雇されたアジア系画家の支援に乗り出す。ジョン・リード・クラブのメンバーを中心に結成されたこの団体は、1937 年 9 月に WPA のアジア系画家の解雇の抗議を目的に「日本人と中国人の合同展覧会」を開催する。この展覧会で日本人画家は、市民権を有し得ない外国人として、いかにアメリカの社会と文化に馴染み、アメリカナイズされているかを表現した。またそれだけではなく、彼らはこの展覧会に、日本の中国侵入に対する抗議を意図した作品も発表したのだ。さらに 1937 年 12 月の「世界の民主主義の防衛 スペインと中国の人民に捧ぐ」展には、石垣栄太郎、保忠蔵、鈴木盛が反戦をテーマにした作品を出品し、彼らの作品は英字紙で大きく取り上げられている。これらのことから、1937 年にアメリカ美術家会議が後援した二つの展覧会は、市民権がない一世の日本人画家が、日本の軍国主義に抗議し、反戦・反ファシズムの立場を明らかにした重要な展覧会だといえるだろう。

そして、1938 年 6 月には、ニューヨーク市美術委員会主催の展覧会で日本人画家のグループ展が開催される。それまでニューヨークで開催された邦人美術展覧会は、紐育新報社と日本人社会の後援による、日米親善を意図したものだったのに対して、この展覧会の出品は趣旨が異なる。それは、ニューヨーク市が主催した美術展覧会に、市民権が無い日本人が、日本の中国侵入に抗議した反戦と反ファシズムを訴え、且つ、アメリカで活動する自身の不安定な立場とアイデンティティの葛藤を示した作品を発表しているからだ。

しかし、日本人画家の反戦の訴えは祖国日本には届かず、1941 年 12 月 8 日、日米は開

戦する。それから4日後の1941年12月12日に国吉康雄、保忠蔵、トーマス永井、鈴木盛、門脇ロイ、田川文治、レオ・アミノは、反戦・反ファシズムを記した書面をアメリカ側に提出している。署名した7名のうち6名が、本章で取り上げた美術団体に活動していた。世界恐慌期の日本人画家は、アイデンティティの葛藤を抱えながらも、WPAやアメリカ美術家会議といったアメリカ美術家という画家の組織での活動を通して¹⁰⁸、日本の軍国主義に意義を唱え、反戦・反ファシズムの立場に至ったのだ。

¹ 石垣綾子「アメリカの左翼文芸」『紐育新報』1930年12月31日。

² この展覧会は1929年12月15日から、ブロンクスパーク東2700のユナイテッド・ワーカーズ共同住宅で開催された (*New Masses*, December, 1929; *New York Times*, December 1, 1929)。

³ “Worker’s Art in Germany” *New Masses*, December, 1929.

⁴ 「石垣栄太郎氏個展」『紐育新報』1932年1月16日。

⁵ “Art: Joint Exhibition” *New York Times*, January 17, 1932.

⁶ Carlyle Burrows. “News and Comment on Current Art Events” *New York Herald Tribune*, January 24, 1932.

⁷ “Diego Rivera and the John Reed Club” *New Masses*. February, 1932.

⁸ 「プロレタリアの文化同盟 発会式と藤森氏の講演」『日米時報』1932年2月24日。

⁹ 「労働者クラブで国吉康雄氏講演」『紐育新報』1932年3月30日。

¹⁰ 「プロレタリア美術講演」『紐育新報』1932年11月30日。

¹¹ 「労働文化同盟主催で絵画展覧会開催」『紐育新報』1932年11月19日。

¹² “John Reed Club Artists exhibition Now on At Aca Gallery, New York” *Daily Worker*, November 15, 1932.

¹³ *Exhibition Sculpture • Painting • Drawing—the Social Viewpoint in Art*. (Exhibition catalogue). (New York: John Reed Club, 1933). Thomas. J. Watson Library, NY.

¹⁴ “John Reed Club Shows Art With Social Purpose” *New York Herald Tribune*. January 28, 1933; 「左翼美術家展覧会」『紐育新報』1933年1月23日。

¹⁵ *Exhibition Paintings, Sculpture, Drawings, Prints on the Theme Hunger Fascism War*. (Exhibition catalogue). (New York: John Reed Club, 1933). in Philip Evergood papers, 1890-1971: Series 7: scrapbooks, 1924-1954, Box 12, Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.

¹⁶ Kainen, Jack. “Scenes of the Class Struggle at J.R.C. Exhibit in New York” *Daily Worker*, June 11, 1934.

¹⁷ “Revolutionary Art at the John Reed Club” *Art Front*, January, 1935.

¹⁸ “The Revolutionary Front” *New York Times*, November 10, 1934.

¹⁹ “The Critic Takes A Look Around The Galleries” *New York Post*. November 30, 1935.

²⁰ 「失業者への一福音 画家救済」『紐育新報』1933年12月30日。

²¹ *General Services Administration. General Services Administration Description, 1920-2009. GSA Artists’ Employment History Records, 1936-1973*, in Francis V. O’Connor papers, 1920-2009, box 4, folder: 104; box 6, folder: 8; box 6, folder: 71; box 6, folder: 117, Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.

²² 安來正博「石垣栄太郎関係スクラップ資料と、その補足的考察(2)」『和歌山県立近代美術館紀要』第2号(1997年3月31日)55-56.; *Federal Art Project papers. 1920-1965*. Federal Art Project, Photographic Division collection, circa 1920-1965, bulk 1935-1942: Artist Files, circa 1920-1965, box: 22. Folder: 26, Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.

²³ 芳賀武『紐育ラブソディー—ある日本人米共産党員の回想—』朝日新聞社(1985年10月30日)、62。

-
- ²⁴ 「故野口博士の壁画を完成 画家鈴木盛氏の名誉」『紐育新報』1937年6月16日。
- ²⁵ Federal Art Project Gallery papers, manuscript.1936. “Federal Art Project Gallery, 27 January to 15 February”. (Exhibition catalogue). in College Art Association of America Records, box 9, folder: 2, Frick Collection/Frick Art Reference Library Archives, NY. : “Federal Artists Exhibit 80 Oils”. *New York Times*, February 1, 1936: “Federal and Municipal” *New York Times*, February 9, 1936.また、保忠蔵は1936年2月19日から2月29日まで開催された展覧会にも《田園風景》を出品している (*New York Herald Tribune*, February 20,1936)。
- ²⁶ Federal Art Project Gallery papers, manuscript. “Federal Art Project Gallery, April 30 to May 20, 1936”. (Exhibition catalogue). in College Art Association of America Records, box 9, folder: 2. Frick Collection/Frick Art Reference Library Archives, NY.; “Federal Project Opens Art Exhibit”, *New York Times*. May 1, 1936.
- ²⁷ WPA papers, manuscript. 1936-1940. WPA/FAP NY Admin, Allocation of Works of Art, circa 1936-1940. in Francis V. O'Connor papers, 1920-2009, box 1. Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.
- ²⁸ New Deal Gallery. *Our Heritage the Decade of the Great Depression a Timeline Courtesy of Livingston Arts New Deal Gallery*. (Brochure).(New Deal Gallery. Livingston, N.Y. 2016).
- ²⁹ 門脇ロイは本名、門脇本市 (「素人芸術家の作品も交じって邦人美術展覧会 (下)」『日米時報』1935年2月23日)。
- ³⁰ 永井トーマスは本名、永井富三 (岡部晶幸『1920-30年代アメリカン・シーンの画家発見 トーマス永井の不思議世界』第一生命保険相互会社社会文化事業室(1996年)。いずれも市民権がない一世の画家だ。
- ³¹ Municipal Art Committee Manuscript, February 25, 1934, New York, NY.-Municipal Art Committee, College Art Association of America Records, box 10, folder: 16, Frick Collection/Frick Art Reference Library Archives, NY.
- ³² “New York Artists to Have Own Show,” *New York Times*, January 29, 1934; “LaGuardia is Sponsor of Art Exhibit Here,” *New York Times*, January 29, 1934; Municipal Art Committee Manuscript, March 7, 1934, New York, NY.-Municipal Art Committee, College Art Association of America Records, box 10, folder: 16, Frick Collection/Frick Art Reference Library Archives, NY.
- ³³ Municipal Art Committee, *First Municipal Art Exhibition*, (New York: Rockefeller Center Building, New York,1934), Dorothy C. Miller papers, 1853-2013, bulk 1920-1996, box 23. Folder: First Municipal Exhibition (1934). Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.
- ³⁴ Municipal Art Committee Manuscript, March 7, 1934, New York, NY.-Municipal Art Committee, College Art Association of America Records, box 10, folder: 16 ,Frick Collection/Frick Art Reference Library Archives, NY.
- ³⁵ リベラの助手として野田英夫もこの壁画制作に携わった。
- ³⁶ 壁画が取り壊された理由は、アメリカの資本家たちと共にレーニンが描かれていたためだとされる。Landgren, E. Marchal, “New York’s Municipal Art Committee” Marchal E. Landgren papers, 1881-crica 1982, bulk 1930-1975, box 4, folder: 28-30, Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington DC.
- ³⁷ 1918年に紐育日本人美術協会主催の邦人美術展覧会がマクドローウェル・クラブで開催されている。 *Exhibition of Paintings*, (New York: The Macdowell Club, New York 1918), In

New York: Macdowell Club, *Exhibition of Paintings and Sculpture, 1912-1919*. (Exhibition catalogue). (New York: Macdowell Club). Frick Collection/Frick Art Reference Library Archives, NY.

³⁸ マクドゥウェル・クラブでは、互いの創作を尊重し合い、展覧会を開くことを希望する 10 人から 20 人の画家たちのグループに無審査でギャラリーを 3 週間提供する展示方針だった。Landgren, E. Marchal, “New York’s Municipal Art Committee” Marchal E. Landgren papers, 1881-circa 1982, bulk 1930-1975, box 4, folder: 28-30, Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington DC.

³⁹ 1924 年の移民法の制定により、日本生まれの一世はアメリカの市民権がなかった。

⁴⁰ Landgren, E. Marchal, “New York’s Municipal Art Committee” Marchal E. Landgren papers, 1881-circa 1982, bulk 1930-1975, box 4, folder: 28-30. Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington DC.; Edward Alden Jewell, “Community Effort Gains: The New Municipal and WPA Galleries—Pro and Con of Federal Mural Project,” *New York Times*, January 5, 1935.

⁴¹ Municipal Art Committee Manuscript, January 17, 1936, Subject file: New York (N.Y.). Municipal Art Committee: Miscellaneous uncatalogued material, Museum of Modern Art Library, NY; Municipal Art Committee Manuscript, “Temporary Galleries of the Municipal Art Committee, Second Exhibition”. January 21 to February 1, 1936, Subject file: New York (N.Y.) Municipal Art Committee: Miscellaneous uncatalogued material, Museum of Modern Art Library, NY. 出品作品のタイトルから推察すると、それぞれ〔図 9-17〕と〔図 9-18〕だと考えられる。

⁴² Edward Alden Jewell, “Municipal Galleries Devoted to Exhibit of Drawings, Paintings and Prints” *New York Times*, January 22, 1936.

⁴³ Municipal Art Committee Manuscript, “Temporary Galleries of the Municipal Art Committee, Sixth Exhibition,” April 8 to April 26, 1936, Subject file: New York (N.Y.) Municipal Art Committee: Miscellaneous uncatalogued material, Museum of Modern Art Library, NY; Municipal Art Committee Manuscript, April 4 or 5, 1936, New York, NY.-Municipal Art Committee, College Art Association of America Records, box 10, folder: 16, Frick Collection/Frick Art Reference Library Archives, NY.

⁴⁴ Municipal Art Committee Manuscript, “Temporary Galleries of the Municipal Art Committee, Eight Exhibition,” May 20 to June 7, 1936, Subject file: New York (N.Y.) Municipal Art Committee: Miscellaneous uncatalogued material, Museum of Modern Art Library, NY; Municipal Art Committee Manuscript, May 18, 1936, New York, NY.-Municipal Art Committee, in College Art Association of America Records, box 10, folder: 16, Frick Collection/Frick Art Reference Library Archives, NY.

⁴⁵ “City Art Museum Offers 8th Exhibit,” *New York Times*, May 20, 1936; “Among Other Offerings,” *New York Times*, May 24, 1936.

⁴⁶ Municipal Art Committee, Exhibition, a magazine of art activities in New York, January 1937, Frick Collection/Frick Art Reference Library Archives, NY.

⁴⁷ タイトルと年代から推察して〔図 9-19〕 Chuzo Tamotsu, Peace Valley, oil canvas, 1930s, (東京都庭園美術館『〈戦後 50 年企画〉アメリカに生きた日系人画家たち—希望と苦悩の半世紀 1896-1945』日本テレビ放送網(1995 年) 62 だと考えられる

⁴⁸ Haward Devree, “The Galleries Present” *New York Times*, June 14, 1936.

⁴⁹ 「全米美展へ出品」『紐育新報』1935 年 11 月 6 日。

⁵⁰ Municipal Art Committee, Exhibition, a magazine of art activities in New York, January 1937, Frick Collection/Frick Art Reference Library Archives, NY; Municipal Art Committee Manuscript, “Critics’ Review” November 25, 1936, New York, NY.-

Municipal Art Committee, College Art Association of America Records, box 10, folder: 16, Frick Collection/Frick Art Reference Library Archives, NY.

⁵¹ Municipal Art Committee Manuscript, March 12, 1937, New York, NY.-Municipal Art Committee, College Art Association of America Records, box 10, folder: 16, Frick Collection/Frick Art Reference Library Archives, NY.

⁵² “Municipal group Show Art Today: Twentieth Exhibition at the Temporary Galleries Has Wide Variety of Works” *New York Times*. March 17, 1937.

⁵³ American Artists’ Congress. *First American Artists Congress*. (Exhibition catalogue). (New York City. New York City. 1936).

⁵⁴ American Artists’ Congress papers, manuscript. “Minutes of the Executive Board Meeting report, February 15, 1936 to May 4, 1936”, in Stuart Davis papers, Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.

⁵⁵ Baigell, Matthew and Williams, Julia *Artists Against War and Fascism*. (New Jersey: Rutgers University Press, 1986), 277-278.

⁵⁶ Herman Baron. “American Artists” Herman Baron papers, circa early 1950s. unpublished typescript, A.C.A. Galleries records, 1917-1963, Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.

⁵⁷ Harman Baron. Undated, correspondence, A.C.A. gallery circa, 1936-1940. manuscript. in Max Weber papers, Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.

⁵⁸ [図 9-20] Sakari Suzuki, *Of Her Past*, oil on canvas, 1936, Private Collection. 競作展については、Howard Devree, “With a Distinctly American Flavor: The Metropolitan’s Gallery of Contemporaries Some of Whom Reappear at Kraushaar’s—Other Current Exhibitions” *New York Times*, June 21, 1936 ; “Events in New York and Far Afield” *New York Times*, June 28, 1936 参照。また、『紐育新報』1936 年 12 月 30 日と *New York Times*, June 28, 1936 に同作品の図版が掲載されている。

⁵⁹ 鈴木盛は、カリフォルニアの美術学校で美術を学び、1930 年代初めにウッドストックで、野田英夫と山崎近道と創作活動をした画家で、1935 年と 1936 年の紐育新報社主催の邦人美術展覧会にも出品している。

⁶⁰ Harman Baron. Undated, correspondence, A.C.A. gallery circa, 1936-1940. manuscript. in Max Weber papers, Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.

⁶¹ Sakari Suzuki, *Marverick Road*, oil on canvas, 1934.

(<https://americanart.si.edu/artist/sakari-suzuki-4716>. Accessed October 8, 2017) と同一作品だと推察できる。また、これと類似した作品がアメリカ美術家会議の第二回展に出品されている (*American Artists’ Congress, Second Annual Membership Exhibition*, New York: Rockefeller Center, 1938)。

⁶² 本作品は、アメリカ美術家会議の第 1 回年次展覧会にも出品された。Sakari Suzuki, “War,” as reproduced in American Artists’ Congress, *First Annual Membership Exhibition*. (Exhibition catalogue). (New York: Rockefeller Center, 1937); “Fascism, War Kicked Around in Artists’ Congress” *New York World Telegram*, December 16, 1937.

⁶³ 石垣栄太郎「鈴木氏個展」『紐育新報』1936 年 11 月 21 日。

⁶⁴ Ibid.

⁶⁵ American Artists’ Congress. *America Today*. (Exhibition catalogue). (New York A.C.A. Gallery. 1936).

⁶⁶ フレーム・アンド・ハング展には、寛容的なユーモアのある風刺画が展示された。American Artists’ Congress papers, manuscript. February 19, 1937. in American Artists’ Congress papers, manuscript. “Press release”. New York Public Library, NY.; “Caricatures Mock Many Celebrities: Framed and Hung’ Exhibition at A.C.A. Gallery Featured by Some Sharp Barbs” *New York Times*, February 25, 1937.

-
- ⁶⁷ American Artists' Congress. *First Annual Membership Exhibition*. (Exhibition catalogue). (New York: Rockefeller Center, 1937).
- ⁶⁸ General Services Administration Description, GSA Artists' Employment History Records, 1936-1973, in Francis V. O'Connor Papers, 1920-2009, box 4, folder: 104, box 6, folder: 8, box 6, folder: 71, box 6, folder: 117, Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.
- ⁶⁹ General Services Administration. *General Services Administration Description, 1920-2009. GSA Artists' Employment History Records*, 1936-1973, in Francis V. O'Connor papers, 1920-2009, box 4, folder: 104, box 6, folder: 8, box 6, folder: 71, box 6, folder: 117, Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.
- ⁷⁰ American Artists' Congress papers, manuscript. July 15, 1937. "Open Meeting for Discussion on W.P.A. Dismissals American Artists Congress", in Stuart Davis, Papers, 1911-1966, Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC. この会合の議事録には、2 回目の会合を 7 月 29 日に開く予定と記載されているが、2 回目の会合の資料は所在不明。
- ⁷¹ Carlyle Burrows, "Waifs of the W.P.A. and Other Artists," *New York Herald Tribune*, July 26, 1937: "Sights and Sounds Freedom and frustration in movies making—A Pink Slip art show," *New Masses*, Vol.24, July 27, 1937.
- ⁷² Herman Baron, "ACA Uptown," by Herman Baron, circa 1950s, Writings and Notes 1938-circa1960s, A.C.A. Galleries records, 1917-1963, box 1, folder: 14, Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.
- ⁷³ 安來正博「石垣栄太郎関係スクラップ資料と、その補足的考察(2)」『和歌山県立近代美術館紀要』第 2 号(1997 年 3 月 31 日)、57。
- ⁷⁴ 星野睦子「国吉康雄と 1930 年代ニューヨークの日系人画家—アメリカ美術家会議を糸口として—」『大学美術教育学会誌』第 32 号 (2000 年 3 月 10 日)、278。
- ⁷⁵ Harry Gottlieb. *American Contemporary Art Gallery, Paintings by New York Chinese-Japanese Artists*, 1937. in ACA Gallery, 61 and 63, East 57th Street.(Exhibition catalogue). (New York: A.C.A. Gallery, 1945), Brooklyn Museum Libraries & Archives, NY.
- ⁷⁶ American Artists' Congress papers, manuscript. September 16, 1937. "Minutes of the Executive Board Meeting", in Stuart Davis, Papers, 1911-1966, Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.
- ⁷⁷ 「日支ルンペン美術展覧会」『紐育新報』1937 年 9 月 8 日; 「今年も亦邦人画展」『日米時報』1937 年 9 月 18 日。
- ⁷⁸ Melville Upton, "New Light on Eastman Johnson: Early Work at Frazier Gallery Other local Exhibitions of Interest," *New York Sun*, September 18, 1937.
- ⁷⁹ "Oriental Artists Exhibit," *New York World Telegram*, September 18, 1937.
- ⁸⁰ Jacob Kainen, "The Art World: Dismissed WPA Chinese and Japanese Artists Express Unity in Paintings at A.C.A. Gallery," *Daily Worker New York*, September 18, 1937.
- ⁸¹ Jerome Klein, "Chinese Artists Join Japanese in WPA Job Protest", *New York Post*, September 18, 1937.
- ⁸² *An Exhibition in Defense of World Democracy—Dedicated to the peoples of Spain and China*. (Exhibition catalogue). (New York: A.C.A. Gallery, 1937).
- ⁸³ 星野睦子「国吉康雄と 1930 年代ニューヨークの日系人画家—アメリカ美術家会議を糸口として—」『大学美術教育学会誌』第 32 号 (2000 年 3 月 10 日) 278。
- ⁸⁴ 国吉康雄は 1937 年 5 月 7 日の幹部会議で、展覧会委員長を辞職し、グリーンテンキャンプが後任となっている。American Artists' Congress papers, manuscript. , May 6, 1937. "Minutes of the Executive Board Meeting", in Stuart Davis, Papers, 1911-1966, Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.

⁸⁵ *An Exhibition in Defense of World Democracy—Dedicated to the peoples of Spain and China* (Exhibition catalogue). (New York: A.C.A. Gallery.1937).

⁸⁶ “Denouncing War in Paint: Japanese Artists Portray Horrors of War Machine Their Show is Dedicated to the Peoples of Spain and China”. *New York Post*, December 14, 1937.

⁸⁷ Klein, Jerome. “Art Comment: Democracy Aided by World Figures at Art Congress Thomas Mann’s Message read by his Daughter” *New York Post*. December 18, 1937.

⁸⁸ “Fascism, war Kicked Around in Artists’ Congress”. *New York World Telegram*, December 16, 1937.

⁸⁹ Kainen, Jacob. “2 nd Artists’ Congress Show is Dedicated to Spain and China” *Daily Worker*, December, 18 1937.

⁹⁰ “Artists’ Congress Denounces Japan Meeting Here Also Protests Intervention of fascists in Spain” *New York Times*, December 18, 1937.

⁹¹ American Artists’ Congress papers, manuscript. December 27, 1937. in Subject file: New York (N.Y.). American Artists’ Congress: Miscellaneous uncatalogued material, Museum of Modern Art Library, NY.

⁹² American Artists’ Congress papers, manuscript. December 17, 1937. “2nd Annual National Convention Public Session”, in Philip Evergood papers, manuscript. 1890-1971: Series 7: scrapbooks, 1924-1954, Box 12, Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC. ; American Artists’ Congress papers, manuscript. December 27, 1937. in Subject file: New York (N.Y.). American Artists’ Congress: Miscellaneous uncatalogued material. Museum of Modern Art Library, NY. ; American Artists’ Congress papers, manuscript .Winter 1937. “Boycott Japanese Goods” in American Artists’ Congress papers, manuscript. “American Artists: News bulletin of the American Artists’ Congress”, New York Public Library, NY.

⁹³ この展覧会は日本が中国に侵入する以前にニューヨーク市に申し込まれたとある。Marchal E. Landgren, “New York’s Municipal Art Committee” Marchal E. Landgren papers, 1881-circa 1982, bulk 1930-1975, box 4, folder: 28-30, Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington DC. 49.

⁹⁴ 安來正博「石垣栄太郎関係スクラップ資料と、その補足的考察(2)」『和歌山県立近代美術館紀要』第2号(1997年3月31日)、59。

⁹⁵ “Japanese Artists Have City Exhibit” *New York Times*, June 23, 1938.には9名16点の作品が展示されたとあるが、“Notes and Comment on Events in Art: Municipal Show” *New York Herald Tribune*, June 26, 1938 には10名 の画家の氏名がある。〔表9-2〕

⁹⁶ 「市主催の美術展」『日米時報』1938年6月25日。

⁹⁷ 「邦人画家作品展覧」『紐育新報』1938年6月25日。

⁹⁸ “Group Shows Stress Works by American Contemporaries, Chiefly the Younger” *New York Times*, June 26, 1938.

⁹⁹ “Notes and Comment on Events in Art: Municipal Show,” *New York Herald Tribune*, June 26, 1938.

¹⁰⁰ Klein, Jerome. “Silvermine Painters Try Social Slant,” *New York Post*, July 2, 1938.

¹⁰¹ “Japanese Art Favors China” *New York World Telegram*, June 25, 1938.

¹⁰² “Japanese Artists have City Exhibit: Nine Show Works Here Slight Traditional Influence Seen,” *New York Times*, June 23, 1938.

¹⁰³ トーマス永井の本名は、永井富三（岡部晶幸『1920-30年代アメリカン・シーンの画家発見 トーマス永井の不思議世界』第一生命保険相互会社社会文化事業室、1996年）。

「ACA 画堂の会員、日本語を話さない人、勿論話せないにあらず」（「雪の如月に春を告げる美術展出品諸家スケッチ」『紐育新報』1935年2月9日）とある。門脇ロイは本名、門脇本市（「素人芸術家の作品も交じって邦人美術展覧会（下）」『日米時報』1935年2月23

日)。山崎近道は、ジャック山崎の名で活動している。

¹⁰⁴ “Japanese Artists have City Exhibit: Nine Show Works Here Slight Traditional Influence Seen” *New York Times*, June 23, 1938.

¹⁰⁵ Ishigaki, Eitaro. “*Fight*,” as reproduced in *New York Herald Tribunes*, June 26, 1938.

¹⁰⁶ この作品は、アメリカ美術家会議第二回展にも出品された。Ishigaki, Eitaro. “*Victim of War*,” as reproduced in American Artists’ Congress, *Second Annual Membership Exhibition*. (New York: Rockefeller Center, 1938).

¹⁰⁷ 安來正博「石垣栄太郎関係スクラップ資料と、その補足的考察(2)」『和歌山県立近代美術館紀要』第2号(1997年3月31日)、59。

¹⁰⁸ 1937年から1940年に合計4回開催されたアメリカ美術家会議の年次展覧会には、九吉康雄、石垣栄太郎、鈴木盛、トーマス永井、保忠蔵が出品している。(*First Annual Membership Exhibition, 1937*. (Exhibition catalogue). (New York: Rockefeller Center, New York); *Second Annual Membership Exhibition, 1938*. (Exhibition catalogue). (New York: Rockefeller Center, New York); *Third Annual Membership Exhibition, 1939*. (Exhibition catalogue). (New York: Rockefeller Center, New York); *Fourth Annual Membership Exhibition, 1940*. (Exhibition catalogue). (New York: Rockefeller Center, New York).

結章

1.日本人による活字メディアの役割

本研究では、戦前のニューヨークの日本人によるメディアとして、新聞、雑誌、文芸と美術に着目し、日本人芸術家の活動と日本人社会との関わりを検討してきた。

このうち新聞や雑誌といった活字メディアは、日本語で記されたものだけではなく、日本人が発行した英語の雑誌もあった。『Japan and America』は、日米間の貿易の促進や相互理解を意図して1900年に星一が発行した英字雑誌だ。また、日本語新聞や雑誌は、20世紀初頭から日本人社会の情報伝達や記録と保存を目的に発行された。ニューヨークは、アメリカ西海岸の都市と比べると日本人社会の規模も小さかったことから、週刊の『日米週報』と『紐育新報』が戦前まで発行された。これらの日本語新聞には、日本の情報や国際情勢、在留同胞の動静のほかにも、僅かな文芸欄が設けられていた。このような文芸欄は詩歌、俳句を中心に当地の人々の作品が掲載され、慰安や娯楽の役割を果たしていた。

また、日本語雑誌の出版は、経済的な負担も大きいことから、短命に終わるものがほとんどだった。1907年にニューヨークで発行された『太西洋』もそのような雑誌の一つだ。同誌は、ニューヨークの日本人の活動の記録と保存を意図して発行された。ここには中村春雨の編集による文芸欄も設けられ、永井荷風と田村松魚の作品が掲載された。本研究では、『太西洋』の第1号から第3号の調査をもとに、これまで判明していた永井荷風の「一月一日」だけではなく、同誌の第2号に「夜の女」が初出掲載されていたことも明らかにした。また『日米週報』の調査により、同紙の広告欄に掲載された、『太西洋』第4号の目次に永井荷風の「落葉」の掲載が予告されていることも明確になった。これらのことから、永井荷風はこれまで考えられてきた以上にニューヨークの移民地文壇との関わりがあったことが示唆できる。さらに、ここで指摘しておきたいのは、雑誌『太西洋』の発行の意義だ。『太西洋』と同時期に発行された『日米週報』は、今日散逸しており、一貫した調査が困難な日本語新聞だ。もし仮に永井荷風がアメリカ滞在時の作品を日本語新聞に作品を発表していたならば、初出の発見は叶わなかったかもしれない。つまり雑誌『太西洋』は、永井荷風の作品の初出が確認されたことで、記録の保存という同誌発行の目的を十分に果たしたと言えよう。

しかし、活字メディアの研究は課題も残されている。それは使用言語が異なる国や社会での日本語新聞や雑誌の保存の問題だ。このような一次資料は、そこに書かれた言語を解読できて初めて、メディアとして価値が認められる。そのため、世界中のどこかに未発見の日本語の資料が眠っている可能性は十分に考えられる。第2章でも述べた通り、『太西洋』第4号以降の所在は、今後も調査が必要だ。活字メディアは、異郷に渡った人々の実情をより明確にするだろう。

2.異郷で創作する意義

ニューヨークの日本語新聞や雑誌に設けられた文芸欄は、主に詩歌や俳句を中心にした小さな紙面だったが、新年号の特集には、小説が発表されている。本研究では、1910年代

から 1920 年代の日本語新聞と雑誌に発表された文芸作品を検討してきた。その中でも田村松魚は、アメリカの日本人社会に生きる苦学生の姿を、自身の等身大の視線で描いていた。また石垣栄太郎は、美術作品を制作する以前の自身の体験をもとに、日本人社会の様相と創作活動における思想の変遷を描き出している。彼らは、修学や労働を目的に渡米した、自身の経験を作品に投影させることで、東海岸の日本人労働者の移民の実態を映し出したのだ。一方、親がかりで渡米した永井荷風は、横浜正金銀行に勤務する傍らで創作活動をしている。そのため永井荷風の作品には、官吏や駐在員という比較的裕福な日本人の視点でニューヨークの日本人社会が描かれている。このように、ニューヨークの日本語新聞や雑誌に表れた文芸作品は、立場の異なる作者が、それぞれの視点でニューヨークの日本人社会を描いた記録だった。

また移民地の情報伝達や意思疎通の手段はこのような活字メディアだけではなかった。ここでは、ニューヨークで活動した日本人画家の創作も日本人のメディアとして取り上げた。1910 年代のニューヨークには、日本で美術教育を受けた画家が多く、彼らの創作活動は、日系企業との関わりがあった。そのため初期の創作は、商業目的の応用美術や日本趣味な作品が目立った。ところが、1920 年代になると美術家の層は、アメリカの美術学校で学んだ渡米画家へと移り変わる。彼らはアメリカの新進画家に影響を受け、近代社会を写実的に描くアメリカン・シーンの作品を創作した。彼らの作品は、日本人移民によるアメリカの近代社会の記録とも言えよう。そして彼らの活動は、外来者の視点でアメリカの近代社会を描いた特異な作品として、英字紙に取り上げられ、日米両方で価値が認められたのだ。このような日本人画家の活動を背景に、戦前のニューヨークでは邦人美術展覧会が度々開催されている。なかでも紐育新報社の後援で開かれた邦人美術展覧会は、日本に生まれアメリカで活動する日本の作品の展示を通して、東西文化の融合を日米両方の社会に伝える意図があった。以上のことから、日本人の芸術活動は、使用言語が異なる異郷で意思疎通を可能にした越境するメディアとして、日米親善と文化交流の役割を果たしたのだ。

3. 異郷における帰属意識の変遷

これまで異郷における日本人の新聞、文芸、美術はそれぞれ異なるメディアとして扱われてきた。しかし、ニューヨークで日本人が発行、創作した新聞、雑誌、美術作品を異郷に渡った日本人の総体的なメディアとして調査することで、以下の点が明らかになった。まずニューヨークで発行された日本語新聞と雑誌は、情報伝達と記録の保存を意図して発行された。これらの活字メディアが、日本人社会と深い関わりの下で発行されたことはいうまでもない。日本語メディアの文芸欄は、当地で活動する文芸家の重要な発表の場でもあった。ここに発表された文芸作品は、渡米の目的も立場も異なる作家による、当時の日本人社会の様相を記した記録といえよう。

また、日本人画家の芸術活動は、日本語新聞と英字新聞の両方に取り上げられた。彼らの創作は、ジャポニズムの流行に影響を受けた商業目的のものから、ヨーロッパの前衛美術の

模倣、そしてアメリカの近代文明社会を写した社会派の作品へと、アメリカ美術史と共に変容した。日本に生まれアメリカで美術を学んだ画家の美術作品は、言語の枠組みを超えて、越境するメディアだと言えよう。そして、芸術作品が持つこのような特色を活かして、日本人社会が開いたのが、紐育新報社後援の邦人美術展覧会だった。これは日本人画家の作品を東西文化の融合が表象された媒体として、日米の文化交流と日米親善の懸け橋にしようという意図があったのだ。しかし、紐育新報社後援の邦人美術展覧会は、1936 年を最後に開かれていない。日本人画家の創作活動が最も重要な局面を迎えたのは、1930 年代後半だろう。この時期は、世界恐慌とファシズムの拡大が懸念される中、日本の中国侵入をめぐり日米関係が悪化の一途をたどった。不況下でアメリカ政府が打ち出した雇用政策の **Work Progressive Administration(WPA)** には、アメリカの画家と同様に、市民権が無い一世の日本人画家も参加した。だが、彼らは 1937 年に市民権がないことを理由に **WPA** を解雇される。この人種偏見による不当な解雇を受けた画家を支援したのが、アメリカ美術家会議やアーティスト・ユニオンといったリベラルな美術家の団体だった。このような美術家の団体の活動に加わった日本人画家には、反戦・反ファシズムを唱える画家もいた。彼らは、帰属意識の葛藤を抱えながらも、第二次大戦下で **Office of War Information(OWI)** や **Office of Strategic Services(OSS)** といったアメリカの情報機関で活動している¹。つまり一世の画家の中には、アメリカ側に立った者もいたのだ。

そして日系二世の画家は、アメリカの美術界だけではなく、日本人会の後援で設立された東西倶楽部でも活動している。同倶楽部は 1937 年と 1939 年に二世画家の展覧会も開いている²。ここで注視すべきは、臼井文平が二世画家の活動に対して意見を述べていることだ。

『**Japanese American Review**』のインタビューで彼は、日系二世の画家は一世の画家と共に活動することを快く思っていない、そして、二世の画家は僅かな結果を出すためにも時間と費用を費やすことを軽視していると述べている。そして二世の画家が、美術の専門家から建設的な批評を得るには、ニューヨークの中心地で展覧会を開催すべきだと指摘している。そのために彼は、これまで自身が築いてきたアメリカ美術界での人脈を活かして、ニューヨークの中心地で二世画家の展覧会を開くために援助が可能だと述べている。また、ニューヨークには日本人画家の団体がある。二世画家が一世の画家と協力して活動すれば、非常に価値のある利益が得られると指摘したうえで、一世の画家には、二世画家を支援する意志があると述べている³。臼井文平が意図した、日系一世と二世の世代を超えた芸術活動は、1947 年にリバーサイド・ミュージアムで開かれた日系人画家の展覧会で実現している〔表 10-1〕⁴。

異郷に渡った人々は、各地で日本語新聞や雑誌を発行した。ニューヨークにも日本人による活字メディアは存在した。このうち日本語メディアは、日本人社会における慰安や情報伝達と記録の保存の手段として、また英字誌は、アメリカ社会に日本を紹介する日米親善の媒体として発行されていた。そして日本語新聞や雑誌には、文芸作品も発表されている。文芸作品は、異郷で生活する人々の様相を記した日本人社会の記録でもあった。活字メディアの

ほかにも、ニューヨークでは日本人画家による美術活動も日本人のメディアとして存在した。日本人画家は、アメリカで美術を学び、アメリカの美術界を創作活動の場としていた。このようにアメリカで活動する彼らの作品を展示し、日米親善と文化交流を意図した邦人美術展覧会が紐育新報社後援で度々開かれている。日本人の芸術活動は、アメリカ社会と日本人社会を繋ぐ懸け橋として、日本政府の外交政策の一端を担っていたのだ。

ニューヨークの日本人のメディアは、日本人社会を中心に発行された新聞や雑誌といった活字メディアがまず挙げられる。新聞や雑誌は異郷における日本人間の情報伝達や記録を保存する役割を担っていた。そして、このような活字メディアには、文芸作品や美術家の活動も記されている。日本語新聞や雑誌に掲載された文芸作品は、当地に暮らす日本人の生活の様相を日本語読者に伝えるものだった。また、美術批評から浮かび上がる日本人の美術活動と作品は、言語の枠組みを超えた創作者の意思を伝えるメディアであり、日本人社会とアメリカ社会をつなぐ媒体だった。そして、ニューヨークにおける日本人画家の美術活動は、日米間だけではなく、一世と日系二世の世代をつなぐ役割も担ったのだ。このように多岐にわたる日本人のメディアは、ニューヨークという東海岸の都市を背景にした日本人の移民史といえよう。

¹ Chuzo Tamotzu. Transcript, September 3, 1964. Oral history interview with Chuzo Tamotzu. Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.

² 「東西倶楽部主催の美術展覧会」『紐育新報』1937年3月27日；「第二世美術展覧会 精彩奕々たる若き人々の力作」『紐育新報』1939年3月18日。

³ “Japanese Artists Born in America Excel many in Nippon, Experts Say” *Japanese American Review*, January 14, 1939.

⁴ The Japanese-American Artist Group, paintings, drawings, sculpture. (Riverside Museum, Riverside Drive 103 Street, New York).

〔表 2-1〕

『太西洋』目次細目 ＊〔 〕内は補正。原稿は The New York Public Library 所蔵。

第 1 巻第 1 号 明治 40 年 6 月 30 日発行

〔口絵〕

牡丹ト軍艦

黒木大将

伊集院中将

筑波艦

ヒプトロム座水兵

挿絵

高峰博士

小池総領事

福井菊三郎

市内見物水兵

本文

発刊之辞

p.1

発刊之祝辞

p.3

〔時事評論〕

我軍艦の来訪

日本人帰化権取得問題

〔論説〕

人格に就きて

井上文学士

米国太西洋沿岸の産業と我国商工業との関係

三田長太郎

〔文芸〕

小説蹄鉄

田村松魚

p.14

四角張ラザルノ

細田紫水

p.16

雑観

中村春雨

p.17

朝顔

松魚

p.18

鷗埠を読む

悪太郎

p.19

〔文苑〕

俳句

都々逸

p.23

| | |
|---------|------|
| 歡迎彙報 | p.27 |
| 従来一策〔束〕 | p.28 |
| 曰く集 | p.29 |
| 電信局 | |
| ビツクリ箱 | |
| 御進物 | p.36 |
| 三人令嬢 | |
| 落語金鵒娘 | |

第1巻第2号 明治40年7月20日発行

| | | |
|------------------|----------|------|
| 〔口絵〕 | | |
| 清涼 一葉 | | |
| 東京博覧会とゼームスタウン博覧会 | 二葉 | |
| 青木大使及生稲忠兵衛氏肖像 | | |
| 〔時事評論〕 | | |
| 個人的活動を盛んにすべし | | |
| 老骨に外遊を奨む | | |
| 日本協会の設立 | | |
| 日本婦人会の組織を促す | | |
| 〔論壇〕 | | |
| 非日英同盟拡張論 | 福原〔富〕青尊 | p.5 |
| 人格の修養 | 文学士 井上信翁 | |
| 〔訪問録〕 | | |
| 青木大使一夕談 | 一記者 | |
| 生稲忠兵衛氏談 | | |
| 〔小説〕 | | |
| 夜の女 | 永井荷風 | p.18 |
| 病室 | 田村松魚 | p.28 |
| 〔雑録〕 | | |
| 不問語 | 春雨生 | p.30 |
| 甘言苦語 | 森生 | p.31 |
| 旅枕 | 浮雲生 | |
| 種ちゃん | 幸児 | |
| 寸善尺魔 | | |
| 〔文苑〕 | | |
| 第一回募集俳句披露 | 松魚選 | |

第二回募集俳句発題

清風漫吟

杜鵑堂松魚

和歌十数首

新体詩四

〔故国論壇〕

女房本位と親本位

釈宗演

一国民の自覚

実業之日本

伊藤統監の世界政策

太陽

来るべき人物本位の時代

太平洋

男らしき態度

万朝報

敬啓

竹越與三郎

〔ビツクリ箱〕

数十項

読者

青年諸君の奮起を促す

新村益吉

〔雑報〕

p.48

紐育時事

桑港時事

次号予告

p.49

第1巻第3号 明治40年8月20日発行

〔口絵〕

紐育名所案内

二葉

ダンデー氏とタブソン氏

佐藤順次郎氏と佐藤綱治氏

〔時事評論〕

日本の時勢に遅るる勿れ

戦争談に迷はさるる勿れ

独露の奸策

両洋沿岸の同胞

韓国皇帝の禅位

帰化法に就て

〔論説〕

桑港問題の半面観

マスターオブアーツ

関白洋

農業と農民

バチラー オブ サイエンス アグリカルチャー

澤井善七

| | | |
|----------------|-------|------|
| 人生の目的より見たる名と富 | 西山哲治 | |
| 黒人種の将来 | 福富青尊 | |
| 訪問録 | | |
| 山本大将と語る | 福富生 | |
| 〔小説〕 | | |
| 一月一日 | 永井荷風 | p.27 |
| 〔雑録〕 | | |
| 我々観 | 広政法天 | |
| 自動車の話 | 緑笛生 | |
| 紐育生活 | 貧書生 | |
| 腕さまざま | たる男 | |
| ニイチエ経 | 春雨生 | |
| 〔文苑〕 | | |
| 一百放吟 | 静軒 | |
| 我儘集 | 新来 | |
| 〔故国思潮〕 | | |
| 公私の別 | 佐治実然氏 | |
| 大臣より社長 | 渡辺千冬氏 | |
| 農業と人物 | 阪谷芳郎氏 | |
| 其他件数 | | |
| 〔ビツクリ箱〕 | | p.46 |
| 投書数十件 | | |
| 放語漫語 | | |
| 皮肉屋 | | |
| 其他 | | |
| 〔雑報〕 | | p.53 |
| 紐育、桑港、晚香坡、沙港便り | | |
| 故国通信 | | |
| 新刊紹介 | | p.57 |

| 表 3-1 アメリカ滞在時の田村松魚 著作年表 | | | | | | |
|----------------------------|---|------------------|--------------------|---------|---------|----|
| 松魚の動静 | | 発行年月日 | 作品名 | 雑誌名 | 署名 | 備考 |
| 1903(明治36),8,11 横浜を出る。 | | 1903 年 8 月 15 日 | 女叟物語 | 女鑑 | 田村松魚 | |
| | | 1903 年 9 月 5 日 | 村の教師 | 女学世界 | 田村松魚 | |
| | | 1903 年 9 月 1 日 | 女叟物語 | 女鑑 | 田村松魚 | |
| | | 1903 年 9 月 1 日 | 弟子の目に映じたる 幸田露伴氏 | 文庫 | 田村松魚 | |
| | | 1903 年 9 月 11 日 | 灯台守の娘（西洋歴史譚） | 少女界 | 田村松魚 | |
| | | 1903 年 10 月 10 日 | 長夜短話 | 中学世界 | 田村松魚 | |
| | | 1903 年 10 月 15 日 | 白萩 | 文藝倶楽部 | 田村松魚 | |
| | | 1903 年 11 月 1 日 | 友のいろいろ | 文藝倶楽部 | 在米田村松魚 | |
| | | 1903 年 11 月 5 日 | 続 支那動物小話 | 少年世界 | 田村松魚 | |
| | | 1903 年 11 月 10 日 | 空想 | 実業世界太平洋 | 田村松魚 | |
| | | 1904 年 1 月 10 日 | 青灯集 | 中学世界 | 田村松魚 | |
| | | 1904 年 6 月 5 日 | 支那婦人小話 | 女学世界 | 田村松魚 | |
| | | 1904 年 6 月 11 日 | 勇敢なる少年 | 少年界 | 田村松魚 | |
| | | 1904 年 7 月 1 日 | 残燈陳話 | 新小説 | 松魚生 | |
| | | 1904 年 7 月 10 日 | 緑蔭瑣話 | 中学世界 | 田村松魚 | |
| | | 1904 年 8 月 1 日 | 目無鳥 | 太陽 | 田村松魚 | |
| | * | 1904 年 9 月 7 日 | 名花パピー | 手紙雑誌 | 田村松魚 | |
| | | 1904 年 10 月 11 日 | 黄金の指輪 | 少女界 | 田村松魚 | |
| | * | 1904 年 12 月 1 日 | ヘレナの離別 | 新小説 | 在米松魚生 | |
| | * | 1905 年 1 月 1 日 | 合奏 | 女鑑 | 田村松魚 | |
| | * | 1905 年 2 月 1 日 | おもかげ | 文芸界 | 在米松魚生 | |
| 1905(明治38),5,27 ロサンゼルス | * | 1905 年 5 月 28 日 | 〈時論〉今後の我が 平民 | 平民 | 田村生 | |
| | * | 1905 年 5 月 28 日 | 恋衣 | 平民 | 田村松魚 | |
| | * | 1905 年 6 月 1 日 | 危機一髪 | 新小説 | 在米松魚生 | |
| | * | 1905 年 6 月 4 日 | 恋衣 | 平民 | 田村松魚 | |
| | * | 1905 年 6 月 18 日 | 生命の花 | 平民 | 田村松魚 | |
| | | 1905 年 7 月 1 日 | 脚本 帰郷兵 | 太陽 | 在米田村松魚生 | |

| | | | | | | |
|---|---|-----------------------------|------------|------|--------|------------|
| | * | 1905 年 7 月 9 日 | 桃の実(上) | 平民 | 松魚生 | 『北米世俗観』収録 |
| | * | 1905 年 7 月 16 日 | 桃の実(中) | 平民 | 松魚生 | 『北米世俗観』収録 |
| | * | 1905 年 9 月 5 日 | 希望(二) | 平民 | 松魚 | 「親友」として再掲載 |
| | * | 1905 年 9 月 7 日 | 希望(三) | 平民 | 松魚 | |
| | * | 1905 年 9 月 9 日 | 深夜の黙念(一) | 平民 | 松魚 | |
| | * | 1905 年 9 月 12 日 | 羅城文壇一夕話(一) | 平民 | 松魚 | |
| | * | 1905 年 9 月 14 日 | 羅城文壇一夕話(二) | 平民 | 松魚 | |
| | * | 1905 年 9 月 14 日 | 殺人黨(一) | 平民 | 松魚 | |
| | * | 1905 年 9 月 16 日 | 殺人黨(二) | 平民 | 松魚 | |
| | * | 1905 年 9 月 16 日 | 羅城文壇一夕話(三) | 平民 | 松魚 | |
| | * | 1905 年 9 月 19 日 | 羅城文壇一夕話(四) | 平民 | 松魚 | |
| | * | 1905 年 9 月 19 日 | 別れの辞 | 平民 | 松魚生 | |
| 1905(明治38),9,20 ソルトレイク・シティー/オクデ ン 1905(明治38),12 インディアナポリス | * | 1905 年 9 月 21 日 | 朝のおもかげ | 平民 | 松魚 | 「朝顔」として再掲載 |
| | * | 1905 年 9 月 26 日 | 旅硯(第一信) | 平民 | 松魚生 | |
| | * | 1905 年 9 月 30 日 | 旅硯(第二信) | 平民 | 松魚生 | |
| | | 1905 年 10 月 1 日 | 白梅の巻 | 新小説 | 松魚生 | |
| | | 1906 年 2 月 1 日 | 白鳥物語 | 少女界 | 在米田村松魚 | |
| | * | 1906 年 9 月 15 日 ~ 10 月 18 日 | 罪の手 | 新世界 | 田村松魚 | |
| | * | 1906 年 8 月 1 日 | サンデーナイト | 新小説 | 在米田村松魚 | |
| | * | 1907 年 1 月 1 日 ~ 9 日 | 大成功 | 新世界 | 田村松魚 | 『北米の花』収録 |
| 1907(明治40),2,14 ニューヨーク | * | 1907 年 1 月 14 日 ~ 20 日 | 罪の手(続き) | 新世界 | 田村松魚 | |
| | * | 1907 年 2 月 15 日 | 病間録 | 新世界 | 松魚病夫 | |
| | * | 1907 年 2 月 24 日 | 閑畝君足下 | 新世界 | 紐育田村松魚 | |
| | * | 1907 年 3 月 30 日 | 北米相摸とり草 | 日米週報 | 田村松魚選 | |
| | * | 1907 年 4 月 6 日 | 北米相摸とり草 | 日米週報 | 田村松魚選 | |
| | * | 1907 年 4 月 13 日 | 北米相摸とり草 | 日米週報 | 田村松魚選 | |

| | | | | | | |
|---|---|--------------------------------|-------------------------------|-----------|-------------------|----------------------|
| | * | 1907 年 6 月 30 日 | 朝顔 | 太西洋 | 松魚 | 「朝のおも かげ」の再掲 載 |
| | * | 1907 年 6 月 30 日 | 小説 鉄蹄 | 太西洋 | 田村松魚 | |
| | * | 1907 年 7 月 14 日 | A Ghost of Old Japan | The World | Showgio Tamura | |
| | * | 1907 年 7 月 20 日 | 病室 | 太西洋 | 松魚 | |
| | * | 1907 年 7 月 20 日 | 清風漫言 | 太西洋 | 杜鵑堂 松 魚 | |
| | * | 1907 年 7 月 20 日 | 俳友某君のコネクチ カットに行くを送る | 太西洋 | 紐育 田村 松魚 | |
| 1907(明治 40),8 フィラデル フィア | * | 1907 年 11 月 27 日～ 12 月 26 日 | 出世間 | 新世界 | 在紐育 田 村松魚 | |
| ニューヨー ク | | 1907 年 11 月 1 日 | 夜露 | 新小説 | 松魚生 | |
| | * | 1908 年 8 月 29 日 | 粉煙草集 | 日米週報 | 松魚 | |
| | * | 1908 年 9 月 12 日 | 粉煙草集 | 日米週報 | 松魚 | |
| 1908(明治 41),9,18 サンフラン シスコ/大 和植民地 | * | 1908 年 9 月 20 日 | 粉煙草集 | 日米週報 | 松魚 | |
| | * | 1908 年 9 月 26 日 | 漢詩 | 新世界 | 田村松魚 | |
| | * | 1908 年 11 月 29 日 | 大和植民地詩 | 新世界 | 田村松魚 | 『北米の花』 収録 |
| 1909(明治 42),3,19 日本丸で帰 国 | * | 1909 年 6 月 1 日 | 帰朝後余が日本商店 を觀し時の感想 | 成功 | 田村松魚 | |
| | * | 1909 年 6 月 1 日 | 親友 | 成功 | 松魚生 | 「希望」の再 掲載 |
| | | 1909 年 7 月 1 日 | 新たに米国から帰り て日本の商店を見た 時の感 | 新公論 | 田村松魚君 | |
| | * | 1909 年 7 月 1 日 | 萬里矢 | 文藝俱樂部 | 田村松魚 | |
| | * | 1909 年 7 月 1 日 | 米国成金婦人の生活 | 女学世界 | 田村松魚 | |
| | * | 1909 年 7 月 1 日 | 在米日本人の労働生 活 | 成功 | 新 帰 朝 者 田村松魚 | |
| | * | 1909 年 9 月 1 日 | 桃の実 | 成功 | 田村松魚 | 『北米世俗 觀』収録 |
| | * | 1909 年 9 月 10 日 | 在米日本青年の現況 | 中学世界 | 田村松魚 | 『北米世俗 觀』収録 |

| | | | | | | |
|--|---|------------------------------|-----------------|-------|------|---------------|
| | * | 1909 年 9 月 13 日 | 北米の花 | | 田村松魚 | 博文館 |
| | * | 1909 年 10 月 10 日 | 在米日本青年の生活 現状 | 中学世界 | 田村松魚 | 『北米世俗 観』収録 |
| | | 1909 年 11 月 1 日 | 新居 | 文章世界 | 田村松魚 | |
| | * | 1909 年 12 月 1 日 | 商業国の少年 | 実業少年 | 田村松魚 | |
| | * | 1909 年 12 月 20 日 | 北米世俗観 | | 田村松魚 | 博文館 |
| | * | 1910 年 2 月 1 日 | 花祭日 | 文藝倶楽部 | 田村松魚 | |
| | | 1910 年 2 月 11 日～3 月 16 日 | 男子 | 萬朝報 | 田村松魚 | |
| | * | 1910 年 6 月 1 日 | 倶楽部の夜 | 実業少年 | 田村松魚 | |
| | * | 1910 年 10 月 1 日 | 自覚 | 実業少年 | 田村松魚 | |
| | | 1910 年 11 月 5 日 | 脚本家 | | 田村松魚 | 嵩山堂 |
| | | 1911 年 4 月 1 日 | 死後 | 文藝倶楽部 | 田村松魚 | |
| | * | 1911 年 5 月 1 日 | 海から陸 | 新小説 | 田村松魚 | |
| | | 1911 年 9 月 11 日～11 月 22 日 | 乱調子 | 萬朝報 | 田村松魚 | |
| | * | 1911 年 3 月 25 日 | 北米の日本人村 | 冒険世界 | 田村松魚 | |
| | * | 1911 年 5 月 1 日 | 都会の或る家庭（米 国） | 淑女かがみ | 松魚生 | |
| | * | 1911 年 6 月 1 日 | 天幕 | 文藝倶楽部 | 田村松魚 | |
| | * | 1912 年 8 月 1 日 | 北米の夏 | 淑女かがみ | 松魚生 | |
| | | 1912 年 9 月 1 日 | 器械工場 | 実業少年 | 田村松魚 | |
| | | 1912 年 10 月 1 日 | 商館ボーイ | 実業少年 | 松魚生 | |
| | | 1912 年 12 月 1 日 | 実業小説 露店の少 年 | 実業少年 | 田村松魚 | |
| | * | 1913 年 4 月 15 日 | 桜咲く頃 | 婦人評論 | 田村松魚 | |

*はアメリカを背景とした作品を示す。

※本著作年表は、田村松魚の渡米後からアメリカを背にした作品が発表された 1913 年 4 月までとした。

〔表 5-1〕

Catalogue, *Annual Exhibition of The Japanese Art Association Paintings, Drawings and Photographs. ETC.* By the Young Japanese Artists in New York. At The YAMANAKA GALLERIES. 254 Fifth Avenue New York. Exhibition Open From March 12th to 24th 1917.(The Archives of American Art, Smithsonian Institution 所蔵).

Water Colors

| | |
|---------------|-------------------------------|
| I.Kagawa | 《1. A Country House in Japan》 |
| T.K.Gado | 《2. The Willow》 |
| | 《3. Bridesmaid》 |
| | 《4. Fairly Clouds》 |
| | 《5. Landscape》 |
| T.Wake | 《6. Girl in Red》 |
| | 《7. Blue and Yellow》 |
| S.Shimotori | 《8. A Snowy Day》 |
| | 《9. New England Coast》 |
| | 《10. Low Tide》 |
| | 《11. Tea Pot》 |
| | 《12. Still Life》 |
| | 《13. Still Life》 |
| | 《14. Still Life》 |
| | 《15. Still Life》 |
| | 《16. Fruits》 |
| | 《17. Apples》 |
| | 《18. Apples》 |
| | 《19. Apples》 |
| | 《20. Apples》 |
| K.Ashiwara | 《21. Summer》 |
| | 《22. Sweet Peas》 |
| | 《23. Rainy Day》 |
| | 《24. Boat House》 |
| | 《25. Early Summer》 |
| T.Ono | 《26. Lake Hopatocong》 |
| Oil Paintings | |
| S.Hamachi | 《27. Favorite Author》 |
| | 《28. Passing Glance》 |

| | |
|-------------|---------------------------------|
| | 《29. Nude》 |
| | 《30. Nude》 |
| | 《31. Blue Chiffon》 |
| | 《32. Nude》 |
| | 《33. Girl with Violin》 |
| | 《34. Nasturtium》 |
| | 《35. Palisade Park》 |
| | 《36. Autumn》 |
| | 《37. Afternoon Sun》 |
| S.Shimotori | 《38. Early Spring》 |
| | 《39. Girl in the Dressing Room》 |
| | 《40. Apples》 |
| M.Uwagawa | 《41. A Souvenir of Paris》 |
| | 《42. A Bridge in Pairs》 |
| | 《43. Pont Royal》 |
| | 《44. Louvre》 |
| | 《45. Suburbs of Paris》 |
| | 《46. St. Cloud, Paris》 |
| | 《47. A Bridge on the Seine》 |
| | 《48. Corner of the Studio》 |
| | 《49. An Afternoon》 |
| | 《50. Notre-Dame》 |
| | 《51. A Brook》 |
| | 《52. Still Life》 |
| | 《53. The Seine》 |
| | 《54. River Bank on the Seine》 |
| K.Ashiwara | 《55. St.Denis》 |
| | 《56. Still Life》 |
| | 《57. Sketch》 |
| | 《58. Full Moon》 |
| | 《59. Gray Day》 |
| | 《60. Still Life》 |
| | 《61. Chinese Plants》 |
| | 《62. Mountain Road》 |
| | 《63. Still Life》 |
| | 《64. Still Life》 |

| | |
|------------------------|-------------------------------------|
| | 《65. Elevated Train》 |
| | 《66. Still Life》 |
| M.Tsuchiya | 《68(sic). Snow Scene in Japan》 |
| | 《68. The Old Japanese Pantomime》 |
| | 《69. Autumn Field in Japan》 |
| Architectural Drawings | |
| I.Takanosu | 《70. A Fireplace for Dining Room》 |
| T.Ono | 《71. Suburban House in America》 |
| | 《72. Combination Style of Interior》 |
| Photographs | |
| T.Kikuchi | 《72(sic). Slumber》 |
| | 《74. Morning Arisal》 |
| | 《75. Elsie》 |

〔表 5-2〕

Exhibition of Paintings. By K.Ashiwara/ T.K.Gado/ S.Hamachi/ I.E.Hori/ K.Inukai/ K.Kimoto/ Y.Kuniyoshi/ G.Sakaguchi/ S.Shimotori/ George Tera/ M.T.Tsuchiya/ M.Uwagawa/ February Second to February Tenth 1918/ The Exhibition will be open free to the public daily from 10 A.M. to 6 P.M., Sunday 1 P.M. to 6 P.M., At The MacDowell Club of New York. 108 West Fifty-Fifth Street New York City.
(The Frick Art Reference Library 所蔵).

| | |
|-------------|------------------------------|
| K.Ashiwara | 《1. Cherry Blossoms》 |
| | 《2. Autumn》 |
| | 《3. To the Market》 |
| | 《4. The Mountain》 |
| | 《5. Impression of Deer》 |
| T.K.Gado | 《6. Take Gari》 |
| S.Hamachi | 《7. Illusion》 |
| | 《8. Nude》 |
| | 《9. Fifth Avenue》 |
| | 《10. Central Park》 |
| | 《11. Afternoon Sun》 |
| | 《12. Winter Day》 |
| I.E.Hori | 《13. The Woods》 |
| | 《14. My Sister》 |
| K.Inukai | 《15. The Fog》 |
| | 《16. The Sunset》 |
| | 《17. The Cold Wind》 |
| | 《18. The Turbulent Night》 |
| | 《19. Sketch》 |
| | 《20. The Wind》 |
| K.Kimoto | 《21. The Woods》 |
| Y.Kuniyoshi | 《22. Nude》 |
| | 《23. Nude》 |
| | 《24. Nude》 |
| | 《25. Portrait of an Old Man》 |
| | 《26. Landscape》 |
| | 《27. Homeward》 |
| | 《28. July》 |

| | |
|--------------|--|
| | 《29. Resting》 |
| | 《30. Out Again》 |
| | 《31. Cloud, Mountain and Group of Figures》 |
| | 《32. Misty Morning》 |
| | 《33. Sorrow》 |
| | 《34. Nude》 |
| | 《35. Wanderer》 |
| G.Sakaguchi | 《36. Sparrows》 |
| | 《37. Thought of Orient》 |
| S. Shimotori | 《38. Still Life》 |
| | 《39. Still Life》 |
| | 《40. Chrysanthemums》 |
| | 《41. Still Life》 |
| | 《42. Still Life》 |
| | 《43. Purple Haori》 |
| George Tera | 《44. Girl in Brown》 |
| | 《45. Young Man》 |
| | 《46. Red Sleeves》 |
| | 《47. Young Indian》 |
| | 《48. Marion》 |
| M.T.Tsuchiya | 《49. Still Life》 |
| | 《50. Still Life》 |
| | 《51. Figure》 |
| | 《52. Portrait of a Girl》 |
| | 《53. Self Portrait with Fruit》 |
| | 《54. Self Portrait with Cigar》 |
| M.Uwagawa | 《55. The Flower》 |

〔表 5-3〕

Exhibition of Paintings and Sculptures. by The Japanese Artists Society of New York City. November 1st to 21st 1922. Open 10 A.M.to 10 P.M. except Sun., Wed. and Sat. Nights. The Civic Club, 14 West 12th Street, New York City. (和歌山県立近代美術館所蔵).

Paintings

| | |
|------------------|-----------------------------------|
| Ando Kunie | 《1. Music Room》 |
| | 《2. Snow in the Village》 |
| | 《3. Before the Storm》 |
| | 《4. The Mountain》 |
| Hara Makoto S. | 《5. Afternoon at the Suburb》 |
| | 《6. Armand》 |
| Inaba Shotaro | 《7. Sketch》 |
| | 《8. Sketch》 |
| | 《9. Sketch》 |
| | 《10. Sketch》 |
| | 《11. Virgin》 |
| | 《12. Woman》 |
| Ishigaki Eitaro | 《13. Triumph of Death》 |
| | 《14. Twilight Hour》 |
| | 《15. Mystic Shore》 |
| | 《16. Fruit》 |
| Gado T.K. | 《17. Family》 |
| | 《18. Chicken House》 |
| | 《19. Rush Hour in Subway》 |
| | 《20. The Traffic》 |
| Kuniyoshi, Yasuo | 《21. Boy Scared by Snake》 |
| | 《22. Frog and Hospital》 |
| Miki Ryokichi | 《24. Coast of Massachusetts》 |
| | 《25. Unknown Waterfall》 |
| | 《26. Park of Spring Valley, N.Y.》 |
| | 《27. Returning on the Way》 |
| Misaki Michio | 《28. Still Life》 |
| | 《29. Self Portrait》 |
| Shimizu Toshi | 《30. The Road》 |
| | 《31. Children》 |
| | 《32. Yokohama Night》 |

| | |
|-------------------|--------------------------------|
| | 《33. Landscape》 |
| Tera Tetusen | 《34. Portrait》 |
| Usui Bumpei | 《35. Hanging Rock》 |
| | 《36. Evening》 |
| | 《37. Still Life》 |
| | 《38. Landscape》 |
| Watanabe Torajiro | 《39. Endless Wall》 |
| | 《40. Morning Glory》 |
| | 《41. Moonlight after Rain》 |
| | 《42. Old Mill》 |
| | 《43. Flowers》 |
| | 《44. Sketch》 |
| Sculptures | |
| Hiramoto Masaji | 《1. A Man of the Stone Age》 |
| | 《2. Buddha 》 |
| | 《3. Rodin》 |
| | 《4. Joffre》 |
| Kawamura Gozo | 《5. Master James》 |
| | 《6. Ideal Holstein Cow》 |
| | 《7. Ideal Holstein Bull》 |
| | 《8. Tablet》 |
| | 《9. Trophy for Dairy Industry》 |
| | 《10. Baby Book Ends》 |

〔表 6-1〕

独立美術家協会展 日本人画家作品出品目録

第 1 回展 (1917 年 4 月 10 日～5 月 6 日)

| | |
|---------|---------------------|
| 葦原曠 | 《A Girl》 |
| | 《Still Life》 |
| 濱地清松 | 《Illusion》 |
| 佐場リンノスケ | 《Girl with an Idol》 |
| | 《Illumined Flowers》 |
| 国吉康雄 | 《Home Ward》 |
| | 《Modern Crucifix》 |
| 重松岩吉 | 《A Cala Woman》 |
| | 《A Woman》 |

第 2 回展 (1918 年 4 月 20 日～5 月 12 日)

| | |
|----------|----------------------------|
| 安藤邦衛 | 《Woman in the Balcony》 |
| 萩生田真陽 | 《The red bath》 |
| | 《Writhing》 |
| カワチ J.B. | 《The New Kimono》 |
| | 《Spring》 |
| 国吉康雄 | 《Nude》 |
| | 《Still Life》 |
| 重松岩吉 | 《Rowboat》 |
| | 《Fifth Street Los Angeles》 |

第 3 回展 (1919 年 3 月 28 日～4 月 14 日)

| | |
|-------|-------------------------|
| 古田土雅堂 | 《Rush Hour in Subway》 |
| | 《An Accident》 |
| 萩生田真陽 | 《Madison Square Garden》 |
| | 《The Pond》 |
| 鍋島四郎 | 《The Evergreen》 |
| | 《A Corner of the Earth》 |
| 清水登之 | 《Automatic Vaudeville》 |
| | 《In the Park》 |
| 山成弘禪 | 《Deaf》 |
| | 《Lonesome》 |

第4回展（1920年3月11日～4月1日）

| | |
|--------|------------------------|
| 古田土雅堂 | 《After the Bath》 |
| | 《The Spirit》 |
| 萩生田真陽 | 《The Mochitsuki》 |
| | 《A Landscape》 |
| 平本正次 | 《Man of the Stone Age》 |
| | 《Roosevelt》 |
| 国吉康雄 | 《Still Life》 |
| | 《Portrait》 |
| 山添ケイイチ | 《Hell》 |

第5回展（1921年2月26日～3月24日）

| | |
|-------------------|---------------------------|
| 古田土雅堂 | 《The Traffic》 |
| | 《Nude》 |
| 萩生田真陽 | 《Claudia Muzio in "Aida"》 |
| | 《Portrait of a Man》 |
| 平本正次 | 《Dai Butsu》 |
| 久米 Koume, Tami M. | 《Meditation》 |
| 国吉康雄 | 《On the Balcony》 |
| | 《Portrait》 |
| 清水登之 | 《Impression of Yokohama》 |
| | 《Shrine》 |

第6回展（1922年3月11日～4月2日）

| | |
|-------|--------------------------------|
| 古田土雅堂 | 《The Ball》 |
| | 《In the Park Sunday Afternoon》 |
| 平本正次 | 《Rodin》 |
| | 《Foch》 |
| | 《Joffre》 |
| 清水登之 | 《Houses at Dyckman》 |
| | 《In Chop Suey》 |
| 渡辺寅次郎 | 《Water Fall》 |

第7回展（1923年2月24日～3月18日）

| | |
|-------|---------------|
| 古田土雅堂 | 《Block Party》 |
| 平本正次 | 《Youth》 |

| | |
|-------|---------------------------------------|
| | 《Book Ends》 |
| 清水登之 | 《China Town》 |
| | 《Monstrosity in the World of Thought》 |
| 渡辺寅次郎 | 《Symbol of Righteousness screen》 |

第 8 回展 (1924 年 3 月 7 日～3 月 30 日)

| | |
|-------|--------------------------------------|
| 古田土雅堂 | 《Communication in the under Surface》 |
| 古谷久造 | 《Labourer》 |
| | 《Mt.Hood》 |
| 原誠 | 《The Coryphee》 |
| | 《From the Balcony》 |
| 平本正次 | 《La Misericorde》 |
| | 《Prof. Arthur W. Dow》 |
| 藤岡昇 | 《Window》 |
| | 《Woodland Marsh》 |
| 三崎道夫 | 《After the Bath》 |
| 定方塊石 | 《Kwannon》 |
| 清水登之 | 《Childs》 |
| | 《The Place for Apartment house》 |
| 保忠蔵 | 《Kimono》 |
| | 《Storm》 |
| 臼井文平 | 《From my Window》 |
| | 《Landscape》 |
| 渡辺寅次郎 | 《Earthquake》 |

第 9 回展 (1925 年 3 月 6 日～3 月 29 日)

| | |
|------|--------------------|
| 有馬純夫 | 《From the Window》 |
| | 《Florist》 |
| 藤岡昇 | 《Mary》 |
| | 《Still Life》 |
| 古谷久造 | 《Portrait of Girl》 |
| | 《Still life》 |
| 平本正次 | 《Musician》 |
| | 《Poet》 |
| 堀とく子 | 《Woman with Hat》 |

| | |
|--------|-------------------------------|
| | 《Woman》 |
| 石垣栄太郎 | 《The Man with a Whip》 |
| 森田.Y | 《First Favorite》 |
| 中溝不二 | 《Portrait of Miss Lola Scott》 |
| | 《Thirst》 |
| 中村オリバー | 《Blossom Time》 |
| 清水清 | 《Landscape》 |
| | 《Shooting Gallery》 |
| 角南壮一 | 《Penny Arcade》 |
| | 《Big Ben》 |
| 臼井文平 | 《Roof at Evening》 |
| | 《Brick Factory on Sunday》 |
| 保忠蔵 | 《Study》 |
| 吉田石堂 | 《Red Necktie》 |
| | 《Madison Square at Night》 |
| 渡辺寅次郎 | 《"L" Train New York》 |
| | 《Vanes》 |

第 10 回展 (1926 年 3 月 5 日～3 月 28 日)

| | |
|-------|-------------------------------|
| 藤岡昇 | 《American Sprit》 |
| | 《The Day's Opportunities》 |
| 原誠 | 《Edith in Apron》 |
| | 《Harlem River》 |
| 平本正次 | 《Dancer》 |
| 石垣栄太郎 | 《Processional 1925》 |
| 三崎道夫 | 《Bathers》 |
| | 《A Girl》 |
| 清水清 | 《14 Street》 |
| 角南壮一 | 《Doll》 |
| | 《Dyckman Tennis Court》 |
| 都筑隆 | 《Window》 |
| 臼井文平 | 《Painting》 |
| | 《Summer Evening》 |
| 森田 .Y | 《Recreation of the Harvester》 |
| 渡辺寅次郎 | 《Over the Fall》 |
| | 《Colo. Canyon》 |

《Mother and Child(Sculpture)》
《Love(Sculpture)》
《Tulip(Sculpture)》
《Wood Carving》

第 11 回展 (1927 年 3 月 11 日～4 月 3 日)

| | |
|-------|---|
| 土井勇 | 《Japanese Nude》 《Woodstock House》 |
| 藤井菊江 | 《Friendly Call》 |
| 藤岡昇 | 《Judgment of New York》 |
| 石垣栄太郎 | 《Delirium of Eighteenth Amendment》 |
| 平本正次 | 《Dictator》 |
| 加藤隣之助 | 《Czecho Slavakia Landscape》 《Playing Ball》 |
| 角南壮一 | 《Fania》 |
| 清水清 | 《Music Shop》 《Still Life》 |
| 保忠蔵 | 《Stone Yard》 《Bathers》 |
| 都筑隆 | 《The Beauty Shop》 |
| 宫本要 | 《A Young Girl with Red Coat》 《Reflection》 |
| 中川菊太 | 《New London Conn》 |
| 臼井文平 | 《Down in Hill Top》 |
| 渡辺寅次郎 | 《Mob and Persecution》 |

第 12 回展 (1928 年 3 月 9 日～4 月 2 日)

| | |
|-------|--|
| 土井勇 | 《Nude on the Hillside》 《Nude》 |
| 平本正次 | 《Madam Butterfly》 《Junior on Aviator》 |
| 石垣栄太郎 | 《Ferry boat Troubadour》 |
| 加藤隣之助 | 《Chow Mein》 《Vino》 |
| 中川菊太 | 《Riverside Drive》 |
| 清水清 | 《Woman on Horseback》 |

| | |
|--------|-----------------------|
| 角南壮一 | 《Thunder》 |
| 鈴木羅漢 | 《At Tress》 |
| 鈴木彌七 | 《Study》 |
| | 《Study》 |
| 保忠蔵 | 《Girl with Balalaika》 |
| 寺徹圓 | 《Portrait Man》 |
| 臼井文平 | 《Ukulele 》 |
| 永井トーマス | 《Tea》 |
| 藤田ジドー | 《A Little Dreamer》 |
| | 《Mille Piano》 |

第 13 回展（1929 年 3 月 8 日～4 月 1 日）

| | |
|--------|------------------------------------|
| 石垣栄太郎 | 《Undefeated Arm》 |
| 清水清 | 《Composition》 |
| 鈴木羅漢 | 《Chinese Fantasy》 |
| 鈴木彌七 | 《Portrait Spanish Girl》 |
| 保忠蔵 | 《Sacandaga Park Midway》 |
| 臼井文平 | 《Sunday Afternoon》 |
| 藤井菊江 | 《Three Dreamers》 |
| 藤田ジドー | 《The Origin of Unicom chop Sticks》 |
| 古谷久造 | 《Peasant》 |
| 矢部洋輔 | 《Harlem River 》 |
| | 《Harlem River》 |
| 加藤隣之助 | 《Ching's Place》 |
| 永井トーマス | 《Woman with Mirror》 |
| | 《Head Young Girl》 |

第 14 回展（1930 年 3 月 1 日～3 月 31 日）

| | |
|--------|--------------------|
| 浜野作蔵 | 《Landscape》 |
| 加藤隣之助 | 《The Studio》 |
| 河内義雄 | 《Portrait Old Man》 |
| | 《Still Life》 |
| 永井トーマス | 《Painting》 |
| | 《Painting》 |
| 清水清 | 《Still Life 》 |
| 鈴木羅漢 | 《Picket Line》 |

| | |
|-------|--------------------|
| 鈴木彌七 | 《Japonica Camelia》 |
| 臼井文平 | 《Siesta》 |
| 亙理武夫 | 《Commuters》 |
| 石垣栄太郎 | 《The United Front》 |
| 藤井菊江 | 《Miss Butler》 |

第 15 回展 (1931 年 3 月 6 日～3 月 30 日)

| | |
|-------|-------------------|
| 河内義雄 | 《Self Portrait》 |
| | 《Arrest》 |
| 石垣栄太郎 | 《The Noose》 |
| | 《Traffic Problem》 |
| 藤井菊江 | 《Top Floor》 |
| | 《Autumn》 |
| | 《Landscape》 |
| 土井勇 | 《The Quay》 |
| | 《Nude》 |
| 清水清 | 《Merry Go Round》 |
| | 《Still Life》 |
| 角南壮一 | 《Ogunquit Sketch》 |
| | 《Landscape》 |
| 臼井文平 | 《Nude on Couch》 |
| | 《Upper Bronx》 |
| 亙理武夫 | 《Smoking Car》 |

第 16 回展 (1932 年 4 月 1 日～4 月 24 日)

| | |
|--------|--------------------|
| 永井トーマス | 《Little Fisherman》 |
| 藤岡昇 | 《Meditation》 |
| | 《A La Café》 |
| 雨宮要生 | 《Mask》 |
| | 《Mrs. Harry Payne》 |
| 亙理武夫 | 《Still Life》 |
| | 《East Rockaway》 |

第 17 回展 (1933 年 4 月 7 日～4 月 30 日)

| | |
|-------|-----------------------------|
| 石垣栄太郎 | 《Imperialism and Rebellion》 |
| 亙理武夫 | 《Still Life》 |

《Still Life》

第 18 回展 (1934 年 4 月 13 日～5 月 6 日)

| | |
|--------|--------------------------|
| 亙理武夫 | 《Sunlight》 |
| | 《Study in Still Life》 |
| | 《From My window》 |
| 石垣栄太郎 | 《I will not Speak》 |
| | 《Flappers and Newspaper》 |
| 永井トーマス | 《Landscape》 |
| | 《Landscape》 |

第 19 回展 (1935 年 4 月 6 日～4 月 28 日)

| | |
|--------|---------------|
| 雨宮要生 | 《Study》 |
| 鈴木盛 | 《Composition》 |
| 永井トーマス | 《Painting》 |

第 20 回展 (1936 年 4 月 24 日～5 月 17 日)

| | |
|--------|--|
| 広田進 | 《Evening Village》 |
| 三鬼ジョージ | 《The Unity for the Freedom of Tom Mooney and the Scottsboro Boys》 |

出典

Marlor, S. Clark. *The Society of Independent Artists The exhibition Record 1917-1944*.
(Mill Road, Park Ridge New Jersey: Noyes Press. 1984).

〔表 6-2〕

サロンス・オブ・アメリカ 日本人画家出品目録

Autumn Salon (1922 年 10 月 16 日～11 月 4 日)

| | |
|-------|--------------------|
| 古田土雅堂 | 《An Infant》 |
| 国吉康雄 | 《Rowing up Stream》 |
| 清水登之 | 《Tennis Player》 |
| 渡辺寅次郎 | 《Little Creek》 |

Spring Salon (1923 年 5 月 21 日～6 月 9 日)

| | |
|-------|--------------------------------|
| 古田土雅堂 | 《Ambulance》 |
| 国吉康雄 | 《Little Joe and Cow with Calf》 |
| 渡辺寅次郎 | 《Country Town》 |

Spring Salon (1924 年 5 月 26 日～5 月 31 日)

| | |
|------|--------------|
| 国吉康雄 | 《Bather》 |
| 保忠藏 | 《Back Yard》 |
| 臼井文平 | 《Water Tank》 |
| 藤岡昇 | 《Creek》 |

Autumn Salon (1924 年 10 月 7 日～10 月 19 日)

| | |
|------|---------------|
| 吉田石堂 | 《Late Summer》 |
| | 《Azalea》 |

Spring Salon (1925 年 4 月 28 日～5 月 16 日)

| | |
|-------|------------------|
| 有馬純夫 | 《Bathers》 |
| 国吉康雄 | 《The Life Guard》 |
| 藤岡昇 | 《Window View》 |
| 臼井文平 | 《Machine Shop》 |
| 石垣栄太郎 | 《The Clinch》 |

Autumn Salon (1925 年 10 月 20 日～10 月 31 日)

| | |
|-------|----------------------|
| 藤岡昇 | 《Note of Admiration》 |
| 石垣栄太郎 | 《Nun and Flappers》 |
| 国吉康雄 | 《Painting》 |
| 清水清 | 《Burlesque》 |

| | |
|------|----------------|
| 角南壮一 | 《Union Squire》 |
| 臼井文平 | 《Landscape》 |

Spring Salon (1926 年 5 月 18 日～6 月 5 日)

| | |
|-------|--------------------------|
| 平本正次 | 《Musician》 |
| | 《Man of the Stone Age》 |
| 石垣栄太郎 | 《Bald Headed Row》 |
| 渡辺寅次郎 | 《Yankee Girl》 |
| 国吉康雄 | 《Circus Girl》 |
| | 《Grapes in Bowl》 |
| 三崎道夫 | 《Nude and Rocking Chair》 |
| 清水清 | 《Landscape》 |
| 臼井文平 | 《Winter》 |
| 村田紅雪 | 《Rouge》 |
| 都筑隆 | 《Still Life》 |
| 藤岡昇 | 《Public Constitution》 |
| 古谷久造 | 《Still Life》 |

Spring Salon (1927 年 4 月 26 日～5 月 14 日)

| | |
|-------|----------------------------------|
| 国吉康雄 | 《Still Life》 |
| 石垣栄太郎 | 《Circus Days》 |
| 清水清 | 《Billiards Chop Suay and Movies》 |
| 藤岡昇 | 《Fraternal Pleasure》 |
| 保忠藏 | 《Grapefruit》 |
| 中川菊太 | 《Protector》 |
| 加藤燐之助 | 《After Bathing》 |
| 土井勇 | 《Nude》 |
| 古谷久造 | 《Portrait》 |
| 都筑隆 | 《Still Life》 |

Spring Salon (1928 年 5 月 日～5 月 26 日)

| | |
|------|-----------------|
| 国吉康雄 | 《Self Portrait》 |
| 保忠藏 | 《Young Girl》 |
| 都筑隆 | 《Nap》 |
| 臼井文平 | 《Catalogue》 |
| 清水清 | 《Etude》 |

| | |
|-------|-----------------|
| 古谷. F | 《Hillside Farm》 |
| 加藤燐之助 | 《Chow Mein》 |
| 中川菊太 | 《Timid》 |
| 鈴木彌七 | 《Oriental》 |

Spring Salon (1929 年 4 月 16 日～5 月 5 日)

| | |
|--------|-------------------|
| 保忠蔵 | 《Back Yard》 |
| 永井トーマス | 《Picnic》 |
| 国吉康雄 | 《Still Life》 |
| 藤田ジドー | 《Going Up!》 |
| 中川菊太 | 《Early Morning》 |
| 清水清 | 《Two Figure》 |
| 都筑隆 | 《A Self Portrait》 |
| 臼井文平 | 《Painting》 |
| 矢部洋輔 | 《Early Summer》 |
| 加藤燐之助 | 《Card Player》 |

Spring Salon (1930 年 4 月 22 日～)

| | |
|--------|--------------------------|
| 原誠 | 《The Letter》 |
| 永井トーマス | 《Still Life》 |
| 加藤燐之助 | 《Yuk-Tong(Chinese Club)》 |
| 国吉康雄 | 《Woman Asleep》 |
| | 《The Bather》 |
| 中川菊太 | 《Mystic》 |
| 保忠蔵 | 《Landscape》 |
| 臼井文平 | 《Girl with Cats》 |
| 藤田ジドー | 《Handsome Lilion》 |

Spring Salon (1931 年 4 月 20 日～5 月 9 日)

| | |
|--------|--------------------------|
| 藤井菊江 | 《An Oct Day》 |
| 国吉康雄 | 《Still Life》 |
| 永井トーマス | 《Stroll》 |
| 中川菊太 | 《Broken Romance》 |
| 清水清 | 《Painting》 |
| 保忠蔵 | 《Painting》 |
| 臼井文平 | 《Early Spring Washi Sq.》 |

Spring Salon (1932 年 4 月 26 日～5 月 14 日)

| | |
|------|-----------------------|
| 雨宮要生 | 《The Carousel》 |
| 国吉康雄 | 《Girl with far Coat 》 |
| 中川菊太 | 《Portrait Young Lady》 |
| 保忠蔵 | 《West Brighton》 |

Spring Salon (1933 年 5 月 2 日～5 月 20 日)

| | |
|------|-----------------|
| 臼井文平 | 《By the Window》 |
| 土井勇 | 《Mountains》 |
| 国吉康雄 | 《Flowers》 |

Spring Salon (1934 年 4 月 9 日～5 月 6 日)

| | |
|------|-----------------------------|
| 宮本要 | 《Flower of Shadow》 |
| | 《Walk》 |
| | 《Carrot》 |
| 中溝不二 | 《Interior Speakeasy》 |
| | 《Autumn Eventide》 |
| | 《Happy Holiday》 |
| 国吉康雄 | 《Toy Tiger and Odd object》 |
| 土井勇 | 《Portrait》 |
| | 《Tying Sleeves》 |
| 門脇ロイ | 《Fountain》 |
| 臼井文平 | 《Fifteenth St》 |
| | 《Portrait of Man》 |
| 亘理武夫 | 《Hell Gate》 |
| | 《Corners》 |
| | 《Autumn Fruits and Flowers》 |

Spring Salon (1935 年 5 月 7 日から 5 月 25 日)

| | |
|------|--------------------|
| 国吉康雄 | 《Pigeon and Scarf》 |
|------|--------------------|

Spring Salon (1936 年 5 月 6 日～5 月 23 日)

| | |
|------|----------------------------|
| 門脇ロイ | 《Kitchen Table》 |
| 国吉康雄 | 《Grapes and Hard Crackers》 |

出典

Marlor, S. Clark. *The Salons of America 1922-1936*. (Madison, Connecticut: Sound View Press. 1991).

〔表 7-1〕

The First Annual Exhibition of Paintings and Sculpture, by Japanese Artists in New York.

From February 16th to March 5th, 1927.

Assembled by Japanese Times, at The Art Center, 65 East 56th Street, New York City.
(和歌山県立近代美術館所蔵).

| | |
|--------------------------|--|
| Foujioka, Noboru | 《1. Strap Hangers》 |
| | 《2. American Spirit》 |
| | 《3. Charleston》 Courtesy of Tessha Kanaya Esq. |
| Fujii, Kikuye | 《4. Horton Point》 |
| | 《5. Bather》 |
| Hamachi, Seimatsu | 《6. Landscape》 |
| | 《7. Landscape》 |
| | 《8. Nude》 |
| Hiramoto, Masaji | 《9. The Dancer (Sculpture)》 |
| | 《10. Madame Butterfly (Sculpture)》 |
| | 《11. The Musician (Sculpture)》 |
| Inukai, Kyohei | 《12. Reflection》 |
| | 《13. Landscape》 |
| Ishigaki, Eitaro | 《14. Nuns and Flappers》 Courtesy of Dr. Kinichi Iwamoto. |
| | 《15. A Traffic Problem》 |
| | 《16. S.P.C.A.》 |
| Kato, Kentaro (Deceased) | 《17. Fisherman' s Village》 Courtesy of Dr. Kinichi Iwamoto |
| Kawamura, Gozo | 《18. Portrait (Sculpture)》 |
| | 《19. Peggy (Sculpture)》 |
| | 《20. Spring (Sculpture)》 |
| Kitamori, Seioh | 《21. Nude》 |
| | 《22. Winter》 |
| Kuniyoshi, Yasuo | 《23. Little Joe and Cow and Calf》 |
| | 《24. A White Cow》 |
| Miki, Ryokichi | 《25. Cathedral from Morningside Park》 |
| | 《26. My Daughter》 |
| Misaki, Michio | 《27. Still Life》 |
| | 《28. A Woman》 |
| Murata, Mrs. Yukiko | 《29. A Spring Evening》 |

| | |
|--------------------|--|
| | 《30. Rouge》 |
| | 《31. Kimono》 |
| Saito, Ryuko | 《32. Interior》 |
| Shimizu, Kiyoshi | 《33. Fourteenth Street》 |
| | 《34. Along the Harlem River》 |
| | 《35. Landscape》 |
| Shimizu, Toshi | 《36. Yokohama Night》 Courtesy of Mrs. George Bellows |
| Sunami, Soichi | 《37. Portrait of my Mother》 |
| | 《38. Nude》 |
| | 《39. Still Life》 |
| Tmotsu, Chuzo | 《40. Landscape》 |
| | 《41. Portrait》 |
| | 《42. Landscape》 |
| Tera, Tesuen | 《43. Young Girl》 |
| Tsuzuki, Takashi | 《44. Self Portrait 》 |
| | 《45. Landscape》 |
| Usui, Bunpei[sic] | 《46. The Carpenter's Shop》 |
| | 《47. Portrait of a Girl》 |
| | 《48. Landscape》 |
| Watanabe, Torajiro | 《49. Self Portrait》 |
| | 《50. Roofs》 |
| | 《51. Mother and Child》 (Coal Carving) |
| Yoshida, Sekido | 《52. East River》 Courtesy of Hiroshi Saito Esq. |
| Anonymous | 《53. Torso》 |
| (*Isamu Noguchi) | 《54. Portrait in Terracotta》 |
| Yokouchi, Kiyoharu | 《55. Hudson River》 |

The Japanese Times extends its thanks to the following artists for their kind assistance in the arrangement of the exhibition.

Advisory Committee

Rockwell Kent

Walter Pach

John Sloan

Yasuo Kuniyoshi

Hanging Committee

Noboru Foujioka

Masaji Hiramoto

Eitaro Ishigaki

Yasuo Kuniyoshi

Torajiro Watanabe

Corresponding Secretaries

Noboru Foujioka

Eitaro Ishigaki

〔表 8-1〕

紐育新報社後援邦人美術展覧会目録 Exhibition of Paintings and Sculpture, by Japanese Artists in New York, From February 10th to March 2nd, 1935, Assembled by The Japanese Times, at A.C.A. Gallery 52 West 8th Street, New York City.
(The Museum of Modern Art Library 所蔵).

| | |
|------------------|---|
| Amemiya, Yosei | 《1. Still Life》 《2. Landscape》 |
| Aoki, Minoru | 《3. College Chapel》 《4. Hamilton Street》 |
| Doi, Isami | 《5. Women by the Window》 |
| Hara ,Makoto | 《50. [sic] Sinking Sun》 |
| Inouye, T. | 《6. Etude》 《7. “Grand Old Parr”》 |
| Inouye, Mme | 《8. Doll》 《9. Doll》 |
| Ishigaki, Eitaro | 《10. Uprising》 《11. Unemployed》 |
| Kadowaki, Roy | 《12. Fantan Game》 《13. Still Life》 《14. Landscape》 |
| Kato, Rinnosuke | 《15. Passage》 《16. Portrait》 |
| Komuro, David | 《17. Portrait》 《18. Still Life》 |
| Kuniyoshi, Yasuo | 《19. Fruits on Table》 |
| Miyamoto, Kaname | 《20. Early Morning》 《21. Painting》 |
| Nagai, Thomas | 《22. Interior》 |
| Nakagawa, Kikuta | 《23. Portrait of Young Girl》 《24. Landscape》 《25. Still Life》 |
| Nakamizo, Fuji | 《26. Skipping Rope》 《27. Boy Calling》 |
| Noda, Hideo | 《28. Milk Wagon》 《29. Painting》 |

| | |
|------------------|--------------------------------------|
| Noguchi, Isamu | 《30. Sumotori (Sculpture)》 |
| | 《31. My Uncle (Sculpture)》 |
| Nomura, H. | 《51. [sic] Snow》 |
| | 《52. [sic] “Tanzaku”》 |
| Sawada, Mme | 《32. Still Life》 |
| | 《33. Portrait》 |
| Shimizu, Kiyoshi | 《34. Painting》 |
| | 《35. Painting》 |
| Sunami, Soichi | 《36. Haystack》 |
| | 《37. Still Life》 |
| Suzuki, Sakari | 《38. Mountain Voice》 |
| | 《39. Painting》 |
| Suzuki, Yashichi | 《40. Girl in Blue》 |
| Tamotsu, Chuzo | 《41. Apple Blossoms》 |
| | 《42. Peace Valley》 |
| Usui, Bumpei | 《43. Interior》 |
| | 《44. Landscape》 |
| Watari ,Takeo | 《45. Still Life》 |
| | 《46. Still Life(Fruits and Flowers)》 |
| Yamasaki, C. | 《47. Winter Landscape》 |
| | 《48. Self Portrait》 |
| | 《49. Head (Sculpture)》 |

Lecture on Japanese Art by William Zorach and Professor R. Tsunoda, Chairman Y. Kuniyoshi, on February 15th, at 8:30 P.M. at The A.C.A. Gallery 52 West 8th Street, New York City, Also Japanese Entertainers, Admission 75 Cents.

〔表 8-2〕

紐育新報社後援 邦人美術展覧会目録 Exhibition of Paintings and Sculpture by Japanese Artists in New York, From April 20th to May 2nd, 1936 Assembled by The Japanese Times, at A.C.A. Gallery, 52 West 8th Street, New York City.
(和歌山県立近代美術家所蔵).

| | |
|---------------------|---------------------------------|
| Amemiya, Yosei | 《1. Still Life》 |
| Aoki, Minoru | 《2. Country Skyscraper》 |
| | 《3. Phantas Magoria》 |
| Doi, Isami | 《4. Hawaii Mountain》 |
| Hyun,Paul | 《5. Man With Flute》 |
| | 《6. Torso-Male》 |
| | 《7. Torso-Female》 |
| Inouye, T. | 《8. Painting》 |
| Inouye, Mme | 《9. Painting》 |
| Ishigaki, Eitaro | 《10. Painting》 |
| Iwasaki, Kenji | 《11. Girl with Blue Eyes》 |
| Kadowaki, Roy | 《12. Landscape》 |
| | 《13. Still Life 》 |
| Kato, Rinnosuke | 《14. Card Players》 |
| | 《15. Old German Town》 |
| Komuro, David | 《16. Portrait of Aileen》 |
| | 《17. Portrait of Ohodo》 |
| Kuniyoshi, Yasuo | 《18. Painting》 |
| Kusanobu, Murray | 《20. Head.》 |
| Miyamoto, Kaname | 《21. Painting》 |
| Nagai, Thomas | 《22. Landscape with Figure》 |
| Nakagawa, Kikuta | 《23. Little Girl in Red》 |
| | 《24. Still Life》 |
| Nakayama, Mitsu | 《25. Jim》 |
| | 《26. A Girl in a Blue Hat》 |
| Nakamizo, Fugi[sic] | 《27. Painting》 |
| Nakano, M. Kenneth | 《28. Queensborough[sic] Bridge》 |
| Noji, K.Oliver | 《29. Fishing Crafts》 |
| | 《30. After Shower》 |
| Nomura, H. | 《31. Painting》 |

| | |
|-------------------|----------------------|
| Sawada, Mme | 《32. Painting》 |
| | 《33. Painting》 |
| Shimizu, Kiyoshi | 《34. Painting》 |
| Suzuki, Sakari | 《35. Remembrance》 |
| | 《36. Fashion Model》 |
| Tagawa, Bunji | 《37. Market》 |
| Tamotsu, Chuzo | 《38. On the Table》 |
| Usui, Bunpei[Sic] | 《39. Painting》 |
| Watari, Takeo | 《40. Painting》 |
| Yamasaki, C. | 《41. Spring》 |
| | 《42. Negro Children》 |
| | 《43. Head》 |
| Yajima Tokusuke | 《44. Painting》 |

〔表 9-1〕

Paintings by New York Chinese-Japanese Artists. Sponsored by American Artists Congress, Artists Union, Citizen Committee for Support of W.P.A. September 12-26, 1937. A.C.A. Gallery, 52 West 8th Street, New York City.
(Brooklyn Museum Libraries & Archives, NY).

| | |
|---------------------|--|
| 1. Amemiya, Yosei | 《Landscape》 《Landscape》 |
| 2. Ishigaki, Eitaro | 《Basque Woman and Soldier》 《Basque Woman》 《Ku Klux Klan》 |
| 3. Kadowaki, Roy | 《Fantan Game》 《George Washington Bridge》 《Water Color》 |
| 4. Kuniyoshi, Yasuo | 《Painting》 《Lithograph》 |
| 5. Miyamoto, Kaname | 《By the Lake》 《The Boat House》 《Water Color》 |
| 6. Nagai, Thomas | 《W.P.A. Work》 《Landscape》 《Still Life》 |
| 7. Nakamizo, Fuji | 《“Barbara Kent”》 《Girl from California》 《Mother and Child》 |
| 8. Shimizu, Kiyoshi | 《Subway》 《Landscape》 《Still Life》 |
| 9. Suzuki, Sakari | 《Dawn》 《Strength》 《Broken Sculpture》 |
| 10. Tamotsu, Chuzo | 《Fire Trap》 《Jersey Station》 《Sun Light》 |
| 11. Tera, George | 《Painting》 |
| 12. Tiam, Moo-Wee | 《The Russian Kettle》 |

- 《Still Life》
 《The Chinese Seamen》
 《The Farm House》
 13. Usui, Bunpei[sic] 《Painting》
 14. Yamasaki, Chikamichi 《The Man With a Rice Bowl》
 《Noonday Rest》
 15. Tagawa, Bunji 《Chinese Toilers》
 16. Jor, Chu H. 《Still Life》
 17. Young, G.W. 《The Window》
 《Landscape》
 18. Wu, Don Gook 《Unlovely Sunset》
 《The Island》

〔表 9-2〕

Thirty-First Municipal Art Exhibition. June 22 -July 10, 1938. Municipal Art Gallery, 3 East 67th Street, New York.

| | |
|----------------------|-------------------------|
| Ishigaki, Eitaro | 《Fight》 |
| | 《Victim of War》 |
| Kadowaki, Roy | 《Botanic Garden》 |
| | 《Cafeteria》 |
| Kuniyoshi, Yasuo | 《Reclining Figure》 |
| | 《Circus Girl》 |
| Miyamoto, Kaname | 《Waiting》 |
| Nagai, Thomas | 《Water Color》 |
| | 《Water Color》 |
| Nakamizo, Fuji | 《Tudor City Sky Line》 |
| Suzuki, Sakari | 《Remembrance》 |
| Tamotsu, Chuza | 《Gas Tanks and Flowers》 |
| | 《Still Life》 |
| Watari, Takeo | 《From My Window》 |
| Ymasaki, Chikamichi, | |

出典

— “Japanese Artists have City Exhibit: Nine Show Works Here Slight Traditional Influence Seen”. New York Times, June 23, 1938.

—Howard Devree, “A Round-up For Summer Group Shows Stress Work by American Contemporaries, Chiefly the Younger”. New York Times, June 26, 1938.

—“Japanese Art Favors China”. New York World Telegram, June 25, 1938.

—“Notes and Comment on Events in Art: Municipal Show”. New York Herald Tribune, June 26, 1938.

—Jerome Klein, “Silvermine Painters Try Social Slant” . New York Post, July 2, 1938.

〔表 10-1〕

The Japanese American Artists Group. paintings, drawings, sculpture. Riverside Gallery, Riverside Drive and 103rd Street, New York. (Museum of Fine Arts, Boston).

| | | |
|-----------------|-------------------------------------|-------------|
| Nuiko Haramaki | 《1. Landscape》 | Water Color |
| | 《2. Shipyard》 | Water Color |
| Susumu Hirota | 《3. Hamlet by a Pond》 | Oil |
| | 《4. Pigeon Hill Street》 | Oil |
| | 《5. Autumn at Lands End》 | Oil |
| Hiroshi Honnda | 《6. Landscape No.1》 | Water Color |
| | 《7. Landscape No.2》 | Water Color |
| | 《8. Rotation of Universe》 | Water Color |
| Kyohei Inukai | 《9. Portrait》 | Oil |
| Eitaro Ishigaki | 《10. Rug Cutters of Yaddo》 | Oil |
| | 《11. In the South》 | Oil |
| Miyoko Ito | 《12. A House in the Woods》 | Water Color |
| T. Itokawa | 《13. Morning Orchard》 | Oil |
| | 《14. Landscape》 | Water Color |
| Mitsu Iwamatsu | 《15. Landscape No.1》 | Water Color |
| | 《16. Landscape No.2》 | Water Color |
| | 《17. Landscape No.3》 | Water Color |
| Kenji Iwasaki | 《18. Flowers》 | Oil |
| | 《19. Still Life》 | Oil |
| Murry Kusanobu | 《20. Red Church》 | Oil |
| | 《21. Near Paterson》 | Oil |
| | 《22. Jonquils》 | Oil |
| | 《23. Girl in Blue Sweater》 | Oil |
| | 《24. Still Life with Seed Pods》 | Oil |
| Kaname Miyamoto | 《25. Cabbage》 | Oil |
| | 《26. Gasoline Station》 | Oil |
| | 《27. Outdoor Sketch》 | Oil |
| Ezo Nakagawa | 《28. Sixth Avenue》 | Oil |
| | 《29. Arkansas Forest》 | Oil |
| | 《30. Nook of Park》 | Oil |
| | 《31. Dermott Church》 | Oil |
| | 《32. Winter in a Relocation Center》 | Oil |

| | | |
|------------------|--------------------------------|-------------|
| | 《33. Farm Yard》 | Oil |
| Fuji Nakamizo | 《34. Pony Ride》 | Oil |
| | 《35. Quiz Parody》 | Oil |
| | 《36. Squawm Lake》 | Oil |
| | 《37. Pink Elephant & His Gang》 | Oil |
| Isamu Noguchi | 《38. Sculpture No.1》 | |
| | 《39. Sculpture No.2》 | |
| Koichi Nomiyama | 《40. Still Life》 | Water Color |
| | 《41. Winter Morning》 | Water Color |
| | 《42. Portrait of Little Girl》 | Oil |
| Mine Okubo | 《43. Miyo》 | Oil |
| | 《44. Family》 | Oil |
| | 《45. Clown》 | Oil |
| | 《46. Little Girl》 | Oil |
| | 《47. Lamentation》 | Oil |
| | 《48. Lydia》 | Oil |
| Henry Sugiura | 《49. Landscape》 | Oil |
| | 《50. Wash Room》 | Oil |
| | 《51. Country Well》 | Water Color |
| | 《52. Arkansas Field》 | Water Color |
| Sakari Suzuki | 《53. Mountain Romance》 | Oil |
| | 《54. Destiny》 | Oil |
| | 《55. Back Yard》 | Oil |
| Chuzo Tamotsu | 《56. Coop in Woods》 | Oil |
| | 《57. Summer Time》 | Oil |
| | 《58. Young Girl》 | Water Color |
| | 《59. Mother & Child》 | Water Color |
| | 《60. Table Jungle》 | Print |
| Taro Yashima | 《61. Landscape》 | Oil |
| | 《62. Still Life》 | Oil |
| Bunpei[sic] Usui | 《63. Landscape》 | Oil |

〔図版〕

times (日曜土) 日 九 十 月 七 年 八 正 大

アダムの死の床

石垣 増 場



その頃、地は紅き罪にみち、人の女子は美しかりき。アダム百三十歳に及びて、その妻イダを知りてセツを生みし後、齡八百歳にして、男子女子を生めり。アダム九百三十歳の齡を生きたがへて、死の寢床に臥しその子等に、告げて言ひけるは、「神の怒恨は、人の子の苗裔に置かれたれば、土は咀はれ、刺刺と刺を生ずべし。汗は人の額より、限も無く流るれど、勞苦と刺刺と刺との土より食を得ざるべからず。吾が罪の毒血は永久に、人の肉に流れ、涙の河はその靈魂より靈魂に流れてつくることあるなし。女は懷妊の勞苦

苦は生存の凡てに非らざればなり。アダム眼を閉じ叫びけるは、「その時、暗き露西亞の地にレモンなる者起り、ボルネウグアイの子等を幸ひて地上に「プロレタリアートの執政」を高く呼ばむ。その時、地には白き骨、高く堆積し、血は太平洋を赤く染むべし。凄き風吹きて、屍の臭地滿らん。大いなる争亂の悲、嗚呼……は禍なる哉、快樂を求むる地は禍なる哉」

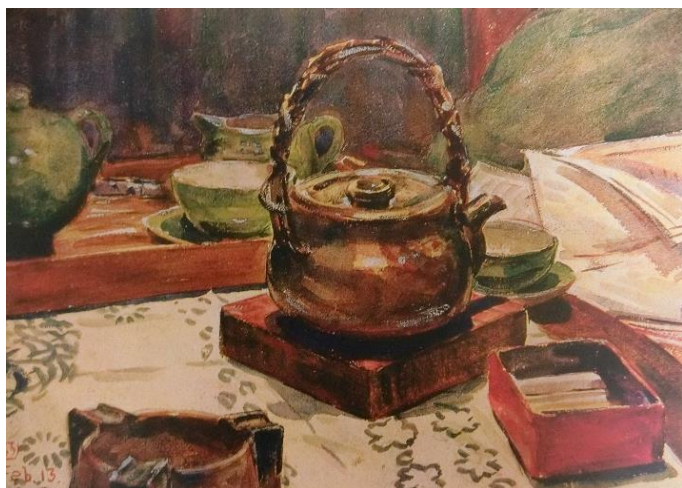
エノクの孫メホアエル、アダムの耳に囁きて言ひけるは「それ飽ける者と飢るの者との戦ひは、快樂欲と生活欲との争ひなるべし。されど和平を求むる、地の子等は、再び刃を捨てて時あどん。その後地には、美しき太陽の光り流れ。幸福の果實結ぶべし。艶麗の罪の花は紅くジュレニアムの如く薫り。人の女子は美しく、甘き虚榮に生きたる。男は性欲の園に、戀の蜜をさぐり。黄色なる誘惑の花粉に酔ふべし、白き柔らかな乳房の床は、彼等が眼りの爲めに設けらるべし。」

アダム再び叫びけるは「禍ふる哉、呪はれし地の子等よ！塵にして塵に眠るべき人の子等よ！アダム蛇の尾を抱きて、暗き死の寢床に眠れり。地は紅き罪にみち、人の女子は美しかりき。」

〔図 4-1〕



〔図 5-1〕 古田土雅堂《雲(Fairly Clouds)》1917 年



〔图 5-2〕 霜鳥之彦 《日本茶(Tea Pot)》 1916 年



〔图 5-3〕 古田土雅堂 《茸狩(Take Gari)》 1917 年



〔图 5-4〕 古田土雅堂 《災難(An Accident)》 1919 年



〔図 5-5〕 犬飼恭平《反映(Reflection)》1918 年



〔図 6-1〕 萩生田真陽《赤い風呂 (Red Bath)》



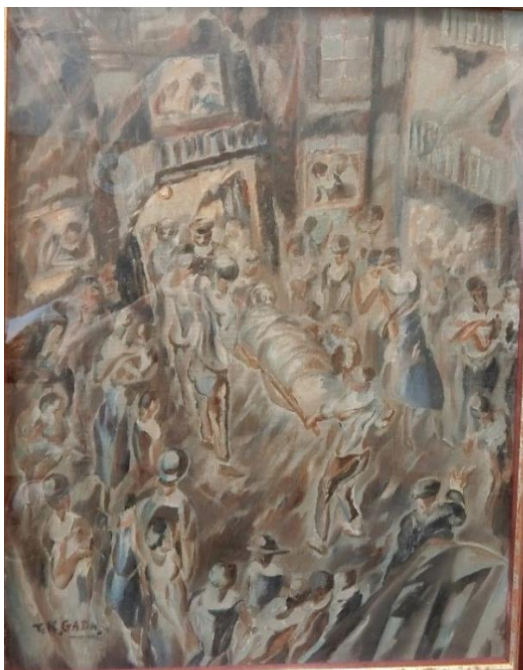
〔図 6-2〕 渡辺寅次郎 《正義の象徴 (Symbol of Righteousness)》



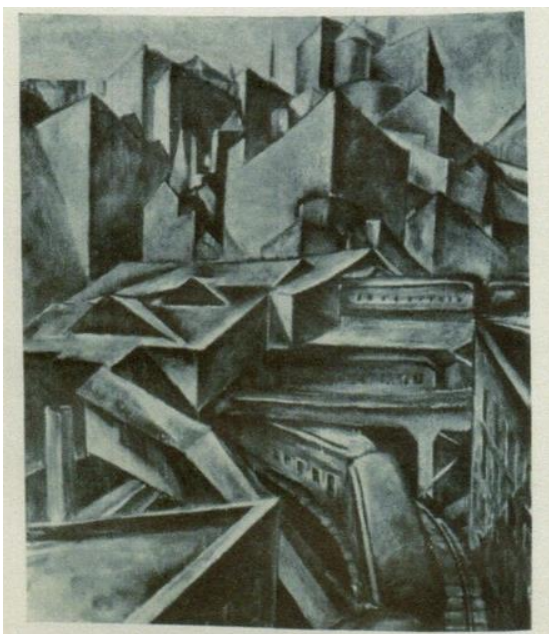
〔図 6-3〕 古田土雅堂 《舞踏会(The Ball)》 1921 年



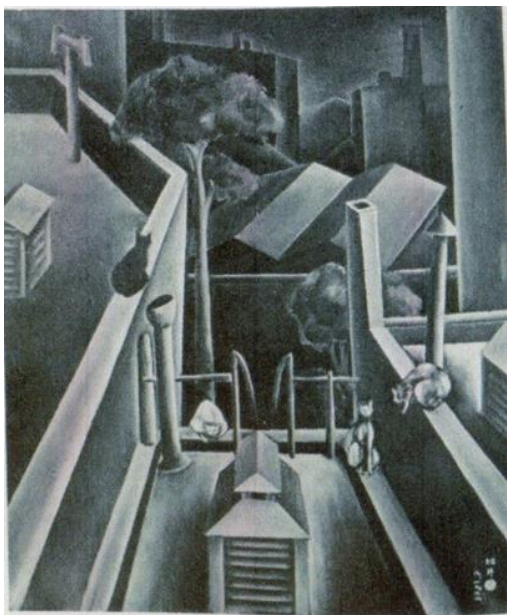
〔図 6-4〕 古田土雅堂 《ブロック・パーティー(Block Party)》 1922 年



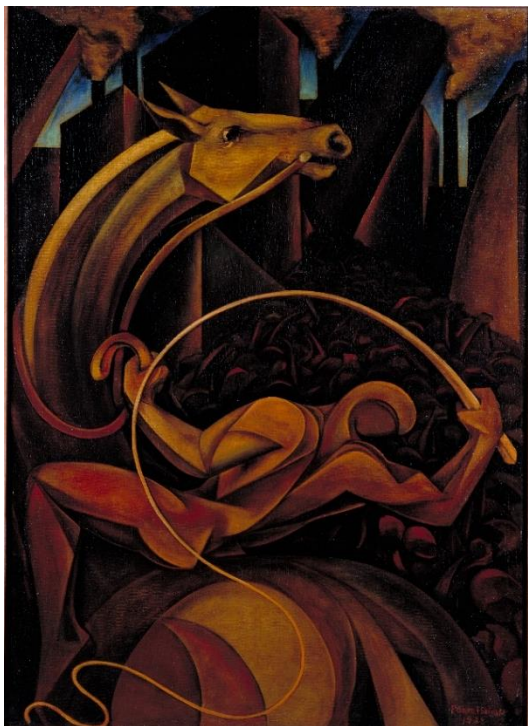
〔図 6-5〕 古田雅堂《救急搬送(Ambulance)》



〔図 6-6〕 渡辺寅次郎《紐育の高架鉄道(“L” Train New York)》



〔図 6-7〕 臼井文平 《夜の屋根(Roof at Evening)》



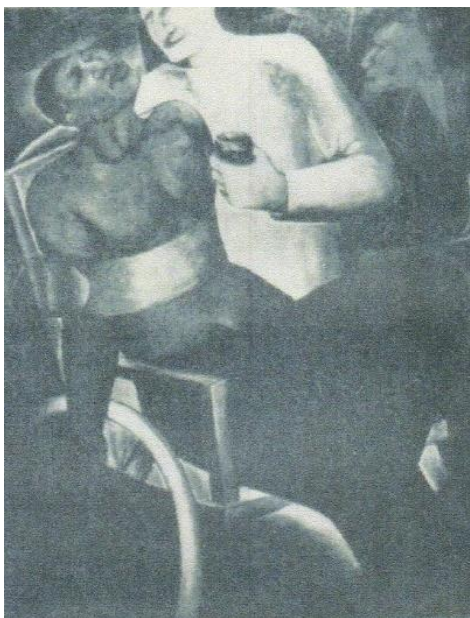
〔図 6-8〕 石垣栄太郎 《鞭打つ人(Man with the Whip)》 1925 年



〔図 6-9〕 藤岡昇 《アメリカン・スピリット (American Spirit)》



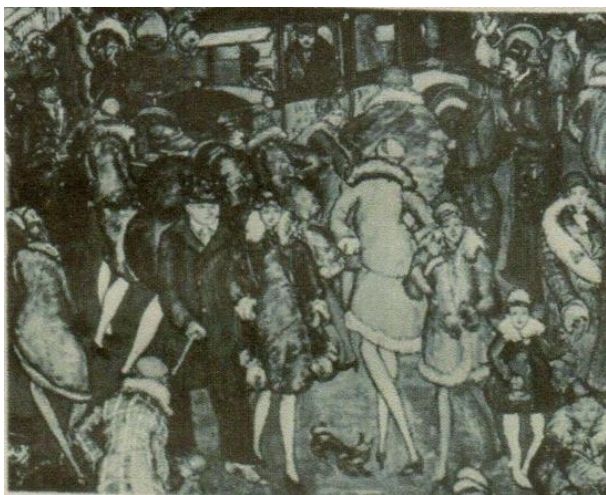
〔図 6-10〕 清水清の《14 丁目 (14 Street)》



〔図 6-11〕 石垣栄太郎 《禁酒法の狂態 (Delirium of the Eighteenth Amendment)》



〔図 6-12〕 清水清 《楽器店 (Music Shop)》



〔図 6-13〕 藤岡昇 《ジャッジメント・オブ・ニューヨーク (Judgment of New York)》



〔図 6-14〕 都筑隆 《ビューティー・ショップ (Beauty Shop)》



〔図 6-15〕 渡辺寅次郎 《モブ・アンド・プロセキューション (Mob and Prosecution)》



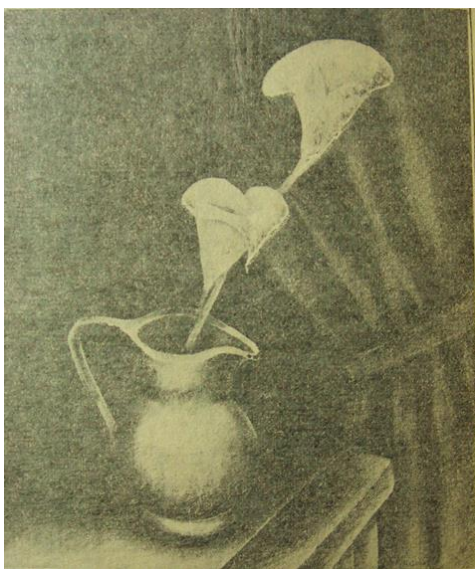
〔図 6-16〕 清水清 《ビリヤードとチャプスイとムービー (Billiards, Chop Suey and Movies)》



〔図 6-17〕 藤岡昇の《フラタernal・プレジャー(Fraternal Pleasure)》



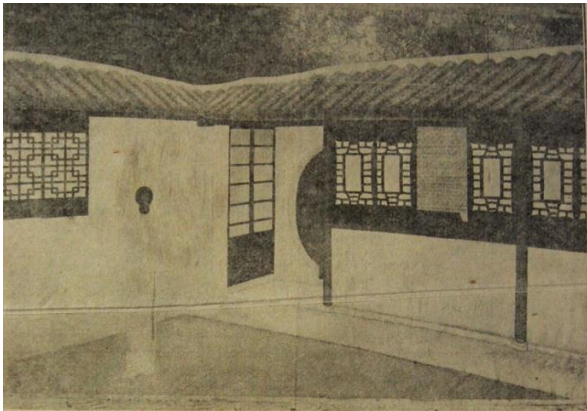
〔図 7-1〕 角南壮一 《母の肖像(Portrait of my Mother)》



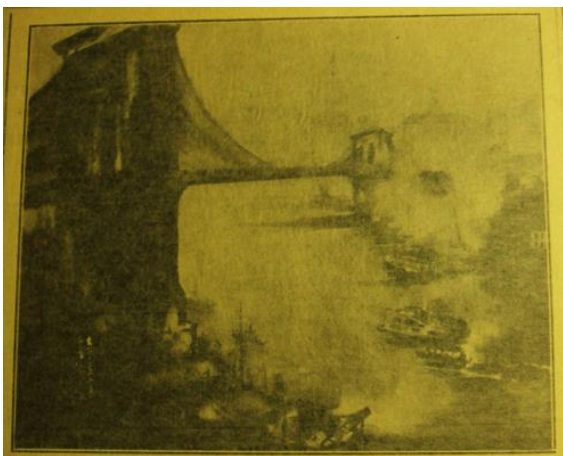
〔図 7-2〕 都筑隆 《静物(Still Life)》



〔図 7-3〕 川村吾蔵《フレデリック・マクモニス(Portrait)》



〔図 7-4〕 村田紅雪《春宵(A Spring Evening)》



〔図 7-5〕 吉田石堂の《イースト・リバー(East River)》



〔図 7-6〕 臼井文平 《少女の肖像(Portrait of a Girl)》



〔図 7-7〕 臼井文平 《工場（大工部屋）(The Carpenter's Shop)》



〔図 7-8〕 渡辺寅次郎 《自画像(Self Portrait)》



〔図 8-1〕 国吉康雄《テーブルの上の果物（Fruits on Table）》1932 年



〔図 8-2〕 臼井文平《室内（Interior）》1934 年



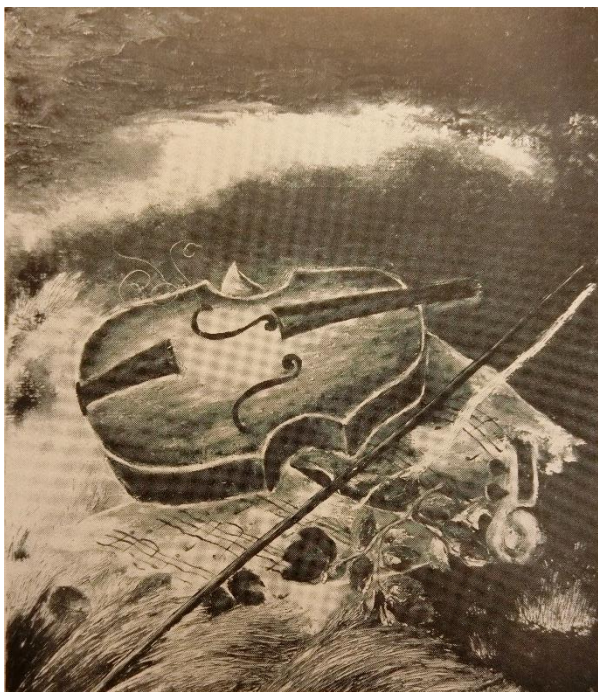
〔図 8-3〕 臼井文平 《風景 (Landscape)》 1932 年



〔図 8-4〕 角南壮一 《ヘイ・スタック (Haystack)》



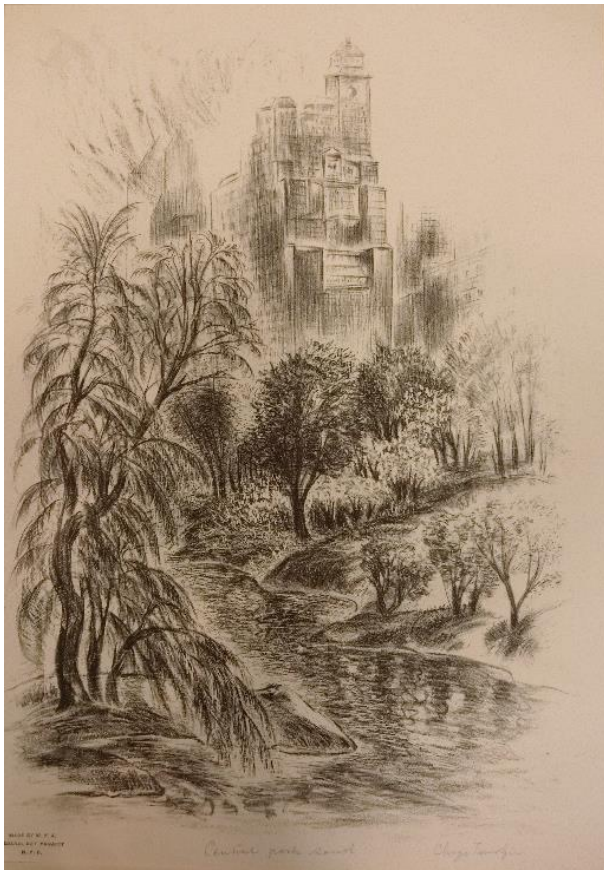
〔図 8-5〕 トーマス永井 《風景(Landscape)》



〔図 8-6〕 中川菊多 《壊れたロマンス (Broken Romance)》



〔図 9-1〕 鈴木盛 《予防医学(Preventive Medicine)》



〔図 9-2〕 保忠蔵 《セントラルパーク南(Central Park South)》



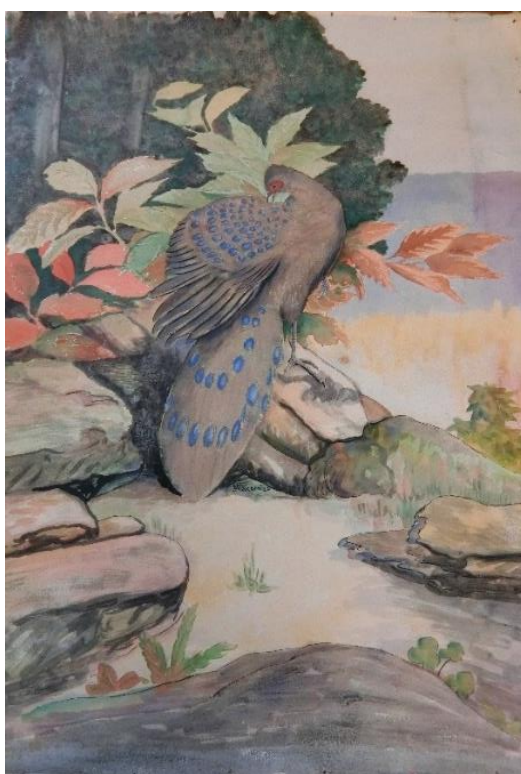
〔図 9-3〕 中川菊太 《丘の家(House on a Hill)》



〔図 9-4〕 中川菊太 《静物 花(Flower Still Life)》



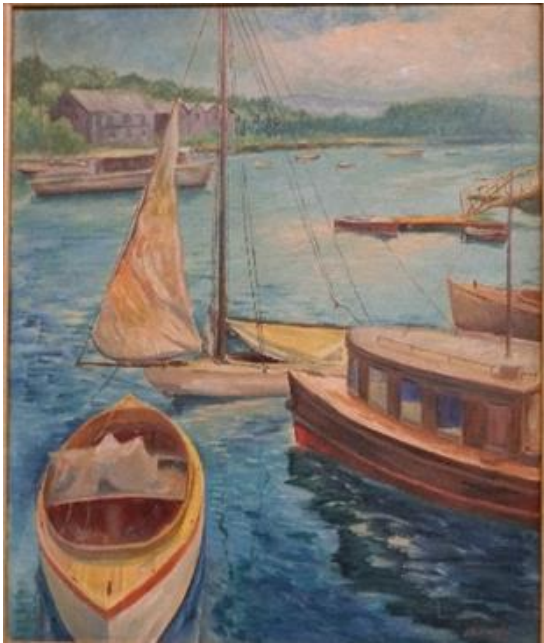
〔図 9-5〕 中溝不二 《アメリカンウッドコック (American Wood Cock)》



〔図 9-6〕 中溝不二 《クジャク (Peacock Pheasant)》



〔図 9-7〕 中溝不二 《キツツキ(Wood Pecker)》



〔図 9-8〕 雨宮要生 《心地よい港(Snug Harbor)》 1936 年



〔図 9-9〕 門脇ロイ 《郊外の工事(Country Construction)》 1936 年



〔図 9-10〕 門脇ロイ 《日本庭園 (Japanese Garden)》 1937 年



〔図 9-11〕 門脇ロイ 《日本の植物 (Japanese Plant)》 1936 年



〔図 9-12〕 門脇ロイ 《フラワー・アレンジメント (Flower Arrangement)》 1937 年



〔図 9-13〕 門脇ロイ《静物 花 (Flower Still Life)》1936 年



〔図 9-14〕 トーマス永井《野原 (Greenfields)》



〔図 9-15〕 トーマス永井 《小さな入り江 (Small Inlet)》



〔図 9-16〕 トーマス永井 《静物と模様のある布(Still Life with Figured Cloth)》 1936 年



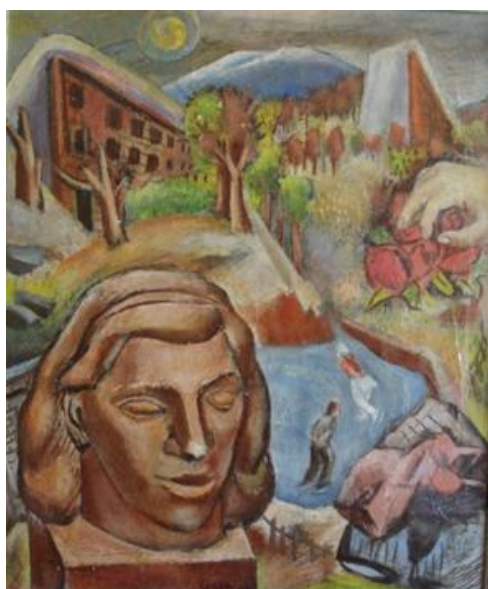
〔図 9-17〕 国吉康雄 《鏡 (Mirror)》 1933 年



〔図 9-18〕 国吉康雄《造花とほかのもの (Artificial Flower and Other Things)》1934 年



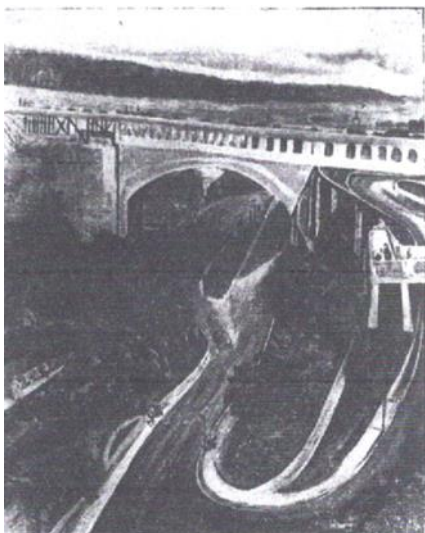
〔図 9-19〕 保忠蔵《平和な谷 (Peace Valley)》1930 年代



〔図 9-20〕 鈴木盛《彼女の過去(Of Her Past)》1936 年



〔図 9-21〕 保忠蔵 《ファイヤー・トラップ (Fire Trap)》



〔図 9-22〕 門脇ロイ 《巴士遼河畔》



〔図 9-23〕 石垣栄太郎 《逃亡 (Flight)》



〔図 9-24〕 保忠蔵 《日本を覆う軍国主義 (Militarism Over Japan)》



〔図 9-25〕 鈴木盛 《戦争 (War)》



〔図 9-26〕 保忠蔵 《ガスタンクと花々 (Gas Tank and Flowers)》



〔図 9-27〕 国吉康雄《横たわる人体(Laying Figure)》1938 年

図版出典

〔図 4-1〕 石垣栄太郎「アダムの死の床」『紐育新報』1919 年 7 月 19 日。

〔図 5-1〕 古田土雅堂《雲(Fairly Clouds)》1917 年

筆者撮影(撮影日 2018 年 10 月 8 日 (ふみの森もてぎ所蔵)。

〔図 5-2〕 霜鳥之彦《日本茶(Tea Pot)》1916 年

(霜鳥之彦遺作展実行委員会.『霜鳥之彦遺作展—遺作展記念画集』(展覧会図録). 光琳社. (1983 年 11 月 1 日).

〔図 5-3〕 古田土雅堂《茸狩(Take Gari)》1917 年

(ふみの森もてぎ所蔵)。

〔図 5-4〕 古田土雅堂《災難(An Accident)》1919 年

筆者撮影(撮影日 2018 年 10 月 18 日) (ふみの森もてぎ所蔵)。

〔図 5-5〕 犬飼恭平《反映(Reflection)》1918 年

東京国立近代美術館 (Photo: MOMAT/DNPartcom)。

〔図 6-1〕 萩生田真陽《赤い風呂 (Red Bath)》

Society of Independent Artists. *Catalogue of the First Annual Exhibition of the Society of Independent Artists*. (Exhibition catalogue). (New York, Grand Central Palace, 1917).

〔図 6-2〕 渡辺寅次郎《正義の象徴 (Symbol of Righteousness)》

Society of Independent Artists. *Catalogue of the Seventh Annual Exhibition of the Society of Independent Artists*. (Exhibition catalogue). (New York, The Waldorf Astoria, 1923).

〔図 6-3〕 古田土雅堂《舞踏会(The Ball)》1921 年

筆者撮影 (撮影日 2018 年 10 月 8 日) (ふみの森もてぎ所蔵)。

〔図 6-4〕 古田土雅堂《ブロック・パーティー(Block Party)》1922 年

筆者撮影 (撮影日 2018 年 10 月 8 日) (ふみの森もてぎ所蔵)。

〔図 6-5〕 古田雅堂《救急搬送(Ambulance)》

筆者撮影 (撮影日 2018 年 10 月 8 日) (ふみの森もてぎ所蔵)。

〔図 6-6〕 渡辺寅次郎《紐育の高架鉄道(“L” Train New York)》

Society of Independent Artists. *Catalogue of the Ninth Annual Exhibition of the Society of Independent Artists*. (Exhibition catalogue). (New York, The Waldorf Astoria, 1925).

〔図 6-7〕 臼井文平《夜の屋根 (Roof at Evening)》

Society of Independent Artists. *Catalogue of the Ninth Annual Exhibition of the Society of Independent Artists*. (Exhibition catalogue). (New York, The Waldorf Astoria, 1925).

〔図 6-8〕 石垣栄太郎《鞭打つ人(Man with the Whip)》1925 年

京都国立近代美術館(Photo: The National Museum of Modern Art,Kyoto)。

〔図 6-9〕 藤岡昇《アメリカン・スピリット (American Spirit)》

Society of Independent Artists. *Catalogue of the Tenth Annual Exhibition of the Society of Independent Artists*. (Exhibition catalogue). (New York, The Waldorf Astoria, 1926).

〔図 6-10〕 清水清の《14 丁目 (14 Street)》

Society of Independent Artists. *Catalogue of the Tenth Annual Exhibition of the Society of Independent Artists*. (Exhibition catalogue). (New York, The Waldorf Astoria, 1926).

〔図 6-11〕 石垣栄太郎《禁酒法の狂態 (Delirium of the Eighteenth Amendment)》

Society of Independent Artists. *Catalogue of the Eleventh Annual Exhibition of the Society of Independent Artists*. (Exhibition catalogue). (New York, The Waldorf Astoria, 1927).

〔図 6-12〕 清水清《楽器店 (Music Shop)》

Society of Independent Artists. *Catalogue of the Eleventh Annual Exhibition of the Society of Independent Artists*. (Exhibition catalogue). (New York, The Waldorf Astoria, 1927).

〔図 6-13〕 藤岡昇《ジャッジメント・オブ・ニューヨーク (Judgment of New York)》

Society of Independent Artists. *Catalogue of the Eleventh Annual Exhibition of the Society of Independent Artists*. (Exhibition catalogue). (New York, The Waldorf Astoria, 1927).

〔図 6-14〕 都筑隆《ビューティー・ショップ (Beauty Shop)》

Society of Independent Artists. *Catalogue of the Eleventh Annual Exhibition of the Society of Independent Artists*. (Exhibition catalogue). (New York, The Waldorf Astoria, 1927).

〔図 6-15〕 渡辺寅次郎《モブ・アンド・プロセキューション (Mob and Prosecution)》

Society of Independent Artists. *Catalogue of the Eleventh Annual Exhibition of the Society of Independent Artists*. (Exhibition catalogue). (New York, The Waldorf Astoria, 1927).

〔図 6-16〕 清水清《ビリヤードとチャプスイとムービー (Billiards, Chop Suey and Movies)》
Salons of America, *Spring Salon*. (Exhibition catalogue). (New York, the American Art Association Anderson Galleries, 1927).

〔図 6-17〕 藤岡昇の《フラターナル・プレジューア (Fraternal Pleasure)》

Salons of America, *Spring Salon*. (Exhibition catalogue). (New York, the American Art Association Anderson Galleries, 1927).

〔図 7-1〕 角南壮一《母の肖像 (Portrait of my Mother)》

『紐育新報』1927 年 1 月 1 日掲載。

〔図 7-2〕 都筑隆《静物 (Still Life)》

『紐育新報』1927 年 1 月 1 日掲載。

〔図 7-3〕 川村吾蔵《フレデリック・マクモニス (Portrait)》

『紐育新報』1927年1月1日掲載。

〔図7-4〕村田紅雪《春宵(A Spring Evening)》

『紐育新報』1927年1月1日掲載。

〔図7-5〕吉田石堂の《イースト・リバー(East River)》

『紐育新報』1927年12月31日掲載。

〔図7-6〕臼井文平《少女の肖像(Portrait of a Girl)》

『紐育新報』1927年1月1日掲載。

〔図7-7〕臼井文平《工場（大工部屋）(The Carpernter's Shop)》

筆者撮影（撮影日2015年3月27日）

Metropolitan Museum of Art 所蔵。

〔図7-8〕渡辺寅次郎《自画像(Self Portrait)》

『紐育新報』1927年1月1日掲載。

〔図8-1〕国吉康雄《テーブルの上の果物（Fruits on Table）》1932年

Sheldon Museum of Art 所蔵（閲覧日 2019年7月4日）。

<http://emuseumplus.unl.edu:8080/eMP/eMuseumPlus?service=ExternalInterface&module=exhibition&viewType=detailList>.

〔図8-2〕臼井文平《室内（Interior）》1934年

Bumpei Usui Paintings 1925-1949. (Exhibition catalogue). (New York: Salander Galleries, 1979).

〔図8-3〕臼井文平《風景（Landscape）》1932年

『臼井文平展』フジテレビギャラリー（1983年）（展覧会図録）。

〔図8-4〕角南壮一《ヘイ・スタック(Haystack)》

筆者撮影（撮影日2016年8月8日）角南壮一の御遺族の御厚意による。

〔図8-5〕トーマス永井《風景(Landscape)》

Parnassus Vol.7 No.5 1935, October

〔図8-6〕中川菊太《壊れたロマンス（Broken Romance）》

Salons of America. *Spring Salon*. (Exhibition catalogue). (New York, The American Art Association Anderson Galleries, 1931).

〔図9-1〕鈴木盛《予防医学(Preventive Medicine)》

Federal Art Project papers. 1920-1965. Federal Art Project, Photographic Division collection, circa 1920-1965, bulk 1935-1942: Artist Files, circa 1920-1965, box: 22. Folder: 26. in Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.

〔図9-2〕保忠蔵《セントラルパーク南（Central Park South）》

筆者撮影（撮影日2019年3月31日）Metropolitan Museum of Art.

〔図9-3〕中川菊太《丘の家（House on a Hill）》

筆者撮影（撮影日2019年8月14日）New Deal Gallery 所蔵。

- 〔図 9-4〕 中川菊太《静物 花 (Flower Still Life)》
筆者撮影(撮影日 2018 年 8 月 15 日) New Deal Gallery 所蔵。
- 〔図 9-5〕 中溝不二《アメリカンウッドコック(American Wood Cock)》
筆者撮影(撮影日 2019 年 8 月 14 日) New Deal Gallery 所蔵。
- 〔図 9-6〕 中溝不二《クジャク(Peacock Pheasant)》
筆者撮影(撮影日 2018 年 8 月 15 日) New Deal Gallery 所蔵。
- 〔図 9-7〕 中溝不二《キツツキ (Wood Pecker)》
筆者撮影(撮影日 2018 年 8 月 15 日) New Deal Gallery 所蔵。
- 〔図 9-8〕 雨宮要生《心地よい港 (Snug Harbor)》1936 年
筆者撮影(撮影日 2018 年 8 月 15 日) New Deal Gallery 所蔵。
- 〔図 9-9〕 門脇ロイ《郊外の工事 (Country Construction)》1936 年
筆者撮影(撮影日 2018 年 8 月 15 日) New Deal Gallery 所蔵。
- 〔図 9-10〕 門脇ロイ《日本庭園 (Japanese Garden)》1937 年
筆者撮影(撮影日 2018 年 8 月 15 日) New Deal Gallery 所蔵。
- 〔図 9-11〕 門脇ロイ《日本の植物 (Japanese Plant)》1936 年
筆者撮影(撮影日 2018 年 8 月 15 日) New Deal Gallery 所蔵。
- 〔図 9-12〕 門脇ロイ《フラワー・アレンジメント (Flower Arrangement)》1937 年
筆者撮影(撮影日 2018 年 8 月 15 日) New Deal Gallery 所蔵。
- 〔図 9-13〕 門脇ロイ《静物 花 (Flower Still Life)》1936 年
筆者撮影(撮影日 2018 年 8 月 15 日) New Deal Gallery 所蔵。
- 〔図 9-14〕 トーマス永井《野原 (Greenfields)》
筆者撮影(撮影日 2018 年 8 月 15 日) New Deal Gallery 所蔵。
- 〔図 9-15〕 トーマス永井《小さな入り江 (Small Inlet)》
筆者撮影(撮影日 2018 年 8 月 15 日) New Deal Gallery 所蔵。
- 〔図 9-16〕 トーマス永井《静物と模様のある布(Still Life with Figured Cloth)》1936 年
筆者撮影(撮影日 2019 年 8 月 14 日) New Deal Gallery 所蔵。
- 〔図 9-17〕 国吉康雄《鏡 (Mirror)》1933 年
『生誕 100 年記念国吉康雄展』京都国立近代美術館(展覧会図録)(1989 年)。
- 〔図 9-18〕 国吉康雄《造花とほかのもの (Artificial Flower and Other Things)》1934 年
『YASUO KUNIYOSHI ネオアメリカン・アーティストの軌跡』福武書店 (1990 年)。
- 〔図 9-19〕 保忠蔵《平和な谷 (Peace Valley)》1930 年代
『アメリカに生きた日系人画家たち—希望と苦悩の半世紀 1896-1945』(終戦 50 年企画) 東京都庭園美術館(展覧会図録)(1995 年)。
- 〔図 9-20〕 鈴木盛《彼女の過去(Of Her Past)》1936 年
筆者撮影(撮影日 2017 年 8 月 8 日) 個人蔵。
- 〔図 9-21〕 保忠蔵《ファイヤー・トラップ (Fire Trap)》

Art Front. December, 1937.

〔図 9-22〕 門脇ロイ 《巴土遜河畔》

『紐育新報』1938年6月15日。

〔図 9-23〕 石垣栄太郎 《逃亡 (Flight)》

和歌山県立近代美術館『アメリカの中の日本—石垣栄太郎と戦前の渡米画家たち』（展覧会図録）（1995年）和歌山県立近代美術館。

〔図 9-24〕 保忠蔵 《日本を覆う軍国主義 (Militarism Over Japan)》

New York Post. December 14, 1937.

〔図 9-25〕 鈴木盛 《戦争 (War)》

New York World Telegram. December 16, 1937.

〔図 9-26〕 保忠蔵 《ガスタンクと花々 (Gas Tank and Flowers)》

New York Times. June 26, 1938.

〔図 9-27〕 国吉康雄 《横たわる人体 (Laying Figure)》1938年

Walker Art Center 所蔵、（閲覧日 2019年7月4日）。

<https://walkerart.org/collections/artists/yasuo-kuniyoshi>

引用文献

〈日本語資料〉

浅野徹.「大正・昭和前期の在米画家についてのノート」『アメリカに学んだ 18 人 太平洋を越えた日本の画家たち』(展覧会図録) 和歌山県立近代美術館・香川文化会館・広島建立美術館・美術館連絡協議会・読売新聞大阪本社 (1987 年).

バーバラ・ローズ (桑原住雄訳).『二十世紀アメリカ美術』美術出版社 (1970 年 7 月 25 日).

『冒険世界』.1912 年 3 月 25.「北米の日本人村」.

『文芸界』.1905 年 2 月 1 日.在米松魚生.「おもかげ」.

———.1906 年 4 月 1 日.「時報 田村松魚の消息」.

『文芸倶楽部』.1903 年 10 月 15 日.田村松魚.「白萩」.

———.1903 年 11 月 1 日.在米田村松魚.「友のいろいろ」.

———.1909 年 7 月 1 日.田村松魚.「萬里矢」.

———.1909 年 10 月 10 日.田村松魚.「在米日本青年の生活の現状」.

———.1910 年 2 月 1 日.田村松魚.「花祭日」.

———.1911 年 4 月 1 日.田村松魚.「死後」.

———.1912 年 6 月 1 日.田村松魚.「天幕」.

『文庫』.1903 年 9 月 1 日.田村松魚.「弟子の目に映じたる幸田露伴氏」.

———.1907 年 11 月 3 日.「六号活字」

『文章世界』.1909 年 11 月 1 日.田村松魚.「新居」.

『中学世界』.1903 年 10 月 10 日.田村松魚.「長夜短話」.

———.1904 年 1 月 10 日.田村松魚.「青灯集」.

———.1904 年 7 月 10 日.田村松魚.「緑陰瑣話」.

———.1909 年 9 月 10 日.田村松魚.「在米日本青年の実況」.

———.1909 年 10 月 10 日.田村松魚.「在米日本青年の生活の現状」.

『婦人評論』.1913 年 4 月 15 日.田村松魚.「桜咲く頃」.

『中外英字新聞』.1901 年 9 月 15 日.「日米 Japan and America」.

『中央公論』.1952 年 6 月 1 日.石垣栄太郎.「アメリカ放浪四十年 (1)」

———.1952 年 7 月 1 日.石垣栄太郎.「アメリカ放浪四十年 (2) 日本からの亡命者達」

———.1952 年 8 月 1 日.石垣栄太郎.「アメリカ放浪四十年 (3) 恋の大陸横断」.

———.1952 年 9 月 1 日.石垣栄太郎.「アメリカ放浪四十年 (4) ニューヨークの香具師」.

———.1952 年 11 月 1 日.石垣栄太郎.「アメリカ放浪四十年 (5) サンガー夫人とスメドレー女史」.

———.1952 年 12 月 1 日.石垣栄太郎.「アメリカ放浪四十年 (6) 片山潜とその同志たち」.

蛭原八郎.『海外邦字新聞雑誌史』学而書院 (1936 年 1 月 13 日).

福武書店.『YASUO KUNIYOSHI ネオアメリカン・アーティストの軌跡』(1990年)
 画彫会.『画彫会第一回作品展覧会後援者名簿』(1922年10月1日).
 外務省.「米国ニ於ル共產主義運動ニ関スル件(1935年10月22日)」『各国共産党関係雑件/
 米国の部(属領地ヲ含ム)第二巻1』(1935年10月22日).
 外務省通商局編.『通商公報』帝国地方行政学会,第936号(1922年5月1日).
 『実業世界太平洋』.1903年11月10日.田村松魚.「空想」.
 『実業少年』.1910年6月1日.田村松魚.「倶楽部の夜」.
 ——.1910年10月1日.田村松魚.「自覚」.
 ——.1912年9月1日.田村松魚.「器械工場」.
 ——.1912年10月1日.松魚生.「商館ボーイ」.
 フジテレビギャラリー.1983.(展覧会図録).
 ——.1912年12月1日.田村松魚.「実業小説 露店の少年」.
 芳賀武.『紐育ラプソディー—ある日本人米共産党員の回想—』朝日新聞社(1985年10月
 30日).
 林かおり.「失意の作家 田村松魚」『羅府新報』1997年2月1日～2月5日.
 林寿美子.「田村松魚の渡米まで—付田村松魚著作目録〔自明治31年至明治36年〕」『国際
 日本学研究』第2号(2004年3月31日).
 ——(高橋寿美子).「田村松魚と〈アメリカ〉—渡米先としてのアメリカ」『国際日本学
 研究』第3号(2005年3月31日).
 『平民』.1905年5月28日.田村松魚「今後の我が平民」.
 ——.1905年5月28日.田村松魚.「恋衣」.
 ——.1905年6月18日.田村松魚.「生命の花」.
 ——.1905年7月9日.田村松魚「桃の実(上)」.
 ——.1905年7月16日.田村松魚「桃の実(中)」.
 ——.1905年9月9日.「東西南北」.
 ——.1905年9月9日.「田村松魚子東行日限」.
 ——.1905年9月12日.田村松魚「羅城文壇一夕話(一)」.
 ——.1905年9月14日.松魚.「羅城文壇一夕話(二)」.
 ——.1905年9月14日.松魚.「殺入党(一)」.
 ——.1905年9月16日.松魚.「殺入党(二)」.
 ——.1905年9月16日.田村松魚「羅城文壇一夕話(三)」.
 ——.1905年9月19日.田村松魚「羅城文壇一夕話(四)」.
 ——.1905年9月19日.松魚生.「別れの辞」.
 ——.1905年9月21日.「田村松魚君を送る」.
 ——.1905年9月21日.松魚「朝のおもかげ」.
 ——.1905年9月26日.松魚生.「旅硯(第一信)」.

- .1905 年 9 月 30 日.松魚生.「旅硯(第二信)」.
- 日比嘉高.「日系アメリカ移民一世の新聞と文学」『日本文学』第 53 号(2004 年 11 月 10 日).
- .「永井荷風『あめりか物語』は「日本文学」か?」『日本近代文学』第 74 集 (2006 年 5 月 15 日).
- .「日系アメリカ移民一世の新聞と文学」『日本文学』第 53 巻第 11 号 (2004 年 11 月 10 日).
- .「移植樹のダンス—翁久允と『移民地文芸』論」筑波大学文化批評研究会編『テキストたちの旅程—移動と変容の中野文学』花書院(2008 年 2 月 23 日).
- .『ジャパニーズ・アメリカン移民文学・出版文化・収容所』新曜社 (2014 年 2 月 20 日).
- 星新一.『明治・父・アメリカ』筑摩書房 (1975 年 9 月 30 日).
- 星野睦子.『『アメリカン・シーン』絵画と 1930 年代の国吉康雄』『欧米文化研究』第 14 号 (1997 年 10 月).
- .「アメリカ美術家会議と国吉康雄」『筑波大学芸術学研究誌 藝叢』14 号 (1998 年 3 月 1 日).
- .「国吉康雄と 1930 年代ニューヨークの日系人画家—アメリカ美術家会議を糸口として—」『大学美術教育学会誌』32 号 (2000 年 3 月 10 日).
- 石垣綾子.『海を渡った愛の画家 石垣栄太郎の生涯』御茶の水書房 (1988 年 7 月 25 日).
- 伊藤一男.『北米百年桜』北米百年桜実行委員会(1969 年 9 月 30 日).
- 『実業少年』.1909 年 12 月 1 日.田村松魚.「商業国の少年」.
- 『女鑑』.1903 年 8 月 15 日. 田村松魚「女叟物語」.
- .1903 年 9 月 1 日. 田村松魚「女叟物語」.
- .1905 年 1 月 1 日.田村松魚.「合奏」.
- 『女学世界』.1903 年 9 月 5 日.田村松魚.「村の教師」.
- .1904 年 6 月 5 日.田村松魚.「支那夫人小話」.
- .1909 年 7 月 1 日.田村松魚.「米国成金夫人の生活」.
- 河盛好蔵.「永井荷風」『文学講座』第 1 巻,筑摩書房 (1951 年 9 月 5 日).
- 川嶋保良.『Japanese-American Voice—米国で発行された日本人による最初の英字誌—』精文堂印刷 (1999 年 12 月 16 日).
- 『共存』.共存社 (1917 年 夏).
- 小林政治.「親友中村吉蔵君と私」『書物展望』第 129 号 (1942 年 3 月 1 日).
- 朽木ゆり子.『ハウス・オブ・ヤマナカ 東洋の至宝を欧米に売った美術商』新潮社 (2011 年 3 月 25 日).
- 工藤美代子.『晚香坡の愛 —田村俊子と鈴木悦』ドメス出版 (1982 年 7 月 15 日).
- 桑井輝子.「『在米』日本人『移民地文芸』覚書(1)アメリカの亡者—翁久允の長編二部作『悪の日陰』と『道なき道』」『白百合女子大学研究紀要』第 41 号(2005 年 12 月).

- 前田河広一郎.「地獄」『三等船客』 自然社 (1922 年 10 月 30 日).
- 南加州日本人商業会議所.『南加州日本人史』 (1956 年 1 月 30 日).
- 水野真理子.「翁久允のアイデンティティと移民地文芸論の変遷」『人間・環境学』第 16 卷 (2007 年 12 月 20 日).
- .『日系アメリカ人の文学活動の歴史的変遷—1880 年代から 1980 年代にかけて』 風間書房 (2013 年 3 月 31 日).
- 永井荷風.『あめりか物語』 博文館 (1908 年 8 月 4 日).
- .『荷風全集』第 4 卷,岩波書店 (1992 年 7 月 8 日).
- .『荷風全集』第 27 卷,「月報」27, 岩波書店 (1973 年 3 月 30 日).
- .『荷風全集』第 27 卷,岩波書店 (2011 年 6 月 24 日).
- 中郷芙美子.「『移民地文芸』の先駆者翁久允の創作活動—『文学会』創設から『移植樹』まで—」『立命館大学言語文化研究』3 卷 6 号 (1992 年 3 月 20 日).
- .「翁久允移民地文芸の特徴—『生活』と『思想』について」『立命館大学言語文化研究』4 卷 6 号 (1993 年 3 月 20 日).
- 中村春雨.『欧米印象記』 春秋社書店 (1910 年 6 月 20 日).
- 中田幸子.『前田河廣一郎における「アメリカ」』 国書刊行会 (2000 年 10 月 20 日).
- 紐育日本人会編.『紐育日本人発展史』PMC 出版 (1984 年 9 月 10 日 [1921 年 3 月 30 日]).
- 『紐育新報』.1911 年 9 月 24 日.「時事一束」.
- .1915 年 1 月 2 日. 千本木生.「紐育邦字新聞の歴史」.
- .1915 年 3 月 20 日.「詩人の妻青年画家に恋す」.
- .1915 年 10 月 30 日.「美術家の懇親会」.
- .1915 年 11 月 27 日.「邦人の美術思想は国家の財産なり」.
- .1917 年 3 月 21 日. 岡田九郎.「在紐日本美術家の作品展覧会を見て」.
- .1917 年 3 月 24 日.「文展乎サロン乎 荒井陸男氏談」.
- .1917 年 5 月 12 日.「紐育日本人会理事会の経過」.
- .1917 年 6 月 9 日. 石垣栄太郎「野に叫ぶ人の声を」.
- .1917 年 8 月 1 日. 石垣栄太郎「滅亡の門辺に」.
- .1917 年 12 月 29 日. 石垣栄太郎「髑髏に接吻する女」.
- .1918 年 2 月 13 日. 岡田九郎.「日本美術会漫録」.
- .1918 年 2 月 13 日. 石垣栄太郎「エイの手紙」.
- .1918 年 7 月 17 日. 石垣坩堝譯「審判の庭 オスカー・ワイルド」.
- .1918 年 10 月 12 日. 坩堝「祈り」.
- .1918 年 10 月 26 日. 石垣坩堝「レデンプションと名を改へて上演された『生ける屍』プリモス座のトルストイ劇」.
- .1919 年 4 月 2 日.石垣坩堝(石垣栄太郎).「独立美術協会の日本人画家」.
- .1919 年 7 月 19 日. 石垣坩堝「アダムの死の床」.

- .1919年7月30日. 埧塙「ある連続せる感覚」.
- .1919年8月16日. 埧塙「哀傷の夕」.
- .1919年8月20日. 埧塙「死の誘惑」.
- .1919年12月31日. 石垣栄太郎「罪人あるなし」.
- .1920年3月17日. 山成無声「三人の同胞画家 独立美術協会展」.
- .1920年4月17日. 「日本人画会成立す」.
- .1921年3月23日. 「日本人画会新役員」.
- .1921年5月28日. 「日本人画家会が彫会と改称」.
- .1921年11月5日. 「籠欄」.
- .1921年12月31日. 「年頭名刺交換」.
- .1922年2月18日. 国吉康雄. 「美術我観」.
- .1922年11月15日. 石垣栄太郎『『玉石同架』(下) 画彫会展覧会」.
- .1922年12月20日. 「画彫会」.
- .1922年2月28日. 国吉康雄「美術我観」.
- .1924年6月25日, 28日. 「米国回答と内外の与論」.
- .1925年2月28日. 「画彫会主催で秋に展覧会 準備委員も選定」.
- .1925年3月21日. 「画彫会の主催で秋季展覧会準備」.
- .1925年3月11日. 石垣埧塙「色とりどりな美術展 邦人出品者十六人」.
- .1925年11月4日. 「画彫会懇親会盛況」.
- .1926年3月10日. 渡辺寅次郎「独立美術展」.
- .1926年10月13日. 「紐育に創設せらるる日本の文化的事業 紐育日本人会書記長
角田柳作氏意見 (上)」.
- .1926年10月16日. 「紐育に創設せらるる日本の文化的事業 紐育日本人会書記長
角田柳作氏意見 (下)」.
- .1926年11月17日. 「本社主催『邦人美術展』来年二月一日より二週間に亘り東部
在留邦人美術家を網羅して」.
- .1926年11月17日. 「絵のシーズンを前に生まれた邦人美術展」.
- .1926年11月20日. 「紐育日会の理事例会」.
- .1926年12月4日. 「紐育新報社主催第一回邦人美術展覧会規定」.
- .1927年1月1日. 藤岡昇. 「画家としての私の態度」.
- .1927年1月1日. 川村吾蔵. 「彫刻断想」.
- .1927年1月1日. 川村吾蔵. 《フレデリック・マクモニス》(図版).
- .1927年1月1日. 三崎道夫. 「踊り子の画」.
- .1927年1月1日. 村田紅雪. 《春宵》(図版).
- .1927年1月1日. 清水清. 「創作と鑑賞」.
- .1927年1月1日. 角南五天. 「邦人美術展を前にして 感想 芸術座談」.

- .1927 年 1 月 1 日. 角南壮一.《母の肖像》(図版).
- .1927 年 1 月 1 日. 保忠蔵.「自分の絵に対する心持」.
- .1927 年 1 月 1 日. 都筑隆.「芸術の個性」.
- .1927 年 1 月 1 日. 都筑隆.《静物》(図版).
- .1927 年 1 月 1 日. 臼井文平.《少女の肖像》(図版).
- .1927 年 1 月 1 日. 渡辺寅次郎.《自画像》(図版).
- .1927 年 2 月 12 日.「邦人美術展」.
- .1927 年 2 月 19 日.「近代派官学派入乱れて 咲誇る邦人美術展」.
- .1927 年 2 月 23 日;2 月 26 日;3 月 2 日;3 月 5 日;3 月 9 日.「美術展合評」.
- .1927 年 2 月 23 日.「日本人味」を忘れないで 特色のある美術展 ヘラルド トリ
ビュン紙の批評 昨今売約の交渉がぼつりぼつり」.
- .1927 年 2 月 26 日.「尊い日本人の伝統を捨て乍ら 泰西化し切れない美術展 タイ
ムスのケリー女史が鋭い批評【アート・センターに於ける邦人美術展の賑ひ】」.
- .1927 年 3 月 2 日.「三月五日に閉会する 第一回邦人美術展 米人批評家の眼に映
じた日本人 モーダニスト 伝統的な日本画」.
- .1927 年 3 月 5 日.「三週間も何時か過ぎて『邦人美術展』はけふ閉会 内外人より
名残を惜しまれて」.
- .1927 年 3 月 5 日.「美術展合評」.
- .1927 年 3 月 9 日.「美術展合評」.
- .1927 年 3 月 19 日.藤岡昇「独立美術展」.
- .1927 年 4 月 30 日.渡辺寅次郎「美術展印象」.
- .1927 年 4 月 30 日.国吉康雄「美術同人会」.
- .1927 年 1 月 1 日. 吉田石堂.《イースト・リバー》(図版).
- .1929 年 8 月 3 日.「日本文化学会産まる」.
- .1929 年 11 月 2 日.「日本人美術協会の絵画研究会」.
- .1930 年 12 月 31 日.石垣綾子.「アメリカの左翼文芸」.
- .1931 年 12 月 30 日.坡土遜小叟.「曼陀羅と達磨」.
- .1932 年 1 月 16 日.「石垣栄太郎氏個展」.
- .1932 年 3 月 30 日.「労働者クラブで国吉康雄氏講演」.
- .1932 年 6 月 1 日.「当地に珍しい失業画家展」.
- .1932 年 11 月 19 日.「労働文化同盟主催で絵画展覧会開催」.
- .1932 年 11 月 30 日.「プロレタリア美術講演」.
- .1933 年 1 月 23 日.「左翼美術家展覧会」.
- .1933 年 12 月 30 日.「失業者への一福音 画家救済」.
- .1934 年 3 月 3 日.「国吉康雄画伯」.
- .1934 年 1 月 27 日.「春浅き如月の初旬邦人画家作品展覧」.

- .1934 年 2 月 7 日.「洋画家展覧会沙汰やみ」.
- .1934 年 2 月 14 日.「懸命の重任を痛感して最善を尽さむと大使の声明」.
- .1934 年 2 月 17 日.「日本美術協会寄附の作品抽籤」.
- .1934 年 2 月 21 日.「米国々民に呼び掛ける齋藤新大使の放送」.
- .1934 年 5 月 26 日.「文化の相互的交換は理解と友誼の恒久的基礎」
- .1934 年 12 月 29 日.「邦人美術展作品募集」.
- .1935 年 1 月 19 日.「ラテン区の春二月…邦人美術展を開催 進新気鋭の二世美術家も参加」.
- .1935 年 2 月 6 日.「美術展覧会の出品五十点」.
- .1935 年 2 月 9 日.「邦人美術展覧会」.
- .1935 年 2 月 9 日.「雪の如月に春を告げる美術展出品諸家スケッチ」.
- .1935 年 2 月 13 日.「我等の大使の二大演説 日本と米国と支那(上)」.
- .1935 年 2 月 20 日.「我等の大使の二大演説 日本と米国と支那(下)」.
- .1935 年 2 月 20 日.「美術展講演ジャパンナイト盛況」.
- .1935 年 2 月 20 日.清水清.「邦人美術展(下)」.
- .1935 年 2 月 20 日.「美術展覧会に就て アデレイド・リチャードソン投」.
- .1935 年 2 月 27 日.角田柳作.「異国情緒と回顧主義(1)」.
- .1935 年 3 月 2 日.角田柳作.「異国情緒と回顧主義(2)」.
- .1935 年 3 月 6 日.角田柳作.「異国情緒と回顧主義(3)」.
- .1935 年 3 月 9 日.角田柳作.「異国情緒と回顧主義(4)」.
- .1935 年 11 月 6 日.「全米美展へ出品」.
- .1936 年 3 月 21 日.広告「邦人美術展作品募集」.
- .1936 年 4 月 25 日.石垣綾子.「邦人美術展(A)」.
- .1936 年 4 月 29 日.石垣綾子.「邦人美術展(B)」.
- .1936 年 5 月 2 日.石垣綾子.「邦人美術展(C)」.
- .1936 年 11 月 21 日.石垣栄太郎.「鈴木氏個展」.
- .1936 年 12 月 30 日.鈴木盛.「彼女の過去」(図版).
- .1937 年 3 月 27 日.「東西倶楽部主催の美術展覧会」.
- .1937 年 6 月 16 日.「故野口博士の壁画を完成 画家鈴木盛氏の名誉」.
- .1937 年 9 月 8 日.「日支ルンペン美術展覧会」.
- .1938 年 6 月 25 日.「邦人画家作品展覧」.
- .1938 年 9 月 8 日.門脇ロイ.《巴土遜河畔》(図版).
- .1939 年 3 月 18 日.「第二世美術展覧会 精彩奕々たる若き人々の力作」.
- 『日米』.1915 年 3 月 13 日.「^{ママ}管野夫人の拘留」.
- .1915 年 3 月 14 日.「恋に狂へる女彫刻師」.
- .1915 年 4 月 1 日.「^{ママ}管野夫人離婚問題」.

- 『日米時報』.1918年2月9日.黄四郎.「紐育の画壇 二展覧会拝見記」.
- .1920年1月1日.「過去二十年を回顧して」.
- .1921年1月1日.「名刺交換」.
- .1922年1月1日.「名刺交換」.
- .1922年11月18日.唐変木生.「藪にらみの記 画彫会展覧会偶感」.
- .1923年3月17日.モーニングサイド蔭士.「独立派美術展覧会を觀て」.
- .1925年3月14日.渡辺寅次郎.「第九回独立画展を覗いて」.
- .1926年3月13日.藤岡昇.「独立美術展覧会 在紐邦人画家十一名出品」(上).
- .1926年3月20日.藤岡昇.「独立美術展覧会 在紐邦人画家十一名出品」(下).
- .1927年2月26日.「紐育新報主催美術展の批判 英字新聞美術記者により」
- .1927年3月5日.「紐育夕刊ポストの美術展酷評 飽迄馬鹿にして居る」.
- .1927年5月7日.国吉康雄.「サロン展寸評」.
- .1927年4月30日.国吉康雄.「同人の叫び」.
- .1932年2月24日.「プロレタリアの文化同盟 発会式と藤森氏の講演」.
- .1935年2月23日.「素人芸術家の作品も交じって邦人美術展覧会」.
- .1937年9月18日.「今年も亦邦人画展」.
- .1938年6月25日.「市主催の美術展」.
- 『日米週報』.1906年9月1日.雑報欄「浅井青葉氏」.
- .1907年3月30日.田村松魚選.「北米相撲とり草」.
- .1907年4月6日.田村松魚選.「北米相撲取り草」.
- .1907年4月13日.「田村松魚選.北米相撲取り草」.
- .1907年4月27日.広告欄.
- .1907年5月4日.「紐育記者同志会会則」.
- .1907年5月4日.雑報欄「紐育記者同志会」.
- .1907年6月1日.雑報欄「太西洋」.
- .1907年6月15日.雑報欄「中村春雨氏」.
- .1907年7月6日.広告欄.
- .1907年7月13日.雑報欄「太西洋の発刊」.
- .1907年7月13日.雑報欄「永井荷風氏送別会」.
- .1907年8月10日.雑報欄 しのぎ.「太西洋(第二号)」.
- .1907年9月7日.広告欄.
- .1907年9月28日.雑報欄「太西洋『第三号』」.
- .1907年9月28日.広告欄「太西洋第四号」.
- .1907年11月16日.雑報欄「太西洋(四号、五号)」.
- .1908年5月23日.「中村春雨氏送別会」.
- .1908年8月29日.「粉煙草集」.

- .1908年9月12日.「粉煙草集」.
- .1908年9月20日.「粉煙草集」.
- .1908年11月14日.雜報欄「太西洋」.
- .1908年11月21日.広告欄「太西洋之發行」.
- .1916年12月30日.燈台守り.「除夜の鐘」.
- .1917年3月24日.エス ワイ生.「邦人の美術展覽会を觀る」.
- .1917年3月31日.額屋生.「美術展覽会覗き」.
- .1917年4月21日.台燈守り.「五十行雜感(二)」.
- .1917年4月28日.台燈守り.「五十行雜感(二)」.
- 日米週報社.『紐育の日本』1908年.
- .「在米日本人紳士録」『日米大勢年鑑』日米週報社(1914年1月1日).
- 日本美術年鑑編纂部.『美術年鑑』画報社(1913年).
- 『日本人』.(シアトル)1901年4月20日.「広告」
- 『日本人』.(ニューヨーク)98号1923年1月25日.渡辺寅次郎.「画斎の窓より」.
- .99号1923年2月25日.渡辺寅次郎.「画彫会會員側面觀」.
- 南加州日本人商業會議所.『南加州日本人史』(1956年1月30日).
- 荻野富士夫.『太平洋の架橋者 角田柳作「日本学」の SENSEI』芙蓉書房(2011年4月25日).
- 岡義明.「清水登之、生涯を綴った日記」大川美術館『企画展 No.24 清水登之 滯米日記と素描』大川美術館(1994年9月27日).
- 岡部晶幸.『1920-30年代アメリカン・シーンの画家発見 トーマス永井の不思議世界』第一生命保険相互会社社会文化事業室(1996年10月24日-11月27日).
- 翁久允.『翁久允全集』第二卷, 翁久允全集刊行会(1972年2月25日).
- 『桜府日報』.1915年3月17日.「管野姦通問題」.
- .1915年3月18日.「管野姦通問題(続)」.
- .1915年5月12日.「管野衣川氏離婚問題」.
- 『羅府新報』.1915年4月1日.「管野夫人離婚訴訟を提起す」.
- 坂上博一.「永井荷風『あめりか物語』—異国風土の発見—」『解釈と鑑賞』第62巻第12号(1997年12月).
- 笹淵友一.「永井荷風『あめりか物語』論」『国文学論集』第6号(1973年1月25日).
- 『成功』.1904年12月1日 田村松魚「ヘレナの離別」.
- .1909年6月1日.田村松魚.「帰朝後余が日本商店を觀し時の感想」.
- .1909年6月1日.松魚生.「親友」.
- .1909年7月1日.新帰朝者田村松魚.「在米日本人の労働生活」.
- .1909年9月1日.田村松魚.「桃の実」.
- 霜鳥之彦遺作展実行委員会.『霜鳥之彦遺作展—遺作展記念画集』(展覧会図録). 光琳社.

(1983年11月1日).

篠田左多江・山本岩夫編.『日系アメリカ文学雑誌研究—日本語雑誌を中心に』不二出版
(1998年12月15日).

『新公論』.1909年7月1日.田村松魚君.「新たに米国から帰りて日本の商店を見た時の
感」.

『新世界』.1906年9月15日～10月18日.田村松魚.「罪の手」.

——.1907年1月1日～1月9日.田村松魚.「大成功」.

——.1907年1月14日～1月20日.田村松魚.「罪の手」(続).

——.1907年2月15日.松魚病夫.「病間録」.

——.1907年2月24日.紐育田村松魚.「閑畝君足下」.

——.1907年7月28日.雑報欄「中村春雨氏の消息」.

——.1908年9月18日.「田村松魚氏来る」.

——.1908年9月26日.雑報欄「田村松魚」

——.1907年11月27日～12月26日.紐育田村松魚「出世間」.

——.1908年11月29日.田村松魚「大和殖民地」.

——.1915年3月13日.「^{マツ}管野氏の米夫人は狂へる乎」.

——.1915年3月14日.「卅歳の女と廿三歳の恋人」.

——.1915年3月16日.「^{マツ}管野夫人放免」.

——.1915年4月1日.「^{マツ}管野夫人離婚訴訟提起」.

——.1915年4月4日.清沢生「温かい死の手に抱かれた女」.

——.1915年4月7日.「^{マツ}管野離婚訴訟」.

——.1915年4月8日.「^{マツ}管野夫人に不利」.

——.1915年5月16日.燈台守「その夜」.

——.1915年5月16日.清沢冽「その夜」序文.

『新小説』.1903年9月1日.「時報」.

——.1904年7月1日.松魚生.「残燈陳話」.

——.1904年12月1日.在米松魚生.「ヘレナの別離」.

——.1905年6月1日.在米松魚生.「危機一髪」.

——.1905年10月1日.松魚生.「白梅の巻」.

——.1906年8月1日.在米田村松魚.「サンデーナイト」.

——.1907年9月1日.「時報」.

——.1907年11月1日.松魚生.「夜露」.

——.1911年5月1日.田村松魚.「海から陸」.

『少女界』.1903年9月11日.田村松魚.「灯台守の娘(西洋歴史譚)」.

——.1904年10月11日.田村松魚.「黄金の指輪」.

——.1906年2月1日.在米田村松魚.「白鳥物語」.

『商工世界 太平洋』.1908年9月15日. 風来坊.「大和植民地(YAMATO COLONY)を紹介す」.

『少年界』.1904年6月11日.田村松魚.「勇敢なる少年」.

『少年世界』.1903年11月5日.田村松魚.「続支那動物物語」.

『淑女鏡かがみ』.1912年5月1日.松魚生.「都会の或る家庭(米国)」.

——.1912年8月1日.松魚生.「北米の夏」.

『趣味』.1907年11月1日.「文芸界消息」.

末延芳晴.『荷風とニューヨーク』 青土社 (平成14年10月30日).

——.『荷風のあめりか』 平凡社 (平成17年12月7日).

杉村浩哉.「古田土雅堂について」『美術運動史ニュース』第87号 (2007年4月20日).

『太平洋』1901年4月21日.「世界第一の鉄道会社」.

——.1901年12月2日.「バッファロー博覧会の景況」.

——.1901年12月16日.「紐育市の建物」.

——.1902年2月10日.「カーネギー氏の工業学校」.

——.1902年3月17日.「紐育の地下鉄道」.

『太西洋』第1号.1907年6月30日.

——.1907年6月30日.朝井外門.「発刊の辞」.

——.1907年6月30日.田村松魚.「朝顔」.

——.1907年6月30日.田村松魚.「鉄蹄」.

——.第2号.1907年7月20日.

——.1907年7月20日.春雨生.「入社 of 辞」.

——.1907年7月20日.永井荷風.「夜の女」.

——.1907年7月20日.田村松魚.「病室」.

——.1907年7月20日.「第一回俳句募集披露」.

——.1907年7月20日.杜鵑堂松魚.「清風漫言」.

——.1907年7月20日.田村松魚.「俳友某君のコネクチカットに行くを送る」.

——.第3号.1907年8月20日.

——.1907年8月20日.永井荷風.「一月一日」.

——.1907年8月20日.「本誌に対する反響(紐育時報)」.

——.1907年8月20日.「本誌に対する反響(桑港新聞)」.

——.1907年8月20日.万歳万歳生.「ビックリ箱」.

——.1907年8月20日. Shomgio[sic] Tamura.「A Ghost of Old Japan」.

高須正郎.「ニューヨーク日系紙の変遷と発展」『別冊新聞研究』17号(1983年12月).

武田勝彦.『荷風の青春』 三笠書房 (1973年3月15日).

竹内幸次郎.『米国西北部日本移民史』 大北日報社 (1929年7月1日).

田村紀雄.『アメリカの日本語新聞』 新潮社 (1991年10月20日).

- .『海外の日本語メディア-変わり行く日本町と日系人』世界思想社（2008年2月10日）.
- .「在米日系新聞の発達史研究(11) 反ファシズムの新聞『同胞』—1937年～1942年」『人文自然科学論集』第78号（1988年3月15日）139-178.
- .「在米日系新聞の発達史研究(18) 1880-1910、Portland 日本語新聞と伴新三郎—外交官辞し、日本語新聞発刊へ」『人文自然科学論集』第93号（1993年3月16日）65-89.
- 田村紀雄・新井勝紘.「在米日系新聞の発達史研究(5) 自由民権期における桑港湾岸地区の活動」『人文自然科学論集』第65号（1983年12月5日）75-136.
- 田村紀雄・藤野雅己.「日系新聞研究ノート(8) オークランド『新日本』新聞の基礎的研究」『東京経済大学会誌』第144号（1986年1月15日）363-406.
- 田村紀雄・蓮池紀生.「日系新聞研究ノート(7) 紐育日系新聞小史」『東京経済大学会誌』第140号（1985年3月20日）119-158.
- 田村紀雄・蒲池紀生・芳賀武.「日系新聞研究ノート(7)紐育日系新聞小史」『東京経大学会誌』第140号（1985年3月20日）119-158.
- 田村紀雄・大澤隆.「在米日系新聞の発達史研究(21) 『蒸気船』新聞と萌芽期の桑港日本町—大澤栄三の活動を中心に」『人文自然科学論集』第97号（1994年7月20日）3-32.
- 田村紀雄・坂口満宏.「在米日系新聞の発達史研究(17) シアトル初期の日本語新聞」『人文自然科学論集』第92号（1992年12月5日）39-70.
- 田村紀雄・白水繁彦編.『米国初期の日本語新聞』勁草書房（1986年9月20日）.
- 田村紀雄・白水繁彦.「在米日系新聞の発達史研究序説」『人文自然科学論集』第61号（昭和57年9月25日）33-90.
- 田村紀雄・山本武利.「日系新聞研究ノート(1) 加州日系紙の新聞広告と経営—1910～1940」『東京経済大学会誌』第132号（1983年9月15日）187-238.
- 田村紀雄・ユージ・イチオカ・山本英政・阪田安雄.「在米日系新聞の発達史研究(7)安孫子久太郎—永住を主唱した「日米」新聞経営者—」『東京経済大学 人文自然科学論集』第68号(1984年12月10日) 61-96.
- 田村松魚.『北米の花』博文館（1909年9月13日）.
- .『北米世俗観』博文館（1909年12月20日）.
- 田村羊三.「私の満鉄史」満鉄会編『満鉄会叢書① 思い出の満鉄』龍溪書舎（1986年10月20日）.
- 『太陽』.1904年8月1日.田村松魚.「目無鳥」.
- .1905年7月1日.在米田村松魚生.「脚本帰郷兵」.
- 『手紙雑誌』.1904年9月7日.田村松魚.「名花パピー」.
- 東京国立近代美術館.『アメリカに学んだ日本の画家たち 国吉・清水・石垣・野田とアメリカン・シーン絵画』(展覧会図録).東京国立近代美術館（1982年）.

- 東京都庭園美術館.『終戦 50 年企画 アメリカに生きた日系人画家たち 希望と苦悩の半世紀 1896-1945』(展覧会図録)日本テレビ放送網 (1995 年).
- 角田柳作.『書斎・学校・社会』布哇便利社 (1917 年 1 月 16 日).
- .「The Japanese Culture Centre の創立に就て」外務省外交資料『本邦ニ於ケル文化研究並同事業関係雑件』(1926 年).
- 角田柳作・松本重治・田中耕太郎・嘉治隆一.「座談会 アメリカの真実を認識せよー老紐育人角田氏を囲んでー」『心』(1955 年 8 月 1 日).
- 内海孝.「角田柳作のハワイ時代ー1909 年の渡布前後をめぐって」『早稲田大学史記要』通巻 34 号 (1998 年 7 月 31 日).
- .「角田柳作のハワイ時代再論ー1909 年～17 年の滞在時機を中心にして」『早稲田大学史記要』通巻 35 号 (1999 年 7 月 15 日).
- .「角田柳作のコロラド時代ーコロンビア大学「日本学」生誕前夜をめぐって」『東京外国語大学論集』75 号 (2007 年 12 月 21 日).
- 浦西和彦.「前田河広一郎と『日米時報』」『国文学』83・84 合併号,関西大学国文学会(2002 年 1 月 31 日).
- 和歌山県立近代美術館.『アメリカの中の日本ー石垣栄太郎と戦前の渡米画家たち』(展覧会図録) (1997 年).
- 山本岩夫.「翁久允と『移民地文芸論』」『立命館大学言語文化研究』第 5 巻第 5・6 合併号 (1994 年 2 月 28 日).
- .「アメリカ東海岸唯一の文芸誌『NY 文藝』」篠田左多江・山本岩夫編『日系アメリカ文学雑誌研究ー日本語雑誌を中心に』不二出版(1998 年 12 月 15 日).
- 安來正博.「石垣栄太郎関係スクラップ資料と、その補足的考察(1)」『和歌山県立近代美術館紀要』1 号 (1996 年 3 月 31 日).
- .「石垣栄太郎関係スクラップ資料と、その補足的考察(2)」『和歌山県立近代美術館紀要』2 号(1997 年 3 月 31 日).
- .「資料に見る戦前の渡米画家たちーその活動の軌跡」『アメリカの中の日本ー石垣栄太郎と戦前の渡米画家たち』(展覧会図録) 和歌山県立近代美術館 (1997 年 11 月 11 日).
- 『読売新聞』.1918 年 1 月 29 日(朝刊).岡田九郎.「紐育より」.
- .1918 年 1 月 30 日 (朝刊).岡田九郎.「紐育より」.
- 『万朝報』.1910 年 2 月 1 日～3 月 16 日.田村松魚.「男子」.
- .1911 年 9 月 11 日～11 月 22 日.田村松魚.「乱調子」.
- 在米日本人会.『在米日本人史』在米日本人会(1940 年 12 月 20 日).

〈英文資料〉

American Artists' Congress. *America Today* (Exhibition Catalogue) (1936).

- . *First American Artists Congress*. New York City. 1936.
- . *First Annual Membership Exhibition, 1937*. (Exhibition catalogue). New York: Rockefeller Center, New York.
- . *Second Annual Membership Exhibition, 1938*. (Exhibition catalogue). New York: Rockefeller Center, New York.
- . *Third Annual Membership Exhibition, 1939*. (Exhibition catalogue). New York: Rockefeller Center, New York.
- . *Fourth Annual Membership Exhibition, 1940*. (Exhibition catalogue). New York: Rockefeller Center, New York.
- American Artists' Congress papers, manuscript. February 15, 1936 to May 4, 1936. "Minutes of the Executive Board Meeting report", in Stuart Davis papers. Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.
- . February 19, 1937. "Press release". New York Public Library, NY.
- . May 6, 1937. "Minutes of the Executive Board Meeting", in Stuart Davis, Papers, 1911-1966. Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.
- . July 15, 1937. "Open Meeting for Discussion on W.P.A. Dismissals American Artists Congress" in Stuart Davis, Papers, 1911-1966. Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.
- . September 16, 1937. "Minutes of the Executive Board Meeting", in Stuart Davis, Papers, 1911-1966. Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.
- . December 17, 1937. "2nd Annual National Convention Public Session", in Philip Evergood papers, manuscript. 1890-1971: Series 7: scrapbooks, 1924-1954, Box 12. Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.
- . December 27, 1937. in Subject file: New York (N.Y.). American Artists' Congress: Miscellaneous uncatalogued material. Museum of Modern Art Library, NY.
- . Winter, 1937. "Boycott Japanese Goods" in American Artists' Congress papers, manuscript. "American Artists: News bulletin of the American Artists' Congress". New York Public Library, NY.
- American Art News*. March 17, 1917. "Young Japanese Artists' Display".
- . February 9, 1918. "Japanese Artists at MacDowell Club".
- . November 12, 1921. "Chicago Overrules Jury and Bars Jap".
- . November 18, 1922. "Japanese Artists' Show".
- Anaconda Standard*. August 17, 1901. "Women of Japan"
- . September 12, 1901. "Chino-Japan Bank System".
- An Exhibition in Defense of World Democracy—Dedicated to the peoples of Spain and*

- China*. (New York: A.C.A. Gallery, 1937).
- Annual Exhibition of The Japanese Art Association*. (New York: The Yamanaka Galleries, 1917).
- Art Front*. January 1935. "Revolutionary Art at the John Reed Club".
- . December 1937. Chuzo Tamotzu "Fire Trap". (Figure).
- Art News*. March 3, 1923. "Independent Show Actually Academic".
- Arts*. April. 1927. Lloyd Goodrich, "The Independent 1927".
- . May 1927. Forbes Watson, "The Spring Salon".
- Art Students League of New York. Registration record, Eitaro Ishigaki, Account No.12692, Register No.700. Address, 246 West 14th Street, New York. Art Students League of New York.
- Baigell, Matthew and Williams, Julia. *Artists Against War and Fascism*. (New Jersey: Rutgers University Press 1986).
- Baron, Herman. "Writings and Notes: A.C.A. Uptown" Herman Baron papers, circa early 1950s. 28, unpublished typescript, A.C.A. Galleries records, 1917-1963. Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.
- . "American Artists" Herman Baron papers, circa early 1950s. unpublished typescript, A.C.A. Galleries records, 1917-1963. Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.
- . "Writings and Notes: McCarthyism and American Art articles". Herman Baron papers, circa early 1950s. 28, unpublished typescript, A.C.A. Galleries records, 1917-1963. Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.
- . Undated, correspondence, "A.C.A. gallery circa, 1936-1940". manuscript. in Max Weber papers. Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.
- Bumpei Usui Paintings 1925-1949. (Exhibition catalogue)*. (New York: Salander Galleries. 1979).
- Chuzo Tamotzu. Transcript*, September 3, 1964. Oral history interview with Chuzo Tamotzu. Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.
- Christian Science Monitor*. February 24, 1927. Ralph Flint. "New York Art Miscellany".
- Chrysanthemum*. No.1- No.3. December 1897-February 1898.
- Daily Worker*. November 15, 1932. "John Reed Club Artists exhibition Now on At Aca Gallery, New York".
- . December 5, 1933. "120 Works Shown at Art Exhibition of John Reed Club".
- . June 11, 1934. Kainen, Jack. "Scenes of the Class Struggle at J.R.C. Exhibit in New York".

- .December 18, 1937. Kainen, Jacob. “2 nd Artists’ Congress Show is Dedicated to Spain and China”.
- Evening Telegram New York*, November 4, 1922. “Young Japanese Artist Finds Strange Contrasts in American Men and Women”.
- Exhibition of Paintings*. (Exhibition catalogue) (New York: The MacDowell Club, 1918)
- Exhibition of Paintings and Sculpture, by Japanese Artists*. (Exhibition catalogue)(New York: A.C.A.Gallery, 1935).
- Exhibition of Paintings and Sculpture, by Japanese Artists*. (Exhibition catalogue) (New York: A.C.A. Gallery, 1936).
- Exhibition of Paintings and Sculptures by The Japanese Artists Society of New York City*, (Exhibition catalogue). (New York: The Civic Club, 1922).
- Exhibition Sculpture • Painting • Drawing—the Social Viewpoint in Art*. (Exhibition catalogue). (New York: John Reed Club, 1933).
- Exhibition Paintings, Sculpture, Drawings, Prints on the Theme Hunger Fascism War*. (Exhibition catalogue). (New York: John Reed Club, 1933) .
- Falk, Peter Hastings, ed. 1989.The Annual Exhibition Record of The Pennsylvania Academy of the Fine Arts. Volume III 1914-1968. (Madison Connecticut: Sound View Press 1989).
- .The Annual Exhibition Record of The Art Institute of Chicago 1888-1950. (Madison Connecticut: Sound View Press 1990).
- .The Annual Exhibition Record of The National Academy of Design 1901-1950. (Madison Connecticut: Sound View Press 1990).
- Federal Art Project papers. 1920-1965. Federal Art Project, Photographic Division collection, circa 1920-1965, bulk 1935-1942: Artist Files, circa 1920-1965, box: 22, folder : 26. Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.
- Federal Art Project Gallery papers, manuscript. “Federal Art Project Gallery, 27 January to 15 February 1936”. (Exhibition catalogue). in College Art Association of America Records, box 9, folder: 2. Frick Collection/Frick Art Reference Library Archives, NY.
- .“Federal Art Project Gallery, April 30 to May 20, 1936”. (Exhibition Catalogue). in College Art Association of America Records, box 9, folder: 2. Frick Collection/Frick Art Reference Library Archives, NY.
- The First Annual Exhibition of Paintings and Sculpture, by Japanese Artists in New York*. (Exhibition catalogue)(New York: the Art Center, 1927).
- General Services Administration. General Services Administration Description, 1920-2009. GSA Artists’ Employment History Records, 1936-1973, in Francis V.

- O'Connor papers, 1920-2009, box 4, folder: 104, box 6, folder: 8, box 6, folder: 71, box 6, folder: 117. Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.
- Hemingway, Andrew. *Artists on the Left: American Artists and the Communist Movement 1926-1956* (New Haven, Connecticut: Yale University Press. 2002).
- Idaho Daily Statesman*, August 15, 1901. "Savage Japanese".
- . March 13, 1915. "Charged with Insanity Ward of Late Joaquin Miller Arreted on Sister's Complaint".
- Japan and America*. Vol.1 No.1- Vol.3 No.11, July 1901- November 1903.
- . July, 1901. "Hakko no Kotoba".
- . July, 1901. "Tokyo's Electric Railway".
- . July, 1901. "Education of Women in Japan".
- . July, 1901. "The Ainus".
- . July, 1901. "Sekai Dai-Ichi no Sei-Tetsu Kwaisha".
- . September, 1901. "Japan to Grow Her Own Tobacco".
- . October 1901. "Aim of Japan and America".
- . October 1901. "Baffallo Hakurankwai".
- . November, 1901. "The Birth of the Emperor of Japan".
- . November, 1901. "Japanese National Anthem".
- . November, 1901. "New York Shi no Tatemono".
- . December 1901. "New York no Chika Tetsudo".
- . December 1901. "Carnegie Shi no Kogyo Gakko".
- . July, 1902. "Clan" Government and the Japanese Party Leaders".
- . July, 1902. "Fruit Growing in Japan".
- Japan Current*. Vol.1 No.3-Vol.2No.7. November 1907-August 1908.
- Japan and America*. Vol.1- Vol.3 No.11. July 1901 –November 1903.
- The Japanese-American Artist Group. *The Japanese-American Artist Group, paintings, drawings, sculpture*. (Exhibition catalogue). (New York: Riverside Museum, 1947).
- Japanese American Review*, January 14, 1939. "Japanese Artists Born in America Excel many in Nippon, Experts Say".
- Japanese-American Voice*. No.1- No.6. February 1897-October 1897.
- Landgren, E. Marchal. "New York's Municipal Art Committee" Marchal E. Landgren papers, 1881-circa 1982, bulk 1930-1975, box 4, folder: 28-30. Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington DC.
- Literary Digest*. July 26, 1902. "Prospects of the Japanese Elections".
- Los Angeles Times*. August 21, 1901. "Tokyo's Electric Railway".

- . March 13, 1915. “Girl Artist Prefers Japs”.
- Marlor, S. Clark. *The Society of Independent Artists The exhibition Record 1917-1944*. (Mill Road, Park Ridge New Jersey: Noyes Press. 1984).
- . *The Salons of America 1922-1936*. (Madison, Connecticut: Sound View Press. 1991).
- Mail and Express*. July 20, 1901. “Savage Japanese”.
- . August 24, 1901. “Hajime Hoshi’s Patriotic Task”.
- . September 14, 1901. “Japan to Grow Tobacco”.
- . July 20, 1901. “Savage Japanese”.
- Municipal Art Committee, *First Municipal Art Exhibition*, (New York: Rockefeller Center Building, New York, 1934), Dorothy C. Miller papers, 1853-2013, bulk 1920-1996, box 23. Folder: First Municipal Exhibition (1934). Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.
- . *Exhibition*, a magazine of art activities in New York, January 1937. Frick Collection/Frick Art Reference Library Archives, NY.
- Municipal Art Committee Manuscript, February 25, 1934, New York, NY.-Municipal Art Committee, College Art Association of America Records, box 10, folder: 16. Frick Collection/Frick Art Reference Library Archives, NY.
- . March 7, 1934, New York, NY.-Municipal Art Committee, College Art Association of America Records, box 10, folder: 16. Frick Collection/Frick Art Reference Library Archives, NY.
- . January 17, 1936, Subject file: New York (N.Y.). Municipal Art Committee: Miscellaneous uncatalogued material. Museum of Modern Art Library, NY.
- . “Temporary Galleries of the Municipal Art Committee, Second Exhibition,” January 21 to February 1, 1936, Subject file: New York (N.Y.) Municipal Art Committee: Miscellaneous uncatalogued material. Museum of Modern Art Library, NY.
- . Municipal Art Committee Manuscript, “Temporary Galleries of the Municipal Art Committee, Sixth Exhibition,” April 8 to April 26, 1936, Subject file: New York (N.Y.) Municipal Art Committee: Miscellaneous uncatalogued material. Museum of Modern Art Library, NY.
- . Municipal Art Committee Manuscript, April 4 or 5, 1936, New York, NY.-Municipal Art Committee, College Art Association of America Records, box 10, folder: 16. Frick Collection/Frick Art Reference Library Archives, NY.
- . “Temporary Galleries of the Municipal Art Committee, Eight Exhibition,” May 20 to June 7, 1936, Subject file: New York (N.Y.) Municipal Art Committee:

- Miscellaneous uncatalogued material. Museum of Modern Art Library, NY.
- . “Critics’ Review” November 25, 1936, New York, NY.-Municipal Art Committee, College Art Association of America Records, box 10, folder: 16. Frick Collection/Frick Art Reference Library Archives, NY.
- . March 12, 1937, New York, NY.-Municipal Art Committee, College Art Association of America Records, box 10, folder: 16. Frick Collection/Frick Art Reference Library Archives, NY.
- Municipal Art Committee: Miscellaneous uncatalogued material, Municipal Art Committee Manuscript, May 18, 1936, New York, NY.-Municipal Art Committee, College Art Association of America Records, box 10, folder: 16. Frick Collection/Frick Art Reference Library Archives, NY.
- New Deal Gallery. *Our Heritage the Decade of the Great Depression a Timeline Courtesy of Livingston Arts New Deal Gallery*. (Brochure) (New Deal Gallery. Livingston, N.Y. 2016).
- New Masses*. December 1929. “Worker’s Art in Germany”.
- . February 1932. “Diego Rivera and the John Reed Club”.
- . July 1937. “Sights and Sounds—Freedom and frustration in movies making—A Pink Slip art show”.
- New York Post*. March 14, 1925. “Independent Show Displays Vast Array of Mediocre Work Along with a Few Good Things—Its Reason for Existence and How It Has Passed”.
- . October 31, 1925. Margaret Breuning. “The Salons of America and the Outworn Cause of Artistic Freedom—Other Notes of the Week in the World of Art”.
- . February 26, 1927. Margaret Breuning. “Japanese Artists”.
- . February 16, 1935. “Exhibit by Japanese Artists in New York”.
- . November 30, 1935. “The Critic Takes A Look Around The Galleries”.
- . April 25, 1936. “The Critic Takes a Glance Around the Galleries –Local Japanese Exhibit”.
- . September 18, 1937. Jerome Klein. “Chinese Artists Join Japanese in WPA Job Protest”.
- . December 14, 1937. “Denouncing War in Paint: Japanese Artists Portray Horrors of War Machine Their Show is Dedicated to the Peoples of Spain and China”.
- . December 14, 1937. Chuzo Tamotsu. 《Militarism Over Japan》(図版).
- . December 18, 1937. Klein, Jerome. “Art Comment: Democracy Aided by World Figures at Art Congress Thomas Mann’s Message read by his Daughter”.
- . June 26, 1938. “Group Shows Stress Works by American Contemporaries, Chiefly

- the Younger”.
- . July 2, 1938. Klein, Jerome. “Silvermine Painters Try Social Slant”.
- New York Tribune*. July 14, 1901. “Bonds Drawing Closer, Newspaper started to increase sympathy between Japan and America”.
- New York Herald Tribune*. March 6, 1926. “Independent Show is opened for tenth time All Schools Represented at Exhibit of 1,200 Works in Waldorf; Hangings Are Held Democratic Triumph. Amateurs Given Place Japanese-American Painters There with Long Island Woman Who Taught Self”.
- . February 20, 1927. Royal Cortissoz “The Modern Japanese How He Functions as an Artist in the Western World”.
- . January 24, 1932. Carlyle Burrows. “News and Comment on Current Art Events”.
- . January 28, 1933. “John Reed Club Shows Art with Social Purpose”.
- . February 15, 1935. “Going on Today”.
- . February 20, 1936. “Art Notes: W.P.A. Print Show Opens”.
- . July 26, 1937. Carlyle Burrows. “Waifs of the W.P.A. and Other Artists”.
- . June 26, 1938. “Notes and Comment on Events in Art: Municipal Show”.
- New York Sun*. Art Prizes Awarded. March 31, 1920.
- . February 16, 1935. “East meets West”.
- . September 18, 1937. Melville Upton. “New Light on Eastman Johnson: Early Work at Frazier Gallery Other local Exhibitions of Interest”.
- New York Times*. March 30, 1919. “Notes on Current Art”.
- . March 8, 1925. “The World of Art”.
- . March 15, 1925. “The World of Art: Independent Artists and Others: American Rhythm”.
- . February 20, 1927. Elizabeth Cary “An American A Slav and Some Japanese Painters “Westernized” Japanese”.
- . March 10, 1927. “Artists Show Life in Several Phases; Cubism, Futurism and Abstract Subject to Be Displayed at Independent’s Exhibition”.
- . December 1, 1929. “Art Events in Brief”.
- . January 17, 1932. “Art: Joint Exhibition”.
- . January 29, 1934. “New York Artists to Have Own Show”.
- . January 29, 1934. “LaGuardia is Sponsor of Art Exhibit Here”.
- . October 14, 1934. “In The Wanamaker Regional Exhibition”.
- . November 10, 1934. “*The Revolutionary Front*”.
- . February 15, 1935. “Art Brevities”.
- . January 22, 1936. Edward Alden Jewell, “New City Art Show Displays Variety;

- Municipal Galleries Devoted to Exhibit of Drawings, Paintings and Prints".
- .February 1, 1936. "Federal Artists Exhibit 80 Oils".
- .February 9, 1936. "Federal And Municipal".
- .April 26, 1936. "In Local Art Galleries".
- .May 1, 1936. "Federal Project Opens Art Exhibit".
- .May 20, 1936. "City Art Museum Offers 8th Exhibit".
- .May 24, 1936. "Among Other Offerings".
- .June 14, 1936. Howard Devree, "The Galleries Present".
- .June 21, 1936. Howard Devree, "With a Distinctly American Flavor: The Metropolitan's Gallery of Contemporaries Some of Whom Reappear at Kraushaar's—Other Current Exhibitions".
- .June 28, 1936. "Events in New York and Far Afield".
- .February 25, 1937. "Caricatures Mock Many Celebrities: Framed and Hung' Exhibition at A.C.A. Gallery Featured by Some Sharp Barbs".
- .March 17, 1937. "Municipal group Show Art Today: Twentieth Exhibition at the Temporary Galleries Has Wide Variety of Works".
- .December 18, 1937. "Artists' Congress Denounces Japan Meeting Here Also Protests Intervention of fascists in Spain".
- .June 23, 1938. "Japanese Artists Have City Exhibit: Nine Show Works Here Slight Traditional Influence Seen".
- .June 26, 1938. "Group Shows Stress Works by American Contemporaries, Chiefly the Younger".
- .June 26, 1938. Chuzo Tamotsu. 《Gas Tank and Flowers》 (Figure).
- .April 15, 1940. "Red Issue Splits Artists' Congress".
- .April 21, 1940. "American Artists Congress Dissensions Sunday Other Matters of Moment".
- New York Tribune*, July 14, 1901. "Bonds Drawing Closer. New Paper Started to Increase Sympathy Between Japan and America".
- .February 3, 1918. "Art".
- New York World Telegram*. February 16, 1935. "Japanese Art Work of Local Orientals in Exhibited".
- .September 18, 1937. "Oriental Artists Exhibit".
- .December 16, 1937. "Fascism, war Kicked Around in Artists' Congress".
- .December 16, 1937. Sakari Suzuki. 《War》 (Figure).
- .June 26, 1938. "Japanese Art Favors China".
- Noda, Kesa. Yamato Colony 1906-1960: Livingston California. (Livingston-Merced JACL

- Chapter, 1981).
- Paintings by New York Chinese-Japanese Artists. (New York: ACA Gallery, 1937).
- Saito, Hiroshi. *Japan's policies and purposes, selections from recent addresses and writings*. (Boston: Marshall Jones Co., 1935).
- Salons of America. *Spring Salon*. (Exhibition catalogue). (New York: The American Art Association Anderson Galleries, 1922).
- . *Spring Salon*. (Exhibition catalogue). (New York: The American Art Association Anderson Galleries, 1923).
- . *Autumn Salon*. (Exhibition catalogue). (New York: The American Art Association Anderson Galleries, 1925).
- . *Spring Salon*. (Exhibition catalogue). (New York, The American Art Association Anderson Galleries, 1927).
- . *Spring Salon*. (Exhibition catalogue). (New York, The American Art Association Anderson Galleries, 1931).
- Salt Lake Telegram*. March 16, 1915. "Married to One Jap, With Girl is Fickle".
- San Francisco Chronicle*. March 13, 1915. "Second Jap Wins Gertrude Boyle Insane? Sculptress Says It's Love".
- . March 14, 1915. "Bahaism Played a Part in Kanno Troubles".
- Parnassus*. October, 1935. Thomas Nagai, «Landscape» (Figure).
- Society of Independent Artists. *Catalogue of the First Annual Exhibition of the Society of Independent Artists*. (Exhibition catalogue). (New York: Grand Central Palace, 1917).
- . *Catalogue of the Second Annual Exhibition of the Society of Independent Artists*. (Exhibition catalogue). (New York: 110-114 West 42nd Street, 1918).
- . *Catalogue of the Third Annual Exhibition of the Society of Independent Artists*. (Exhibition catalogue). (New York: The Waldorf Astoria, 1919).
- . *Catalogue of the Fourth Annual Exhibition of the Society of Independent Artists*. (Exhibition catalogue). (New York: The Waldorf Astoria, 1920).
- . *Catalogue of the Fifth Annual Exhibition of the Society of Independent Artists*. (Exhibition catalogue). (New York: The Waldorf Astoria, 1921).
- . *Catalogue of the Sixth Annual Exhibition of the Society of Independent Artists*. (Exhibition catalogue). (New York: The Waldorf Astoria, 1922).
- . *Catalogue of the Seventh Annual Exhibition of the Society of Independent Artists*. (Exhibition catalogue). (New York: The Waldorf Astoria, 1923).
- . *Catalogue of the Eighth Annual Exhibition of the Society of Independent Artists*. (Exhibition catalogue). (New York: The Waldorf Astoria, 1924).

- . *Catalogue of the Ninth Annual Exhibition of the Society of Independent Artists*. (Exhibition catalogue). (New York: The Waldorf Astoria, 1925).
- . *Catalogue of the Eleventh Annual Exhibition of the Society of Independent Artists*. (Exhibition catalogue). (New York: The Waldorf Astoria, 1927).
- Soyer, Rapheal papers. April 16, 1940. Correspondence from Rapheal Soyer to Yauo Kuniyoshi. in Herman Baron papers, box 1: folder 1, General Correspondence. Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.
- Springfield Republican*. February 16, 1902. “Two Nations of the Far East. Relations of Japan and Korea”.
- Springfield Sunday Union and Republican*, February 12, 1939. “Artists Congress’s Third Annual Show”.
- Prescott Evening Courier*. February 12, 1902. “A Short National Anthem”.
- Tucson Daily Citizen*. February 24, 1903. “The Geisha”.
- Washington Post, April 24, 1901. “Plans Half Japanese Paper. Correspondent of Tokyo Chuwo Visits Washington to Study Newspaper Work”.
- . July 13, 1902. “Fruit Growing in Japan”.
- . April 1, 1920. “W.E. Schofield Wins \$1,000. New York Artists Takes Highest Prize in National Exhibition”.
- World*. July 14, 1907. Showgio Tamura 「The Ghost of Old Japan」 .
- . March 21, 1926. “Independent Exhibition has Over a Thousand Works by Beginners and experts”.
- . February 27, 1927. “New York Japanese”.
- WPA papers, manuscript. 1936-1940. WPA/FAP NY Admin, Allocation of Works of Art, circa 1936-1940. in Francis V. O’Connor papers, 1920-2009, box 1. Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.
- Wolf, Tom. “The Tip of the Iceberg: Early Asian American Artists in New York” in *Asian American Art, a history 1985-1970*, eds. Gordon H. Chang, Mark Dean Johnson, Paul J. Karlstrom and Sharon Spain (Stanford: Stanford University Press, 2008).
- . *The Artistic Journey of YASUO KUNIYOSHI*, (Washington DC: Smithsonian American Art Museum, 2015).

主要参考文献

〈日本語文献〉

有島生馬.「初めて国吉君と逢って」『中央美術』第 11 号(1934 年 6 月 1 日).

逸見久美『わが父翁久允—その青少年時代と渡米』オリジン出版センター(1978 年 6 月 30 日).

バーバラ・ローズ(桑原住雄訳).『二十世紀アメリカ美術』美術出版社(1970 年 7 月 25 日).

デイヴィー美代子(セルデン恭子訳).『肖像画家犬飼恭平—ある異教徒の告白』吉備人出版(2013 年 5 月 25 日).

蛸原八郎.『海外邦字新聞雑誌史』学而書院(1936 年 1 月 13 日).

藤岡昇.「国吉君の断面」『中央美術』第 11 号(1934 年 6 月 1 日).

藤岡紫朗.『歩みの跡』歩みの跡刊行後援会(1957 年 8 月 20 日).

画彫会.『画彫会第一回作品展覧会後援者名簿』(1922 年 10 月 1 日).

外務省.「米国ニ於ル共產主義運動ニ関スル件(1935 年 10 月 22 日)」『各国共産党関係雑件/米国の部(属領地ヲ含ム) 第二巻 1』(1935 年 10 月 22 日).

外務省通商局編.『通商公報』第 936 号(1922 年 5 月 1 日).

芳賀武.『紐育ラブソディー—ある日本人米共産党員の回想—』朝日新聞社(1985 年 10 月 30 日).

萩生田祐曠.「米国画壇に於ける国吉君の地位」『中央美術』第 11 号(1934 年 6 月 1 日).

林かおり.「失意の作家 田村松魚」『羅府新報』1997 年 2 月 1 日.

林寿美子.「田村松魚の渡米まで—付田村松魚著作目録〔自明治 31 年至明治 36 年〕」『国際日本学研究』第 2 号(2004 年 3 月 31 日).

———.「田村松魚と〈アメリカ〉—渡米先としてのアメリカ」『国際日本学研究』第 3 号(2005 年 3 月 31 日).

日比嘉高.「日系アメリカ移民一世の新聞と文学」『日本文学』第 53 号(2004 年 11 月 10 日).

———.「永井荷風『あめりか物語』は「日本文学」か?」『日本近代文学』第 74 集(2006 年 5 月 15 日).

———.「日系アメリカ移民一世の新聞と文学」『日本文学』第 53 巻第 11 号(2004 年 11 月 10 日).

———.「移植樹のダンス—翁久允と『移民地文芸』論」筑波大学文化批評研究会編『テキストたちの旅程—移動と変容の中野文学』花書院(2008 年 2 月 23 日).

———.『ジャパニーズ・アメリカ移民文学・出版文化・収容所』新曜社(2014 年 2 月 20 日).

稗田董平.『筆魂・翁久允の生涯』桂書房(1994 年 9 月 10 日).

広島県立美術館.『アメリカに学んだ 18 人 太平洋を越えた日本の画家たち』(展覧会図録) 和歌山県立近代美術館・香川文化会館・広島建立美術館・美術館連絡協議会・読売新

- 聞大阪本社(1987年).
- 星新一.『明治・父・アメリカ』筑摩書房(1975年9月30日).
- 星野睦子.『『アメリカン・シーン』絵画と1930年代の国吉康雄』『欧米文化研究』第14号(1997年10月).
- .「アメリカ美術家会議と国吉康雄」『筑波大学芸術学研究誌 藝叢』第14号(1998年3月1日).
- .「国吉康雄と1930年代ニューヨークの日系人画家—アメリカ美術家会議を糸口として—」『大学美術教育学会誌』第32号(2000年3月10日).
- .「日米戦争下ニューヨークの日系人美術家—日系一世の画家・国吉康雄の戦時努力を中心に」『移民研究年報』第8号(2002年3月31日).
- 飯沼信子.『彫塑家川村吾蔵の生涯』舞字社(2000年2月20日).
- 石垣綾子.『海を渡った愛の画家 石垣栄太郎の生涯』御茶の水書房(1988年7月25日).
- .「ニュー・ヨークの『赤い広場』」『文線』第8巻7号(1931年7月1日).
- .「ジョン・リードの死を記念する」『女人芸術』第5巻第2号(1932年2月1日).
- .「小説家と炭坑夫のストライキ」『女人芸術』第5巻第3号(1932年3月1日).
- .「アメリカ美術の動向」『アトリエ』第251号(1947年10月1日).
- .「在米日本人画家の生活—私の夫の横顔」『アトリエ』第258号(1948年6月1日).
- .「国吉康雄の芸術」『アトリエ』第283号(1950年8月1日).
- .「『鞭打つ』時代の画家たち」『世界』第301号(1970年12月).
- 石垣栄太郎.「アメリカ美術の歩み」『美術手帖』第49号(1951年10月1日).
- .「在米日本人画家の生活法」『芸術新潮』第3巻第5号(1952年5月1日).
- .「アメリカ放浪四十年(1)」『中央公論』第67年7号(1952年6月1日).
- .「アメリカ放浪四十年(2) 日本からの亡命者達」『中央公論』第67年8号(1952年7月1日).
- .「アメリカ放浪四十年(3) 恋の大陸横断」『中央公論』第67年9号(1952年8月1日).
- .「プロフェッサー・クニヨシ」『芸術新潮』第3巻第9号(昭和27年9月1日).
- .「アメリカ放浪四十年(4) ニューヨークの香具師」『中央公論』第67年10号(1952年9月1日).
- .「アメリカ放浪四十年(5) サンガー夫人とスメドレー女史」『中央公論』第67年10号(1952年11月1日).
- .「アメリカ放浪四十年(6) 片山潜とその同志たち」『中央公論』第67年10号(1952年12月1日).
- .「クニヨシの業績」『芸術新潮』第4巻第7号(1953年7月1日).
- .「昔の仲間たち ジョン・リード・クラブ」『美術手帖』第101号(1955年10月1日).

- .「ホレイショ街七三番地」『中央公論』第70巻第9号(1955年9月1日).
- 出水沢藍子.『何もいない 歩き続けた画家保忠蔵の足跡』高城書房(1996年5月18日).
- 河盛好蔵.「永井荷風」『文学講座』第1巻,筑摩書房(1951年9月5日).
- 川嶋保良.『Japanese-American Voice—米国で発行された日本人による最初の英字誌—』精文堂印刷(1999年12月16日).
- 小林政治.「親友中村吉蔵君と私」『書物展望』第129号(1942年3月1日).
- 久保貞次郎.「われらのクニヨシ」『美術手帖』(1948年8月1日).
- 窪島誠一郎.『憂愁の日系画家・野田英夫展 ルース・シェイファー・コレクションを中心に』信濃デッサン館(1985年4月28日).
- .『野田英夫スケッチブック』彌生書房(1985年7月10日).
- .『野田英夫画集』平凡社(1987年8月10日).
- .『ウッドストックの森から』西田書店(1995年12月1日).
- .『明るき光の中へ 日系画家野田英夫の生涯』新日本出版(2016年8月5日).
- 朽木ゆり子.『ハウス・オブ・ヤマナカ 東洋の至宝を欧米に売った美術商』新潮社(2011年3月25日).
- 工藤美代子.『晩香坡の愛 —田村俊子と鈴木悦』ドメス出版(1982年7月15日).
- 糸井輝子.「『在米』日本人『移民地文芸』覚書(1)アメリカの亡者—翁久允の長編二部作『悪の日陰』と『道なき道』」『白百合女子大学研究紀要』第41号(2005年12月).
- 国吉康雄.「アメリカの美術界」『美術新論』第7第巻1号(1932年1月1日).
- .「ウッドストック」『アトリエ』第9巻9号(1932年9月1日).
- .「芸術の世界性に就いて」『美術手帖』第19号(1949年7月1日).
- 前田河広一郎.「地獄」『三等船客』自然社(1922年10月30日).
- 水野真理子.「翁久允のアイデンティティと移民地文芸論の変遷」『人間・環境学』第16巻(2007年12月20日).
- .『日系アメリカ人の文学活動の歴史的変遷—1880年代から1980年代にかけて』風間書房(2013年3月31日).
- 永井荷風.『荷風全集』第4巻,岩波書店(1992年7月8日).
- .『荷風全集』第27巻,「月報」27,岩波書店(1973年3月30日).
- .『荷風全集』第27巻,岩波書店(2011年6月24日).
- 中郷英美子.「『移民地文芸』の先駆者翁久允の創作活動—『文学会』創設から『移植樹』まで—」『立命館大学言語文化研究』第3巻6号(1992年3月20日).
- .「翁久允移民地文芸の特徴—『生活』と『思想』について」『立命館大学言語文化研究』第4巻6号(1993年3月20日).
- 中村春雨.『欧米印象記』春秋社書店(1910年6月20日).
- 中田幸子.『前田河廣一郎における「アメリカ」』国書刊行会(2000年10月20日).
- 紐育日本人会編.『紐育日本人発展史』(PMC出版1984年[1921年3月30日]).

- 日本美術年鑑編纂部.『美術年鑑』画報社(1913 年).
- 南加州日本人商業會議所.『南加州日本人史』(1956 年 1 月 30 日).
- 荻野富士夫.『太平洋の架橋者 角田柳作「日本学」の SENSEI』芙蓉書房 (2011 年 4 月 25 日).
- 岡義明.「清水登之、生涯を綴った日記」大川美術館『企画展 No.24 清水登之 滞米日記と素描』大川美術館(1994 年 9 月 27 日).
- .「日記に見る…清水登之・滞欧そして帰国後の軌跡」大川美術館『企画展 No.44 自筆の日記と水彩・デッサンで探る 清水登之、滞欧そして帰国後の軌跡』(1999 年 9 月 29 日).
- 翁久允.『翁久允全集』第 2 巻, 翁久允全集刊行会(1972 年 2 月 25 日).
- 大川栄二.『企画展 No.3 清水登之源流展』大川美術館(1989 年 9 月 19 日).
- 大川美術館.『特別企画展 No.100 松本竣介と野田英夫—大川美術館収蔵作品を中心に』(2016 年 11 月 26 日).
- 佐渡拓平.『気骨のジャーナリスト尺魔が刻した カリフォルニア移民物語』亜紀書房 (1998 年 12 月 20 日).
- 坂上博一.「永井荷風『あめりか物語』—異国風土の発見—」『解釈と鑑賞』第 62 巻第 12 号 (1997 年 12 月).
- 笹淵友一.「永井荷風『あめりか物語』論」『国文学論集』第 6 号 (1973 年 1 月 25 日).
- 清水登之.「ヤスオ国吉君」『みづゑ』第 322 号(1931 年 12 月 3 日).
- .「国吉康雄君を語る」『中央美術』第 11 号(1934 年 6 月 1 日).
- 篠田左多江・山本岩夫編『日系アメリカ文学雑誌研究—日本語雑誌を中心に』不二出版(1998 年 12 月 15 日).
- 末延芳晴.『荷風とニューヨーク』青土社 (2002 年 10 月 30 日).
- .『荷風のあめりか』平凡社 (2005 年 12 月 7 日).
- 杉村浩哉.「古田土雅堂について」『美術運動史研究会ニュース』第 87 号 (2007 年 4 月 20 日).
- .『栃木県立美術館所蔵 清水登之』栃木県立美術館 (2007 年).
- .「清水登之とホガース」『美術運動史研究会ニュース』第 146 号(2014 年 12 月 20 日).
- 高須正郎.「ニューヨーク日系紙の変遷と発展」『別冊新聞研究』17 号(1983 年 12 月).
- 武田勝彦.『荷風の青春』三笠書房(1973 年 3 月 15 日).
- 竹内幸次郎.『米国西北部日本移民史』大北日報社(1929 年 7 月 1 日).
- 田村紀雄.『アメリカの日本語新聞』新潮社(1991 年 10 月 20 日).
- .『海外の日本語メディア-変わり行く日本町と日系人』世界思想社(2008 年 2 月 10 日).
- .「在米日系新聞の発達史研究(11) 反ファシズムの新聞『同胞』—1937 年～1942 年」

- 『人文自然科学論集』第78号(1988年3月15日).
- .「在米日系新聞の発達史研究(18) 1880-1910、Portland 日本語新聞と伴新三郎—外交官辞し、日本語新聞発刊へ」『人文自然科学論集』第93号(1993年3月16日).
- 田村紀雄・新井勝紘「在米日系新聞の発達史研究(5) 自由民権期における桑港湾岸地区の活動」『人文自然科学論集』第65号(1983年12月5日).
- 田村紀雄・藤野雅己「日系新聞研究ノート(8) オークランド『新日本』新聞の基礎的研究」『東京経済大学会誌』第144号(1986年1月15日).
- 田村紀雄・蓮池紀生「日系新聞研究ノート(7) 紐育日系新聞小史」『東京経済大学会誌』第140号(1985年3月20日).
- 田村紀雄・蒲池紀生・芳賀武「日系新聞研究ノート(7)紐育日系新聞小史」『東京経大学会誌』第140号(1985年3月20日).
- 田村紀雄・大澤隆「在米日系新聞の発達史研究(21) 『蒸気船』新聞と萌芽期の桑港日本町—大澤栄三の活動を中心に」『人文自然科学論集』第97号(1994年7月20日).
- 田村紀雄・坂口満宏「在米日系新聞の発達史研究(17) シアトル初期の日本語新聞」『人文自然科学論集』第92号(1992年12月5日).
- 田村紀雄・白水繁彦「在米日系新聞の発達史研究序説」『人文自然科学論集』第61号(昭和57年9月25日).
- 田村紀雄・白水繁彦編『米国初期の日本語新聞』勁草書房(1986年9月20日).
- 田村紀雄・山本英政・阪田安雄「在米日系新聞の発達史研究(7) 安孫子久太郎—永住を主唱した『日米』新聞経営者」『人文自然科学論集』第68号(1984年12月10日).
- 田村紀雄・山本武利「日系新聞研究ノート(1) 加州日系紙の新聞広告と経営—1910~1940」『東京経済大学会誌』第132号(1983年9月15日).
- 田村紀雄; ユージ・イチオカ; 山本英政; 阪田安雄.「在米日系新聞の発達史研究(7)安孫子久太郎—永住を主唱した「日米」新聞経営者—」『東京経済大学 人文自然科学論集』第68号(1984年12月10日).
- 田村松魚『北米の花』博文館(1909年9月13日).
- .『北米世俗観』博文館(1909年12月20日).
- 田村羊三「私の満鉄史」満鉄会編『思い出の満鉄』龍溪書舎(1986年10月20日).
- 角田柳作『書斎・学校・社会』布哇便利社(1917年1月16日).
- .「The Japanese Culture Centre の創立に就て」外務省外交資料『本邦ニ於ケル文化研究並同事業関係雑件』(1926年).
- 角田柳作・松本重治・田中耕太郎・嘉治隆一「座談会 アメリカの真実を認識せよ—老紐育人角田氏を囲んで—」『心』(1955年8月1日).
- 内海孝「角田柳作のハワイ時代—1909年の渡布前後をめぐる—」『早稲田大学史記要』通巻34号(1998年7月31日).
- .「角田柳作のハワイ時代再論—1909年~17年の滞在時機を中心に—」『早稲田大

- 学史紀要』通巻 35 号(1999 年 7 月 15 日).
- .「角田柳作のコロラド時代—コロンビア大学「日本学」生誕前夜をめぐって」『東京外国語大学論集』第 75 号(2007 年 12 月 21 日).
- 浦西和彦.「前田河広一郎と『日米時報』」『国文学』第 83・84 合併号,関西大学国文学会(2002 年 1 月 31 日).
- 山口泰二.「画彫会の発足と画彫会展—清水登之ニューヨーク日記によって(上)」『美術運動史研究会ニュース』第 91 号(2008 年 2 月 5 日).
- .「画彫会の発足と画彫会展—清水登之ニューヨーク日記によって(下)」『美術運動史研究会ニュース』第 92 号(2008 年 3 月 20 日).
- 山本岩夫.「翁久允と『移民地文芸論』」『立命館大学言語文化研究』第 5 巻 5・6 合併号(1994 年 2 月 28 日).
- .「アメリカ東海岸唯一の文芸誌『NY 文藝』」篠田左多江・山本岩夫編『日系アメリカ文学雑誌研究—日本語雑誌を中心に』不二出版(1998 年 12 月 15 日).
- 安來正博.「石垣栄太郎関係スクラップ資料と、その補足的考察(1)」『和歌山県立近代美術館紀要』第 1 号(1996 年 3 月 31 日).
- .「石垣栄太郎関係スクラップ資料と、その補足的考察(2)」『和歌山県立近代美術館紀要』第 2 号(1997 年 3 月 31 日).
- .「資料に見る戦前の渡米画家たち—その活動の軌跡」和歌山県立近代美術館『アメリカの中の日本 石垣栄太郎と戦前の渡米画家たち』(1997 年 11 月 11 日).
- 吉田千鶴子.「古田土雅堂・アメリカの日本人」『美術運動史研究会ニュース』第 88 号(2007 年 8 月 15 日).
- 在米日本人会.『在米日本人史』在米日本人会(1940 年 12 月 20 日).

〈新聞・雑誌〉

『冒険世界』
 『文芸界』
 『文芸倶楽部』
 『文庫』
 『文章世界』
 『中外英字新聞』
 『中学世界』
 『婦人評論』
 『実業世界太平洋』
 『実業少年』
 『平民』
 『実業少年』

『女鑑』
『女学世界』
『共存』
『日米』
『日米時報』
『日米週報』
『日本人』(シアトル)
『日本人』(ニューヨーク)
『紐育新報』
『桜府日報』
『羅府新報』
『成功』
『新世界』
『新小説』
『趣味』
『少女界』
『商工世界 太平洋』
『少年界』
『少年世界』
『淑女かがみ』
『太平洋』
『太西洋』
『太陽』
『手紙雑誌』
『読売新聞』
『萬朝報』

〈展覧会図録〉

広島建立美術館.『アメリカに学んだ 18 人 太平洋を越えた日本の画家たち』(1987 年 9 月 26 日).

フジテレビギャラリー.『臼井文平展』(1983 年).

福武書店.『YASUO KUNIYOSHI ネオ・アメリカン・アーティストの軌跡』(1990 年 11 月).

熊本県立美術館.『野田英夫展』(1979 年 7 月 18 日).

———.『壁画帰郷記念展 野田秀夫そして多毛津忠蔵』(1992 年 4 月 7 日).

京都国立近代美術館.『国吉康雄展』日本テレビ放送網 (1989 年).

武蔵野市・武蔵野市文化事業団.『清水登之展』(1991 年 6 月 7 日).

- 岡部晶幸.『1920-30 年代アメリカン・シーンの画家発見 トーマス永井の不思議世界』第一生命保険相互会社社会文化事業室(1996 年 10 月 24 日・11 月 27 日).
- 岡山県立美術館.『国吉康雄展』(2006 年 3 月 10 日).
- 霜鳥之彦遺作展実行委員会.『霜鳥之彦遺作展一遺作展記念画集』(展覧会図録). 光琳社. (1983 年 11 月 1 日).
- 栃木立美術館.『清水登之展』(1996 年).
- 東京国立近代美術館.『アメリカに学んだ日本の画家たち 国吉・清水・石垣・野田とアメリカン・シーン絵画』(1982 年).
- 東京国立近代美術館・富山県立近代美術館・愛知県立美術館.『国吉康雄展』(2004 年).
- 東京都庭園美術館.『終戦 50 年企画 アメリカに生きた日系人画家たち 希望と苦悩の半世紀 1896-1945』日本テレビ放送網(1995 年).
- 和歌山県立近代美術館.『アメリカの中の日本ー石垣栄太郎と戦前の渡米画家たち』(1997 年 11 月 11 日).
- .『生誕 120 年記念 石垣栄太郎展』(2013 年).

〈英字資料〉

- American Artists' Congress papers, manuscript. February 15, 1936 to May 4, 1936. "Minutes of the Executive Board Meeting report", in Stuart Davis papers. Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.
- .February 19, 1937. in American Artists' Congress papers, manuscript. "Press release". New York Public Library, NY.
- .May 6, 1937. "Minutes of the Executive Board Meeting" in Stuart Davis, Papers, 1911-1966. Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.
- .July 15, 1937. "Open Meeting for Discussion on W.P.A. Dismissals American Artists Congress" in Stuart Davis, Papers, 1911-1966. Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.
- .September 16, 1937. "Minutes of the Executive Board Meeting". in Stuart Davis, Papers, 1911-1966. Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.
- .December 17, 1937. "2nd Annual National Convention Public Session", in Philip Evergood papers, manuscript. 1890-1971: Series 7: scrapbooks, 1924-1954, Box 12. Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.
- .December 27, 1937. in Subject file: New York (N.Y.). American Artists' Congress: Miscellaneous uncatalogued material. Museum of Modern Art Library, NY.
- .Winter 1937. "Boycott Japanese Goods" in American Artists' Congress papers, manuscript. "American Artists: News bulletin of the American Artists' Congress".

- New York Public Library, NY.
- Art Students League of New York. Registration record, Eitaro Ishigaki, Account No.12692, Register No.700. Address, 246 West 14th Street, New York. Art Students League of New York.
- Baigell, Matthew and Williams, Julia. *Artists Against War and Fascism*. (New Jersey: Rutgers University Press 1986).
- Baron, Herman. "Writings and Notes: A.C.A. Uptown", Herman Baron papers, circa early 1950s. unpublished typescript, A.C.A. Galleries records, 1917-1963. Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.
- . Undated, correspondence, "A.C.A. gallery circa, 1936-1940". manuscript. in Max Weber papers. Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.
- . "Writings and Notes: McCarthyism and American Art articles", Herman Baron papers, circa early 1950s. unpublished typescript, A.C.A. Galleries records, 1917-1963. Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.
- Clark, Marlor. *The Society of Independent Artists The exhibition Record 1917-1944*. (Mill Road, Park Ridge New Jersey: Noyes Press. 1984).
- . *The Salons of America 1922-1936*. (Madison Connecticut: Sound View Press. 1991).
- Falk, Peter Hastings, ed. 1989. *The Annual Exhibition Record of The Pennsylvania Academy of the Fine Arts. Volume III 1914-1968*. (Madison Connecticut: Sound View Press 1989).
- . *The Annual Exhibition Record of The Art Institute of Chicago 1888-1950*. (Madison Connecticut: Sound View Press 1990).
- . *The Annual Exhibition Record of The National Academy of Design 1901-1950*. (Madison Connecticut: Sound View Press 1990).
- Federal Art Project papers. 1920-1965. Federal Art Project, Photographic Division collection, circa 1920-1965, bulk 1935-1942: Artist Files, circa 1920-1965, box: 22, folder: 26. Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.
- Federal Art Project Gallery papers, manuscript. "Federal Art Project Gallery, 27 January to 15 February". 1936. (Exhibition Catalogue) in College Art Association of America Records, box 9, folder: 2. Frick Collection/Frick Art Reference Library Archives, NY.
- . "Federal Art Project Gallery, 30 April to 20 May", 1936. (Exhibition Catalogue). in College Art Association of America Records, box 9, folder: 2. Frick Collection/Frick Art Reference Library Archives, NY.

- General Services Administration. General Services Administration Description, 1920-2009. GSA Artists' Employment History Records, 1936-1973, in Francis V. O'Connor papers, 1920-2009, box 4, folder: 104; box 6, folder: 8; box 6, folder: 71; box 6, folder: 117. Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.
- Hemingway, Andrew. *Artists on the Left: American Artists and the Communist Movement 1926-1956*. (NH: Yale University Press. 2002).
- Landgren, E. Marchal. "New York's Municipal Art Committee" Marchal E. Landgren papers, 1881-circa 1982, bulk 1930-1975, box 4, folder: 28-30. Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington DC.
- Municipal Art Committee. *First Municipal Art Exhibition*, (New York: Rockefeller Center Building, New York, 1934), Dorothy C. Miller papers, 1853-2013, bulk 1920-1996, box 23. Folder: First Municipal Exhibition (1934). Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.
- . *Exhibition*, a magazine of art activities in New York, January 1937. Frick Collection/Frick Art Reference Library Archives, NY.
- Municipal Art Committee Manuscript. February 25, 1934, New York, NY.-Municipal Art Committee, College Art Association of America Records, box 10, folder: 16. Frick Collection/Frick Art Reference Library Archives, NY.
- . March 7, 1934, New York, NY.-Municipal Art Committee, College Art Association of America Records, box 10, folder: 16. Frick Collection/Frick Art Reference Library Archives, NY.
- . January 17, 1936, Subject file: New York (N.Y.). Municipal Art Committee: Miscellaneous uncatalogued material. Museum of Modern Art Library, NY.
- . "Temporary Galleries of the Municipal Art Committee, Second Exhibition," January 21 to February 1, 1936, Subject file: New York (N.Y.) Municipal Art Committee: Miscellaneous uncatalogued material. Museum of Modern Art Library, NY.
- . Municipal Art Committee Manuscript, "Temporary Galleries of the Municipal Art Committee, Sixth Exhibition," April 8 to April 26, 1936, Subject file: New York (N.Y.) Municipal Art Committee: Miscellaneous uncatalogued material. Museum of Modern Art Library, NY.
- . Municipal Art Committee Manuscript, April 4 or 5, 1936, New York, NY.-Municipal Art Committee, College Art Association of America Records, box 10, folder: 16. Frick Collection/Frick Art Reference Library Archives, NY.
- . "Temporary Galleries of the Municipal Art Committee, Eight Exhibition," May 20

- to June 7, 1936, Subject file: New York (N.Y.) Municipal Art Committee: Miscellaneous uncatalogued material. Museum of Modern Art Library, NY.
- . “Critics’ Review”, November 25, 1936, New York, NY.-Municipal Art Committee, College Art Association of America Records, box 10, folder: 16. Frick Collection/Frick Art Reference Library Archives, NY.
- — — .March 12, 1937, New York, NY.-Municipal Art Committee, College Art Association of America Records, box 10, folder: 16. Frick Collection/Frick Art Reference Library Archives, NY.
- Municipal Art Committee Miscellaneous uncatalogued material. Municipal Art Committee Manuscript, May 18, 1936, New York, NY.-Municipal Art Committee, College Art Association of America Records, box 10, folder: 16. Frick Collection/Frick Art Reference Library Archives, NY.
- New Deal Gallery. *Our Heritage the Decade of the Great Depression a Timeline Courtesy of Livingston Arts New Deal Gallery*. (Brochure) (New Deal Gallery. Livingston, N.Y. 2016).
- Noda, Kesa. *Yamato Colony 1906-1960: Livingston California*. (Livingston-Merced JACL Chapter, 1981).
- Riehlman, Franklin; Wolf, Tom; Weber, Bruce eds. *YASUO KUNIYOSHI: Artists as Photographer*. (New York: Dobbs Ferry, 1983).
- Ruth L. Benjamin. “Japanese Painters in America”. *Parnassus*, October, 1935.
- Saito Hiroshi. *Japan’s policies and purposes, selections from recent addresses and writings*. (Boston: Marshall Jones Co., 1935).
- Soyer, Rapheal papers. April 16, 1940. Correspondence from Rapheal Soyer to Yauo Kuniyoshi. in Herman Baron papers, box 1: folder 1, General Correspondence. Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.
- Wang. ShiPu. *The Other American Moderns*. (Pennsylvania: Penn State University Press, 2017).
- Woodstock Artists Association. *Woodstock’s Art Heritage- the permanent collection of the Woodstock artists association*. (Woodstock New York: Overlook press, 1987).
- . .At Woodstock Yasuo Kuniyoshi. (Woodstock New York: Woodstock Artists Association, 2003).
- WPA papers, manuscript. 1936-1940. WPA/FAP NY Admin, Allocation of Works of Art, circa 1936-1940. in Francis V. O’Connor papers, 1920-2009, box 1, Archives of American Art, Smithsonian Institution, Washington, DC.
- Wolf, Tom. “The Tip of the Iceberg: Early Asian American Artists in New York” in *Asian American Art, a history 1985-1970*, eds. Gordon H. Chang, Mark Dean Johnson,

Paul J. Karlstrom and Sharon Spain (Stanford: Stanford University Press, 2008).
———. *The Artistic Journey of YASUO KUNIYOSHI*, (Washington DC: Smithsonian
American Art Museum, 2015).

⟨Newspaper, Journal⟩

American Art News.

Anaconda Standard.

Art Front.

Art News.

Arts.

Christian Science Monitor.

Chrysanthemum.

Daily Worker.

Evening Telegram New York,

Idaho Daily Statesman,

Japan and America.

Japan Current.

Japanese-American Voice.

Literary Digest.

Los Angeles Times.

Mail and Express.

New Masses.

New York Evening Post.

New York Tribune.

New York Herald Tribune.

New York Sun.

New York Times.

New York Tribune.

New York World Telegram.

Prescott Evening Courier.

Salt Lake Telegram.

San Francisco Chronicle.

Parnassus.

Springfield Republican.

Springfield Sunday Union and Republican,

Tucson Daily Citizen.

Washington Post.
World.

〈Exhibition Catalogue〉

American Artists' Congress. *America Today* (1936).

———. *First American Artists Congress*. New York City. 1936.

———. *First Annual Membership Exhibition, 1937*. (New York: Rockefeller Center, New York, 1937).

———. *Second Annual Membership Exhibition, 1938*. (New York: Rockefeller Center, New York, 1938).

———. *Third Annual Membership Exhibition, 1939*. (New York: Rockefeller Center, New York, 1939).

———. *Fourth Annual Membership Exhibition, 1940*. (New York: Rockefeller Center, New York, 1940).

An Exhibition in Defense of World Democracy—Dedicated to the peoples of Spain and China. (New York: A.C.A. Gallery, 1937).

Annual Exhibition of The Japanese Art Association. (New York: The Yamanaka Galleries, 1917).

Exhibition of Paintings. (New York: The MacDowell Club, 1918).

Exhibition of Paintings and Sculpture, by Japanese Artists. (New York: A.C.A. Gallery, 1935).

Exhibition of Paintings and Sculpture, by Japanese Artists. (New York: A.C.A. Gallery, 1936).

Exhibition of Paintings and Sculptures by The Japanese Artists Society of New York City. (New York: The Civic Club, 1922).

Exhibition Sculpture • Painting • Drawing—the Social Viewpoint in Art. (New York: John Reed Club, 1933).

Exhibition Paintings, Sculpture, Drawings, Prints on the Theme Hunger Fascism War. (New York: John Reed Club, 1933).

The First Annual Exhibition of Paintings and Sculpture, by Japanese Artists in New York. (New York: Art Center, 1927).

The Japanese-American Artist Group. *The Japanese-American Artist Group, paintings, drawings, sculpture*. (New York: Riverside Museum, 1947).

Paintings by New York Chinese-Japanese Artists. (New York: ACA Gallery, 1937).

Salons of America. *Spring Salon*. (New York: The American Art Association Anderson Galleries, 1922).

- . *Spring Salon*. (New York: The American Art Association Anderson Galleries, 1923).
- . *Autumn Salon*. (New York: The American Art Association Anderson Galleries, 1925).
- . *Spring Salon*. (New York, The American Art Association Anderson Galleries, 1927).
- . *Spring Salon*. (New York, The American Art Association Anderson Galleries, 1931).
- Society of Independent Artists. *Catalogue of the First Annual Exhibition of the Society of Independent Artists*. (New York: Grand Central Palace, 1917).
- . *Catalogue of the Second Annual Exhibition of the Society of Independent Artists*. (New York: 110-114 West 42nd Street, 1918).
- . *Catalogue of the Third Annual Exhibition of the Society of Independent Artists*. (New York: The Waldorf Astoria, 1919).
- . *Catalogue of the Fourth Annual Exhibition of the Society of Independent Artists*. (New York: The Waldorf Astoria, 1920).
- . *Catalogue of the Fifth Annual Exhibition of the Society of Independent Artists*. (New York: The Waldorf Astoria, 1921).
- . *Catalogue of the Sixth Annual Exhibition of the Society of Independent Artists*. (New York: The Waldorf Astoria, 1922).
- . *Catalogue of the Seventh Annual Exhibition of the Society of Independent Artists*. (New York: The Waldorf Astoria, 1923).
- . *Catalogue of the Eighth Annual Exhibition of the Society of Independent Artists*. (New York: The Waldorf Astoria, 1924).
- . *Catalogue of the Ninth Annual Exhibition of the Society of Independent Artists*. (New York: The Waldorf Astoria, 1925).
- . *Catalogue of the Eleventh Annual Exhibition of the Society of Independent Artists*. (New York: The Waldorf Astoria, 1927).

謝辞

本研究に関する調査では、以下の機関、そして多くの方々にご協力いただいた。
末尾ながら厚くお礼申し上げます。

同志社大学人文科学研究所

ふみの森もてぎ

外務省外交資料館

法政大学多摩図書館

石川武美図書館(旧お茶の水図書館)

国際こども図書館

国立国会図書館

国立近代美術館

京都国立近代美術館

道の駅もてぎ 古田雅堂邸

日本大学文理学部図書館

日本近代文学館

昭和女子大学図書館

拓殖大学図書館

東京大学総合図書館

都立中央図書館

和歌山県立近代美術館

和歌山県太地町立石垣記念館

早稲田大学中央図書館

Archives of American Art Smithsonian Institution.

Art Students League of New York.

Brooklyn Museum Libraries & Archives.

Center for Research Libraries.

Columbia University Butler Library.

Columbia University C.V. Starr East Asian Library.

Columbia University Avery Architectural & Fine Arts Library.

Conner・Rosenkranz.

Frick Art Reference Library.

Harvard University Harvard-Yenching Library.

Library of Congress.

Museum of Modern Art Library and Archives.

Museum of Fine Arts, Boston.

New Deal Gallery.
New York Historical Society & Archives.
New York Public Library.
Sheldon Museum of Art.
Thomas J. Watson Library.
Walker Art Center.
Woodstock Artists Association & Museum.

Chunwah Ma
Diane Serrano
Jennifer Tobias
John Lundquist
Joel Rosenkranz
Tom Wolf
Reiko M. Kopelson
Ria Koopmans-deBruijn
Sachie Noguchi

修正箇所 比較表

- P.7 10 行目 「移民地文芸とは」→「移民地とは」
- P.8 註 15 「和歌山県近代美術館」→「和歌山県立近代美術館」
- P.13 17 行目 「1808 年 8 月」→「1908 年 8 月」
- P.14 23 行目 「欧州祖国」→「欧州諸国」
- P.16 註 24 「Chise-Japan」→「Chino-Japan」
- P.19 14 行目 「1908 年 7 月 20 日」→「1907 年 7 月 20 日」
- P.19 35 行目 「古谷商会」→「古谷商店」
- P.20 1 行目 「予告には」→「予告として」
- P.23 註 35 「前掲 30。」→「『荷風全集』第 4 巻、岩波書店(1992 年 7 月 8 日)、169。」
- P.25 15 行目 「世を夢と観じ、ては覚め現に口惜しかりき。」→「世を夢と観じ、ては覚め^{ママ}て現に口惜しかりき。」
- P.25 21 行目 「サンフランシスコ」→「ロサンゼルス」
- P.26 1 行目 「梗概」→「郊外」
- P.28 34 行目 「生活が描いた」→「生活を描いた」
- P.28 36 行目 「北米世俗館」→「北米世俗観」
- P.29 註 19 「平民の友 田村松魚君を送る」→「田村松魚君を送る」
- P.29 註 24 「田村松魚」→「松魚病夫」
- P.30 註 37 「Shomgio」→「Shomgio[sic]」
- P.33 26 行目 「小室篤次郎」→「小室篤次」
- P.33 26 行目 「管野衣川」→「菅野衣川」
- P.33 27 行目 「管野衣川」→「菅野衣川」
- P.33 28 行目 「管野衣川」→「菅野衣川」
- P.34 6 行目 「管野衣川」→「菅野衣川」
- P.34 13 行目 「管野衣川」→「菅野衣川」
- P.38 2 行目 「圍繞」→「圍繞」
- P.38 33 行目 「1917 年 7 月」→「1917 年 6 月」
- P.39 27 行目 「管野衣川」→「菅野衣川」
- P.43 13 行目 「此の詩」→「この詩」
- P.46 5 行目 「1917 年頃」→「1920 年頃」
- P.47 3 行目 「自身の内情を自身の内情を描いた私小説」→「自身の内情を描いた私小説」
- P.47 註 9 「管野氏の米夫人は狂へる乎」『新世界』1915 年 3 月 13 日；「管野夫人の拘留」『日米』1915 年 3 月 13 日。→「^{ママ}管野氏の米夫人は狂へる乎」『新世界』1915 年 3 月 13 日；「^{ママ}管野夫人の拘留」『日米』1915 年 3 月 13 日。
- P.47 註 11 「管野夫人離婚問題」→「^{ママ}管野夫人離婚問題」

- P.47 註 12 「「管野姦通問題」『桜府日報』1915 年 3 月 17 日；「管野姦通問題（続）」『桜府日報』1915 年 3 月 18 日；「管野夫人離婚訴訟を提起す」『羅府新報』1915 年 4 月 1 日；清沢生「温かい死の手に抱かれた女」『新世界』1915 年 4 月 4 日；「管野衣川離婚問題」『桜府日報』1915 年 5 月 12 日」→「「^マ管野姦通問題」『桜府日報』1915 年 3 月 17 日；「^マ管野姦通問題（続）」『桜府日報』1915 年 3 月 18 日；「^マ管野夫人離婚訴訟を提起す」『羅府新報』1915 年 4 月 1 日；清沢生「温かい死の手に抱かれた女」『新世界』1915 年 4 月 4 日；「^マ管野衣川氏離婚問題」『桜府日報』1915 年 5 月 12 日」
- P.48 註 13 「管野夫人離婚訴訟」→「^マ管野夫人離婚訴訟提起」
- P.48 註 16 「管野夫人に不利」→「^マ管野夫人に不利」
- P.48 註 18 「管野夫人放免」→「^マ管野夫人放免」
- P.48 註 19 「管野離婚訴訟」→「^マ管野離婚訴訟」
- P.48 註 21 「恋に狂へる女彫刻家」→「恋に狂へる女彫刻^マ師」
- P.48 註 21 「三十七歳の女と二十三歳の恋人」→「^マ卅七歳の女と^マ廿三歳の恋人」
- P.49 註 46 「1907 年夏」→「19^マ17 年 夏」
- P.50 12 行目 「記録に残る限りニューヨーク」→「記録に残る限り^マでは、ニューヨーク」
- P.50 30 行目 「1.ニューヨークの日本人社会と邦字新聞」→「1.ニューヨークの日本人社会と^マ日本語新聞」
- P.50 34 行目 「活動を伝える機関」→「活動を伝える^マ媒体」
- P.51 3 行目 「『紐育日本新聞』」→「『紐育^マ週報』」
- P.51 13 行目 「高嶺讓吉」→「高^マ峰讓吉」
- P.52 7 行目 「読み物や岡田九郎」→「読み物の^マほかにも、岡田九郎」
- P.52 20 行目 「家永豊彦」→「家永豊^マ吉」
- P.53 26 行目 「進新画家」→「^マ新進画家」
- P.54 2 行目 「シカゴ・アート・インステチュート」→「シカゴ・アート・インステ^マイチュート」
- P.54 2 行目 「《冷風 (The Cold Wind)》」→「《^マ寒風 (The Cold Wind)》」
- P.54 14 行目 「霜鳥之彦の静物、」→「霜鳥之彦の静物^マ画と」
- P.55 2 行目 「《横浜の夜 (Yokohama Night)》」→「《横浜の^マ印象 (Impression of Yokohama)》」
- P.55 3 行目 「シカゴ・アート・インステチュート」→「シカゴ・アート・インステ^マイチュート」
- P.55 3 行目 「オーガスタ」→「オーガスタ^マス」
- P.55 4 行目 「外国人である事を理由で」→「外国人である^マことを理由に」
- P.55 7 から 8 行目 「シカゴ・アート・インステチュート」→「シカゴ・アート・インステ^マイチュート」
- P.55 24 行目 「10 月 24 日より 11 月 21 日」→「^マ十月^マ廿四日より^マ十一月^マ廿一迄」
- P.55 25 行目 「10 月 29 日」→「^マ十月^マ廿九日」

- P.55 27 行目「賛助委員」→「賛助~~委員~~」
- P.55 28 行目「講演」→「~~後援~~」
- P.55 35 行目「渡辺虎次郎」→「渡辺^{マモ}虎次郎」
- P.56 17 行目「このち清水登之の《横浜の夜》」→「この~~う~~ち清水登之の《ヨコハマ・ナイト》」
- P.56 19 行目「ペンシルバニア・アカデミー」→「~~シカゴ・アート・インスティテュート~~の年次展覧会」
- P.56 28 行目「三崎道夫の静物」→「三崎道夫の静物~~画~~」
- P.57 註 1「『終戦 50 年企画 アメリカに生きた日系画家たち 希望と苦悩の半世紀 1986-1945』」→「『終戦 50 年企画 アメリカに生きた日系~~人~~画家たち 希望と苦悩の半世紀 1896-1945』」
- P.57 註 2「安來正博「石垣栄太郎スクラップ」『和歌山県立近代美術館紀要』第 1 号(1996 年 3 月 31 日)、15-66; 安來正博「石垣栄太郎スクラップ資料」→「安~~來~~正博「石垣栄太郎~~関係~~スクラップ資料と、その補足的考察(1)」『和歌山県立近代美術館紀要』第 1 号(1996 年 3 月 31 日)、15-66; 安來正博「石垣栄太郎~~関係~~スクラップ資料と、その補足的考察(2)」
- P.58 註 14「1911 年 9 月 24 日」→「1911 年 9 月 ~~23~~ 日」
- P.58 註 20「雑報 美術家の懇親会」→「美術家の懇親会」
- P.58 註 24「東京美術学校洋画撰科卒業」→「東京美術学校~~西洋~~画撰科卒業」
- P.58 註 25「前掲 20。」→「「邦人の美術思想は国家の財産なり」『紐育新報』1915 年 11 月 27 日。」
- P.58 註 26「「邦人の美術思想は国家の財産なり」『紐育新報』1915 年 11 月 27 日。」→「Ibid.」
- P.58 註 30「在紐日本美術家の作品展覧会を見て」→「在紐日本美術家の作品展覧会を~~観~~て」
- P.58 註 32「霜鳥之彦遺作展実行委員会.『霜鳥之彦遺作展』(展覧会図録)京都府立文化芸術会館(1983 年 11 月 1 日)」→「霜鳥之彦遺作展実行委員会.『霜鳥之彦遺作展一遺作展記念画集』(展覧会図録)、~~光琳社~~、(1983 年 11 月 1 日)」
- P.58 註 36「燈台守り(石垣栄太郎)」→「~~台燈~~守り」
- P.59 註 43「『日米時報』」→「『日米~~週報~~』」
- P.59 註 49「統一のタイトルの作品は」→「~~同~~一のタイトルの作品~~が~~」
- P.59 註 49「シカゴ・アート・インスティテュート」→「シカゴ・アート・インステ~~イ~~テュート」
- P.59 註 49「オーガスタ賞受賞」→「オーガスタ~~ス~~賞~~の~~受賞」
- P.59 註 50「“Art Prizes Awards”」→「“Art Prizes ~~Awarded~~”」
- P.59 註 59「(1921 年 10 月 1 日)」→「(192~~2~~ 年 10 月 1 日)」
- P.60 註 62「(1921 年 10 月 1 日)」→「(192~~2~~ 年 10 月 1 日)」
- P.60 註 67「玉石同架」→「玉石同架 (~~下~~)」

- P.63 30 行目「新紀元を割する」→「新紀元を~~割~~する」
- P.65 6 行目「感じ得さす」→「感^マげ得さす」
- P.70 註 9『日米週報』1917 年 4 月 21 日、28 日、台燈守り「五十行雜感。」→「台燈守り「五十行雜感」『日米週報』1917 年 4 月 21 日、28 日。」
- P.71 註 32「1922 年 2 月 28 日」→「1922 年 2 月 18 日」
- P.74 23 行目「3.邦人美術展覧会の様相」→「~~2~~.邦人美術展覧会の様相」
- P.75 24 行目「都築隆」→「都~~築~~隆」
- P.76 29 行目「開催することに致しました」→「開催すること~~と~~致しました」
- P.77 12 行目「国差違親善」→「国~~際~~親善」
- P.78 6 行目「欲するため」と同じ」→「欲する」ため、と同じ」
- P.80 2 行目「コンプリメントであるが」→「コンプリメントで~~は~~あるが」
- P.80 13 行目「斉藤」→「~~齋~~藤」
- P.80 25 行目「謳歌し、これ等」→「謳歌し謳歌し『これ等」
- P.80 32 行目「興味を与える」→「興味を与える~~』~~」
- P.82 註 8「美術委員も予定」→「~~準備~~委員も~~選~~定」
- P.82 註 12「三崎道夫『踊り子の画』邦人美術展出品考」→「三崎道夫「踊り子の画」」
- P.82 註 13「角南五天「邦人美術展を前にして＝感想 芸術座談」→「角南五天「邦人美術展を前にして 感想 芸術座談」
- P.82 註 16「藤岡昇「画家としての私の態度を」→「藤岡昇「画家としての私の態度」
- P.82 註 17「都築隆「芸術の個性」→「都~~築~~隆「芸術~~と~~個性」
- P.82 註 18「川村吾蔵『彫刻断想』邦人美術展出品考」→「川村吾蔵「彫刻断想」
- P.83 註 41「紐育新報主催美術展の批評」→「紐育新報主催美術展の批~~判~~」
- P.83 註 47「三週間も過ぎて「邦人美術展」はけふ閉会内外人より名残を惜しまれて」→「三週間も~~何時~~か過ぎて『邦人美術展』はけふ閉会 内外人より名残を惜しまれて」
- P.83 註 47「この展覧会が~~い~~かに深い興味を与へたかを窮知するに足るであらう。現にニューヨークワールド紙の如きも美術を通じた東西の融合和を高調して居る」→「この展覧会が如何に深い興味を~~彼等~~に与へたかを窮知するに足るであらう。現にニューヨーク ~~ウ~~ォールド紙の如きも美術を通じた~~東西融和~~を高調して居る」
- P.86 27 行目「美術展覧会はこの後」→「美術展覧会は近い将来」
- P.86 31 行目「2.1935 年の紐育新報社後援邦人美術展覧会」→「1935 年~~の~~紐育新報社後援の邦人美術展覧会」
- P.87 15 行目「《机の上の果物 (Fruits on Table)》」→「《~~テ~~ーブルの上の果物 (Fruits on Table)》」
- P.87 16 行目「テンプルメダル」→「テンプル・~~ゴ~~ールド・メダル」
- P.87 17 行目「前年」→「1934 年」
- P.87 21 行目「赤い花の「静物」よりも「糸の切れたヴァイオリン」の方に、より多くの創

意の働きを見る」→「赤い花の『静物』よりも『糸の切れたヴァイオリン』の方に、より多くの創意の動きを見る」

P.88 18行目「世界文化に関する限り」→「世界文化の開する限り」

P.88 31行目「ギャラリーの格が上った」→「ギャラリーの評価が上った」

P.89 5行目「移植されていると評価している」→「移植されており、人を引きつけると評価している」

P.89 7行目「表現されている」→「表記されている」

P.89 16行「アデレイド・リチャドソン」→「アデレイド・リチャドソン」

P.89 20行目「風景画」→「風景画」

P.91 1行目「事業だったいえるだろう」→P.91 1行目「事業だったといえるだろう」

P.91 15行目「育新報社後援」→「紐育新報社後援」

P.91 16行目「美術団体」→「美術家団体」

P.93 註12「《机の上の静物》」→「《テーブルの上の静物》」

P.93 註23「美術展覧会に就て アデレイド・リチャドソン投」→「美術展覧会に就て アデレイド・リチャドソン投」

P.93 註24「米国国民に呼び掛ける齋藤新大使の放送」→「米国々民に呼び掛ける齋藤新大使の放送」

P.94 註26「*Japan's policies and purposes, selections from recent address and writings.*」→「*Japan's policies and purposes, selections from recent addresses and writings.*」

P.94 註34「『紐育新報』1936年4月25日;4月29日;5月2日. 石垣綾子「邦人美術展」。」→「石垣綾子「邦人美術展」(A)~(C)『紐育新報』1936年4月25日;4月29日;5月2日。」

P.94 註39「日支ルンペン展覧会」→「「日支ルンペン美術展覧会」

P.95 10行目「Work Progressive Administration」→「Work Progress Administration」

P.98 14行目「これらの作品は展覧会終了後、公共施設に寄付されており」→「このような作品は公共施設にも寄付されており」

P.99 13行目「《人、人生の岐路に立つ (Man, at the Crossroads of Life)》」→「《十字路口に立つ人 (Man, at the Crossroads)》」

P.102 24行目「クー・ラックス・クラン」→「クー・クラックス・クラン」

P.102 35行目「クー・ラックス・クラン」→「クー・クラックス・クラン」

P.103 33行目「解雇通知の抗議」→「解雇通知を抗議」

P.105 13行目「華盛頓体制」→「ワシントン体制」

P.107 3行目「支那事変以後」→「日中戦争以後」

P.107 9行目「支那事変以後」→「日中戦争以後」

P.107 19行目「そして」→削除

P.108 註9「労働者クラブで国吉康雄氏後援」→「労働者クラブで国吉康雄氏講演」

P.108 註11「労働者文化同盟主催で絵画展覧会開催」→「労働文化同盟主催で絵画展覧会

開催」

P.108 註 20「失業者への一福音—画家救済」→「失業者への一福音 画家救済」

P.113 註 103「雪の如月に春告げる美術展出品諸家スケッチ」→「雪の如月に春を告げる美術展出品諸家スケッチ」

P.116 29 行目「相対的」→「**総体的**」

P.118 14 行目「背景にた」→「背景に**した**」

P.118 註 1「Cuzo Tamotzu」→「**Ch**uzo Tamotzu」

P.127 34 行目「Oil Painting」→「Oil Paintings**s**」

P.129 4 行目「《68. The Old Japanese Pantomine》」→「《68. The Old Japanese Pantomime》」

P.130 4 行目「The MacDowell」→「**At** The MacDowell」

P.153 8 行目「Usui, Bumpei」→「Usui, Bunpei**[Sic]**」

P.157 2 行目「*The Japanese American Artists Group. paintings, drawings, sculpture. Riverside Gallery, Riverside Drive and 103rd Street, New York. (Museum of Fine Arts, Boston).*

」→「*The Japanese American Artists Group. paintings, drawings, sculpture. Riverside Gallery, Riverside Drive and 103rd Street, New York. (Museum of Fine Arts, Boston).*」

※4 行目の「とじカッコ」を取りました。

P.169 「都築隆《静物(Still Life)》」→「都筑隆《静物(Still Life)》」

P.172 「《机の上の果物 (Fruits on Table)》」→「《**テーブル**の上の果物 (Fruits on Table)》」

P.187 7 行目「京都府立文化芸術会館『霜鳥之彦遺作展』(展覧会図録)(1983 年)。→「**霜鳥之彦遺作展実行委員会**.『霜鳥之彦遺作展**一遺作展記念画集**』(展覧会図録). **光琳社**. (1983 年 **11 月 1 日**).」

P.188 33 行目「〔図 7-2〕都築隆《静物(Still Life)》」→「〔図 7-2〕都**筑**隆《静物(Still Life)》」

P.189 12 行目「〔図 8-1〕国吉康雄《机の上の果物 (Fruits on Table)》」→「〔図 8-1〕国吉康雄《**テーブル**の上の果物 (Fruits on Table)》」

P.193 2 行目「画彫会.『画彫会第一回作品展覧会後援者名簿』(1921 年 10 月 1 日)」

→「画彫会.『画彫会第一回作品展覧会後援者名簿』(19**22** 年 10 月 1 日)」

P.193 34 行目『平民』「1905 年 9 月 21 日.「平民の友 田村松魚君を送る」」→「1905 年 9 月 21 日.「田村松魚君を送る」」

P.195 21 行目『紐育新報』「1915 年 10 月 30 日.「雑報 美術家の懇親会」」→「1915 年 10 月 30 日.「美術家の懇親会」」

P.196 14 行目「1922 年 2 月 28 日.国吉康雄「美術我観」.」→「1922 年 2 月 **18** 日.国吉康雄「美術我観」.」

P.196 16 行目「1925 年 2 月 28 日.「画彫会主催で秋に展覧会 術委員も予定」→「**準備**委員も**選定**」

- P.196 30行目「1927年1月1日. 藤岡昇. 「画家としての私の態度を」」→「1927年1月1日. 藤岡昇. 「画家としての私の態度」」.
- P.196 31行目「1927年1月1日. 川村吾蔵. 「『彫刻断想』邦人美術展出品」」→「1927年1月1日. 川村吾蔵. 「彫刻断想」」.
- P.196 33行目「1927年1月1日. 三崎道夫. 「『踊り子の画』邦人美術展出品考」」→「1927年1月1日. 三崎道夫. 「踊り子の画」」.
- P.196 36行目「角南五天「邦人美術展を前にして＝感想 芸術座談」」→「角南五天「邦人美術展を前にして 感想 芸術座談」」
- P.197 3行目「都築」→「都~~築~~」
- P.197 4行目「都築」→「都~~築~~」
- P.197 16行目「「三週間過ぎて「邦人美術展」はけふ閉会内外人より名残を惜しまれて」」→「三週間も~~何時か~~過ぎて『邦人美術展』はけふ閉会 内外人より名残を惜しまれて」
- P.197 29行目「労働者クラブで国吉康雄氏後援」→「労働者クラブで国吉康雄氏~~講演~~」
- P.197 31行目「労働者文化同盟主催で絵画展覧会開催」→「~~労働文化同盟~~主催で絵画展覧会開催」
- P.197 34行目「失業者への一福音—画家救済」→「失業者への一福音 画家救済」
- P.198 11行目「雪の如月に春告げる美術展出品諸家スケッチ」→「雪の如月に春~~を~~告げる美術展出品諸家スケッチ」
- P.198 16行目「美術展覧会に就て アデレイド・リチャドソン投」→「美術展覧会に就て アデレイド・リチャ~~ア~~ドソン投」
- P.198 23行目『紐育新報』1936年4月25日「邦人美術展(1)」→「邦人美術展(~~A~~)」
- P.198 24行目『紐育新報』1936年4月29日「邦人美術展(2)」→「邦人美術展(~~B~~)」
- P.198 25行目『紐育新報』1936年5月2日「邦人美術展(3)」→「邦人美術展(~~C~~)」
- P.198 30行目『紐育新報』1937年9月8日「日支ルンペン展覧会」→「日支ルンペン~~美術~~展覧会」
- P.198 31行目『紐育新報』「1937年9月8日. 門脇ロイ. 《巴土遜河畔》(図版).」
→32行目「1938年9月8日. 門脇ロイ. 《巴土遜河畔》(図版).」
- P.198 34行目『日米』「1915年3月13日. 「管野夫人の拘留」」→「~~管野夫人~~の拘留」
- P.198 35行目『日米』「1915年3月14日. 「恋に狂へる女彫刻家」」→「恋に狂へる女彫刻師」.
- P.198 36行目『日米』「1915年4月1日. 「管野夫人離婚問題」」→「~~管野夫人~~離婚問題」
- P.199 8行目『日米時報』「1926年3月13日. 藤岡昇. 「独立美術展覧会 在紐邦人画家十一名出品」」→「1926年3月13日. 藤岡昇. 「独立美術展覧会 在紐邦人画家十一名出品」(~~上~~)」.
- P.199 9行目『日米時報』「1926年3月20日. 藤岡昇. 「独立美術展覧会 在紐邦人画家十一名出品」」→「1926年3月20日. 藤岡昇. 「独立美術展覧会 在紐邦人画家十一名出品」

(下) .」

P.200 8 行目 『日米週報』「1917 年 4 月 28 日. 燈台守り(石垣栄太郎). 「五十行雑感 (二.)」
→ 「1917 年 4 月 28 日. 台燈守り. 「五十行雑感 (二) .」」

P.200 9 行目 『日米週報』「1917 年 4 月 28 日. 台燈守り(石垣栄太郎). 「五十行雑感 (二) .」
→ 「1917 年 4 月 28 日. 台燈守り. 「五十行雑感 (二) .」」

P.200 24 行目 『桜府日報』「1915 年 3 月 17 日. 「管野姦通問題」 → 「管野姦通問題」

P.200 25 行目 『桜府日報』「1915 年 3 月 18 日. 「管野姦通問題 (続)」 → 「管野姦通問題
(続)」

P.200 26 行目 『桜府日報』「1915 年 4 月 1 日. 「管野夫人離婚訴訟を提起す」 → 削除

P.200 27 行目 『桜府日報』「1915 年 5 月 12 日. 「菅野衣川離婚問題」 → 「菅野衣川氏離
婚問題」

P.200 28 行目 『羅府新報』「1915 年 4 月 1 日. 「管野夫人離婚訴訟を提起す」 → 「菅野夫
人離婚訴訟を提起す」

P.200 29 行目 『羅府新報』「1970 年 3 月 14 日」 → 削除

P.200 33 行目 『成功』1904 年 12 月 1 日 田村松魚「ヘレナの離別」 → 『成功』1904 年
12 月 1 日 田村松魚「ヘレナの離別」

P.200 36 行目 「霜鳥之彦遺作展実行委員会. 『霜鳥之彦遺作展』(展覧会図録)京都府立文化
芸術会館 (1983 年 11 月 1 日).」 → 「霜鳥之彦遺作展実行委員会. 『霜鳥之彦遺作展一遺作展
記念画集』(展覧会図録). 光琳社. (1983 年 11 月 1 日).」

P.201 11 行目 「田村病夫」 → 「松魚病夫」

P.201 18 行目 『新世界』「1915 年 3 月 13 日. 「管野氏の米夫人は狂へる乎」 → 「菅野氏
の米夫人は狂へる乎」

P.201 19 行目 『新世界』「1915 年 3 月 14 日. 「三十七歳の女と二十三歳の恋人」 → 「卅
歳の女と廿三歳の恋人」

P.201 20 行目 『新世界』「1915 年 3 月 16 日. 「管野夫人放免」 → 「菅野夫人放免」

P.201 21 行目 『新世界』「1915 年 4 月 1 日. 「管野夫人離婚訴訟」 → 「菅野夫人離婚訴訟
提起」

P.201 23 行目 『新世界』「1915 年 4 月 7 日. 「管野離婚訴訟」 → 「菅野離婚訴訟」

P.201 24 行目 『新世界』「1915 年 4 月 8 日. 「管野夫人に不利」 → 「菅野夫人に不利」

P.202 34 行目 『大西洋』「1907 年 8 月 20 日. Shomgio Tamura. 「A Ghost of Old Japan」
→ 「1907 年 8 月 20 日. Shomgio[sic] Tamura. 「A Ghost of Old Japan」 .

P.204 1 行目 『終戦 50 年企画 アメリカに生きた日系画家たち 希望と苦悩の半世紀
1986-1945』 → 『終戦 50 年企画 アメリカに生きた日系人画家たち 希望と苦悩の半世
紀 1896-1945』

P.206 30 行目 「Cuzo」 → 「Chuzo」

P.211 17 行目 「New York Sun. Art Prizes Awards. March 31, 1920.」 → 「New York Sun.

Art Prizes Awarded. March 31, 1920.]

P.213 3 行目「*Japan's policies and purposes, selections from recent address and writings.*」→「*Japan's policies and purposes, selections from recent addresses and writings.*」

P.215 13 行目「画彫会.『画彫会第一回作品展覧会後援者名簿』(1921 年 10 月 1 日)」→「画彫会.『画彫会第一回作品展覧会後援者名簿』(1922 年 10 月 1 日)」

P.218 32 行目「武田勝彦.『荷風の青春』三笠書房(昭和 48 年 3 月 15 日).」→「武田勝彦.『荷風の青春』三笠書房(1973 年 3 月 15 日).」

P.222 8 行目「『終戦 50 年企画 アメリカに生きた日系画家たち 希望と苦悩の半世紀 1986-1945』」→「『終戦 50 年企画 アメリカに生きた日系人画家たち 希望と苦悩の半世紀 1896-1945』」

P.222 4 行目「霜鳥之彦遺作展実行委員会.『霜鳥之彦遺作展』(展覧会図録)京都府立文化芸術会館 (1983 年 11 月 1 日).」→「霜鳥之彦遺作展実行委員会.『霜鳥之彦遺作展一遺作展記念画集』(展覧会図録). 光琳社. (1983 年 11 月 1 日).」

P.225 20 行目「*Japan's policies and purposes, selections from recent address and writings.*」→「*Japan's policies and purposes, selections from recent addresses and writings.*」